

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第138集

讚良郡条里遺跡
IV

寝屋川市

讚良郡条里遺跡 IV

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇六年二月

財団法人
大阪府文化財センター

2006年2月28日

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第138集

寝屋川市

讃良郡条里遺跡 IV

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



1 調査地遠景（北西から）



2 5区東壁断面（南西から）

序 文

讃良郡条里遺跡は、古代律令国家の土地制度である条里制地割が最近まで良好に残っていた大阪府寝屋川市と四條畷市にまたがる広大な遺跡です。

今回の調査では縄文時代中期の焚火跡とみられる土坑を始めとして、弥生時代後期から古墳時代前期の水田跡、古代の建物跡などの遺構やそれらに伴う遺物が検出されました。

また各遺構面で、多数の流路や洪水による大量の土砂堆積層を確認しました。

このようにこの地が、はるか縄文時代から、度重なる洪水などの災害を受けながらも、何度も生活の場を築いてきたことが窺えます。

最後に、発掘調査にあたってご助力、ご支援頂きました関係諸機関、および地元関係各位には深く感謝いたします。併せて今後とも本センターの事業を推進していく上で、ご理解とご協力を賜りますよう、お願いします。

2006年 2月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、第二京阪道路（大阪北道路）予定地のうち、讃良郡条里遺跡の発掘調査報告書である。調査地は大阪府寝屋川市楠根南町に所在する。
2. 本調査は、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人 大阪府文化財センターが実施した。現地調査は平成15年4月17日から平成16年9月30日までと平成17年3月2日から3月25日まで、遺物整理作業は平成17年4月1日から平成18年3月31日に行った。なお、受託名と期間は下記の通りである。
平成15年度 「第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その4）」平成15年4月1日から平成16年3月31日
平成16年度 「第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その4の2）」平成16年4月1日から平成17年3月31日
平成17年度 「第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理」平成17年4月1日から平成18年3月31日
3. 本調査の調査名称は、財団法人 大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年）に従い、「讃良郡条里遺跡03-3」とした。本書は財団法人 大阪府文化財センターが発行した讃良郡条里遺跡の発掘調査報告書としては4冊目であるため、タイトルは「讃良郡条里遺跡 IV」とした。
4. 現地調査および整理作業は、財団法人 大阪府文化財センター調査部長 玉井功・赤木克視、調整課長赤木克視・田中和弘、京阪調査事務所長（平成15年度は京阪支所） 渡邊昌宏・山本彰、調査第二係長 寺川史郎・金光正裕の指導のもと、技師 小谷裕・近藤章子・高橋潔・山本雅和、専門調査員 多賀晴司（現熊本県教育委員会）が実施した。
5. 調査にあたっては、関係諸機関、地元関係各位をはじめ、以下の方々からご指導ならびにご協力を賜った。記して感謝の意を表する（順不同・敬称略）。
阪田育功・橋本高明・堀江門也・竹原伸次（大阪府教育委員会）、松田順一郎（財団法人 東大阪市文化財協会）、小貫充（大阪府立門真西高校）
6. 現地調査および遺物整理・報告書作成作業には、下記の方々の協力を得た。
臼杵睦美・小川裕子・黒木和子・桑原美津江・佐藤敦子・野條隆行・浜田保子・福田玲子・本田裕美・松尾有里子・松本順子・與十田節子（50音順）
7. 本書で用いた遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺構写真の焼付け、遺物写真の撮影・焼付けは京阪調査事務所 主査 上野貞子が担当した。
8. 調査では、植物珪酸体化石分析・花粉分析・放射性炭素年代測定の分析を実施した。植物珪酸体化石分析は株式会社 パレオ・ラボ、花粉分析・放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果は本書第5章に掲載した。
9. 本書の執筆は、近藤・山本・多賀が担当し、文責を目次に記した。
10. 本書の編集は寺川・金光の指導のもと、山本と協議の上、近藤が行った。

11. 本調査で出土した遺物および写真・図面などの記録類は、財団法人 大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書に掲載した地図・遺構実測図に付した方位は、すべて座標北を示している。
2. 本書で使用している座標は、世界測地系（測地成果2000）によって測量し、第Ⅵ座標系で示している。地図・遺構実測図に記載した座標値はメートル単位で表示し、単位は省略して数値のみ示している。
3. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、単位はすべてメートルである。土層断面図・遺構実測図では（T.P.+）および単位を省略して数値のみ示している。
4. 現地調査および遺物整理作業は、財団法人 大阪府文化財センター『遺跡調査マニュアル【暫定版】』（2003年）に準拠して行った。
5. 本書で使用した土色は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2002年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構番号は、基本的に調査区ごとに調査時に付したものを使用している。
7. 土層断面図・遺構実測図・遺物実測図は、対象により適宜縮尺を変えて掲載している。各図面の縮尺はスケールを付して表示している。
8. 遺物番号は、土器・瓦類・埴輪・土製品・石製品・金属製品・木製品の順に通し番号を付した。番号は本文・遺物観察表・遺物実測図・遺物写真に共通である。
9. 註は各章の末尾に記した。

目 次

- 巻頭カラー写真図版 1 調査地遠景（北西から）
2 5区東壁断面（南西から）

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯 (山本雅和)

1. 調査に至る経緯 1
2. 調査経過と調査方法 2
3. 整理・報告書作成の経緯 4

第2章 遺跡の位置と環境 (近藤章子)

1. 位置と環境 6
2. 周辺の調査 6

第3章 遺構

1. 基本層序 (多賀晴司) 11
2. 遺構の概要 (山本) 17
3. 8区の遺構 (山本) 18
4. 7区の遺構 (山本) 22
5. 6区の遺構 (山本) 26
6. 10区の遺構 (山本) 27
7. 5区・4区の遺構 (山本) 28
8. 3区・1区・9区の遺構 (多賀) 44
9. 2区の遺構 (多賀) 72

第4章 遺物 (山本)

1. 遺物の概要 82
2. 土器 82
3. 瓦類 96
4. 埴輪・土製品 97
5. 石製品 98
6. 金属製品 100

7. 木製品	101
8. その他の出土遺物	102

第5章 自然科学分析

1. 讃良郡条里遺跡の古環境分析	(辻本裕也・斎藤崇人・田中義文) 104
	パリノ・サーヴェイ株式会社
2. 植物珪酸分析	(鈴木 茂) 120
	株式会社パレオ・ラボ

第6章 まとめ

.....	(山本) 125
-------	----------

報告書抄録

挿 図 目 次

図1 調査位置図	1	図19 6区西壁断面図	27
図2 調査区配置図	2	図20 10区西壁断面図	27
図3 地区割図	4	図21 10区平面図	28
図4 周辺遺跡分布図	7	図22 5区東壁断面図	29
図5 調査区南北断面模式図	13	図23 4区東壁断面図	30
図6 調査区東西断面模式図	14	図24 5区第2面、4区第1面平面図	31
図7 8区東壁断面図	19	図25 4区第2面平面図	32
図8 8区北部・南部第1面平面図	20	図26 5区第3面、4区第4面平面図	33
図9 8区北部第2・3面、 南部第3面平面図	20	図27 5区第3面主要部平面図	34
図10 8区北部第5面、 南部第4面平面図	21	図28 5区第3面建物1実測図	35
図11 8区北部第6面、 南部第5面平面図	21	図29 5区第3面建物2実測図	36
図12 8区北部第2面70流路断面図	22	図30 5区第3面390溝断面図	37
図13 8区南部第3面98流路断面図	22	図31 5区第3面390溝 南北セクション断面図	37
図14 7区東壁断面図	23	図32 5区第4面、4区第5面平面図	38
図15 7区平面図	24	図33 5区第4面441溝断面図	39
図16 7区第4面28流路、 第5面30流路断面図	25	図34 5区第4面450流路断面図	39
図17 7区第5面29土坑実測図	25	図35 5区第4面440井戸実測図	39
図18 7区第5面29土坑石器分布状況図	26	図36 5区第5面、4区第6面平面図	40
		図37 5区第6面、 4区第7・8面平面図	41
		図38 5区第6面489流路断面図	42

図39	5区第6面488流路断面図	42	図70	2区第2面18溝断面図	75
図40	4区第7面132流路断面図	42	図71	2区第3面33畦断面図	76
図41	5区第7面平面図	43	図72	2区第5面平面図	77
図42	5区第8面平面図	43	図73	2区第6面、第7面平面図	79
図43	3区・1区路線中央 セクション断面図	45	図74	土器拓影・実測図(1)	87
図44	9区路線中央セクション・ 南壁断面図	47	図75	土器実測図(2)	88
図45	3区第1面458・459島畠断面図	48	図76	土器実測図(3)	89
図46	3区第2面平面図	50	図77	土器実測図(4)	90
図47	1区・9区第2面平面図	51	図78	土器拓影・実測図(5)	91
図48	1区第2面1島畠・ 第3面48島畠断面図	52	図79	土器拓影・実測図(6)	92
図49	3区第2面66畦断面図	52	図80	土器実測図(7)	93
図50	1区第2面3畦断面図	53	図81	土器実測図(8)	94
図51	9区第2面4畦断面図	53	図82	土器拓影・実測図(9)	95
図52	3区第2面348畦断面図	53	図83	瓦類拓影・実測図	97
図53	3区第3面平面図	56	図84	埴輪・土製品実測図	98
図54	1区・9区第3面平面図	57	図85	石製品実測図	99
図55	3区第3面113畦断面図	58	図86	金属製品実測図	100
図56	9区217置石実測図	59	図87	木製品実測図	101
図57	3区第4面平面図	60	図88	遺跡位置図	104
図58	1区・9区第4面平面図	61	図89	遺跡等高線図	105
図59	3区第4-2面平面図	63	図90	讚良郡条里遺跡周辺地質図	106
図60	3区第4-2面253畦断面図	64	図91	調査地点の位置と層序	107
図61	3区第5面平面図	66	図92	花粉化石群集の層位分布	113
図62	1区・9区第5面平面図	67	図93	花粉化石	119
図63	1区第5面188土坑実測図	68	図94	試料採取地点付近の土層断面と 試料採取層準	120
図64	9区第5面128土坑実測図	68	図95	機動細胞珪酸体分布図	121
図65	9区第5-2・5-3面平面図	68	図96	植物珪酸体	123
図66	1区・3区・9区第6面平面図	70	図97	遺跡変遷図(1)	125
図67	9区地震痕跡実測図	71	図98	遺跡変遷図(2)	126
図68	2区南壁断面図	73	図99	遺跡変遷図(3)	127
図69	2区第2面、第3面平面図	74	図100	遺跡変遷図(4)	128
			図101	遺跡変遷図(5)	128

表 目 次

表1	報告書基本層序と 調査時の層名との対応表 ……………11	表7	試料1 g当たりの 機動細胞珪酸体個数 ……………121
表2	調査遺構面と報告書基本層序・ 調査時の層名との対応表 ……………12	表8	土器観察表 ……………133
表3	建物1・建物2遺構番号対照表 ……………32	表9	瓦類観察表 ……………144
表4	放射性炭素年代測定結果 ……………110	表10	埴輪・土製品観察表 ……………144
表5	暦年較正結果 ……………111	表11	石製品観察表 ……………145
表6	花粉分析結果 ……………112	表12	金属製品観察表 ……………145
		表13	木製品観察表 ……………146

写 真 図 版 目 次

写真図版1	1 調査地遠景（北東から） 2 調査地遠景（南西から）
写真図版2	1 8区北部第1面（北から） 2 8区南部第1面（北から） 3 8区北部第2面（北から） 4 8区北部第2面70流路（北西から） 5 8区南部第3面98流路（北から）
写真図版3	1 8区北部第5面（北から） 2 8区南部第4面（北から） 3 8区北部第6面（北から） 4 8区南部第5面（北から） 5 8区北部東壁断面（北西から）
写真図版4	1 7区第1面全景（北から） 2 7区第2面南部（西から） 3 7区第4面全景（北から） 4 7区第4面28流路（西北西から） 5 7区第5面29土坑（南東から） 6 7区作業状況（西から）
写真図版5	1 6区全景（北東から）

- 2 6区西壁断面（北東から）
- 3 10区第1面全景（北から）
- 4 10区第2面全景（北から）
- 5 10区第3面全景（北から）
- 6 10区第5面全景（北から）
- 7 10区第5面16流路（東から）
- 8 10区西壁断面（北東から）

- 写真図版 6
- 1 5区第2面全景（北から）
 - 2 4区第1面全景（北から）
 - 3 4区第2面全景（北から）
 - 4 4区第2面58・59区画（北から）
 - 5 4区第2面51畦（南から）
 - 6 4区第2面56区画（北東から）

- 写真図版 7
- 1 5区第3面全景（北から）
 - 2 5区第3面建物1（南東から）

- 写真図版 8
- 1 5区第3面314・315・316柱穴（北東から）
 - 2 5区第3面312柱穴（北東から）
 - 3 5区第3面390溝（西から）
 - 4 5区第3面390溝断面（西から）
 - 5 5区415土坑（西から）
 - 6 5区石鏝出土状況（東から）

- 写真図版 9
- 1 4区第4面全景（北から）
 - 2 4区第4面61溝（東から）
 - 3 4区第4面62畦検出状況（南から）
 - 4 4区第4面62畦（南東から）

- 写真図版10
- 1 5区第4面全景（北から）
 - 2 5区第4面441流路（北西から）
 - 3 5区第4面440井戸土器出土状況（北西から）
 - 4 5区第4面440井戸（北西から）

- 写真図版11
- 1 4区第5面水田検出状況（北から）
 - 2 4区第5面99・100・101・103・104区画（南から）
 - 3 4区第5面81畦（南から）

- 4 4区分析土壌採集断面（北から）
- 写真図版12 1 5区第5面全景（北から）
2 5区第5面北部（東から）
3 4区第6面全景（北から）
4 4区第6面124流路（東から）
5 5区第6面全景（北から）
6 5区第6面488・489流路（西から）
- 写真図版13 1 4区第7面全景（北から）
2 4区第7面132流路（東南東から）
3 5区第8面全景（北から）
4 5区第8面根株（西から）
5 5区西壁（南東から）
- 写真図版14 1 3区第2面全景（西南西から）
2 3区第2面中央部（南西から）
3 3区第2面北東部（南から）
4 3区第2面北西部（南西から）
5 3区第2面66畦水口（南西から）
- 写真図版15 1 1区第2面全景（西から）
2 9区第2面全景（東から）
3 1区第2面3畦（西から）
4 1区第2面3畦断面（東から）
5 9区第2面4畦断面（東から）
6 1区第2面1島畠・第3面48島畠断面（北西から）
- 写真図版16 1 3区第3面中央部（南から）
2 3区第3面東部（北から）
3 3区第3面113畦断面（南から）
4 1区第3面東部（北から）
5 1区第3面南西部（西から）
6 9区第3面全景（東から）
7 9区217置石（北東から）
8 9区金環出土状況（東から）
- 写真図版17 1 3区第4面全景（西南西から）

- 2 3区第4面中央部（東から）
- 3 1区第4面全景（西から）
- 4 1区第4面耕作溝検出状況（北東から）
- 5 9区第4面全景（東から）
- 6 9区第4面東部（北から）
- 7 3区第4-2面全景（西から）
- 8 3区第4-2面251・252・253畦（南西から）

- 写真図版18
- 1 3区第5面全景（西南西から）
 - 2 3区第5面東部（北から）
 - 3 3区第5面334土坑（北から）
 - 4 3区第5面298土坑（北から）
 - 5 3区第5面298土坑断面（南から）

- 写真図版19
- 1 1区第5面全景（西から）
 - 2 9区第5面全景（東から）
 - 3 1区第5面188土坑土器出土状況（南から）
 - 4 9区第5面南東部（南西から）
 - 5 9区第5-3面134土坑土器出土状況（西から）
 - 6 9区第5面128土坑土器出土状況（東から）

- 写真図版20
- 1 3区第6面全景（西南西から）
 - 2 3区第6面東部（北から）
 - 3 1区第6面全景（西から）
 - 4 1区第6面247流路（北西から）
 - 5 9区第6面全景（東から）
 - 6 9区第6面南部（東から）

- 写真図版21
- 1 3区第7面424流路（北西から）
 - 2 1区第8面（北東から）
 - 3 3区西壁断面（南東から）
 - 4 3区北壁断面（南から）
 - 5 3区路線中央セクション断面（南西から）
 - 6 1区南壁断面（北西から）

- 写真図版22
- 1 1区東壁断面（南西から）
 - 2 9区地震痕跡検出状況（北東から）
 - 3 9区地震痕跡断面（東から）

- 4 9区下層確認断面（北から）
- 写真図版23 1 2区第2面全景（北東から）
 2 2区第2面北部（東から）
 3 2区第2面南部（北から）
 4 2区第2面18溝断面（西から）
- 写真図版24 1 2区第3面全景（北東から）
 2 2区第3面33畦（北西から）
 3 2区第3面南部（北から）
 4 2区第3面31畦（北から）
 5 2区第3面31畦水口（北西から）
- 写真図版25 1 2区第5面中央部（北西から）
 2 2区第6面全景（北東から）
 3 2区第6面107流路（西から）
 4 2区第7面全景（北東から）
 5 2区南壁断面（北西から）
 6 2区下層確認断面（東から）
- 写真図版26 1 7区10a層・9b層出土土器
 2 7区29土坑出土土器
 3 9区134土坑・3区408土坑出土土器
 4 2区10層・3区16b層出土土器
- 写真図版27 5区440井戸・415土坑出土土器
- 写真図版28 1区188土坑・9区128土坑・7区28流路・5区第3面出土土器
- 写真図版29 縄文土器（上：中期 下：後期）
- 写真図版30 1 軒丸瓦 2 鬼瓦 3 埴輪
 4 ナイフ形石器・石鏃・スクレイパー・楔形石器
- 写真図版31 1 金環 2 煙管 3 漆器椀
 4 円盤形木製品 5 付木

第1章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

讃良郡条里遺跡は近年まで条里制地割が良好に残っていたことから命名された遺跡で、寝屋川市と四條畷市にまたがり広がっている。

この地に第二京阪道路および一般国道1号バイパス建設が計画されたため、財団法人 大阪府文化財センターでは国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと平成12年度から14年度にかけて遺跡の確認調査を実施した。その結果、各調査区において複数の遺構面で土坑・溝・流路を検出すると同時に縄文時代以降の各時代の遺物を採集したことから、周辺には該当する時期の遺跡が存在することが推定された¹⁾。

これらの成果に基づき、改めて国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受けた財団法人 大阪府文化財センターが、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと遺構・遺物を確認した道路計画路線部分の埋蔵文化財調査を実施するはこびとなった。調査は讃良郡条里遺跡内の対象地を複数に分けて行うこととなり、平成14年度には讃良郡条里遺跡（その1）から（その3）²⁾、平成15年度には同（03-1）から（03-5）、平成16年度には同（03-6）の調査が開始された。当調査地は讃良郡条里遺跡のほぼ中央部、寝屋川市楠根南町地先に位置する（図1）。

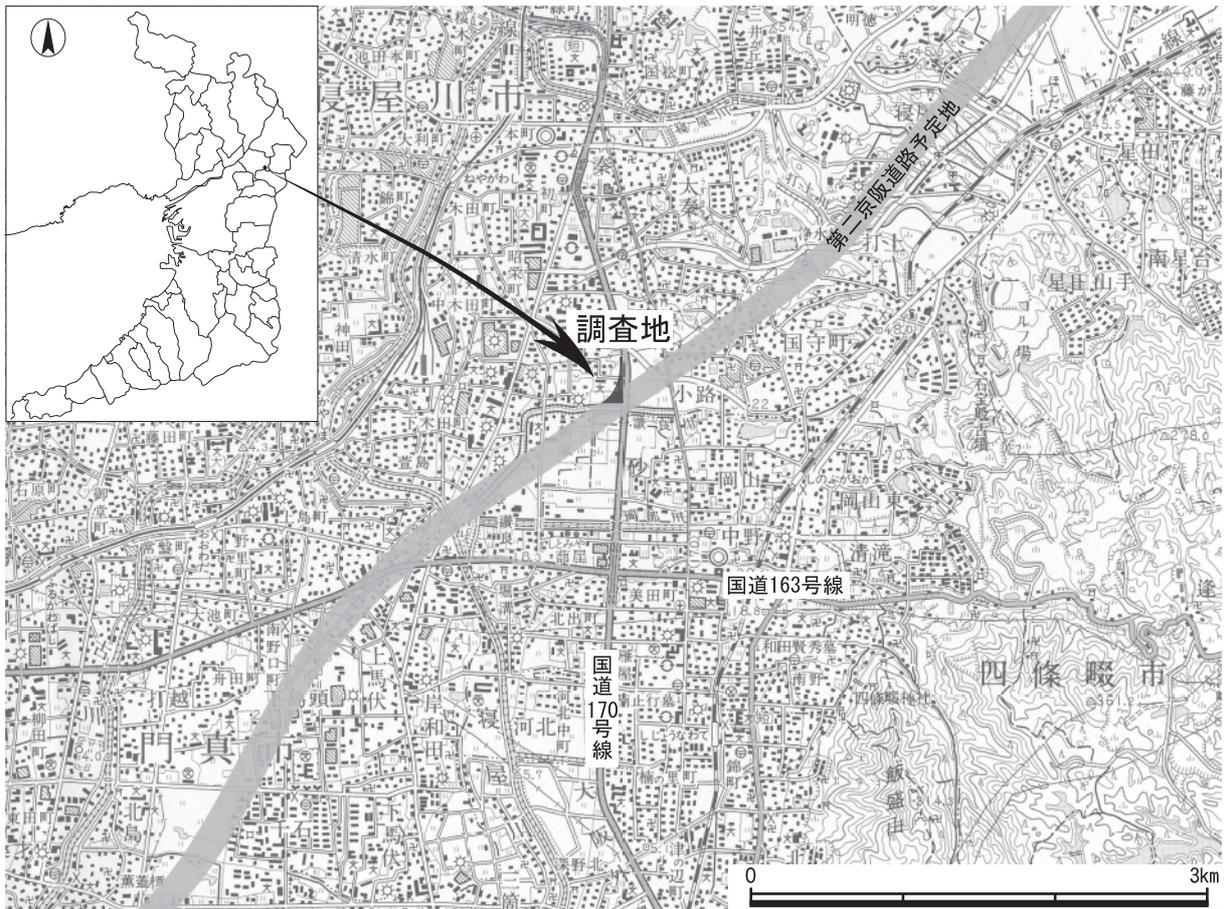


図1 調査位置図（国土地理院 1：50,000地形図を一部改変）

2. 調査経過と調査方法

(1) 調査経過 (写真図版1)

調査対象範囲 調査地は道路計画路線と国道 170号線 (大阪外環状線) が交差する箇所の北西側に当たり、東を国道 170号線、南を讃良川に画された南北約 360m、東西約 200mの細長い三角形を呈する。北・西側は、楠根小学校・民間会社敷地や農耕地に隣接している。

確認調査 当調査地では平成12年度に楠根小学校東側部分で3箇所の調査区を設定して行われた³⁾。その結果、各調査区では縄文時代の洪水堆積層、古墳時代から古代の溝、古代から中世の溝・落込みなどを検出した。また、古墳時代から中世の遺物がまとまって出土し、中には古墳時代後期の円筒埴輪片も含まれていることから近隣に古墳が存在していることも期待された。

調査の目的 発掘調査にあたり、次の目的の解明を目指した。

- 1 条里制に関連する遺構を検出することにより、讃良郡での条里制の施行時期を明らかにする。



図2 調査区配置図

2 調査地での旧地形や確認調査で出土した遺物の所属を明らかにすることにより、縄文時代以降の調査地の歴史的変遷を検討する。

調査区の設定 調査地は北東から南西に向かって細長く広がっている。また、調査地を東西に貫流する楠根川や道路・農道など直ちに調査を実施できない部分があり、それらを基にいくつかの区画に分けることとした。さらにその区画内での排土置き場なども配慮して、合わせて1区から10区の調査区を設定した(図2)。

調査経過 平成15年4月から8月にかけての準備期間ののち、発掘調査は9月1日から5区の機械掘削より開始した。各調査区では機械掘削により表土および江戸時代の包含層を除去したのち、人力にて包含層の掘削および遺構の精査を行った。検出した遺構面や重要な遺構は、写真撮影・測量を実施して記録を採りながら調査を進めた。なお、3区東側については産業廃棄物を含む盛土が行われていたため、土壌調査を実施し安全を確認したのち、産業廃棄物混入土を場外へ搬出、処理した。最終遺構面の調査終了後には埋め戻しを行い、平成16年9月30日に現地調査を終了した。最終遺構面における調査面積は7,935㎡である。

追加調査 1区から10区の調査終了後、本体工事の進捗に伴い、未調査区域にも工事がおよぶこととなったため、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受けた財団法人 大阪府文化財センターが、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと埋蔵文化財調査を実施することとなった。調査は讃良川堤防北側と楠根小学校南東隅の2箇所で行った。以下では前者を2区西側、後者を4区西側と呼称する(図2)。調査は平成17年3月に着手し、平成17年3月25日にすべての作業を終了した。最終遺構面における調査面積は114㎡である。

(2) 調査方法

発掘調査の実施にあたっては、当センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル』⁴⁾を基に、遺構登録、遺物登録、実測図作成を行った。

地区割 地区割は平面直角座標系VI(世界測地系)による。地区割の詳細については図3に示した。各調査区では遺構検出地点表示および遺物取り上げ表示は第IV区画を使用して行った。

遺構の記録 遺構番号は各調査区で、遺構の種類を問わず検出した順に1から番号を遺構名称の前に付した(例:1溝、368柱穴など)。また、遺構番号を付した遺構であっても建物などまとまりのあるものは遺構番号とは別に新たに遺構名称の後に遺構番号を連番で付した(例:建物1)。

遺構の平面測量は航空測量と人力による測量を併用した。航空測量はヘリコプターによる写真測量を実施し、縮尺50分の1ならびに100分の1の平面図を作成した。また、人力による測量は第IV区画を基準に縮尺50分の1ならびに100分の1の平面図を作成し、必要に応じて縮尺20分の1・10分の1の遺構実測図を作成した。

層序の記録は国道170号線沿いの南北断面図、讃良川堤防沿いの東西断面図を基幹断面図として作成した。また、隣接する調査地との関係を明らかにすることを目的として道路計画路線中央に北東から南西に向かう斜め方向のセクションを設定し、断面図を作成した。このほかにも必要に応じて各調査区で断面図を作成した。

遺物の取り上げ 遺物の取り上げは基本的に第IV区画および遺構・層位を基準に行った。

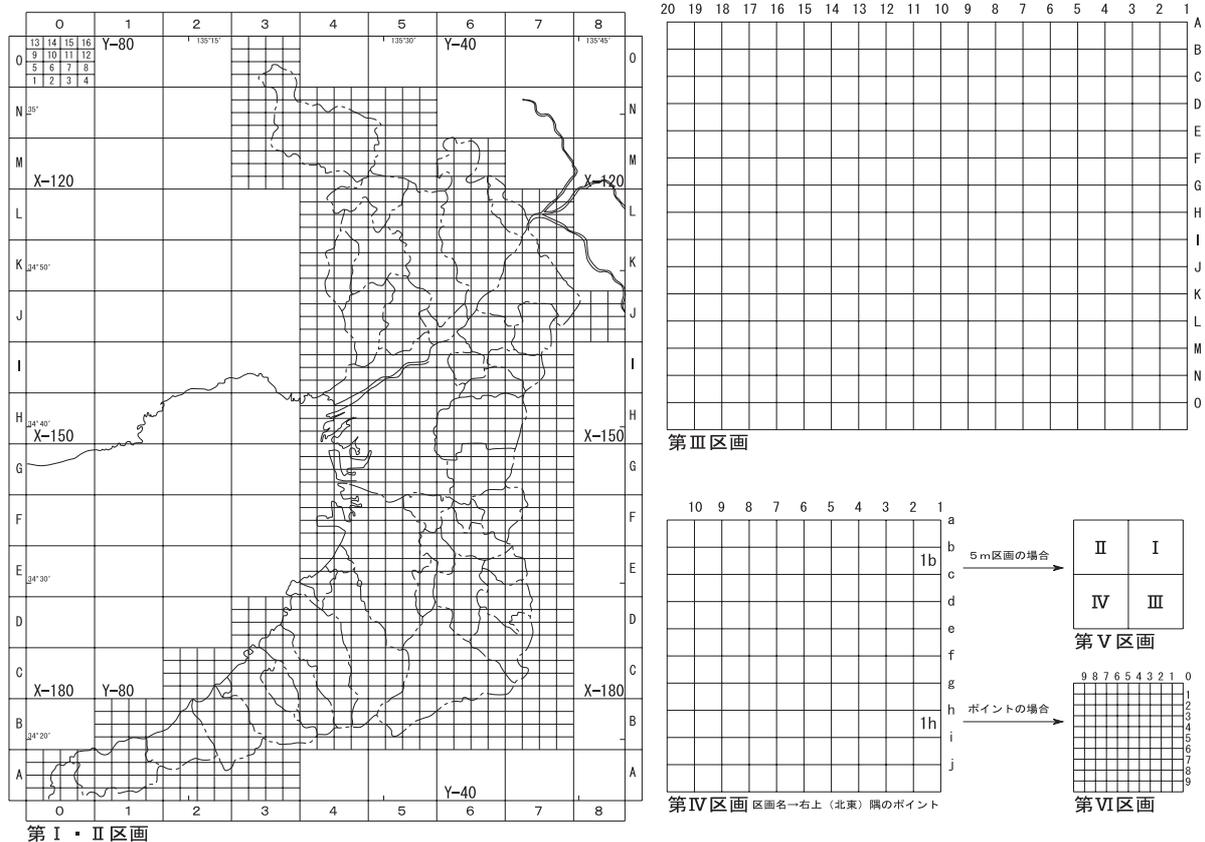


図3 地区割図

3. 整理・報告書作成の経緯

整理・報告書作成の目的 調査では縄文時代以降の各時代の様々な遺構を検出するとともに旧石器時代以降の各時代の豊富な遺物が出土した。このことを前提として次の点を検討課題として整理作業を行い、報告書を作成することとした。

- 1 条里制に関連する遺構を検査するために耕作地の時期的な消長（特に成立時期）を層位と遺物から確定するとともに、遺跡の構成や広がりを明らかにする。
- 2 比較的多くの遺構を検出した古墳時代から奈良時代の遺跡の状況を明らかにする。調査地で検出した遺構群は隣接する調査地にも広がっていたと推定できるので十分な検討が必要である。また、古墳時代は遺構にともなう土器がまとまって出土しており、時期の確定を目指す。
- 3 縄文時代・弥生時代の旧地形や古環境を復原する。遺構・遺物は比較的少ないが、下層確認による断面観察の所見や科学的分析成果を活用する。
- 4 第1層の洪水砂層から出土した豊富で多様な遺物の検討により、周辺の歴史的状况を明らかにするための手掛かりを得る。

整理経過 整理作業は調査期間中は雨天などの合間を活用して図面整理、台帳作成、遺物の登録・洗浄・注記などを行った。

本格的な整理作業は、調査終了後の平成16年10月より開始した。遺構については、調査中に作成した実測図面や航空測量図面の点検および遺構台帳・図面台帳・写真台帳の作成を行った。遺物については調査段階で取り上げた単位で遺物内容を点検したのち、必要な個体を抽出し、約530点を実測した。ま

た、これらの中で図版に掲載するものの一部は復元・彩色ののち、写真撮影を行った。

整理作業 遺構・遺物に対する基礎的な作業の進捗と併行して、実測図図版・写真図版・遺物観察表を作成し、あわせて遺構・遺物の総合的検討を行い、その後、担当者によって原稿を分担して執筆した。原稿と表・図版などがそろった時点で編集・校正を行い、調整ののち、入稿した。

註

- 1) (財)大阪府文化財センター 2002年『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第77集
(財)大阪府文化財センター 2003年『門真西地区、讚良郡条里遺跡西地区、讚良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第93集
(財)大阪府文化財センター 2003年『讚良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第101集
- 2) (財)大阪府文化財センター 2004年『讚良郡条里遺跡(その1) 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第109集
(財)大阪府文化財センター 2003年『讚良郡条里遺跡(その2) 第二京阪道路(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第98集
(財)大阪府文化財センター 2004年『讚良郡条里遺跡(その3) 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第114集
- 3) (財)大阪府文化財センター 2002年『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第77集
- 4) (財)大阪府文化財センター 2003年『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』

第2章 遺跡の位置と環境

1. 位置と環境

調査地は寝屋川市楠根南町に所在し、寝屋川市と四條畷市の境界となる讃良川の北、および国道170号線（大阪外環状線）の西側に位置する。

当該地は河内平野の北東部で、淀川の左岸、生駒山地を東に臨む。生駒山地西麓から派生する洪積層によって形成された枚方丘陵地の南西部にあたる。丘陵地から裾部にかけて段丘面があり、丘陵地から西に向かって楠根川、讃良川、岡部川、清滝川などの小河川が流れる。

調査地は旧地形的には沖積平野後背低地にあたる。氷河期の終わりとともに海水面が上昇し、現在の河内平野のほとんどは海中という状態で、約6000年前までは生駒山地の麓付近まで河内湾と呼ばれる大きな入り江を形成していた。いわゆる縄文海進である。河内湾には淀川や旧大和川水系の河川が流れ込んでおり、それら河川の土砂堆積により湾口が狭められ、海水の出入が悪くなりやがて湖沼化していく。水位の低下とともに干上がり陸地化し、河内平野となる。さらに河川の氾濫などによって土砂・礫などが堆積して形成された低湿な土地である。

讃良郡条里遺跡は、寝屋川市と四條畷市にまたがる南北約2.65km、東西約1.65kmの広範囲にわたる遺跡で、調査地はその中央やや南東に位置する。条里とは古代の土地の区画制度で、現在でも付近に条里区画による水田が明瞭に遺存すること、小字名に条里を示すものがあること、遺跡内を流れる楠根川・讃良川は西に正方位に流れており、その川によって区画されたと思われる地域があることなどから条里遺構が復元され周知の遺跡となった¹⁾。

2. 周辺の調査

讃良郡条里遺跡内およびその周辺では、旧石器時代から江戸時代に至る多種多様な遺跡が発見されている。以下に、主な周辺遺跡の概要と、当センターが行った讃良郡条里遺跡内の確認調査および発掘調査について、すでに報告されているものについて概略を述べる。

高宮遺跡 遺跡の一部が讃良郡条里遺跡と重複する。旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。旧石器時代では国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している。縄文時代では前期の土器片やサヌカイト製の石器が多数出土している。奈良時代では大型建物などの掘立柱建物を検出した。平安時代では保延六年（1140）の墨書銘をもつ曲物を据えた井戸を検出した。また鎌倉時代の屋敷や、烏帽子を伴う土壙墓を検出した。

高宮廃寺 高宮遺跡の範囲内に重複する。1980年、国指定の史跡に認定された。白鳳期創建の寺院で、寺域内には鎌倉時代から室町時代の式内大杜御祖神社の神宮寺がある。東塔跡の調査で塔芯礎、礎石を検出した。後の調査で主要伽藍配置および寺域が明確になり、薬師寺式伽藍配置に似るが、左右対称としないことも明らかとなった。平安時代には一旦廃絶し、鎌倉時代に神宮寺として再建された。

高宮八丁遺跡 讃良郡条里遺跡と重複するが、1985年の試掘調査で弥生時代前期から中期の遺構を検出し、新たな遺跡として認定された遺跡である。その試掘調査の結果を踏まえて、寝屋川市教育委員会が3次にわたる発掘調査を行った結果、縄文時代から中世の複合遺跡であることが確認された。特に弥

生時代前期から中期の良好な集落で、建物・土坑・溝・貯蔵穴などから遺物が多量に出土している。その中でも石製品・木製品は多種多様なものが出土しており、良好な資料が得られている。

長保寺遺跡 讃良郡条里遺跡と重複する。縄文時代から室町時代の複合遺跡である。古墳時代後期の掘立柱建物14棟と土壙墓を含む大規模な集落遺構を検出された。また井戸枠に船材を転用したものが発見された。鎌倉時代から室町時代の集落跡を検出し、多種多様な遺物が出土している。

小路遺跡 遺跡の一部が讃良郡条里遺跡と重複する。旧石器時代から近世の遺構・遺物を検出している。自然流路や溝から縄文時代前期の土器や石器、弥生時代から古墳時代の土器が多数出土した。2002年の2箇所での調査では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓、方形周溝墓、流路内から奈良時代後半から平安時代前半の祭祀に伴う人面土器や墨書土器が出土した。また、中世・近世の耕作に伴う溝や土坑を検出した。



図4 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|--------------------|-----------|-----------|-----------|
| 1 確認調査その1 | 2 確認調査その2 | 4 確認調査その4 | 6 発掘調査その2 |
| 1-1 確認調査その1 (00-⑧) | 3 確認調査その3 | 5 発掘調査その1 | 7 発掘調査その3 |

太秦遺跡・太秦古墳群 縄文時代から弥生時代の遺物の散布地としてのみ認知された遺跡であったが、2001年・2003年の調査により弥生時代中期の竪穴住居、方形周溝墓などを多数検出し、遺構の存在が明らかとなった。また方墳を中心とする古墳時代後期の古墳を25基検出し、太秦古墳群の一端を確認した。

大尾遺跡 太秦遺跡と高宮遺跡の間に位置する。弥生時代中期から近世の遺構を検出している。特に弥生時代中期後半の周溝墓を42基、竪穴住居を検出した。また飛鳥時代後半から奈良時代前半の掘立柱建物群を検出した。室町時代では火葬墓を検出した。主要な遺構は太秦遺跡と同時期に存在している。

砂遺跡 縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。縄文時代中期の船元式の土器が多量に出土し、その他石皿や集積遺構が検出されている。また縄文時代晩期の甕棺や土壙墓が検出されている。

藪屋北遺跡 讚良郡条里遺跡の南限に位置し、一部南に広がる。2000年・2001年の調査により讚良郡条里遺跡の中でも固有の性格をもつものとして、新たに遺跡名が付けられた。弥生時代から近世にいたる複合遺跡である。特に古墳時代中期の遺構・遺物が良好な状態で残存しており、竪穴住居や掘立柱建物、馬の全身骨格を含む土坑などが検出されている。

更良岡山遺跡 旧石器時代では国府型ナイフ形石器、縄文時代中期から晩期の石鏃・石錘・石斧などの石器による生活用具が多数出土した。また土器類も多数出土している。

讚良寺跡 伝承・文献による遺跡の存在のみであったが、更良岡山遺跡の調査中に縄文時代の遺跡に重複して、奈良時代の礎石・平瓦を敷いた遺構や軒丸瓦が出土している。

更良岡山古墳群 縄文時代晩期の包含層から石器を含め、土器が多数出土している。古墳時代中期から後期の円墳・土坑状遺構、鎌倉時代の遺構、鎌倉時代末期から室町時代初期の旧讚良川護岸工事に伴う杭列が検出されている。

讚良川川床遺跡 更良岡山遺跡の下層から旧石器時代の石器が出土した。その地点が讚良川のかつての川床となり、上流から運搬されたものであるとみられるため、更良岡山遺跡とは別遺跡とされた。

讚良川遺跡 縄文時代の包含層から旧石器時代の国府型ナイフ形石器が出土した。縄文時代中期の包含層や貯蔵穴4基から船元式を主体とする土器が多数出土し、貯蔵穴はその構造および当時の生活を知る良好な資料となる遺物や食物遺体が多数含まれていた。

忍ヶ丘駅前遺跡 古墳時代中期から中世の集落・古墳の複合遺跡である。旧石器時代の国府型ナイフ形石器が出土している。遺跡の中心は古墳時代中期の集落で多様な埴輪が多数出土している。また、室町時代の建物、溝、井戸が検出されている。

奈良田遺跡 古墳時代後期を中心とした遺跡で、掘立柱建物、方形板柵井戸などが検出された。また平安時代の曲物井戸を検出されている。

雁屋遺跡 弥生時代前期から後期の弥生時代全般にわたる集落を検出した。弥生時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、木棺墓主体の方形周溝墓を検出した。

讚良郡条里遺跡

2000年度確認調査（その1）²⁾

00-① 掘削-3.0m。近・現代の水田面、縄文時代中期以前の水成堆積層を確認した。

00-② 掘削-3.0m。近・現代の水田面、中世の包含層、縄文時代中期の包含層、縄文時代中期以前の流水堆積層を確認した。

00-③ 掘削-3.0m。近・現代の水田面、縄文時代中期以前の流水堆積層を確認した。

00-④ 掘削-4.9m。近・現代の水田面、縄文時代中期の流路・包含層、縄文時代中期以前の流水堆

積層を確認した。

00-⑤ 掘削-6.0m。近・現代の水田面、縄文時代中期と思われる包含層、縄文時代中期の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、A T火山灰層を確認した。

00-⑥ 掘削-6.0m。上部 2.7mまで現代攪乱。縄文時代中期の包含層、縄文時代中期以前の流水堆積層を確認した。

00-⑦ 掘削-6.0m。上部 2.6mまで現代攪乱。近・現代の水田面・流水堆積層、中世以前の流水堆積層を確認した。

00-⑧ 掘削-4.9m。近・現代の水田面、中・近世の包含層、縄文時代中期の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層の可能性のあるシルト～粗砂層を確認した。古代から中世の土師器・瓦器、古墳時代から古代の須恵器、流路より縄文時代中期の土器が出土した。

00-⑧-1 00-⑧の追加調査である。基本層序は同様である。近・現代の水田面、中・近世の包含層、古墳時代から古代の土器を含む溝を検出した。

00-⑨ 掘削-4.9m。近・現代の水田面、中・近世の包含層、縄文時代の包含層、縄文時代中期以前の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層の可能性のあるシルト～粗砂層を確認した。古代の土師器、円筒埴輪片、縄文土器が出土した。

00-⑩ 掘削-4.9m。上部 3.8mまで現代攪乱。縄文時代中期以前の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層を確認した。

2001年度確認調査（その1）

01-④ 以下の確認調査の掘削深度は 5.0mである。近・現代の水田面、古代と思われる包含層、古代以前の流路・落込み、溝を確認した。

01-⑤ 近・現代の水田面、中世以前の包含層、縄文時代中期以前の流水堆積層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層を確認した。客土と考えられる層から弥生土器が出土した。サヌカイト片・古代から中世の土師器・古墳時代から古代の須恵器が含まれる。

01-⑥ 近・現代の水田面、中世の包含層、古墳時代から古代の包含層、縄文時代の包含層、陸地化に伴う粘土層、海成堆積層の可能性のあるシルト～粗砂層を確認した。古代から中世の土師器・瓦器が出土した。

2001年度確認調査（その2）³⁾

01-① 近・現代の水田面、弥生時代の水田面を確認した。弥生時代の水田面からは、顕著な足跡を確認した。

01-② 微高地にあたる。近・現代の水田面、古代・弥生時代の水田面、弥生時代の包含層を確認した。水田関連の遺構として大畦畔・溝・落込み・置石を確認した。

01-③ 中世以降の水田面を2面確認した。上面で検出した畦畔は、残存幅が70cmあり、農道としても機能していた可能性がある。

2001年度確認調査（その3）³⁾

3-① 近・現代、中世、弥生時代の水田面、古墳時代の流水堆積層を確認した。

3-② 近・現代の木組遺構、古墳時代の洪水層、弥生時代の水田面、海成堆積層を確認した。古墳時代の洪水層よりサヌカイト片、円筒埴輪片が出土した。

3-③ 近・現代から中世の耕作土層、古墳時代から古代の包含層、古墳時代の洪水層、弥生時代の

水田面、海成堆積層を確認した。

3-④ 微高地にあたる。近代・中世の耕作土層、近世の水田面、古墳時代前期の方形墳丘墓の一端、溝、ピット群、海成堆積層を確認した。

3-⑤ 近世・中世・古代の耕作土層、古墳時代前期の土器を含む洪水層を確認した。

2002年度確認調査（その4）⁴⁾

第1-1・2 近代の洪水層、近世の耕作地、中世の水田面・包含層、古代の遺構面、古墳時代後期の包含層を確認した。

第2-1・2 近代の洪水層、近世の水田面、中世の包含層・ピット状遺構、奈良時代の包含層・円形土坑（井戸の可能性あり）、古墳時代前期の洪水層、弥生時代中期の耕作土層を確認した。微高地にあたる。

第3-1・2 上部2.5mまで現代攪乱。遺物が出土しなかったため時期は確定できなかったが、第1・第2調査区と類似する堆積層序を確認した。

第4 中世の南北方向の畦畔状遺構を確認した。

第5 中世の包含層を確認した。

発掘調査（その1） 縄文時代早期の土器を含む溝・落込み、中世・近世の耕作面を検出した。また奈良時代中期から平安時代初頭の溝からは、祭祀関連遺物（絵馬・斎申・人形、人面墨書土器等）が多量に出土した。

発掘調査（その2） 縄文時代前期の石器製作跡、弥生時代から古墳時代前期初頭の流路、古墳時代中期の土坑、奈良時代から平安時代初頭の土坑（石製巡方出土）、掘立柱建物を検出した。

発掘調査（その3） 縄文時代の溝、古墳時代中期から後期の土坑・溝、奈良時代から平安前期の掘立柱建物・柵列・井戸・土坑・溝を検出した。井戸の木枠は船材を転用している。近世の溝に混入して、平安時代の石製丸軋が出土した。⁵⁾

註

- 1) 讃良郡の条里および各遺跡については、『寝屋川市誌（1966年）』を参照した。
- 2) (財)大阪府文化財センター 2002年 『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』（財）大阪府文化財センター 調査報告書 第77集
- 3) (財)大阪府文化財センター 2003年 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』（財）大阪府文化財センター 調査報告書 第93集
- 4) (財)大阪府文化財センター 2003年 『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』（財）大阪府文化財センター 調査報告書 第101集
- 5) (財)大阪府文化財センター 2004年 『讃良郡条里遺跡（その1） 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター 調査報告書 第109集
(財)大阪府文化財センター 2003年 『讃良郡条里遺跡（その2） 第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター 調査報告書 第98集
(財)大阪府文化財センター 2004年 『讃良郡条里遺跡（その3） 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター 調査報告書 第114集

第3章 遺構

1. 基本層序

第二京阪道路建設に伴う発掘調査は、巨視的には北河内地域を北東から南西方向に横断する細長いトレンチを入れることにより、枚方丘陵から大阪湾岸の沖積平野にかけての旧地形や環境の景観復元に重要な成果が得られることが期待されている。この課題についてはすでに西部の門真遺跡群の調査で地形・環境変遷が試みられている¹⁾。寝屋川市域の当遺跡周辺についても、確認調査による部分的な成果ではあるが景観復元が行われている²⁾。本調査においてもより広域の景観復元を目的として、近隣の調査と層序の対比が行えるよう努めた³⁾。

地層の表記についてa層は耕作土層、擾乱を受けている暗色の層としている。b層はa層の母材となる層である {例：第1 a (1-7)層に対して第1 b (1-7)層となる} がb層が伴わない場合もある。ただし、平安時代以降の暗色泥層はb層としている。また、第○層には複数存在したり {例：第2 a (5)、第2 a (6)} ひとつのa層に対して複数のb層が存在する場合がある。「a」・「b」を付していない場合はa・b層をともに含めた表現である。

遺構面には上から順に第1面、第2面…、層位には基本的に上から順に1層、2層…の名称を付した。しかし、当然のことながら各調査区ではそれぞれ堆積状況が異なり、隣接する調査区の間でも遺構面や

表1 報告書基本層序と調査時の層名との対応表

	8区北部	8区南部	7区	10区	5区	4区
第1層	1層	1層	1層	—	1・2層	1・2層
第2層	2層	2層	2・3層	4層	3・4層	3・4層
第3-1層	3層	3層	4層	8層	5・6層	5・6層
-2層	—	—	—	—	7~9層	7~9層
-3層	—	—	—	—	10・11層	10・11層
第4-1層	4層	4層	—	12層	12・13層	12・13層
-2層	5層・6層	5層	5層		14層	14層
第5-1層		6層	6層	15層	15層	15層
-2層				16層	16層	16層
-3層				17層	17層	17-1層
-4層				18層	18層	17-2層
第6層	7層	7層		18層	18層	18層
第7層	8・9層	8・9層	8・9層		19層	19層
第8層			10層			

	3区	1区	9区	2区
第1層	1-1~8・2~4層	1-1~7・2~4層	1-1~8・2~4層	1-1~8層
第2層	5~10層	5~10層	5~10層	2~7層
第3-1層	11・12-1層	11・12層	11・12-1層	8-1・2層
-2層	12-2・12-3 (上)層	13層	12-2・12-3 (上)層	
-3層	12-3 (下)・12-4 (上)層	14層	12-3 (下)・12-4 (上)層	
第4-1層	12-4 (下)・13層	15-1層	12-4 (下)・13層	9層
-2層	15-2層	15-2層	15-2層	
第5-1層	15-3層	15-3層	15-3層	10-1層
-2層				10-2層
-3層				11層
-4層				12層
第6層	18層	18層	18層	13層
第7層	19・20層	19・20層	19・20層	
第8層	21層	21層	21層	

層位の名称がくい違ふことがしばしばであった。これは特に未調査部分を挟む調査区間に顕著である。そこで調査終了後にまとめた第1層から第8層までの遺跡全体の基本層序を基に、調査段階における各調査区の層位との対応関係を表1、遺構面との対応関係を表2に示した。以下では調査段階の層位との混乱を避けるため基本層序には「第」を冠し、調査時の層位は（ ）内に併記する。

(1) 第1層

現代耕作土の直下であり、5区から北ではにぶい黄褐色砂泥（極細砂）である。擾乱を顕著に受け、下面に小溝が見られることから耕作土と考えられる。小溝の肩口から底部にかけて極細砂～細砂がラミナ状に入ることが多い。2～3層に細分している。4区から南では多数のb層が存在する。4区のb層は、淘汰が非常に悪くやや上方に粗粒化する土石流と考えられるものと、ラミナを明瞭にもつ破堤・氾濫堆積物に分けられる。3区では土石流が第1a（1-6）層より上位に存在し、破堤・氾濫堆積物は第1b（1-7）層や第2層中に存在することが多い。

3区の層序については、3区北東部の第2（5～7）層と4区南壁断面で観察したa層とを対比し、3区と4区の間で層序を検討した。その結果、3区から南では水田耕作層と思われる第1a（1-1～3）層と、下面に小溝を有する第1a（1-4～7）層、砂礫の供給が極めて多い第1a（2～4-2）層に分けることができる。

9区の第1b（3・4）層は全体としてやや上方に粗粒化する氾濫堆積物で、3区の北東部を除きすべての畔畔を完全に覆い、さら畦畔の上に約0.4～0.5m堆積する。

時期を示す遺物の出土はないが、第2層が江戸時代前半ころまでと考えられることから、第1層の時期は江戸時代中期以降と推定する。

表2 調査遺構面と報告書基本層序・調査時の層名との対応表

遺構面	8区北部	8区南部	7区	10区	5区	
第1面	第3-1a(3)層下面	第3-1a(3)層下面	第3-1a(4)層下面	第2a(4)層下面	第2a(4)層下面	
第2面	-1 -2	第4-1a(4)層下面	第4-1a(4)層下面	第4-2a(5)層下面	第3-1a(8)層下面	第3-1a(6)層下面
第3面	第4-2a(6)層上面	第6a(7)層上面	第6a(6)層上面	第4-2a(12)層下面	第4-1a(13)層下面	
第4面	-1 -2	第6a(7)層上面	第7a(8)層上面	第7a(8)層上面	第5-2a(16)層上面	第5-1a(15)層上面
第5面	-1 -2 -3	第7a(8)層上面	第7a(9)層上面	第7a(9)層上面	第5-3a(17)層上面	第5-2a(16)層上面
第6面	第7a(9)層上面	—	第7a(9)層下面	第6a(18)層上面	第5-3a(17)層上面	
第7面	—	—	—	—	第6a(18)層上面	
第8面	—	—	—	—	第7a(19)層上面	

遺構面	4区	3区	1区	9区	2区
第1面	第3-1a(6)層下面	—	—	—	—
第2面	-1 -2	第3-2a(9)層上面	第2a(5)層上面	第2a(5)層上面	第2a(2)層上面
			第2a(6)層下面	第2a(6-1)層下面	
第3面	第3-3a(11)層下面	第2a(6)層上面	第2a(7)層上面	第2a(6-2)層下面	第2a(3)層上面
第4面	-1 -2	第4-1a(13)層下面	第3-1a(12-1)層下面	第3-1a(12)層下面	第3-1a(12-1)層下面
			第3-3a(12-3(下))層上面		
第5面	-1 -2 -3	第5-1a(15)層上面	第4-1a(13)層下面	第4-1a(15-1)層下面	第3-2・3a(9)層下面
				第4-1a(13)層下面	
				第5-1a(15-3)層上面	
第6面	第5-1a(15)層下面	第5-3a(16)層上面	第5-3a(16)層上面	第5-3a(16)層上面	第5-3a(11)層上面
第7面	第5-3a(17-1)層上面	第5-4a(17)層上面	第5-4a(17)層上面	第5-4a(17)層上面	第5-4a(12)層上面
第8面	第6a(18)層上面	—	第6a(18)層上面	第6a(18)層上面	—

※（ ）内は調査時の層名

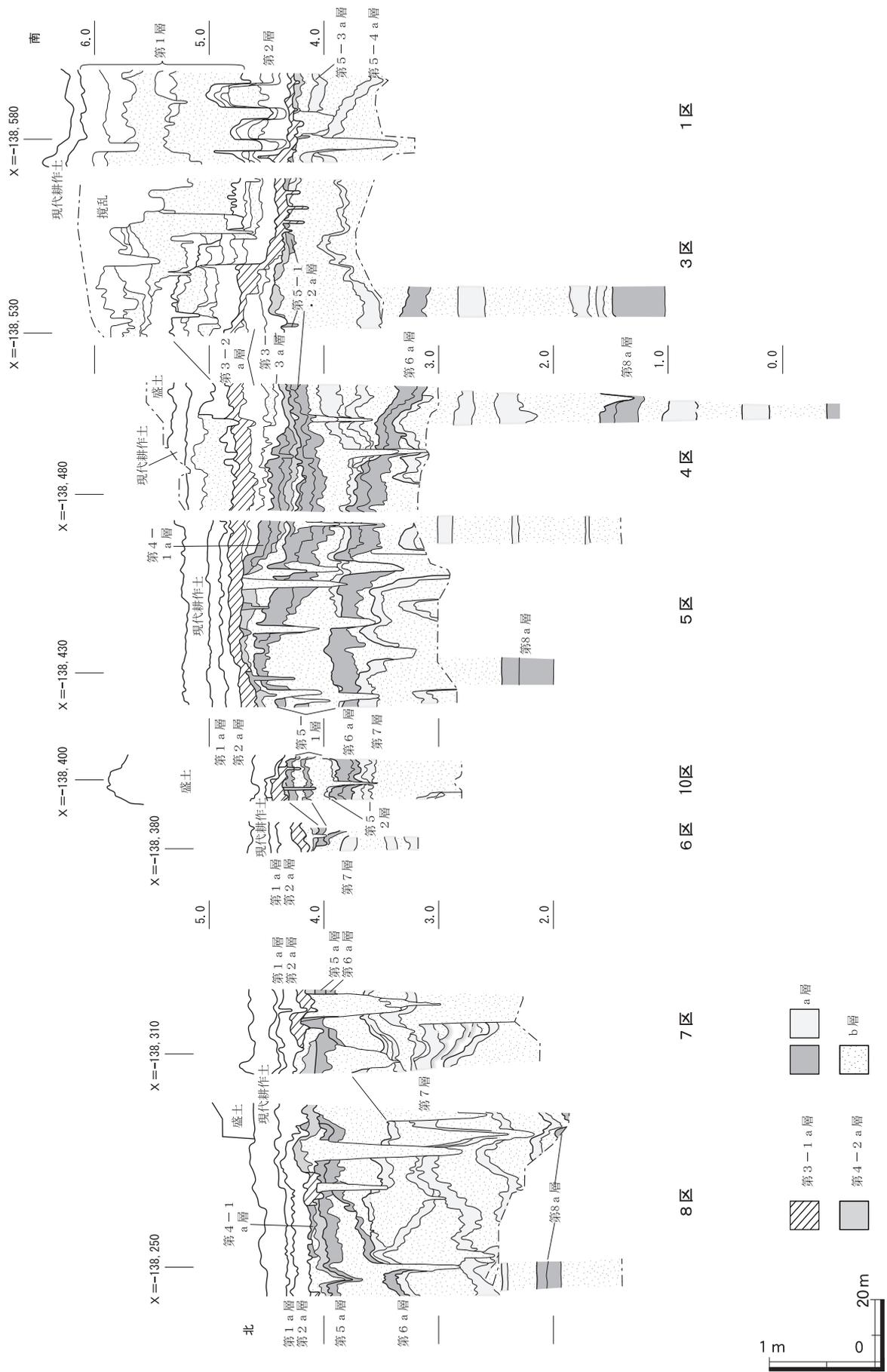


图5 調査区南北断面模式图

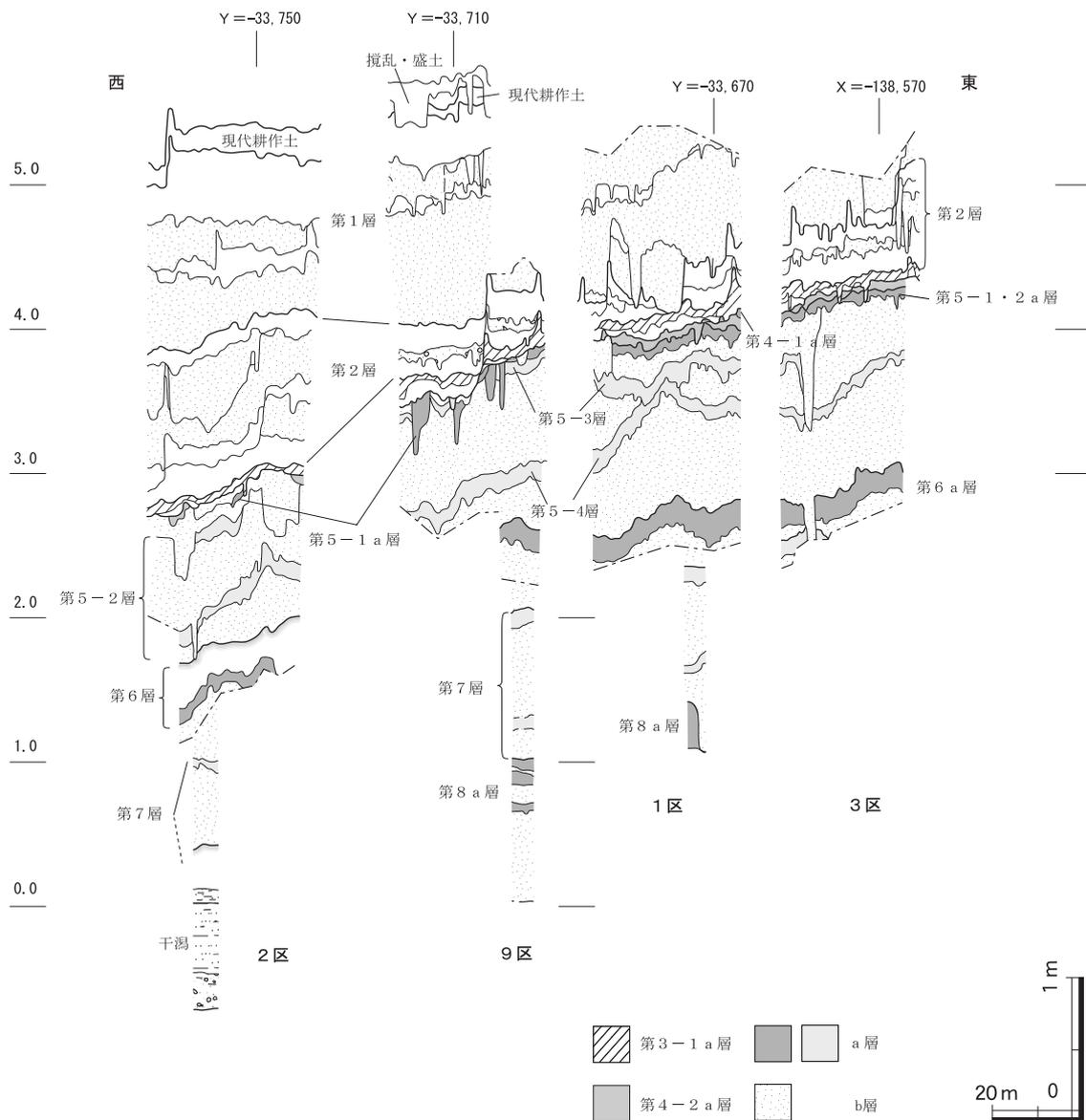


図6 調査区東西断面模式図

(2) 第2層

10区から北ではおおむねオリーブ黄色～灰オリーブ色砂泥（極細砂）層で、5区以南では黄褐色砂泥（極細砂）～オリーブ褐色泥土層である。全体として上方に粗粒化する傾向がある。擾乱を受け、下面に小溝が見られることから耕作土と考えられる。3区から南では、b層が厚く堆積していたため畦畔、畝、島島が良好に検出された。第2層中にも破堤・氾濫堆積物が広域に堆積しており、また島島の芯として残っている場合がある。第2層は4層に細分した。

9区と2区の層のつながりについてはb層の層相からだけでは判断できなかったため、次のような検討を行った。9区では第2-1面にあたる第2a（5層上面）層・第2-2面にあたる第2a（6-1層上面）層で水田を検出した。2区では第2面にあたる第2a（2層上面）層で畦畔をもたない耕作地を検出し、第3面にあたる第2a（3層上面）層で畦畔を有する耕作地を検出した。遺構面の様相と層相からすると9区の第2-2面と2区の第3面が対応する。9区第2-1面と2区第2面はb層の洪水

砂によって埋没しており、9区の第2 a (5)層と2区の第2 a (2)層が同じ層であると考えた。9区と2区の間調査区外には坪境が存在すると想定されるが、b層によって坪境が埋没している可能性が高い。時期を示す遺物は出土していないが、1区の第2 a層の上部から、江戸時代前期の焼締陶器が出土し、第1 b (3・4・4-2)層からは江戸時代中期以降の遺物が出土していないことと、第3-1 a層の時期から推定して、第2層の時期は室町時代から江戸時代前期と考えられる。

(3) 第3層

3層に細分した。

第3-1 a層は、10区から北はオリーブ黄色～オリーブ褐色砂泥（極細砂～細砂）で第2 a層に比べ色調が暗く締まりが強い。5区より南では黄褐色～褐色泥土で粗砂を含み、3区より南側は砂礫を多く含む。下面に小溝がみられることから、耕作土と考えられる。第3-1 a層はさらに2層に細分でき、下位は上位に比べ色調が暗い。確実な時期を示す遺物の出土はないが、1区第4面の耕作溝から出土した瓦器碗の特徴から、鎌倉時代後半以降と考えられる。

第3-2 a層は5区北部から北では暗オリーブ褐色砂泥（細砂～中砂）、5区南部から南では灰色～灰オリーブ色細砂～粗砂混じりシルトである。第3-1 a層と比べて泥質となる。5区から北は第3-3 a層と区別することができなかった。擾乱を受け下面に耕作溝が見られる。

第3-3 a層は3区北部と4区南部で第3-2 a層との間に第3-2 b層を挟むことから分離した。3区北西部の第3-2 b層は擾乱を受けていると思われる灰色シルト上に極細砂～細砂混じり中砂～極粗砂や細砂混じり中砂～粗砂混じり極粗砂、その他の調査区では第3-3 a層は暗灰オリーブ色中砂～細砂混じりシルトである。第3-3 a層上面で畦を検出しており、耕作土であることが分かる。第3-2 a・3 a層ともに遺物の出土は極めて少なく時期の検討は困難ではあるが、第3-3 a (12-3)層から出土した瓦器碗の特徴、また第4-1 a層の時期から推定して、第3-3 a層は平安時代から鎌倉時代前半と考えられる。

(4) 第4層

2層に細分した。

第4-1 a層は灰色砂混じりシルトで、4・5区では中位で暗色が強く、上方に粗粒化しつつ2～3層に分かれる。部分的に砂礫の薄層が存在する。4・5区以外の調査区では、上層が形成される段階で削られ部分的にあるいは遺構埋土として存在する。5区では第4-1 a層下面から建物、柱穴、土坑や溝を多く検出している。4区では畦と考えられる第4-2 a層の帯状の高まりやプラントオパールが一定量検出されており、水田が営まれていた可能性が高い。5区の第4-1 a層下面遺構は古墳時代中期から飛鳥時代の範囲である。4区や5区南側では、2～3層に細分しているが、時期を推定することはできなかった。8区の北部では、第4-1 b層が存在する。下部は極細砂～細砂、上部は淘汰が悪い細礫を含む極細砂～中砂である。

第4-2 a層は、4区南部から北ではオリーブ褐色極細砂～細砂で細礫を少量含む。4区北部と5区以外では第5 a層と接し、オリーブ黒色細砂～粗砂混じりシルトで、極粗砂～径5 mmの礫が混じる。第4-2 b層は5区と4区の北部では細砂～粗砂で細礫が混じる淘汰が悪い土石流堆積である。時期を示す遺物は出土していないが、第4-2 a層は讚良郡条里遺跡03-1調査の古墳時代初頭の層準と同じと考えられるため、この時期を想定している。

(5) 第5層

6区より北では第5 a層を細分できなかったが、10区より南では4層に細分した。第5 a層は6区より北では黒褐色極細砂～中砂で細礫が混じる。5区中央部から4区では層厚が増し、2～3層に分かれ下位から上位に粗粒化する。5区の451溝を境として黒褐色砂礫混じりシルトから黒褐色砂礫質シルトに変化する。層相が異なるため、第5-1 a層と第5-2 a層とした。

4区北部の第5-1 a層上面で小区画水田を検出した。この地点では第5-1 a層下部と検出した水田の耕作土層の上部に分かれる。3区から南では、第5-2 b・3 b層が厚く堆積し、第4-2 a層との間に第5層の薄層を挟在するが、第5-1 a層と第5-2 a層が収斂しているのか、第4-2 a層の形成によって第5-1 a層が失われ、第5-2 a層が残っているのかを区別することができなかった部分がある。10区と5区北端では灰オリーブ色泥砂（シルト～極細砂）層の下に淘汰が悪い泥砂（中砂～極粗砂）層を挟み、砂泥（シルト～極細砂）層となる。全体として上方に粗粒となる傾向は5区南部と同様であるため、前者を第5-1 a層、後者を第5-2 a層とした。9区では第5-1 a（15-3）層下面で検出した134土坑から、縄文時代晩期末の突帯文土器が出土している。5区の第5-1 a層上面に属する流路や9区の第4-2 b層から弥生時代中期の土器が出土している。出土量は僅少で細片であることから、積極的に評価しがたいが、第5-1・2 a層はおおむね縄文時代晩期から弥生時代中期に相当すると考えられる。

第5-3 a層は10区・5区・4区北半では灰色粘土で、4区の中央部から南側は第5-3 b層が存在するようになり、中砂を含む黒色細砂へと漸移的に変化する。

4区中央部からはさらに径1～5 mmの礫が混じる灰色細砂層で、第5-4 a層の堆積が認められる。第5-3 a層に比べ色調が薄いのが、1区西部から2区にかけては、逆に第5-4 a層が細粒になり暗色が強くなる。9区では第5-4層中に地震痕跡と考えられる亀裂を検出した。第5-3・4 a層は、時期を示す遺物の出土はないが、第5-2 a層と第6 a層の間の層であるため、縄文時代後期から縄文時代晩期であると考えられる。

（6）第6層

10区から南では第7 a層から上位の層の中で最も暗色の層で、黒色粘土である。粘りが強いので植物遺体を多く含むと思われる。第6 b層は砂礫質シルトが大部分である。本調査と東接する讚良郡条里遺跡03-2調査で、第6 a層と同じ層序から縄文時代後期の土器が出土していること、また、9区と同層の土壌の放射性炭素年代測定法で測定したところB.P. 3,620±40年前の結果を得たことから、第6 a層の時期は縄文時代後期と考えられる。

6区から北では暗褐色シルト層となる。第5 a層と接しており、層厚や色調も薄く10区から南とは層相が異なる。6区の第7 a層の上面は、南に向かって下降し、それを覆う第6 b層が南に向かうほど粗粒化しており、南端に流路が存在することが想定できる。

また7区でも第5 a層と接しており、第5 a層の下に堆積する灰色シルト層が、第5-3 a層と第6 a層を含むものなのか、あるいは第5-3 a層に相当する層として、第6 a層が第5-3 a層と第7 a層との間に収斂するのかを明確にできなかった。そのため7区では第5層と第6層を一部を除いて区分できなかった。

（7）第7層

第7層は第6 b層と第8 a層の間に挟まれた層である。調査区によってa層の層数は異なり、1層になったり、1つの層が2つの層に分離したりしている。また、下層確認トレンチによる部分的な観察に

よることも多かったため、統一した枝番号を付していない。7・8区ではおおむねa層が4層存在する。上位のほうに向かって、やや暗色が弱くなる傾向があるが、特に暗色が強い層はみられない。b層は流路上方やレンズ状に堆積している。中心部分は砂礫であるが、そのほかは淘汰が不良でわずかに極粗砂を含む細粒の砂である。7区の第7b(9)層の下では、砂混じりのシルト層から上方に細粒化し上部でシルト層になりやや暗色化する単位が3回続くが、この状況は第7a層中ではこの地点にのみ存在する。6・10区では第8a層を確認していないため、第7a層の層数は不明である。7区の第7a(9)層上面で検出した焚火跡から採集した木炭片の年代測定の結果、B.P.4,250±40年の数値を得たことから、縄文時代中期中葉と考えられる。5区では北部は1層のみで、南部では確実に第8a層に対比できる層を確認できていないため、層数は判明していない。4区南部から9区までは2層存在する。9区のオリーブ黒色中砂～極粗砂混じりシルト層(上から1層目)の土壌の年代測定の結果、B.P.3,920±40年の数値を得た。2・9区の第7a(20)層(上から2層目)はb層を含め砂混じりのシルトになっている。9区では下面が波打つ状況が見られることから、地震による変形の可能性がある。

(8) 第8層

本調査の4・5区の調査前に行われた確認調査⁴⁾で、鬼界アカホヤ火山灰を検出していることから、下層確認トレンチでは同火山灰を包含する層を見つけることにも留意した。その結果5区の北部で鬼界アカホヤ火山灰を検出することができた⁵⁾ので、同様の層相を示す層を第8a層とする。9区以外の第8a層の上部はおおむね黒色シルトで極粗砂～細礫を含み、下部はオリーブ黒色細砂～粗砂で極粗砂～細礫を含む。層厚は0.2～0.4mと厚い。第8a層直上の第7b層には砂混じりシルトが存在することが多い。9区では第8a層中に2層のb層を挟み、さらにa層の重なりがあるため4層に分かれる。2区での第8-1b層は干潟から後背湿地に変化する堆積状況が見られる。干潟の上面はT.P.+0.3mである。干潟上部の土壌に含まれる植物遺体の年代測定の結果、B.P.4,380±40年の数値を得たことから、第8a層は縄文時代前期から縄文時代中期中葉に相当すると考えられる。7・8区では第8a層と同様の層相を示す層は、上層から縄文時代前期後半から末期の土器が出土しているため、第8a層に含める。7区の第7a(9)層の年代から下位の層も第8a層に含めるべき層があると考えられるが、根拠を示すことができないため第7a層としている。第8b層は淘汰が悪く、締まりが強い。上部は第8a層からの植生により大きく乱されていることがある。4区では第8b層は上方に細粒化する。T.P.+0.9m付近で黒色層、下に上方に粗粒化するb層が続き、+0.2m付近で上の黒色層と比べ暗色が弱い黒色層を確認し、T.P.-0.5m付近では比較的暗色が強い黒色層を確認している。9区の第8b層の層厚は厚く、T.P.-2.8m付近には植物遺体を多く含む泥炭と思われる黒色層が存在する。

2. 遺構の概要

調査では、縄文時代以降の各時代の遺構を検出した。1区から10区の各調査区では、粗密はあるものの種々の遺構を認めている。これらの調査区は、楠根川や道路・農道などにより複数の区画にまとめることができ、かつ、区画内の状況に共通する部分が多いので、調査地北側から8区、7区、6区、10区、5区・4区、3区・1区・9区、2区の順に7つの区画の遺構の状況を述べる。

調査では『遺跡調査基本マニュアル』にしたがい、各調査区で遺構検出を行った。遺構面には上から順に第1面、第2面…、層位には基本的に上から順に1層、2層…の名称を付した。各調査区ではそれぞれ堆積状況が異なり、隣接する調査区の間でも遺構面や層位の名称のくい違いがあるため、前節に示

した第1層から第8層までの遺跡全体の基本層序を基に、表1、表2に示した。

また、各遺構面では精査に努めたが、耕作による攪拌、洪水による浸食、土壌化の進行などの諸条件により、層序に対応する時期の遺構以外に前後する時期の遺構を検出・掘削することもあった。ここでは調査段階の検出状況にしたがって、各遺構面に分けて述べる。これらの方法はやや煩雑な印象を与えるかもしれないが、調査段階に作成した図面・写真、また、採集した遺物との整合性の分かりやすさを優先して考えたものである。調査地の歴史的な変遷については第6章で総括する。

なお、検出した遺構は多数におよぶため、以下では遺跡を理解する上で重要と判断した遺構、各時期を代表する遺物が出土した遺構を重点的に紹介することとする。

3. 8区の遺構（図7～13）

8区は南北約55m、東西約7mの細長い長方形の調査区である。工程の関係から北部と南部に2分割して調査を行った。まず南部の調査から開始し、南部の調査終了後、埋め戻しを行い、反転して北部の調査を行った。遺構の密度などの違いにより、遺構検出面に違いがでたため、ここでは北部・南部の対応する遺構面をつなげて検出遺構を紹介する。

（1）北部第1面、南部第1面（図8、写真図版2）

近現代の耕作土層の下には、約0.2～0.3mの厚さで第1層から第3-1層に相当する耕作土層が重なる。これらの耕作土層を除去して第1面とした。5区より北部では第3-2・3層は、第3-1層以前の耕作によって攪拌が著しいため残存していない。

耕作溝 調査区の広い範囲に分布する。北部・中部に偏在するように見えるのは、南部南側は機械掘削で第4-1（4）層まで掘り下げたためであり、本来はこの部分にも耕作溝が分布していたことが断面観察により判明している。溝は東西または南北方向に並び、東西方向のものが圧倒的に多い。幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mのものが多くを占める。複数の溝が密に重なり合う状況を示すが、埋土は大きく3種類に分けることができ、各々の間隔は約2～4m程度になる。出土遺物は少なく、小片がほとんどであるが、平安時代から江戸時代に属する耕作溝が重複していると推定できる。

小土坑 直径約0.1m・深さ約0.1mの小土坑が散在するが、性格は不明である。出土遺物はない。

なお、南部第2面では遺構は検出できなかった。

（2）北部第2・3面、南部第3面（図9・12・13、写真図版2）

第4-2a（5）層は厚さ0.1～0.2mで、比較的土壌化が弱い。北部では第4-2a（6）層との境界は明瞭ではないが、南部では98流路に伴う砂層が間に入る。

70流路（図12、写真図版2-4） 中央部で検出した南南東から北北西方向の流路である。第4-2a（5）層上面の遺構である。断面形は浅いU字形で、幅2～3m、深さ約0.6mである。埋土は中砂～極粗砂が主体で、ラミナは不明瞭である。出土遺物はない。

98流路（図13、写真図版2-5） 南部で検出した南東から北西方向のやや規模の大きい流路である。第5a（6）層上面の遺構である。断面形は浅いU字形で、幅約5m、深さ約1mである。埋土は極細砂～極粗砂が主体で、発達したラミナが観察できる。器種不明の土器片が数点出土した。

なお、北部第4面では特筆すべき遺構は検出できなかった。

（3）北部第5面、南部第4面（図10、写真図版3）

南部南端付近では第4-2a（6）層は第6a（7）層と接しており、第5層は明瞭に観察できない。

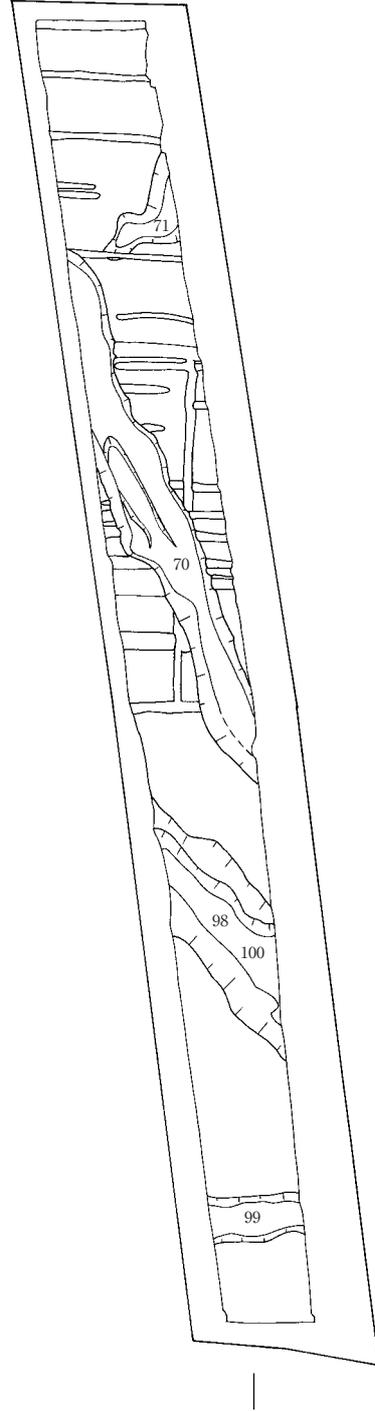
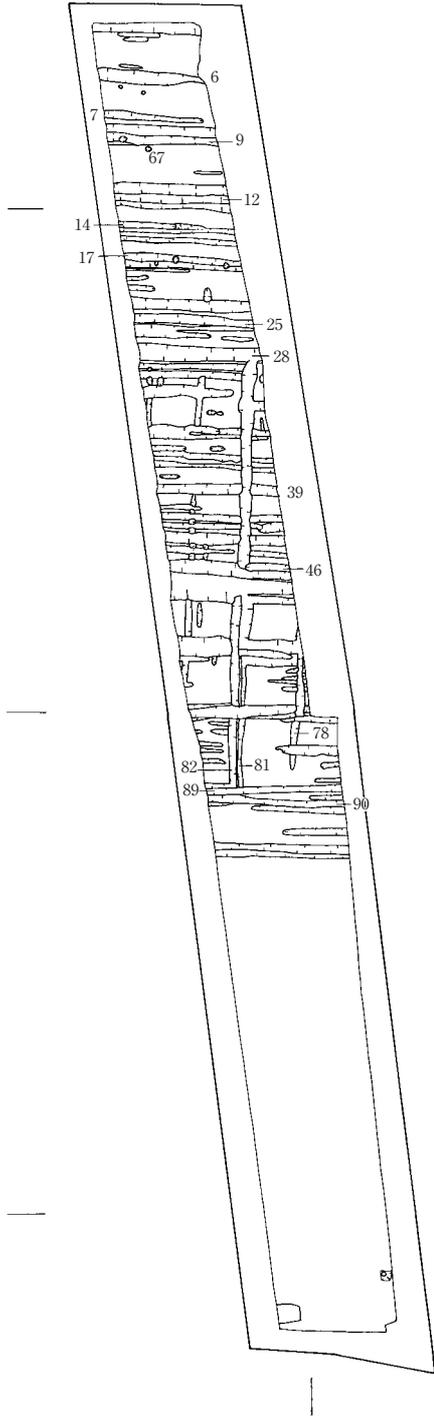


図7 8区東壁断面図



Y=-33,630

Y=-33,630



X=-138,250

X=-138,270

X=-138,290



图8 8区北部·南部第1面平面图

图9 8区北部第2·3面、南部第3面平面图



Y=-33,630

Y=-33,630

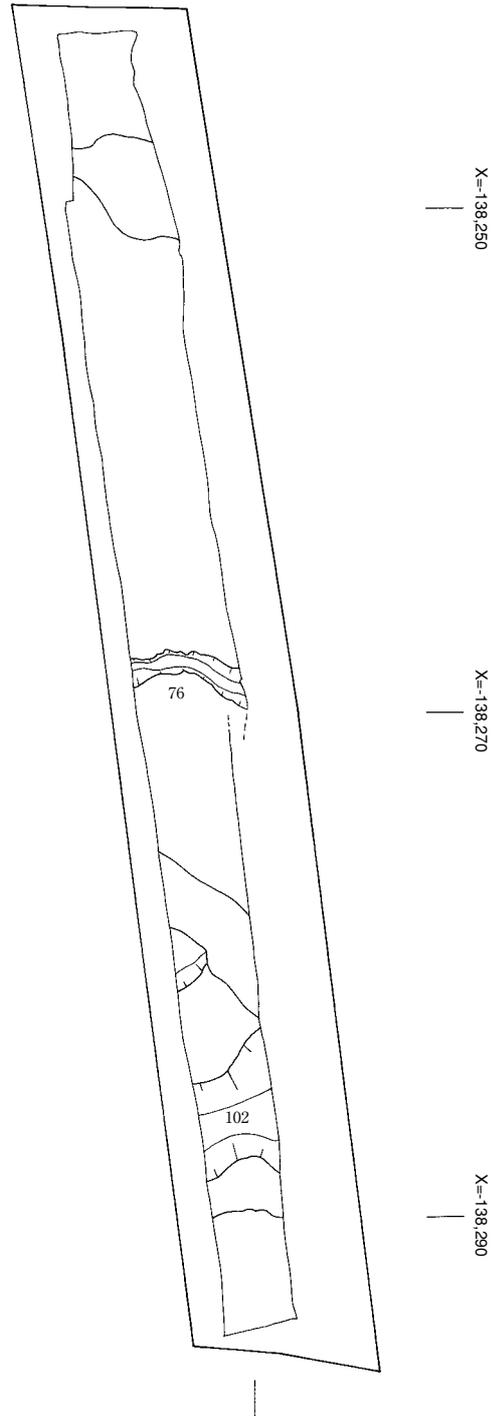
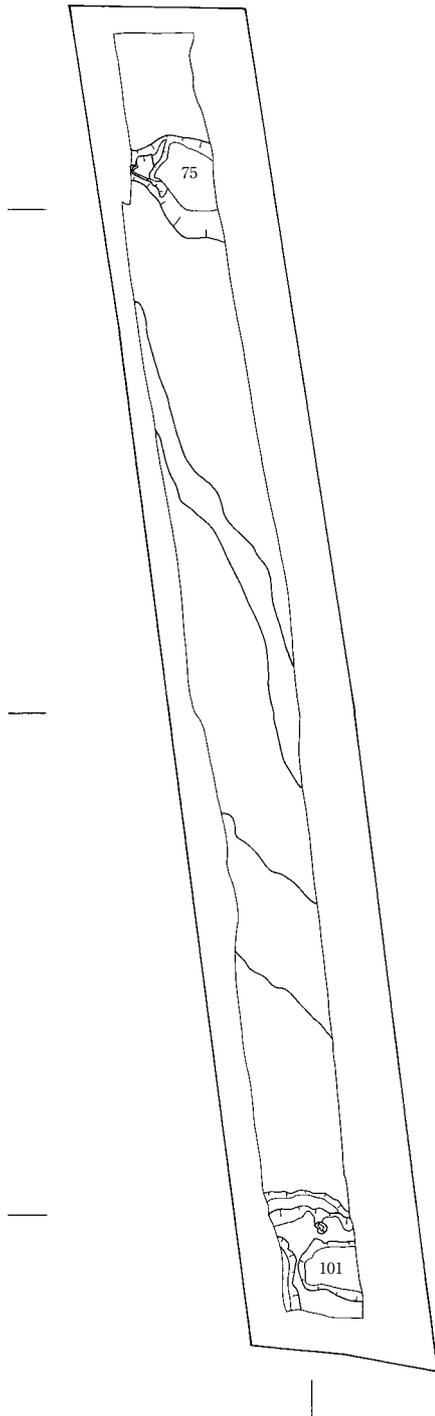


图10 8区北部第5面、南部第4面平面图

图11 8区北部第6面、南部第5面平面图

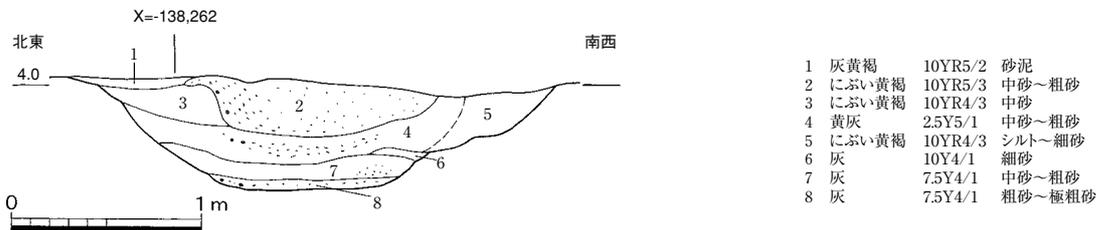


図12 8区北部第2面70流路断面図

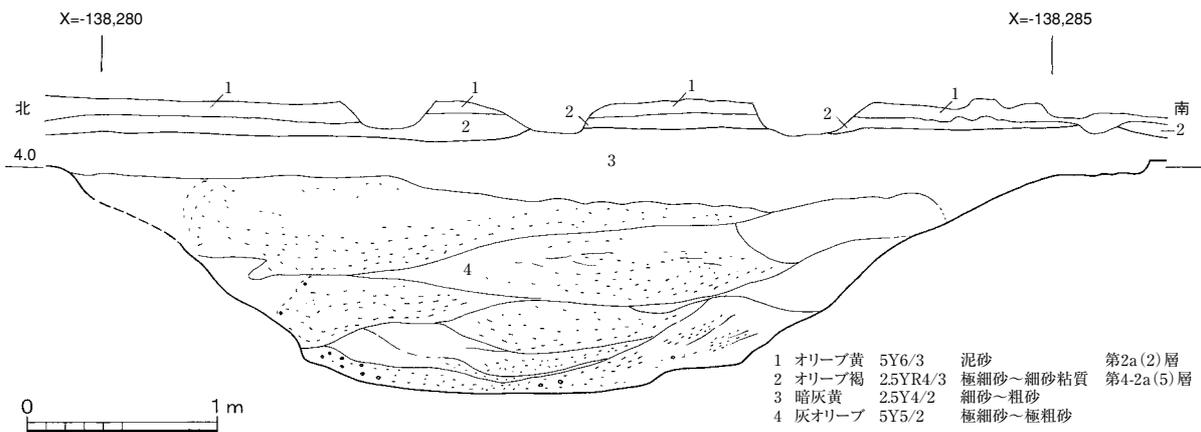


図13 8区南部第3面98流路断面図

北部では徐々に厚くなり約 0.4mになる。一方第 6 a (7) 層は北部では第 7 a (8) 層と接しており、南部では徐々に厚くなり約 0.4mになる。

101 流路 南部で検出した東から西方向の流路である。第 7 a (8) 層上面の遺構で、幅 5 m 以上、南肩は調査区外となり、断面形は U 字形、深さは 1.2m 以上ある。縄文土器、石器剥片が出土した。

(4) 北部第 6 面、南部第 5 面 (図13、写真図版 3)

第 7 a (8) 層は全体的に厚く堆積しており、0.3～0.6mの厚さがある。

102 流路 南部で検出した東から西方向の流路である。第 7 a (9) 層上面の遺構である。断面形は浅い V 字形で、幅 4～6 m、深さ約 1.7m である。101流路の北側に接する。断面観察によりこれらの流路の下層にも大規模な流路を確認することができた。8区南端付近には少しずつ位置を変えながら東から西へ流れる流路が存続していることが分かる。

なお、調査区北端で下層確認のための掘削を行い、T.P.約 2.2m で第 8 層を確認した。

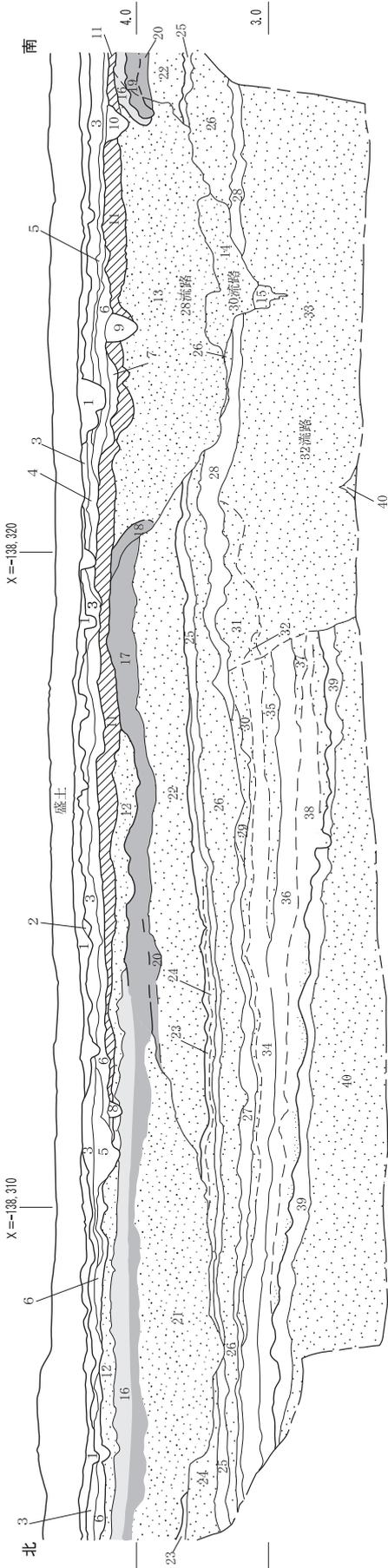
4. 7 区の遺構 (図14～18)

7区は南北約24m、東西約7mの長方形の調査区である。

(1) 第 1 面 (図15、写真図版 4)

近現代の耕作土層の下には、約 0.2m の厚さで第 1 層～第 3 - 1 層に相当する耕作土層が重なる。第 3 - 2 a 層以下は第 3 - 1 層形成時の耕作土により攪拌され残存していない。

耕作溝 南部を中心に分布するが、これは第 3 - 1 (4) 層にまで耕作がおよび攪拌を受けたため、9溝・10溝などのように土坑状に検出したものもあるが、本来は調査区全体に耕作溝が分布していたと推定できる。東西または南北方向に並ぶ。幅 0.2～0.5m、深さ0.05～0.1mのものが多くを占める。出土



1	灰オリーブ	5Y5/2	泥砂	第1(1)層	中砂～極粗砂	第6b(6)層
2	灰オリーブ	5Y5/2	泥砂(中砂)	耕作層	中砂	第7a(8)層
3	オリーブ	5Y5/4	泥砂	第2a(2)層	極細砂～細砂	第7b(8)層
4	オリーブ	5Y6/3	砂泥	第2a(3)層	シルト	第7a(8)層
5	灰オリーブ	7.5Y5/2	鉄分沈着	第2a(3)層	極細砂	第7b(8)層
6	灰オリーブ	5Y5/3	泥砂	第2a(3)層	シルト	第7a(9)層
7	灰オリーブ	5Y5/2	泥砂	耕作層	中砂～極粗砂	第7b(9)層
8	暗灰黄	2.5Y5/2	泥砂(中砂)	耕作層	シルト	第7a(9)層
9	灰オリーブ	7.5Y4/2	泥砂	耕作層	シルト～微砂	第7b(9)層
10	灰オリーブ	5Y5/3	泥砂混粗砂	耕作層	シルト～微砂	第7b(9)層
11	暗灰黄	2.5Y5/2	泥砂(中砂)	第3-1a(4)層	泥砂(中砂)	32流路
12	黄褐	2.5Y5/3	泥砂(細砂～中砂)	流路	泥砂(中砂)	32流路
13	灰白	2.5Y7/1	中砂～粗砂	第4-2a(5)層	泥砂(中砂)	32流路
14	オリーブ	7.5Y2/2	細砂	第5a(6)層	泥砂(中砂)	第7b(8)層
15	灰白	7.5Y7/1	中砂	第5a(6)層	中砂～粗砂	第7b(8)層
16	黄褐	2.5Y5/4	砂泥	第4-2a(5)層	泥土 中砂混	第7a(9)層
17	にぶい黄褐	10YR4/3	泥砂(粗砂)	第5a(6)層	シルト	第7b(9)層
18	オリーブ	2.5Y4/3	砂泥	第5a(6)層	砂泥	第7b(9)層
19	暗褐	10YR3/3	砂泥	第6a(6)層	細砂～粗砂	第8a(10)層
20	暗灰黄	2.5Y5/2	泥砂(細砂～中砂)	流路	細砂～極粗砂	第8b(10)層
21	灰白	5Y7/2	中砂	流路	リバーズグレイディング	
22	灰オリーブ	5Y5/2				
23	暗緑灰	7.5GY3/1				
24	灰	10GY4/1				
25	暗緑灰	10GY4/1				
26	オリーブ	5Y6/1				
27	暗灰	N3/0				
28	暗オリーブ	5Y3/1				
29	暗オリーブ	2.5GY4/1				
30	灰	7.5Y4/1				
31	灰	7.5Y4/1				
32	灰	7.5Y3/1				
33	灰白	5Y7/1				
34	オリーブ	7.5Y3/1				
35	オリーブ	7.5Y3/1				
36	灰	5Y5/1				
37	褐灰	10YR4/1				
38	灰	7.5Y4/1				
39	灰	7.5Y4/1				
40	灰	10Y6/1				

図14 7区東壁断面図

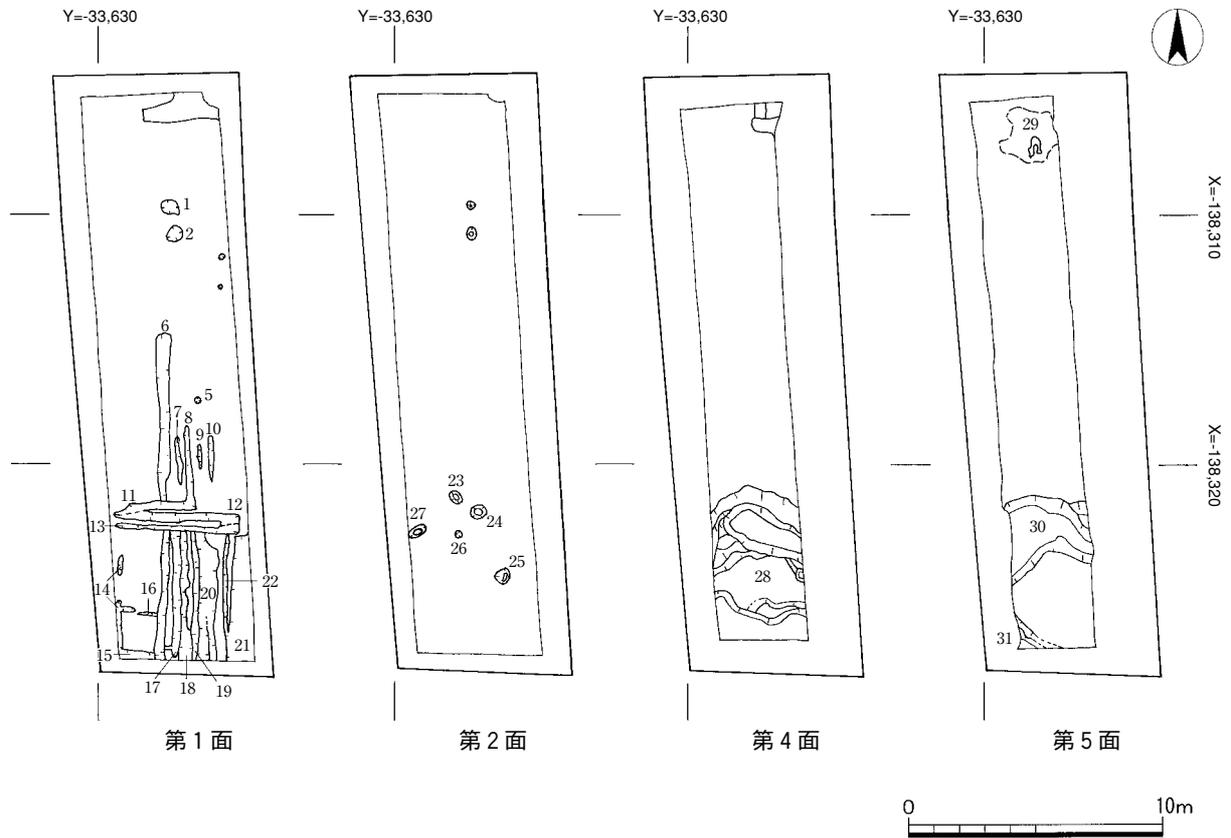


図15 7区平面図

遺物は少なく、小片がほとんどであるが、平安時代後期から鎌倉時代の土師器片が多い。

小土坑 直径約 0.1m、深さ約 0.1mの小規模な土坑が散在するが、性格は不明である。出土遺物はない。

(2) 第2面 (図15、写真図版4)

第4-2a(5)層は厚さ0.1~0.2mである。調査区南端では第6a(6)層との間に第5層が存在していることを確認できた。

小土坑 直径 0.1~0.2m、深さ約 0.1mの小土坑が南部を中心に散在するが、性格は不明である。出土遺物はない。ただし、第4面で検出した28流路の埋土を掘り込んでいるので平安時代以降に属することが分かる。

なお、第6a(6)層上面を第3面として精査したが、遺構は検出できなかった。

(3) 第4面 (図15・16、写真図版4)

8区南部から引き続く状況で、第6a(6)層は8区より徐々に厚くなり、0.4~0.5mとなる。第7a(8)層上面を第4面として精査を行った。

28流路 (図16、写真図版4-4) 南部で検出した東から西方向への流路である。第2面を精査した段階で輪郭があらわれており、断面での確認の結果、第4-2a(5)層の遺構であることが分かった。断面形は幅の広いU字形で、幅約6m、深さ約0.7mである。底部は凹凸が目立つことから流れが激しかったことが推測できる。奈良時代の土師器甕 (図76-81・82) などが出土した。

(4) 第5面 (図15、写真図版4)

第7a(8)層の厚さは0.2~0.3mで、土壌化の強い部分と弱い部分がある。第7a(9)層上面を

第5面として精査を行った。

29土坑(図17・18、写真図版4-5・6) 北部で検出した。第7a(9)層上面の遺構である。平面形は南北約0.8m、東西約0.5mの南に開く不整形なU字形である。この部分はやや赤みを帯びた色調を示し、周囲には木炭片が密に散布することから焚火跡と判断した。赤みを帯びた部分は約0.05mの厚さである。

この遺構の周囲は南北約2.2m、東西約2.4mの不整形な平面形で土がやや硬くなっており、また、土

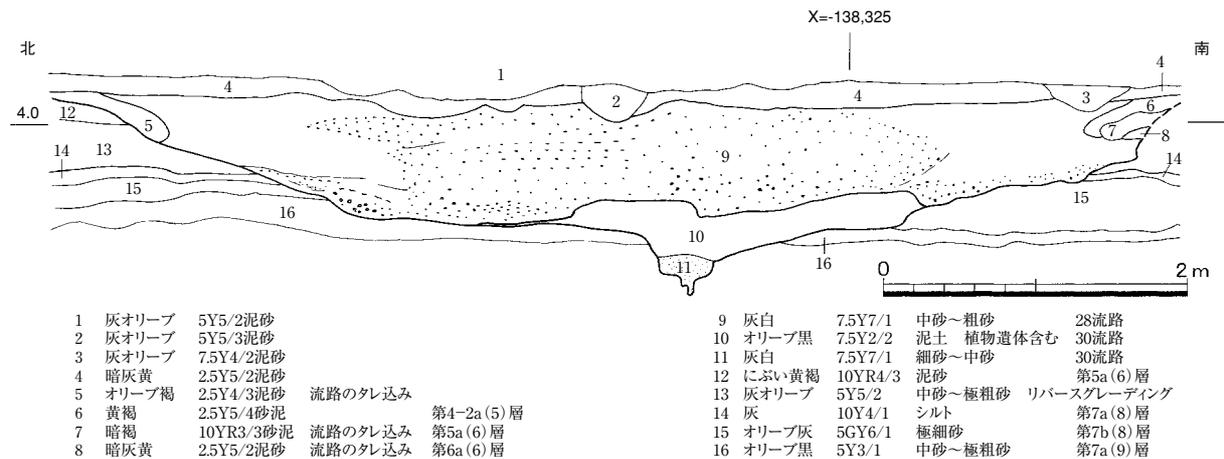


図16 7区第4面28流路、第5面30流路断面図

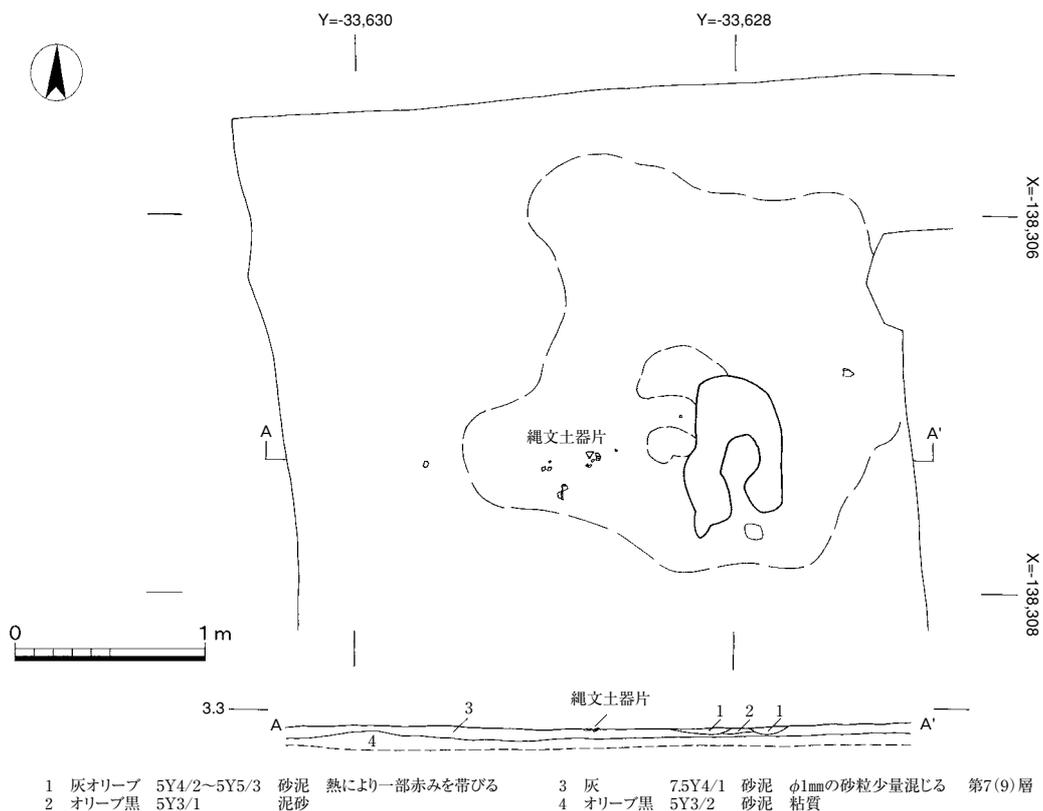


図17 7区第5面29土坑実測図

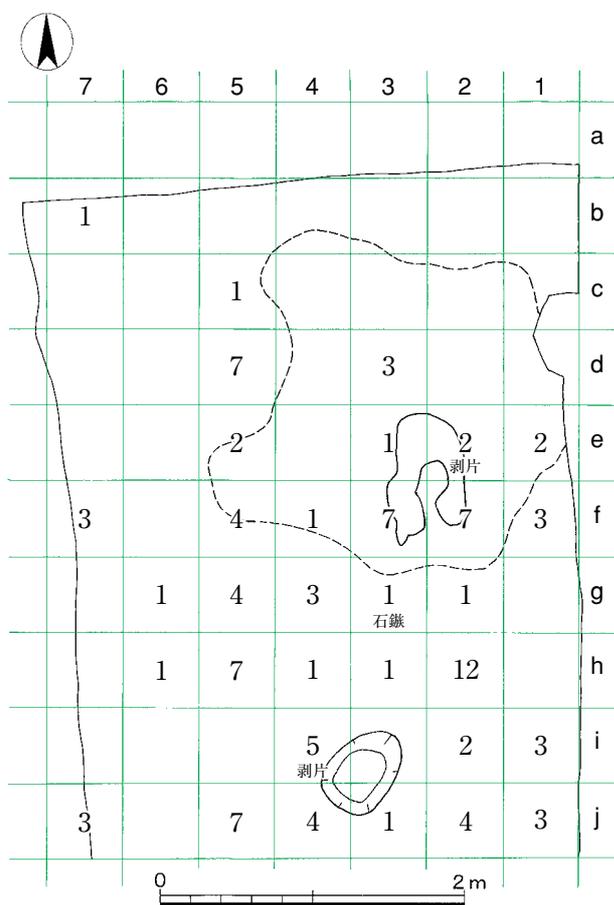


図18 7区第5面29土坑石器分布状況図

器片、石器片の散布を認めた。そこで、この部分を中心に南北 5.0m、東西 3.5mの範囲を 0.5 m四方に区切り、区画ごとに土を取り上げ、篩がけを行い、微細な土器片、石器片、木炭片などの遺物採集に努めた。

その結果、南側を中心に石器剥片や多量の石屑を認めたことから、ここで石器製作が行われていたことが推定できる。この遺構に伴い、縄文時代中期の土器が出土した（図74-4）。

採集した木炭片を樹種同定分析した結果、コナラ節であることが判明した。また、年代測定の結果、B.P.4,250±40の数値を得た。

30流路（図16） 調査区南部を東から西方向に流れ、南西方向に蛇行していくものと思われる。第4面で検出した28流路の前段階の流路で、第7層上面で検出した。規模は上部を28流路に切られているため詳細は不明であるが、断面形は底部が深くV字形になる。残存幅は東壁で約2.1 m、西壁付近では約 2.5mと広がるのを確認した。埋土は植物遺体を含む泥土層、底部は細砂～中砂層である。

第5面で縄文時代中期の土器を含む29土坑を認めたことから、第7 a（9）層を掘り下げ、下層遺構の検出をめざして第6面として精査したが、平面では遺構は検出できなかった。

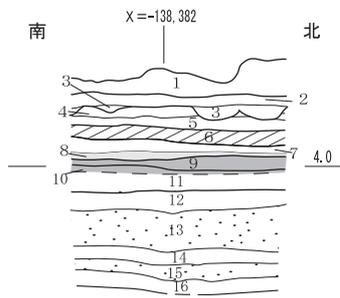
32流路（図14-31～33層） 断面の観察により南部で確認した、東から西方向に流れると思われる流路である。上部は28流路、30流路などに切られる。幅は約 9 mを確認したが、南肩が調査区外へとなるため、規模は不明である。第6面の時期にはすでに流れていたと思われるが、出現時期は確実に確認できなかった。第7・第8層の大量の砂の供給源の一つであったと思われる。また上部の28流路、30流路や周辺のb層の形成にも影響した流路であると思われる。

5. 6区の遺構（図19）

6区は当初は南北約17m、東西約15mの長方形の調査区として機械掘削を開始したが、東半分が上水道工事の縦坑により攪乱を受けており、また、西半分でも著しい湧水があったため、調査区西端を南北方向に細長く掘削し、西壁の断面を観察・記録を取ることとした。

（1）層序・遺構（図19、写真図版5）

隣接する7区・10区と同様に、近現代の耕作土層の下は0.2～0.3mの厚さで、第1～第3層の耕作土層が重なる。第4-2 a層は厚さ約 0.1mである。第6層も厚さ約 0.1mで、その上に部分的に薄く第5層が確認できる。第7 a層は7区よりも高い位置で検出できた。第8層は確認できていない。断面の観察



1 黒褐色	2. 5Y3/1	砂泥		耕作土
2 灰オリーブ	5Y4/2	砂泥 (シルト～細砂)	小礫φ2～5mm僅かに混	第1層
3 灰オリーブ	5Y4/2	砂泥 (シルト～細砂)	2に4が小ブロックで混	耕作溝
4 灰オリーブ	5Y5/2	砂泥 (シルト～細砂)	極粗砂僅かに混	第2層
5 オリーブ褐色	2. 5Y4/3	泥土 (シルト～細砂)	固く締まる 極粗砂～粗砂僅かに混	第2層
6 灰	5Y4/1	泥土 (シルト～細砂)	粗砂少量混 固く締まる	第3-1 a 層
7 オリーブ黒	5Y3/1	シルト～中砂	砂っぽい	第3-1 b 層
8 暗灰黄	2. 5Y4/2	細砂～粗砂		第4-2 a 層
9 暗オリーブ	5Y4/3	シルト～極細砂	粗砂少量混 泥っぽい	第5層
10 黒褐色	2. 5Y3/2	シルト～細砂	極粗砂僅かに混 固く締まる 鉄分沈着 土器・炭僅かに含む	第6 a 層
11 オリーブ黒	5Y3/1	極細砂～細砂	粗砂少量混	第6 b 層
12 黒	5Y2/1	シルト～極細砂	粗砂僅かに混	第7 a 層
13 暗オリーブ灰	2. 5GY3/1	極細砂～粗砂	下層ほど粗くなる	第7 b 層
14 オリーブ黒	10Y3/1	シルト～極細砂		第7 a 層
15 灰	10Y4/1	極細砂～細砂		第7 b 層
16 オリーブ黒	5Y3/1	極細砂～中砂		第7 a 層

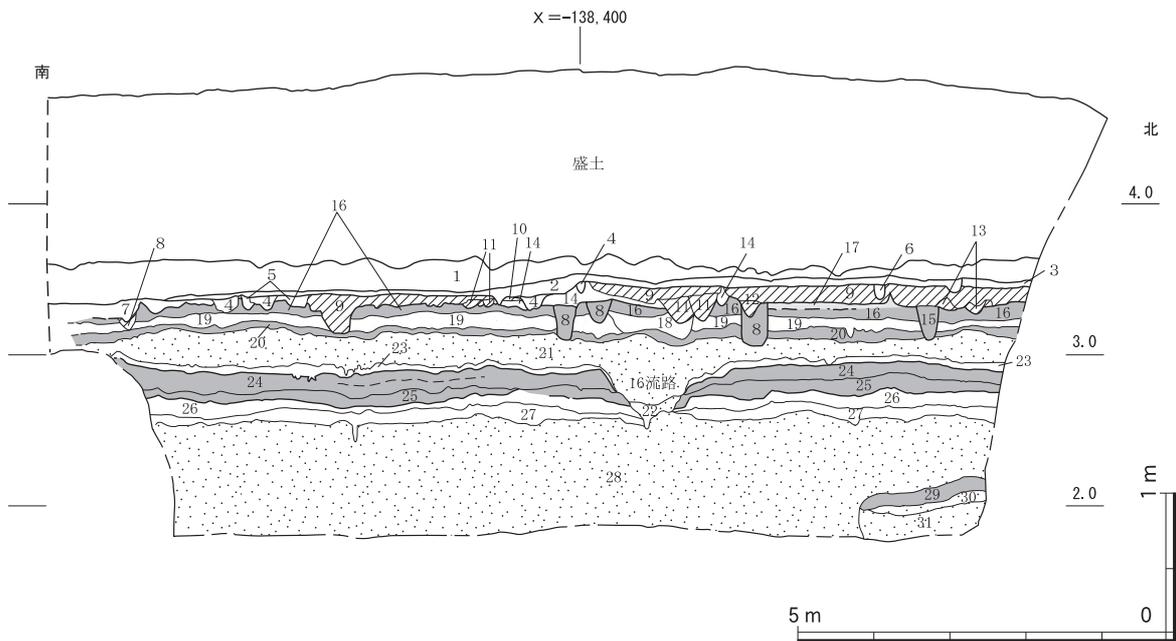


図19 6区西壁断面図

により、第2層上面の東西方向の耕作溝、第4層上面の小規模な流路を認めたが遺物の出土はない。

6. 10区の遺構 (図20・21)

10区は当初は南北約17m、東西約15mの長方形の調査区として機械掘削を開始したが、東半分が上水道工事により攪乱を受けていたため、西半分のみを調査対象とした。南北約16m、東西約 7.5mの長方形の調査区である。なお、10区の調査時の層名は5区の調査時の層名に準拠している。



1 オリーブ黒	5Y3/1	砂泥			
2 オリーブ褐色	2. 5Y4/3	泥砂 (極細砂～細砂)	極粗砂僅かに混		
3 暗灰黄	2. 5Y5/2	泥砂 (極細砂～粗砂)	極粗砂僅かに混	第2 (4)層	
4 灰オリーブ	5Y5/2	砂泥 (極細砂～粗砂)	極粗砂僅かに混		
5 灰	7. 5Y4/1	泥砂 (極細砂～細砂)	極粗砂僅かに混	第3-1 a (8)層	
6 灰オリーブ	5Y5/3	泥砂 (極細砂)	粗砂僅かに混		
7 灰オリーブ	5Y4/2	泥砂 (極細砂～粗砂)	極粗砂僅かに混 9より砂多い		
8 灰オリーブ	5Y4/2	泥砂 (極細砂～細砂)	粗砂僅かに混 5より砂やや少		
9 灰オリーブ	5Y4/2	泥砂 (極細砂～粗砂)	極粗砂僅かに混	第3-1 a (8)層	
10 オリーブ褐色	2. 5Y4/3	泥砂 (極細砂～粗砂)	粗砂僅かに混	第3-1 a (8)層	
11 灰	7. 5Y4/1	泥砂 (極細砂～細砂)	極粗砂僅かに混 5より砂やや多		
12 灰オリーブ	5Y4/2	泥砂 (極細砂～細砂)	粗砂少量混	第3-1 (8)層	
13 暗灰黄	2. 5Y5/2	泥砂 (極細砂)		第3-1 (8)層	
14 暗オリーブ	5Y4/3	泥砂 (極細砂～細砂)	粗砂僅かに混	第4 (12)層	
15 オリーブ褐色	2. 5Y4/3	泥砂 (シルト～極細砂)	粗砂僅かに混		
16 灰オリーブ	5Y4/2	泥砂 (シルト～極細砂)	粗砂少量混 土壌化が進む	第5-1 a (15)層	
17 灰オリーブ	5Y4/2	泥砂 (シルト～極細砂)	16より砂が少	第4 (12)層	
18 灰	7. 5Y4/1	中砂 (細砂～極粗砂)			
19 暗オリーブ	5Y4/3	泥砂 (極粗砂～中砂)	16より砂が多	第5-1 b (15)層	
20 灰オリーブ	5Y4/2	砂泥 (シルト～極細砂)	粗砂僅かに混 16より砂が少	第5-2 a (16)層	
21 灰	5Y4/1	中砂 (粗砂～細砂)	小礫φ5mm僅かに混	第5-2 b (16)層	
22 暗緑灰	10GY4/1	極粗砂 (極細砂～細砂)		16流路	
23 オリーブ黒	5Y3/2	泥土 (粘土)		第5-3 (17)層	
24 オリーブ黒	5Y3/1	泥土 (シルト)	極細砂少量混 固く締まる	第6 a (18)層	
25 オリーブ黒	5Y3/1	泥土 砂混じりシルト	極細砂～細砂少量混	第6 a (18)層	
26 オリーブ黒	5Y3/1	シルト～極細砂	細砂少量混 固く締まる 土壌化進む	第7 a 層	
27 オリーブ黒	5Y3/1	極細砂	細砂～中砂少量混 25より砂多	第7 a 層	
28 黄灰	2. 5Y4/1	中砂 (細砂～極粗砂)		第7 b 層	
29 緑黒	5G2/1	シルト (シルト～極細砂)	粗砂僅かに混	第7 a 層	
30 暗緑灰	5G3/1	シルト (極細砂～中砂)		第7 b 層	
31 暗緑灰	5G3/1	粘土	有機物 (植物の根少量混)	第7 b 層	

図20 10区西壁断面図

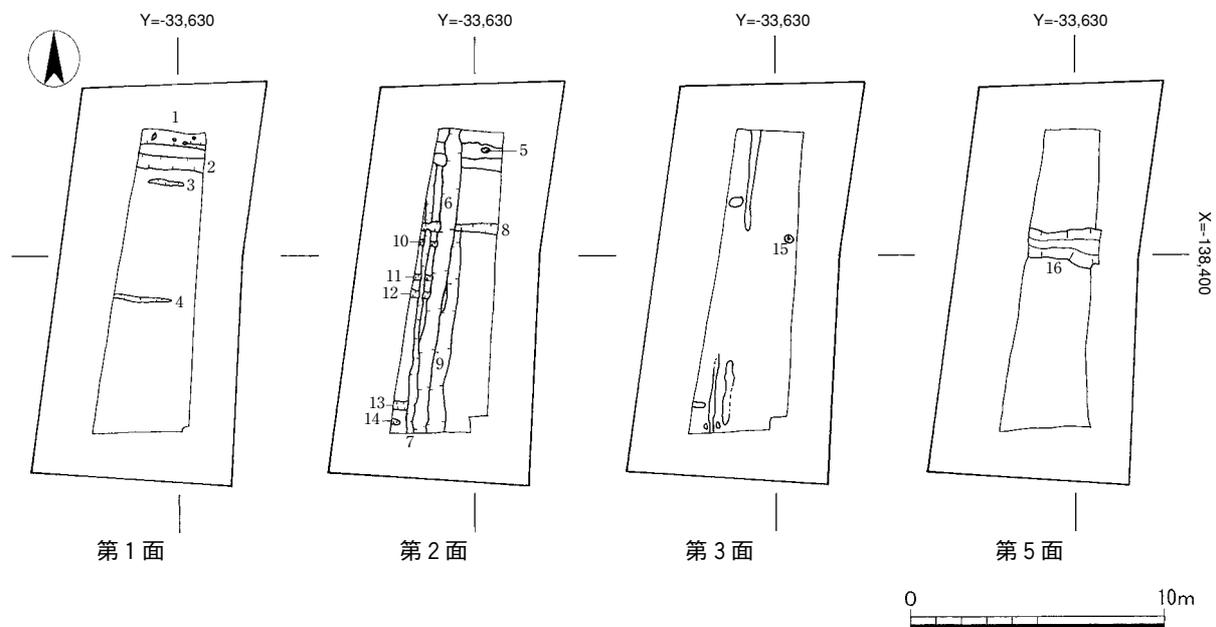


図21 10区平面図

(1) 第1面 (図21、写真図版5)

近現代の耕作が深くまでおよんでいるため、第2(4)層は厚さ0.1mに満たない。この層を除去した面を第1面として精査を行った。

耕作溝 調査区北部を中心に検出した。東西方向のもののみである。幅0.2~0.5m、深さ0.03~0.1mである。出土遺物は少なく、時期不明の土師器片のみである。

(2) 第2面 (図21、写真図版5)

厚さ0.1~0.2mの第3-1(8)層を掘り下げ、精査を行った。

耕作溝 調査区のはほぼ全面に分布する。東西または南北方向に並ぶ。幅0.3~0.6m、深さ0.05~0.1mのものが多い。出土遺物は少なく、また小片がほとんどであるが、平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿、瓦器碗を認めた。

(3) 第3面 (図21、写真図版5)

第4(12)層は非常に薄く、一部でのみ確認した。この層を除去した面を第3面とした。

小土坑 1基を認めたのみである。出土遺物はない。

なお、第5-2a(16)層上面になる第4面では遺構を検出していない。

(4) 第5面 (図21、写真図版5)

第5-2a(16)層は0.2~0.3mの厚さである。第5-3a(17)層は調査区のはほぼ全面に広がっており、この上面を第5面として精査を行った。

16流路 東から西方向への流路である。5-3a(17)層上面の遺構である。断面形は浅いU字形で幅約1.7m、深さ約0.4mである。埋土は中砂が主体でラミナは不明瞭である。出土遺物はない。

なお、第6a(18)層上面になる第6面では遺構を検出していない。

7. 5区・4区の遺構 (図22~42)

4区・5区は北辺約11m、南辺約28m、南北約90mの南に広がる細長い台形状の調査区である。工程

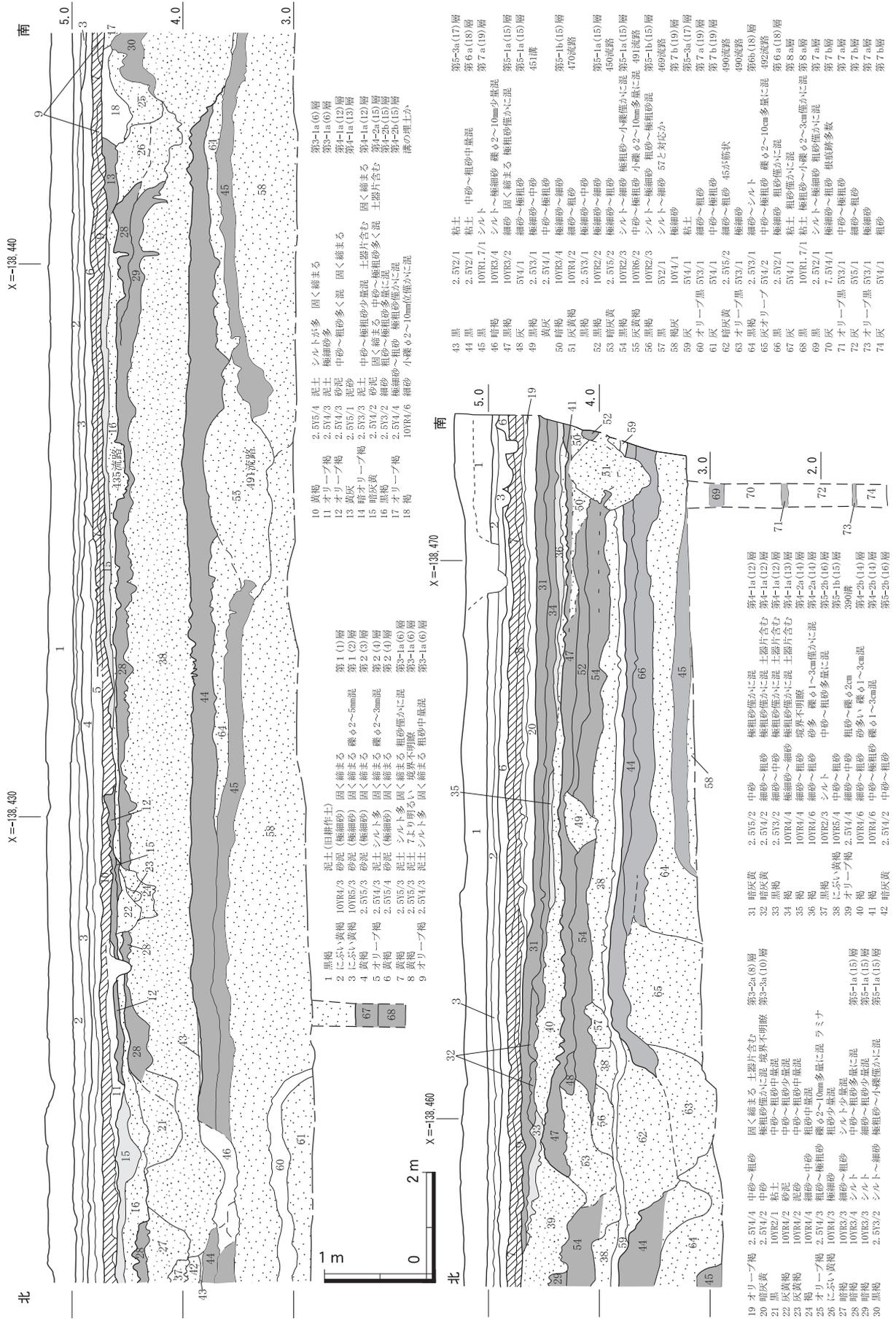


図22 5区東壁断面図



図23 4区東壁断面図

の関係から、まず、5区の調査から開始し、終了後埋め戻し、反転して4区の調査を行った。

(1) 5区第2面・4区第1面(図24、写真図版6)

5区の調査では、まず、第2層を除去した面を第1面として精査を行い、調査区全体で多数の耕作溝を検出した。溝は密に切り合った状況で東西または南北方向に並び、南北方向のものがほとんどを占める。出土遺物はほとんどが土器の小片である。

次いで、第3-1a(6)層を除去し、第2面として精査を行ったところ、第1面とほぼ同じ状況で耕作溝を検出した。そのため4区の調査では5区第2面と同じ第3-1a(6)層を除去した面を第1面として精査を行った。

耕作溝 溝は調査区全体に分布する。4区に少ないのは耕作による攪拌を受けたためである。溝は東西または南北方向に並び、南北方向のものが圧倒的に多い。幅0.1~0.4 m、深さ0.1~0.2mのものが多くを占める。複数の溝が重なり合う状況を示すが、埋土は大きく3種類に分けることができる。中には5区137溝・4区48溝、5区164溝、4区42溝のように幅0.8~1.2 mの比較的規模の大きいものがある。これらは耕作溝群の区画の役割を果たしており、同じ場所で何度かの作りかえが行われたことが推定できる。出土遺物は、土器の小片がほとんどである。耕作による攪拌の結果混入した弥生

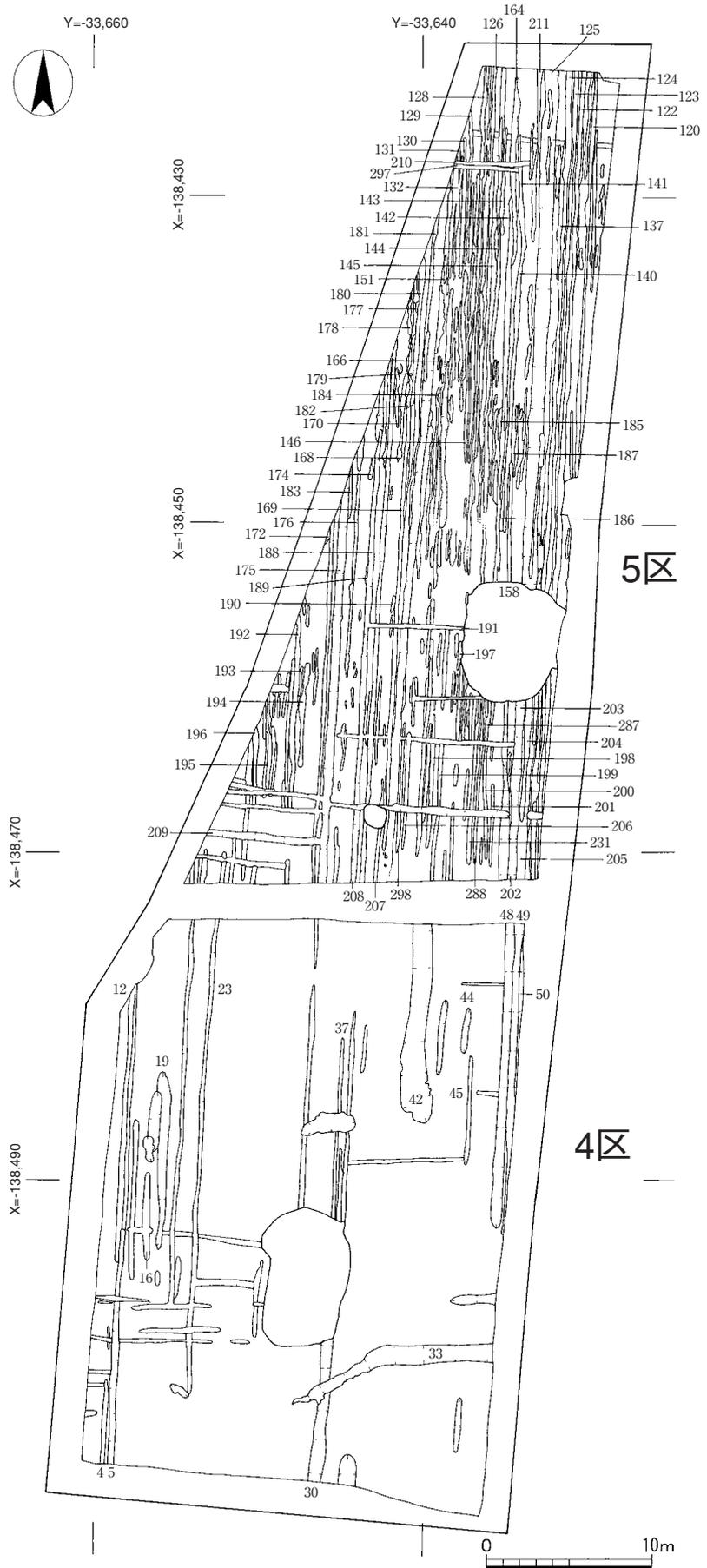


図24 5区第2面、4区第1面平面図

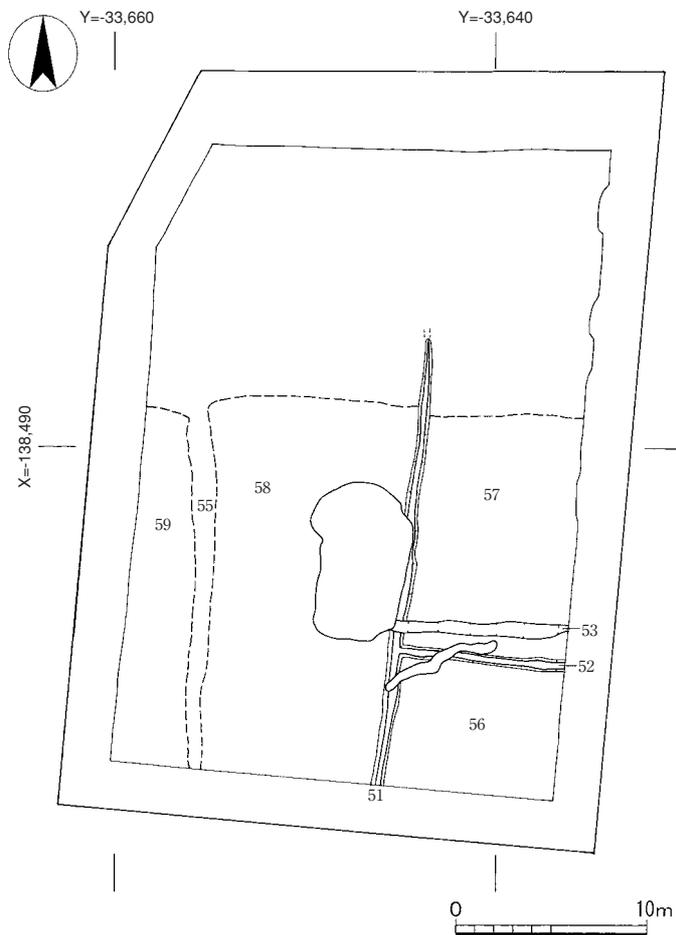


図25 4区第2面平面図

焼締陶器片が出土した。

52畦 (写真図版6-6) 南東部で検出した東西方向の畦である。51畦に取り付く。検出長は約 8.8 m、断面形は半円形で、幅約 0.3m、高さ約 0.1mである。出土遺物はない。

耕作地 (写真図版6-4・6) 調査区南部から中央部で検出した。51畦・52畦のほかにも58区画・59区画との間に55擬似畦畔、57区画・58区画・59区画北端にも東西方向に一直線の土層の違いがあるので、調査区全体に耕作地の方形区画が広がっていたと推定できる。出土遺物は少なくほとんどが土器の小片である。第3-2 b (8) 層からは時期不明の瓦器片が、51畦からは焼締陶器片が出土していることから、耕作地の時期は鎌倉時代から室町時代前半と推定できる。

なお、4区第3面では、顕著な遺構は検出できなかった。

(3) 5区第3面・4区第4面 (図26~31、写真図版7~9)

第3-2 (7~9) 層は5区南西部から4区にかけて堆積していた。また、第3-3 (10・11) 層は4区では約 0.2mの厚さがあるのに対して5区では薄くなる。第4-1 a (12・13) 層の堆積状況も同様である。

土器、埴輪、古墳時代から飛鳥時代の土師器、須恵器が多くを占めるが、平安時代後期から室町時代前半の土師器皿、瓦器椀・鍋・釜も少量含まれる。

(2) 4区第2面 (図25、写真図版6)

第3-2 b (8) 層に覆われていた遺構面である。第3-2 b (8) 層は灰黄褐色粗砂を主体とする砂層で、4区南部では厚さ約0.1 mあり、北側では徐々になくなっていき、X = -138,490付近まで広がる。5区では相当する砂層を認めていない。楠根川が氾濫したときに堆積したものと考えられる。

51畦 (写真図版6-5) 南部から中央部にかけて検出した南北方向の畦である。検出長は約24m、断面形は台形で、幅約 0.4m、高さ約 0.2mである。北側は低くなり X = -138,485付近で途切れる。部分的に木杭・竹杭で補強する。出土遺物はわずかで、時期不明の土師器片と焼

表3 建物1・建物2遺構番号対照表

建物1	307柱穴・308柱穴・309柱穴・328柱穴・311柱穴・312柱穴・313柱穴・314柱穴
建物2	402柱穴・362柱穴・406柱穴・364柱穴・363柱穴

建物1 (図27・28、写真図版7-2、8-1・2) 5区中央部で検出した掘立柱建物である。第3-3a(11)層を除去した面の遺構である。方位は北から約45度の角度をなす。桁行は3間約4.7m、柱穴の間隔はそれぞれ1.5m、梁行は1間約3.4mである。ただし、318柱穴・392柱穴が棟持柱であれば梁行は2間、柱の間隔は1.6~1.8mとなる。柱穴の掘形は、直径0.3~0.5mの円形ないし隅丸方形で、深さは0.2~0.3mである。柱あたりは直径0.2~0.3mの円形である。掘形の直径に比して浅いのは上部が耕作により削平されたためと考えられる。北東角の307柱穴から北西方向延長上には306柱穴・305柱穴が並ぶことから、柵または塀が取り付けいた可能性がある。314柱穴から飛鳥時代の土師器が出土した。

建物2 (図27・29) 5区西部中央で検出した掘立柱建物である。第3-3a(11)層、第4-1a(12・13)層を除去し、検出した遺構である。方位はほぼ南北方向をとる。桁行は2間約4.4m、柱穴の間隔は北から2.4m・2.0m、梁行は1間約1.8mである。406柱穴・362柱穴の延長上に482柱穴が並ぶことから、桁行2間・梁行2間の総柱建物である可能性があり、その場合梁行は約3.5mになる。柱穴の掘形は直径0.3~0.6mの円形ないし隅丸方形で、深さは0.1~0.3mである。柱あたりは直径約0.2mの円形である。

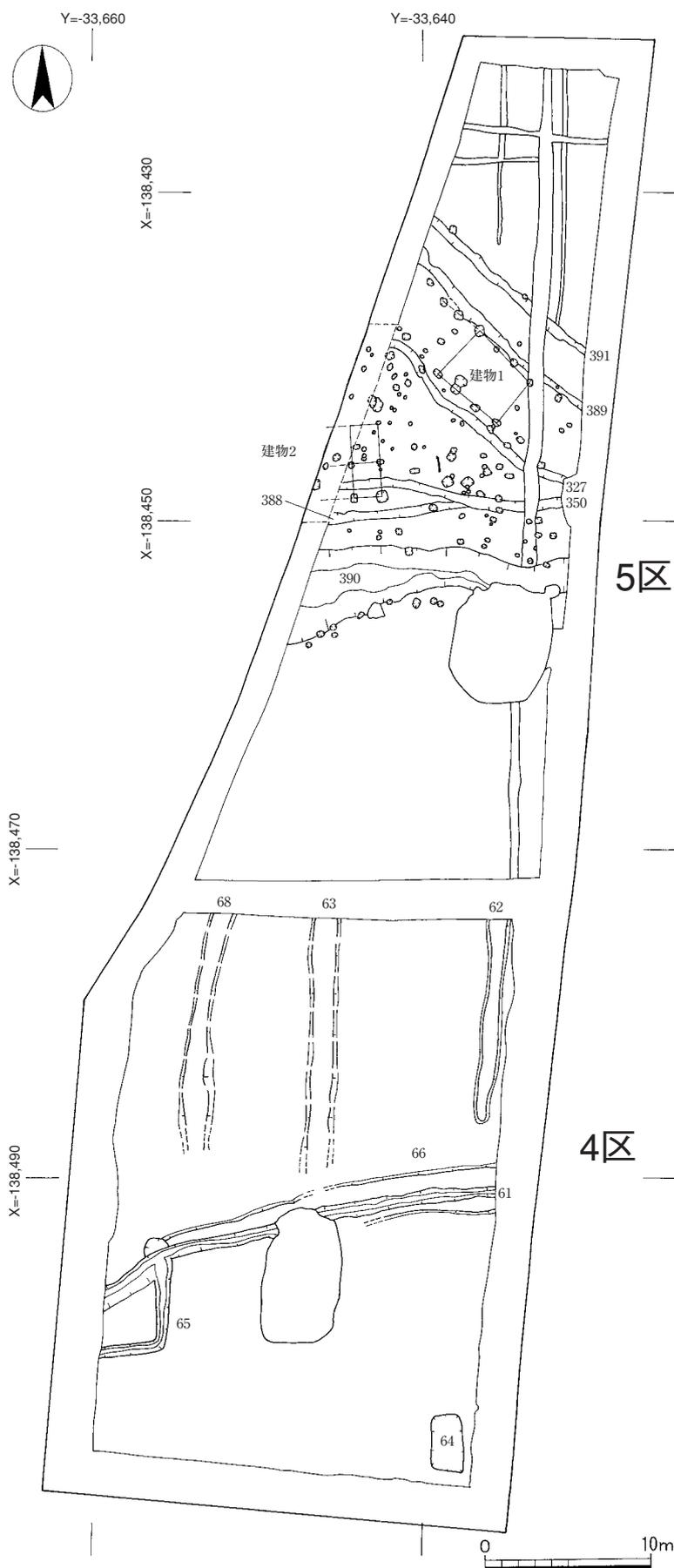


図26 5区第3面、4区第4面平面図

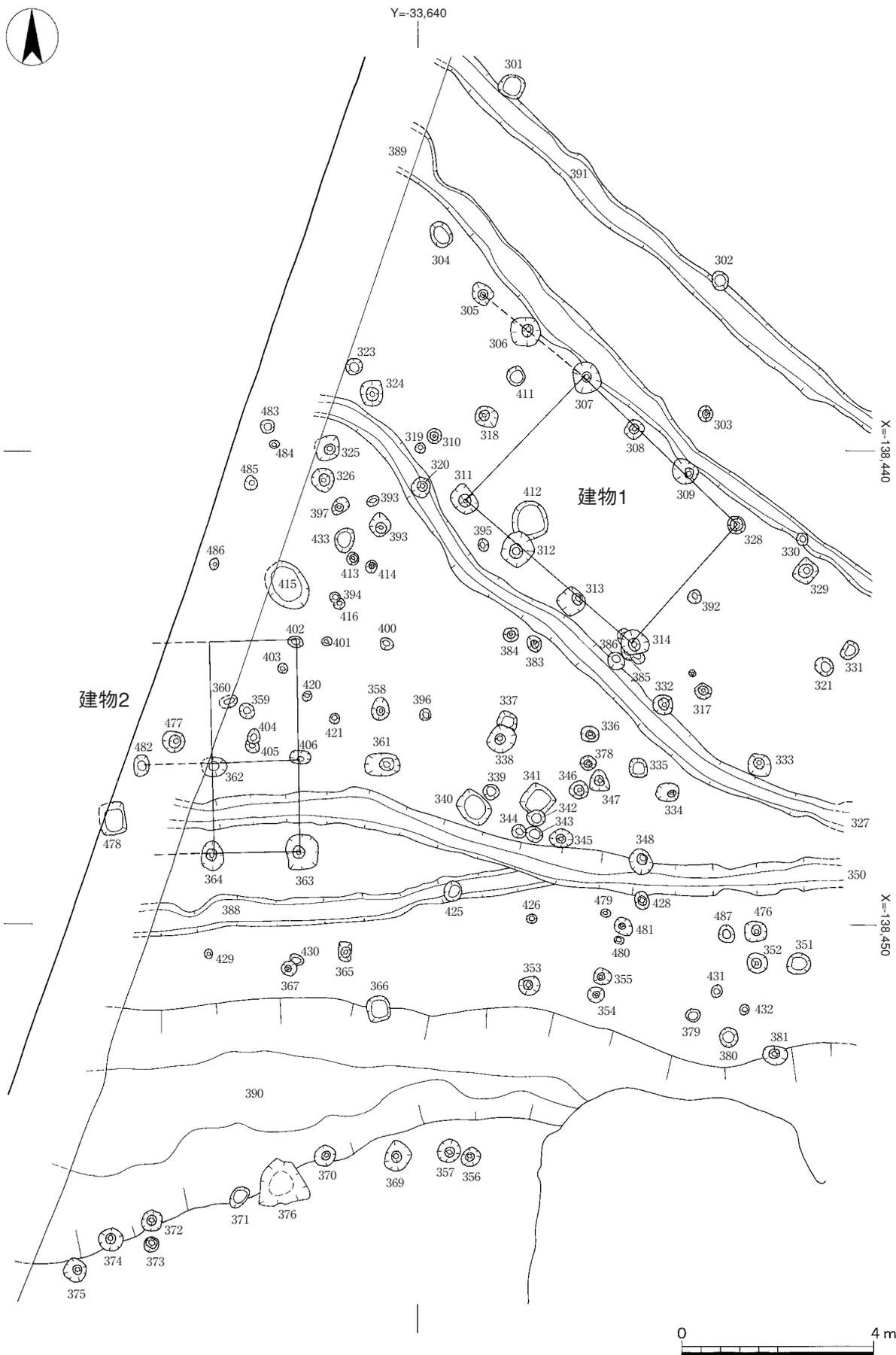


图27 5区第3面主要部平面图

掘形の直径に比して浅いのは上部が耕作により削平されたためと考えられる。363柱穴・364柱穴から古墳時代中期の土師器が出土したが、混入の可能性が高い。

柱穴群(図27) 5区中央部で検出した。391溝と390溝に挟まれた範囲に集中して分布する。第3-3a(11)層、第4-1a(12・13)層を除去し、検出した遺構である。多くの柱穴の上部は耕作により削平されるが、西部中央には第4-1a(12・13)層に相当すると考えられる土器片を多く含む整地土層が広がっており、その下面で検出した柱穴もある。柱穴の多くは第3-3a(11)層を除去した面で検出したが、これは元は高まりであった5区北部が、第3-3(11)層の段階の耕作により攪拌を受けたためと考えられる。柱穴には掘形をもつものもたないものがある。前者は掘形は直径0.3~

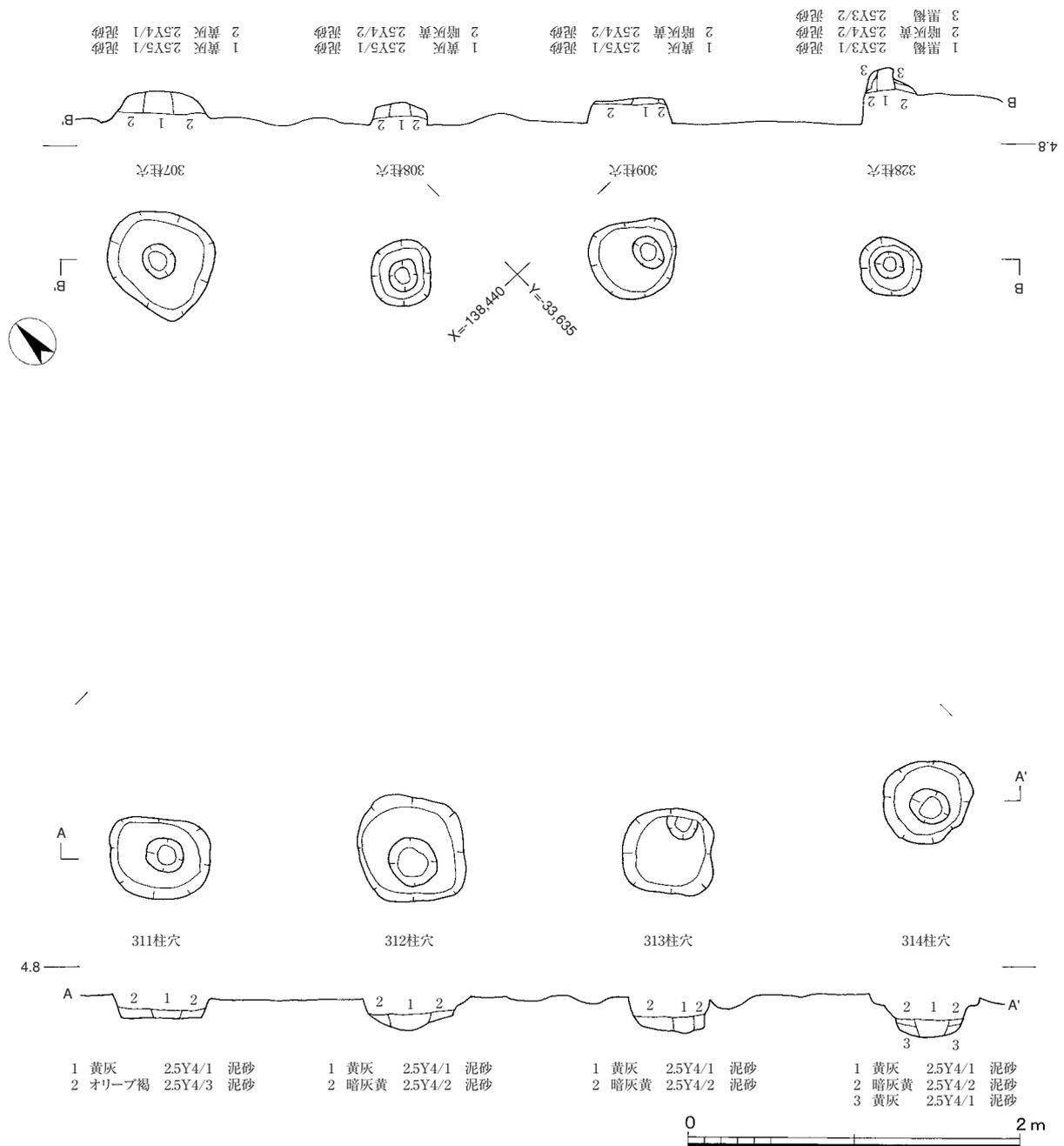


図28 5区第3面建物1実測図

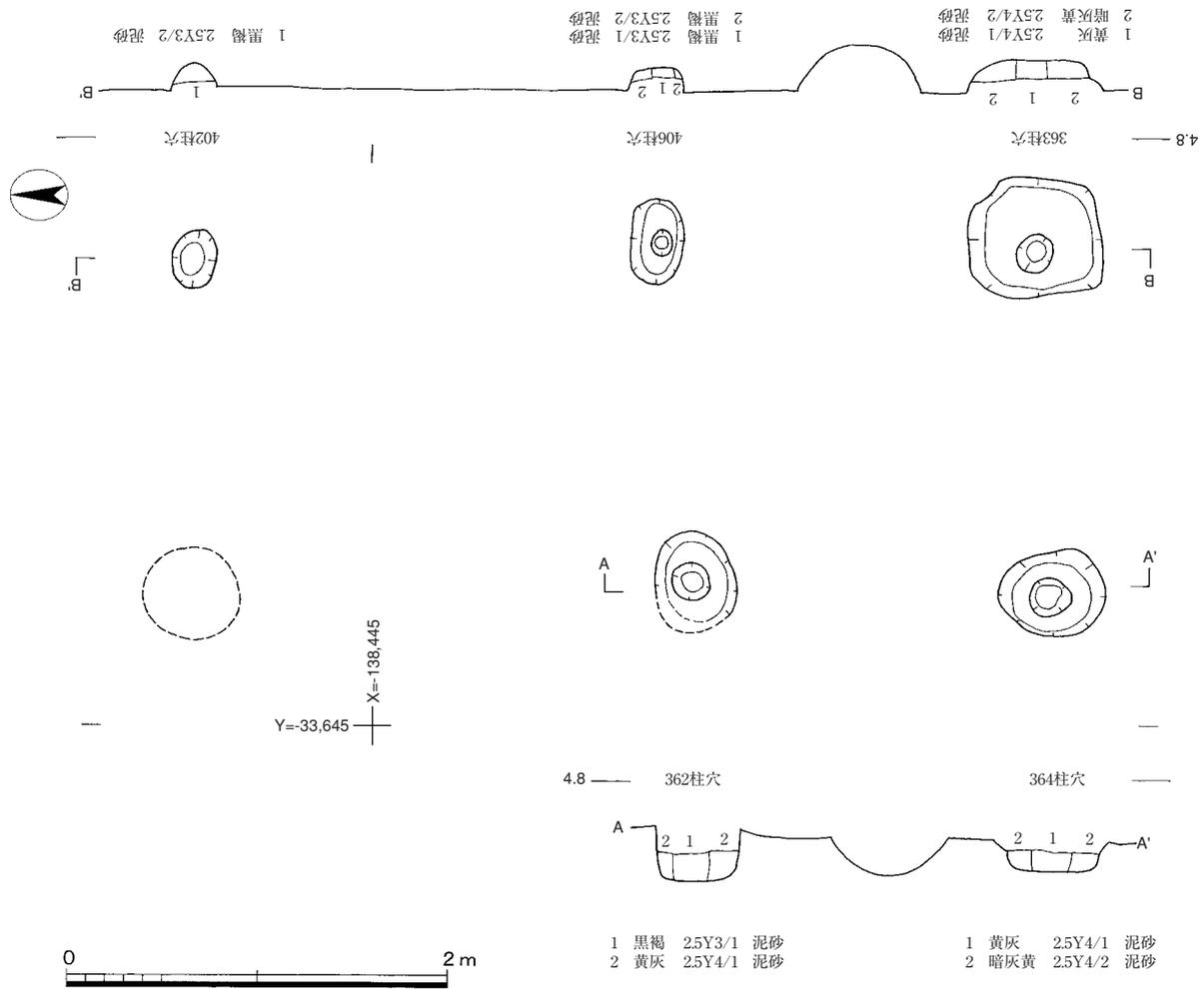


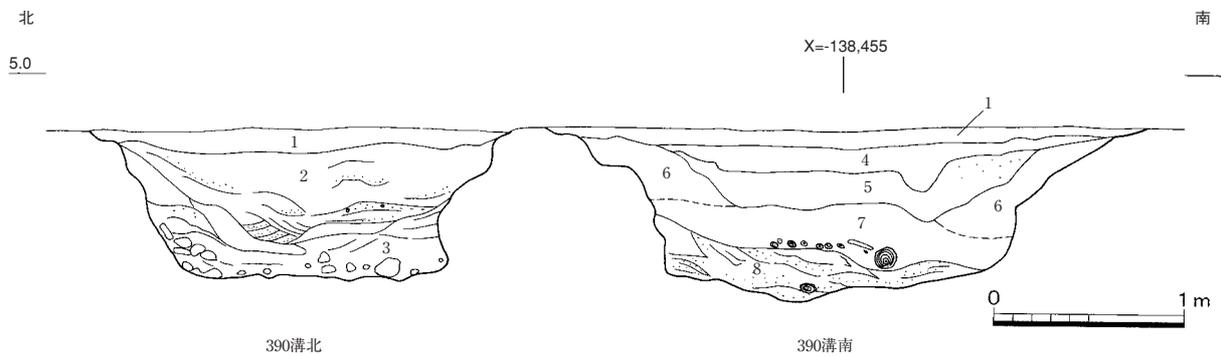
図29 5区第3面建物2実測図

0.7 mの円形ないし隅丸方形、深さは0.2～0.3mで、柱あたりは直径0.2～0.3mの円形である。また後者は柱あたりは直径0.1～0.3mの円形で、深さは0.1～0.3mである。掘形の有無により特にまとまりを認めることはできない。柱穴は埋没した溝の肩口に並ぶものが目立つことから、溝を埋めた後に柵を作った可能性が考えられる。埋土からは古墳時代中期から飛鳥時代の土師器、須恵器が出土した。

5区 391溝 5区北部で検出した南東から北西方向の溝で、直線状に伸びる。第3-3a(11)層を除去した面の遺構である。断面形は浅いU字形で幅約0.6m、深さ約0.1mである。埋土は黄灰色泥砂で、301柱穴・302柱穴はこの埋土上の遺構である。出土遺物はない。

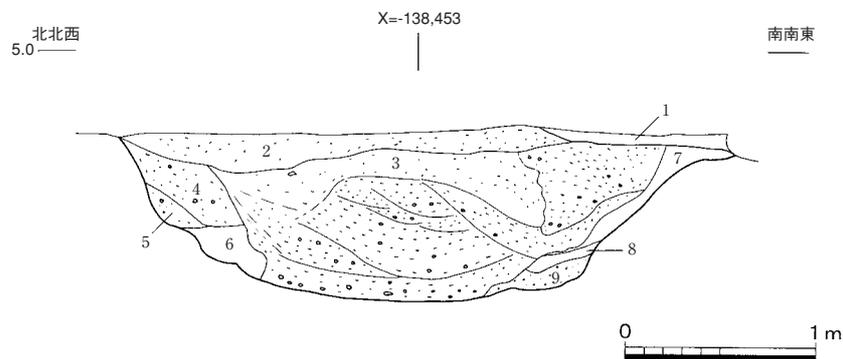
5区 389溝 5区北部で検出した南東から北西方向の溝である。391溝と平行してほぼ直線状に伸びる。第3-3a(11)層下面の遺構である。断面形は浅いU字形で幅0.7～0.8m、深さ0.1～0.2mである。埋土は灰黄色泥砂・暗灰黄色泥砂で、建物1を構成する309柱穴・307柱穴はこの埋土上面で検出した遺構である。古墳時代中期から後期の土師器、須恵器が出土した。

5区 327溝 5区中央部で検出した、南東から北西方向のやや蛇行する溝である。第3-3a(11)層下面の遺構である。断面形は浅いU字形で幅0.5～0.6m、深さ約0.2mである。埋土は暗灰黄色泥砂で、332柱穴・386柱穴・320柱穴は327溝埋土の上面で検出した遺構である。古墳時代中期から後期の土師器、須恵器が出土した。



1	オリブ褐	2.5Y4/3	細砂～粗砂	φ5mmの小礫僅かに混じる	土器片含む
2	暗灰黄	2.5Y4/2	極細砂～中砂	粗砂～φ2mmの小礫混じる	
3	灰黄褐	10YR6/2	中砂～極粗砂	φ2～20mmの礫少量混じる	土器片多く含む
4	オリブ褐	2.5Y4/4	極細砂～中砂		土器片含む
5	暗灰黄	2.5Y4/2	極細砂		
6	暗オリブ褐	2.5Y3/3	極細砂～中砂	極粗砂僅かに混じる	土器片含む
7	黒褐	2.5Y3/2	極細砂～中砂		木の枝多く含む
8	灰黄	2.5Y6/2	極細砂～極粗砂	φ2mm位の小礫少量混じる	

図30 5区第3面390溝断面図



1	黄灰	2.5Y5/1～2.5Y4/1	泥砂	
2	オリブ褐	2.5Y4/3	泥砂	やや粘質 粗砂混じる
3			極細砂～粗砂	やや粘質 ラミナ不明瞭
4	黄灰～オリブ褐	2.5Y4/1～2.5Y4/3	泥砂	
5	黄灰～暗灰黄	2.5Y4/1～2.5Y4/2	泥砂	砂質
6	暗灰	N3/	シルト	粘質 中砂～φ2～5mm小礫混じる
7	にぶい黄褐	10YR4/3	泥砂	土壌化進む
8	オリブ黒	5Y3/1	極細砂～細砂	
9	灰黄	2.5Y6/2	粗砂	

図31 5区第3面390溝南北セクション断面図

5区 350溝 5区中央部で検出した東から西方向の溝である。ほぼ直線状に伸びる。第3-3a(11)層下面の遺構である。断面形は浅いU字形で、幅 0.6～0.8m、深さ約 0.2mである。埋土はオリブ褐色泥砂・粗砂で、348柱穴はこの埋土上面で検出した遺構である。古墳時代中期から後期の土師器、須恵器などが多く出土した(図76-67～72)。

5区 390溝(図27・30・31、写真図版8-3・4) 5区中央部で検出した東から西方向の溝である。2条の溝が分岐・合流しているが、平面形を正確に検出することができなかった。第3-3a(11)層下面の遺構である。東壁付近では北側・南側とも断面形は逆台形で、幅 1.0m、深さ約 0.4mで、合流している部分の断面形はU字形で、幅約 1.6m、深さ約 0.4mである。埋土は細砂から粗砂が中心でラミナが明瞭である。底部近くには掘削直後に壁が崩落した土がブロック状に堆積しており、また、東壁近くでは木の枝が多数含まれる。366柱穴・370～372柱穴・374～376柱穴・381柱穴はこの埋土上面の遺構である。古墳時代中期から後期の土師器、須恵器などが出土した。

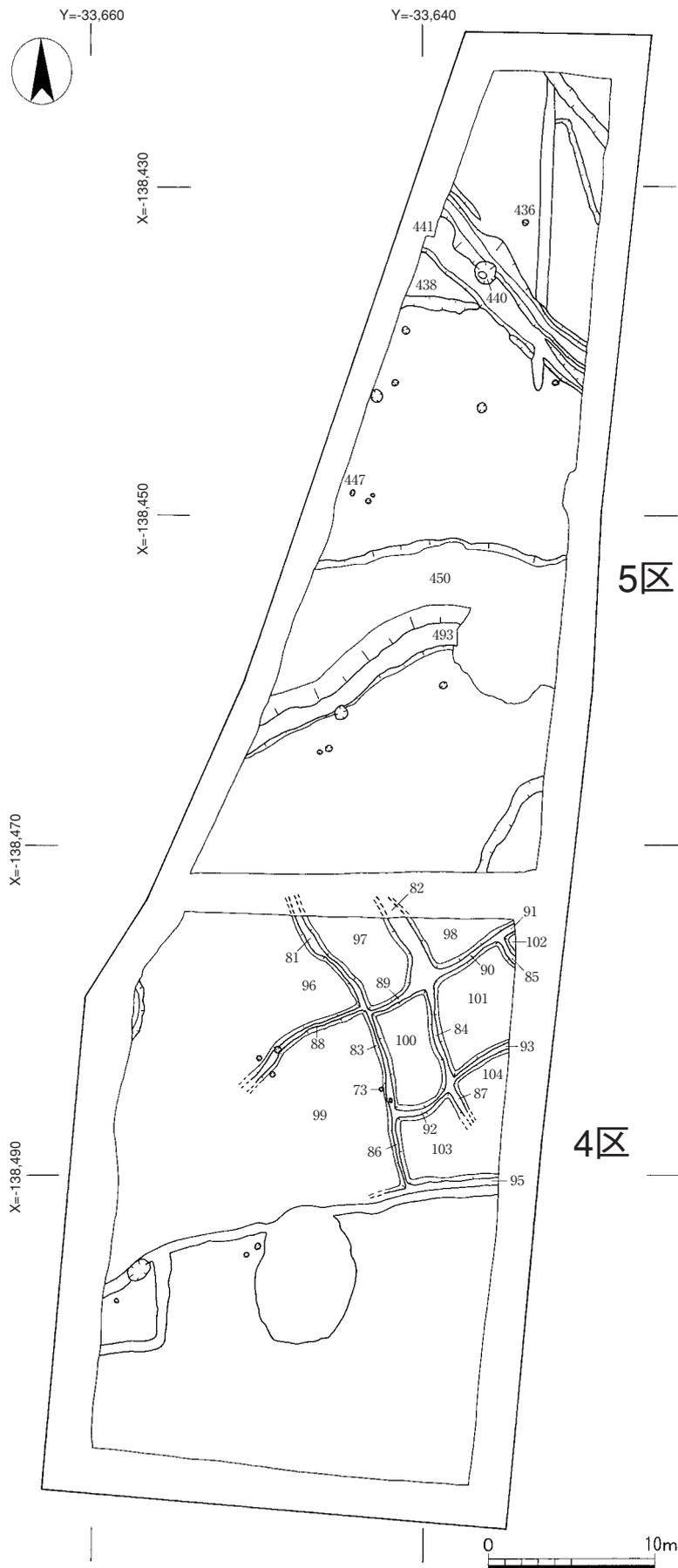


図32 5区第4面、4区第5面平面図

5区415土坑 (写真図版8-5)

5区西部中央で検出した、第4-1 a (13)層下面の遺構である。平面形は長軸1.1m以上、短軸約0.8mの楕円形で、深さは約0.2mである。埋土は炭片を含む黒褐色泥砂である。完形の個体を含む古墳時代中期の土師器がまとまって出土した(図75-50~53)。

4区61溝 (写真図版9-2)

4区中央部で検出した東から西方向の溝である。ほぼ直線状に伸びる。第4-1 a (13)層下面の遺構である。東側では部分的に67溝と重複し、また、西側では65溝が取り付く。断面形は浅いU字形で、幅0.8~1.0m、深さ0.1~0.2mである。埋土は黄褐色粗砂で細礫を含む。古墳時代中期から後期の土師器、須恵器がわずかに出土した。

4区62畦 (写真図版9-3・4)

4区北東部で検出した南北方向の畦である。第4-1 (13)層下面の遺構である。検出長は約12m、断面形は平坦で、幅約0.8~1.2m、高さは数cmしかない。南側は低くなり、X=-138,492付近で途切れる。出土遺物はない。62畦と平行する南北方向の63畦・68畦は、当初畦として検出したが、北壁断面で明確に確認できなかったため畦とするには不確定である。

(4) 5区第4面・4区第5面 (図32~35、写真図版10・11)

一部に残っていた第4-1 a (13)層と第4-2 (14)層を掘削し、第5-1 a (15)層上面で精査を行った。第4-2 (14)層は5区南部か

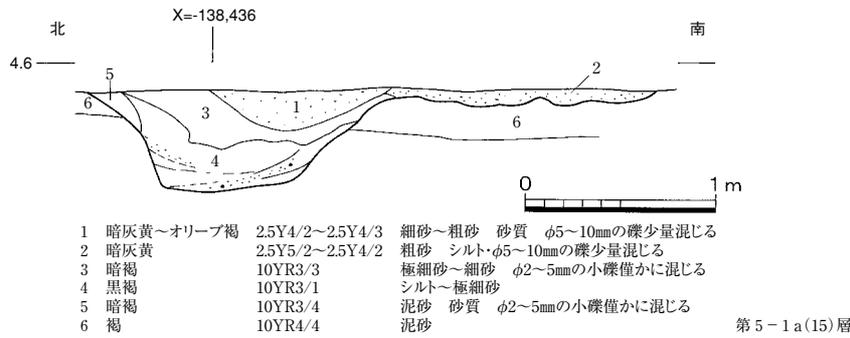


図33 5区第4面441清断面図

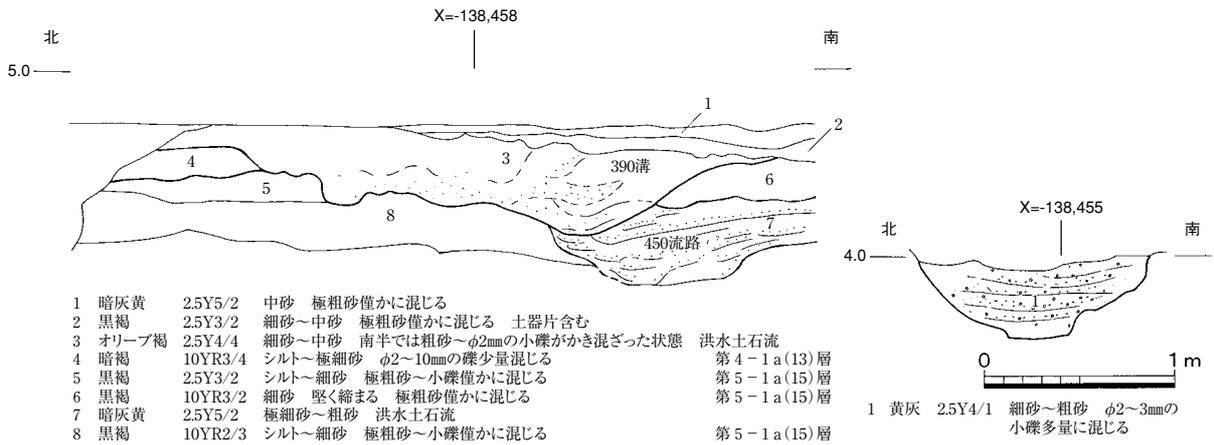


図34 5区第4面450流路断面図

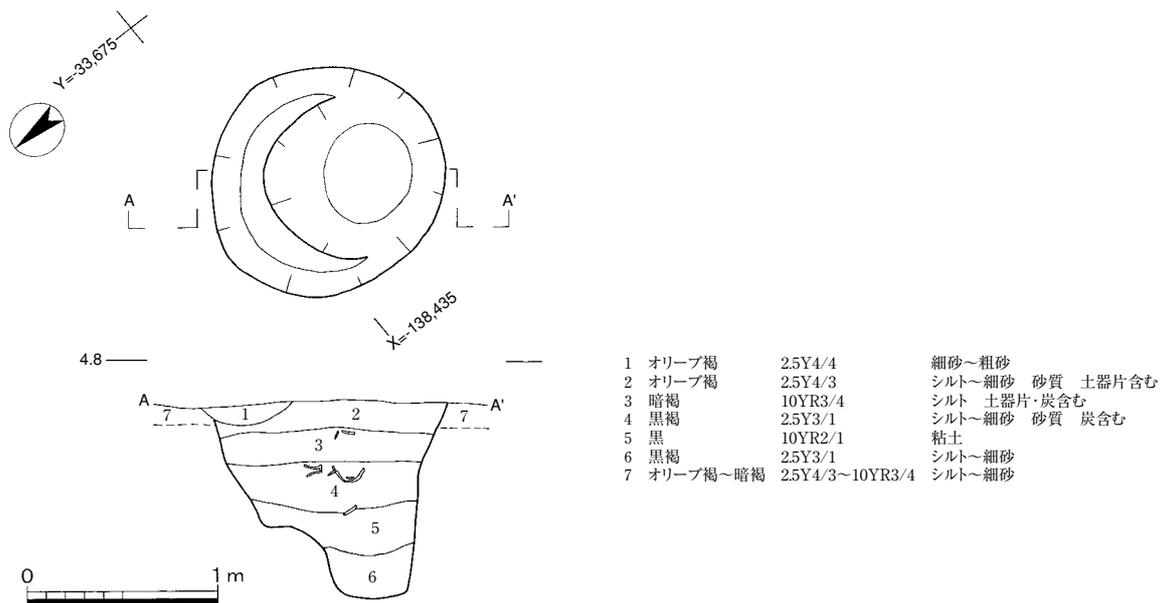


図35 5区第4面440井戸実測図

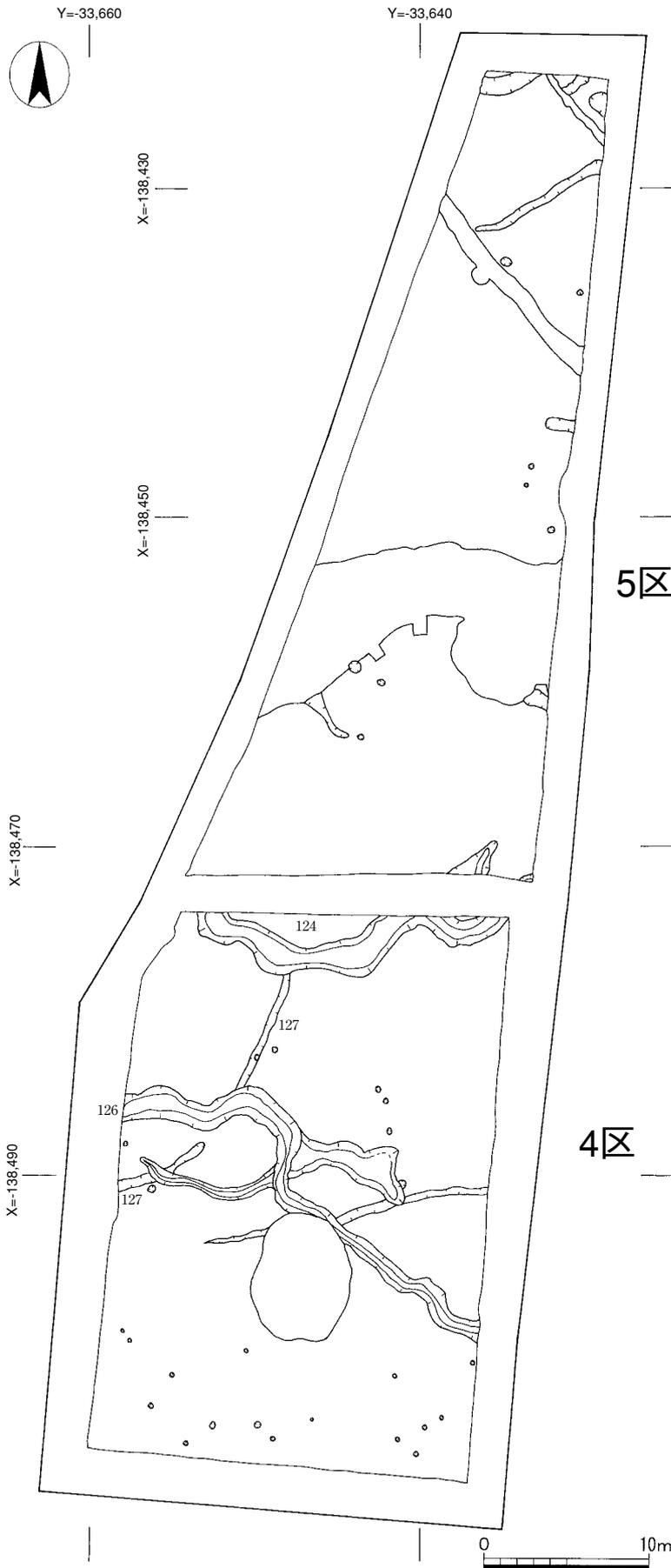


図36 5区第5面、4区第6面平面図

ら4区では厚さ約0.1 mあるが、5区北部には広がらない。

5区 441流路 (図33、写真図版10-2) 5区北部で検出した南東から北西方向の流路である。ほぼ直線状に伸びる。第5-1a (15)層上面の遺構である。断面形は逆台形で一部は浅く広がる。幅約1.5 m、深さ約0.3mである。埋土は暗灰黄色細砂から粗砂で細礫をわずかに含む。440井戸はこの埋土上面で検出した遺構である。時期不明の土器片が、わずかに出土した。

5区

5区 450流路 (図34) 5区中央部で検出した東から西方向の流路である。5区第3面390溝と重複しており、平面形を正確に検出することができなかった。第5-1 (15)層上面の遺構である。断面形はU字形で、幅0.6~1.7m、深さ0.2~0.4mである。埋土は灰オリーブ色微砂・黄灰色粗砂などで複数の流路が切り合った状況を示す部分があり、明瞭なラミナが観察できる。弥生時代中期の土器が出土した。

4区

5区 493土手 450流路南肩に沿って土手状の高まりを検出した。第5-1 (15)層上面の遺構である。断面形は低い台形で幅1.0~1.5 m、高さ約0.7mある。出土遺物はない。

5区 440井戸 (図35、写真図版10-3・4) 5区北部で検出した素掘りの井戸である。441流路の直上に位置する。第4-2 (14)層下面に属する遺構と考えられる。平面形は直径約1.2mの円形で、深さは約1.0mである。南西寄りに直径約0.5m、深さ約0.4 mの水溜を備え

る。埋土はオリブ褐色細砂などである。完形の個体を含む古墳時代中期の土師器がまとまって出土した(図75-35~46)。

4区水田(写真図版11) 4区北部で検出した小区画水田である。第4-2b(14)層が薄く覆っていたため検出することができた。畦は上部が削平されているため平坦で、幅0.6~1.2m、高さは数cmしかない。畦に囲まれた耕作地の区画は不整形な方形で、全体が分かる100区画で面積は約15㎡である。この遺構については土壤サンプルを採集し、植物硅酸体分析を行ったところ、多量のイネ科の植物遺体を検出したことから水田であることが裏付けられた。出土遺物はないが、層位的関係から弥生時代後期から古墳時代前期に属すると推定できる。なお、5区南部では相当する遺構面を精査したが、畦を検出することはできなかった。

(5) 5区第5面、4区第6面(図36、写真図版12)

第5-1a(15)層と第5-2a(16)層が接していたため、第5-1a(15)層を掘削し、精査を行った。

4区124流路(写真図版12-4) 4区と5区の境目で検出した東から西方向の蛇行する流路である。第5-2(16)層の遺構である。断面形はU字形で、幅1.2~2.0m、深さ約0.5mである。埋土は黄灰色極細砂~粗砂で流木を含んでいた。

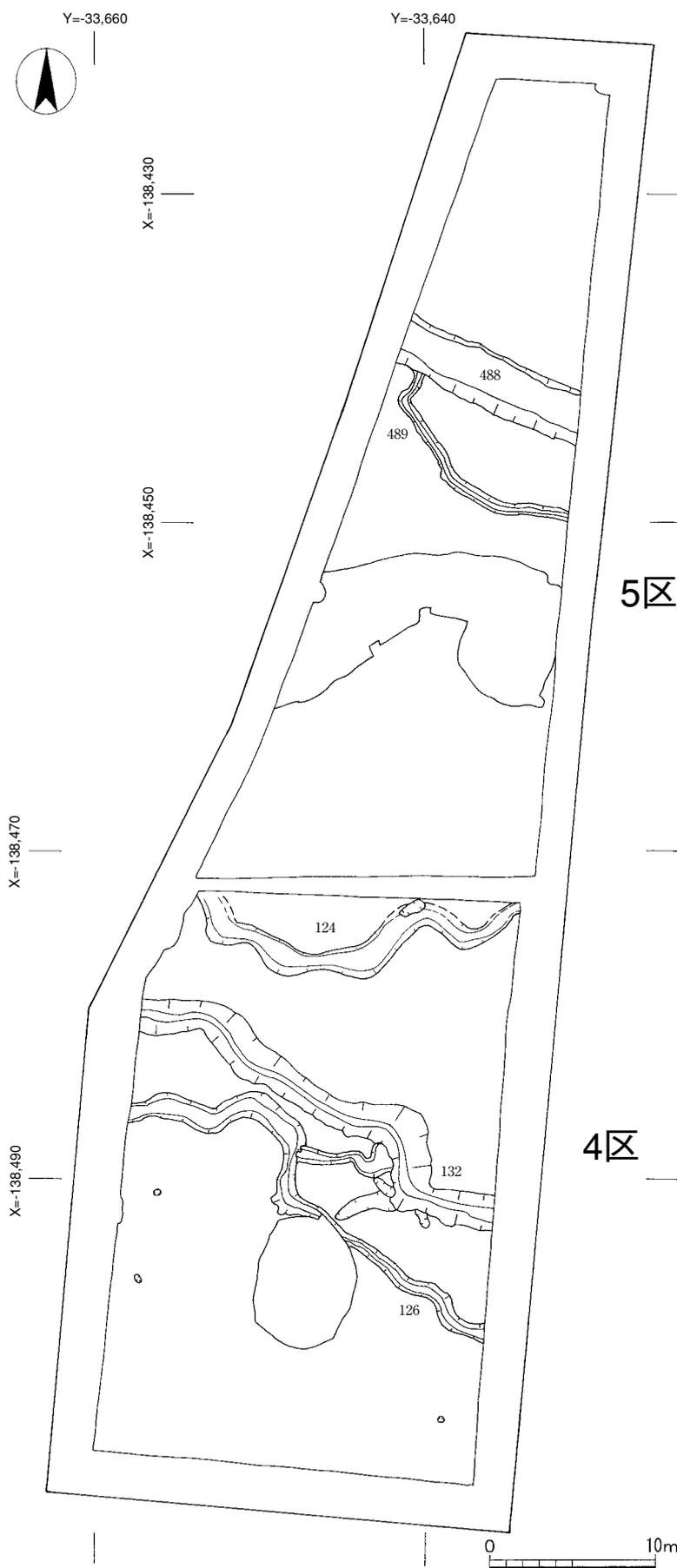


図37 5区第6面、4区第7・8面平面図

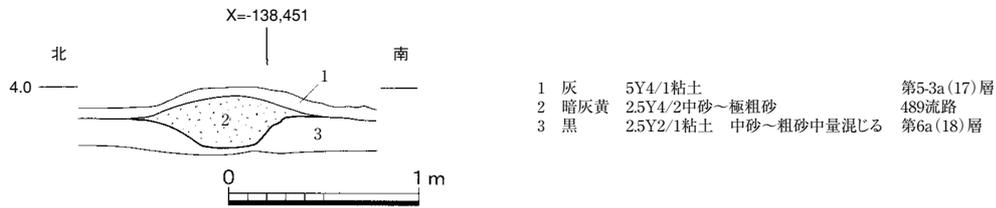


図38 5区第6面489流路断面図

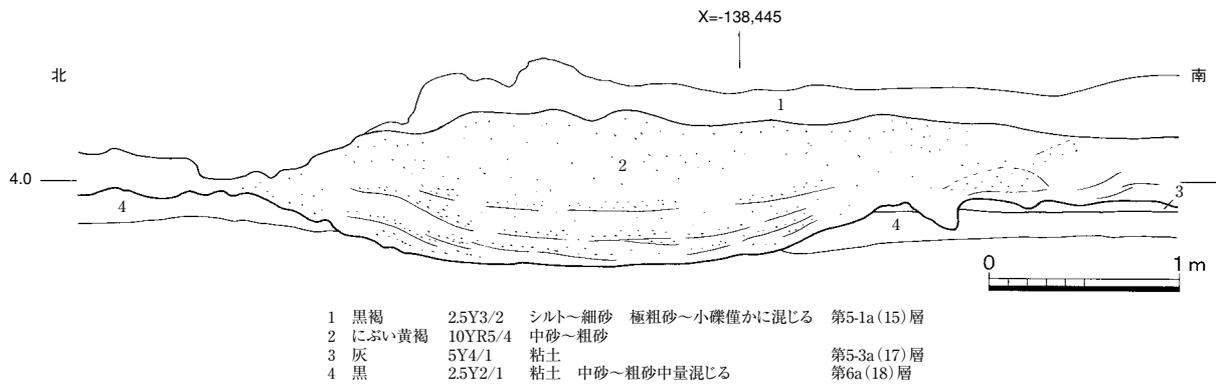


図39 5区第6面488流路断面図

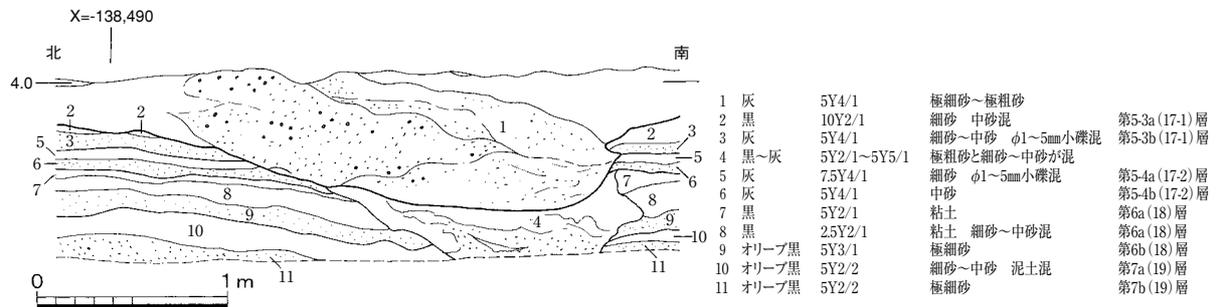


図40 4区第7面132流路断面図

4区 126流路 4区中央部で検出した南東から北西方向の蛇行する流路である。第5-2(16)層上面の遺構である。断面形はU字形で、幅 0.8~1.5m、深さ約0.5 mである。埋土は黄灰色細砂~粗砂などである。出土遺物は混入したと考えられる縄文土器片のみである。

4区 127溝 北東から南西方向に流れる小規模な溝である。幅 0.4~0.6m、深さ 0.2~0.3mで、124流路に取り付いた状態で検出された。間を 126流路で切られている。また溝は調査区から西に延びるため、長さは不明である。埋土は暗灰黄色中砂~粗砂層である。出土遺物はない。

小土坑 直径約 0.1m、深さ約 0.1mの小土坑が4区南部を中心に散在するが、性格は不明である。出土遺物はない。

(6) 5区第6面、4区第7・8面(図37~40、写真図版12・13)

第5-2(16)層は0.3~0.4mの厚さがある。これを掘削して第5-3(17)層上面で精査を行った。第5-3(17)層は5区では固く締まった細砂であるが、4区では粒形が粗くなり2層に分かれる。

5区 489流路(図38、写真図版12-6) 5区中央部で検出した東から北西方向の蛇行する流路である。488流路に取り付く。第5-3a(17)層上面の遺構である。断面形はU字形で、幅約 0.4m、深さ

約0.2 mである。埋土は暗灰黄色粗砂である。出土遺物はない。

5区 488流路 (図39、写真図版12-6) 5区中央部で検出した東南東から西北西方向の流路である。直線状に伸びる。第5-3 a (17) 層上面の遺構である。断面形は浅いU字形で、幅約 1.6m、深さ約 0.4 mである。埋土は暗灰黄色粗砂で水平方向の明瞭なラミナが観察できる。わずかながら縄文土器片、石器片が出土した (図74-9)。

4区 132流路 (図40、写真図版13-2) 4区中央部で検出した南東から北西方向の蛇行する流路である。第5-3 a (17-1) 層上面の遺構である。断面形はいびつなU字形で、幅 1.2~ 2.0m、深さ0.5~0.7 mである。埋土は灰色細砂~中砂などで明瞭なラミナが観察できる。出土遺物はない。

(7) 5区第7面 (図41)

5区では第5-3 a (17) 層と第6 a (18) 層が接している。第6 a (18) 層は土壌化が強く、この上面を第7面として精査を行った。

490流路 南部で検出した東から西方向の流路である。ほぼ直線状に伸びる。第6 a (18) 層上面の遺構である。断面形はU字形で、幅 2.5~ 3.0m、深さ約 0.6mである。埋土は灰黄褐色粗砂である。出土遺物はない。

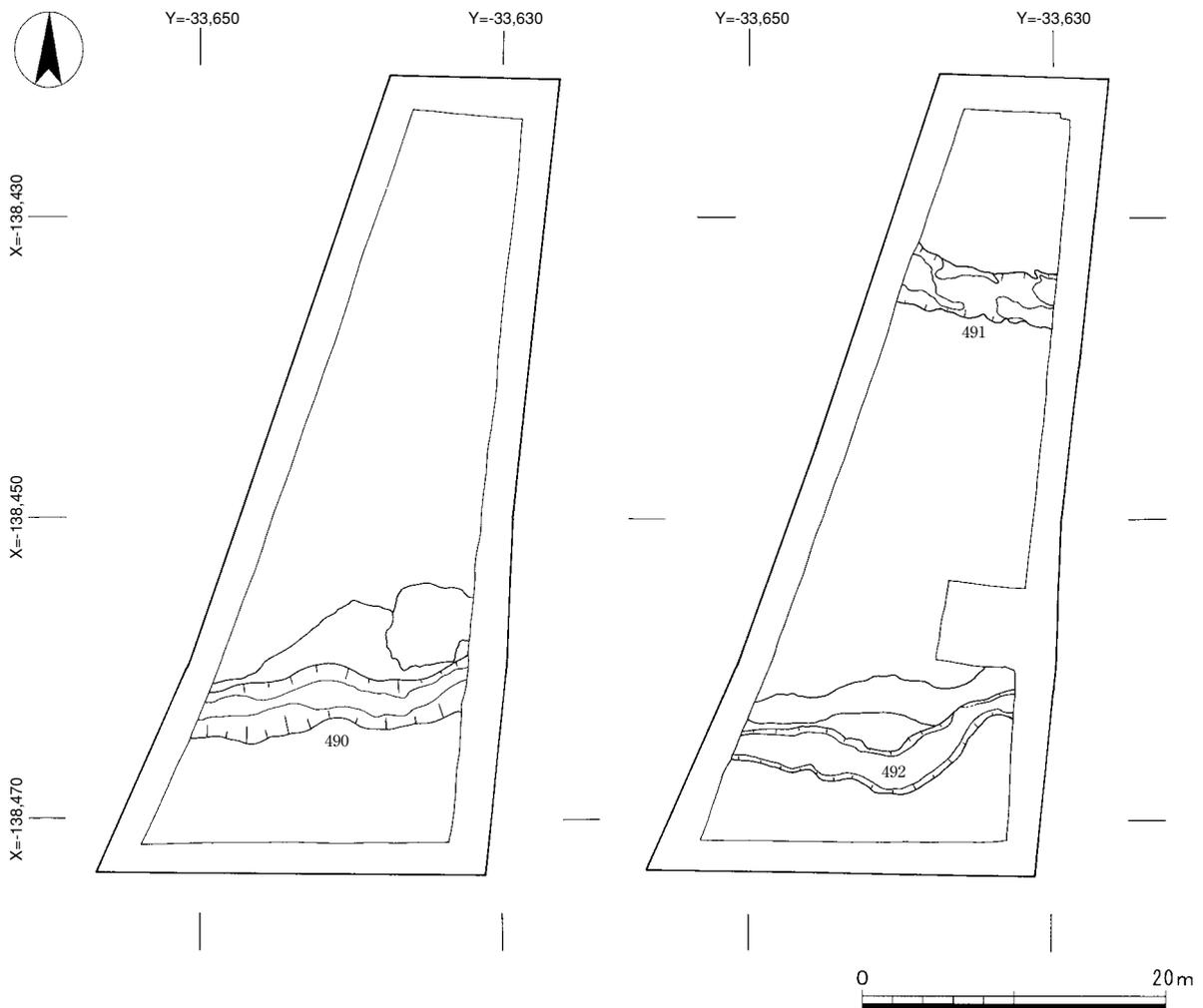


図41 5区第7面平面図

図42 5区第8面平面図

(8) 5区第8面 (図42、写真図版13)

第6 (18)層は厚さ 0.3～ 0.4mあり、これを掘削して第7 a (19)層上面を第8面として精査を行った。

491 流路 北部で検出した東から西方向の流路である。ほぼ直線状に伸びる。第7 a (19)層上面の遺構である。断面形は凹凸があり、幅約 2.8m、深さ約 0.4mである。埋土は灰白色粗砂である。わずかながら縄文土器が出土した。

492 流路 南部で検出した東から西方向の蛇行する流路である。第7 a (19)層上面の遺構である。断面形はU字形で、幅 1.0～ 2.5m、深さ約 0.5mである。埋土は灰オリーブ色粗砂である。出土遺物はない。

根株 (写真図版13-4) 5区東部中央で樹木の根株を検出した。樹種はクヌギ節である。

なお、下層確認のための掘削で、T.P.2.48mでアカホヤ火山灰を含む層を検出した。

(9) 4区西側

本体工事の進捗に伴い実施した追加調査である。4区南西部に接する楠根小学校敷地南東隅で行った。まず、4区第2面に対応する遺構面直上まで機械掘削を行った後、包含層の掘削および遺構の精査を行った (第1面)。その後、調査区中央部を4区第8面に対応する遺構面まで再び機械掘削を行った後、遺構の精査を行い (第2面)、あわせて土層断面観察を行った。

第1面では4区第2面に対応する洪水砂層に覆われた鎌倉時代から室町時代前半の耕作土層が広がっていることが明らかとなった。畦・耕作溝は検出していない。なお、4区第5面で検出した水田に伴う遺構面を確認することはできなかった。第2面では明瞭な遺構を検出していないが、断面観察により4区第6面で検出した流路を認めた。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土したのみである。

8. 3区・1区・9区の遺構 (図43～67)

3区・1区・9区は南北が約70m、東西が約88mのほぼ方形の調査区である。工程の関係から南半の1区・9区、北半の3区に分割し、1区、9区、3区の順で調査を行った。ここでは各調査区に対応する遺構面を一括して検出遺構を紹介する。なお、複数の調査区に遺構がまたがる場合は1区の遺構番号を優先して報告する。

(1) 第1面

機械掘削を開始した1区の北東部では第1 a (2)層の残存が悪く、第1 b (1-7)層と第1 b (3・4)層を区別することができなかった。ところが機械掘削途中で南壁の断面観察から第1 a (2)層が良好に残存していることが判明したため、第1 a (2)層上面を第1面として設定し、第2 a (5-1)層上面を第2面として1区の調査を進めた。第1面は3区・9区でも調査する予定としていたが、1区の調査により第2面の第2 a (5・6)層が江戸時代前期に属することが分かったので、3区・9区では平面による調査を見送った。したがって第1面の状況については、断面観察・機械掘削中に得られた知見、第2面に残された痕跡などに基づいて復元している。

第1面は東から西へ傾斜しており高低差は約 0.6mあるが、比較的平坦な様相を呈する。これは第1 b (3・4)層が第2 a (5)層のほとんどを覆い尽くしているためである。この第1 b (3・4)層

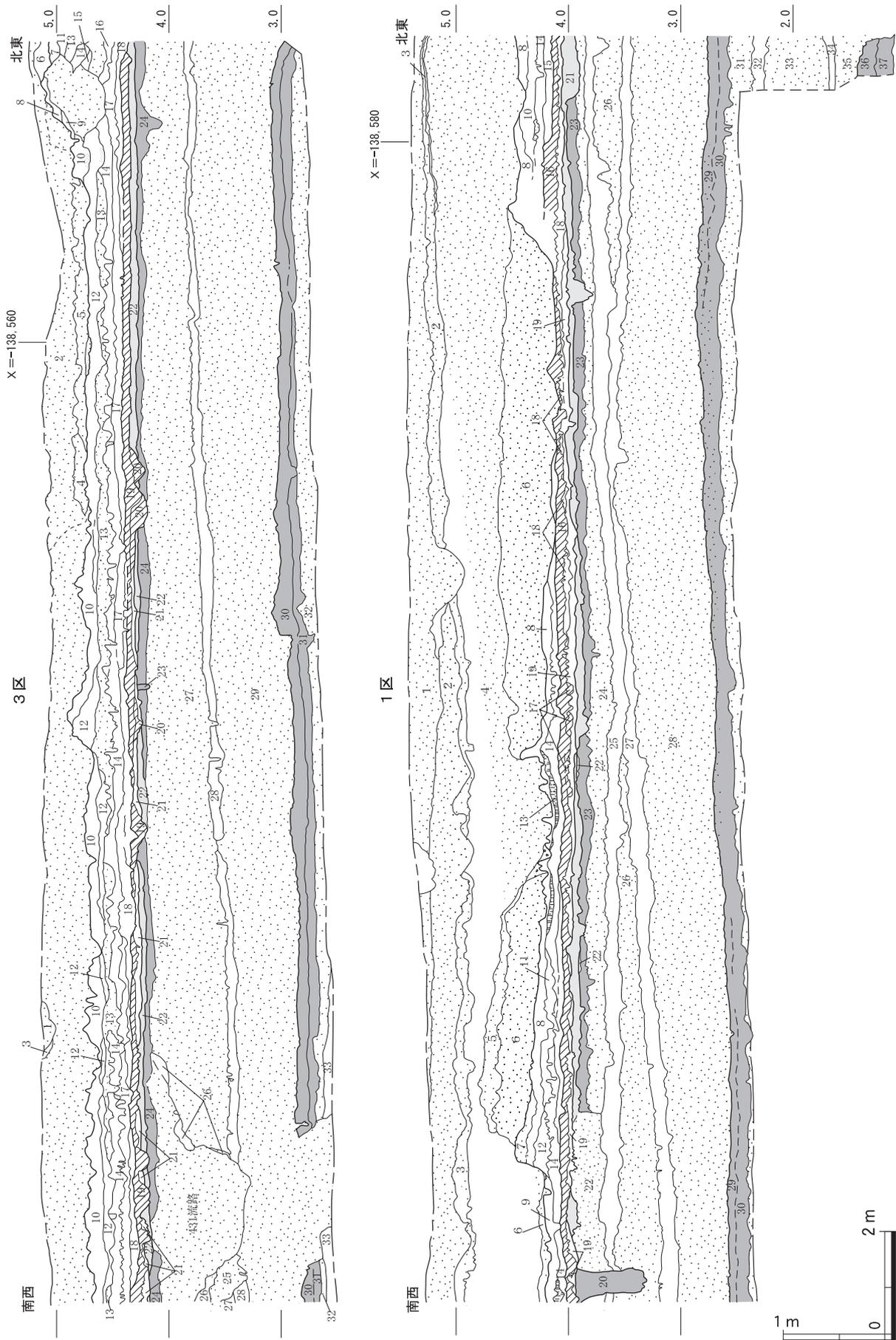


図43 3区・1区路線中央セクション断面図

3 区路線中央セクション層記載

1		粗砂～極粗砂 細礫～φ5mmの礫混	
2		細砂～中砂 一部ラミナ	
3		オリブ灰10Y4/2 シルト混じり細砂～粗砂 細礫混	第1(2)層
4		2に粗砂～φ7mmのブロック状に混	
5		2に粗砂～φ7mmの礫ブロック状に混	
6	灰オリブ 7.5Y5/2	中砂～粗砂・極細砂～極粗砂・シルト～細砂の互層 シルト部分少ない	第1(2-1)層
7	オリブ灰 2.5GY5/1	中砂～極粗砂・φ10mmの細礫混 シルト～細砂・細礫～φ5mm混	第2(5)層
8	暗オリブ灰 5GY4/1	シルト混じり中砂～粗砂 極粗砂～礫混	第2(5)層 畦盛土
9	暗オリブ灰 2.5GY4/1	中砂～粗砂混じりシルト 中砂～粗砂ラミナ有	第2(5)層 畦盛土
10	灰 5Y4/1	粗砂～極粗砂混じりシルト 細砂混じりシルトブロック φ2～10mm礫多く混	第2(5-1)層
11	灰 7.5Y5/1	シルト混じり細砂～粗砂	第2(5-2)層
12	緑灰 7.5GY5/1	細砂～粗砂混じりシルト 細礫～φ20mmの礫多く混 ブロック状	第2(5-2)層
13		細砂～粗砂シルト質粗砂～細砂のブロック混 細いラミナの集合有	
14	灰オリブ 7.5Y5/2	細砂混じりシルト 粗砂～極粗砂若干混	第2(6)層
15	灰オリブ 5Y5/2	中砂～粗砂混じりシルト 細礫～φ5mmの礫僅かに混	
16	オリブ灰 2.5GY5/1	細砂～中砂混じりシルト 粗砂～極粗砂混 18に比べシルト質	第2(7)層
17	オリブ灰 2.5GY5/1	細砂～中砂混じりシルト 粗砂～極粗砂混	
18	緑灰 7.5GY5/1	細砂～粗砂混じりシルト 細礫～φ20mmの礫多く混 ブロック状	第2(8～10)層
19		細砂～中砂質シルト 粗砂～極粗砂混 細砂～粗砂点々と混	第3-1a(11)層
20	灰 7.5Y5/1	細砂～極粗砂混じりシルト	第3-1a(12-1)層
21	灰 10Y4/1	細砂～中砂混じりシルト 粗砂～極粗砂混	第3-2a(12-3)層
22	暗青灰 10BG3/1	粗砂～極粗砂混じり細砂質シルト	第4-2a(15-2)層
23	灰 10Y4/1	極細砂～細砂混じりシルト	第4-1(13層上面)層
24	オリブ黒 7.5Y3/1	中砂～粗砂質極粗砂混じりシルト	第5-1-2a(15-3)層
25		中砂～粗砂混じりシルト～細砂の互層	
26	暗オリブ灰 2.5GY3/1	極粗砂～粗砂質シルト～細砂 中砂～極粗砂点々とする	第5-3a(16)層
27		粗砂～極粗砂混じりシルト～粗砂	
28	暗青灰 5B4/1	シルト～中砂 極粗砂僅かに混	第5-4a(17)層
29		極細砂～細砂・細砂～中砂・中砂～粗砂・極粗砂φ2mmの礫混	
30	青黒 5B2/1	腐食質シルト 粗砂～極粗砂僅かに混 植物の根	第6a(18)層
31	暗灰 N3/0	粗砂～極粗砂混じりシルト やや腐植質	第6a(18)層
32		極粗砂混じり中砂～粗砂 細砂混	
33	青黒 5B2/1	細砂～粗砂質シルト 極粗砂混 やや腐植質	第7a(19)層

1 区路線中央セクション層記載

1		中砂～粗砂・中砂～細礫の互層 ラミナ有り 細砂～中砂の互層を部分的に混	
2		中砂～細礫 一部にラミナ 極粗砂混じり細砂～中砂・中砂～粗砂・シルト～極細砂の互層 上部荒れる	
3	灰 7.5Y6/	細砂	
4		細砂～中砂・中砂～粗砂の互層 中砂～粗砂のラミナ	
5	オリブ灰 2.5GY4/1	中砂混じりシルト(土壌化) 青灰極細砂～細砂(ラミナ有) 礫φ8mm混	
6		シルト～細砂の互層 最下部は泥っぽい シルト～粗砂 ラミナ波打つ 中砂～極粗砂 ラミナ顕著	
7		9に比べ礫質強い	第2a(5-1)層 畦盛土
8	オリブ黒 5GY2/1	9に比べ礫質強い シルト質強くブロック状 大きな礫少ない	第2a(5-1)層
9	オリブ黒 5GY2/1	細砂混じりシルト 粗砂～φ8mmの礫混 やや色調薄い	第2a(7)層
10	灰 7.5Y5/1	中砂～粗砂混じりシルト 礫φ5mm混	第2a(7)層
11	灰 10Y5/1	粗砂混じりシルト～中砂 極細砂質シルトブロック状に入る 礫φ10mm混	第2a(6)層
12	オリブ黒 5GY2/1	8の一部と同様であるが境に中砂～粗砂が部分的に混	第2a(5-2)層 畦盛土
13		シルト～極細砂	
14	灰 10Y4/1	細砂混じりシルト粗砂～細礫混	第2a(7)層
15	灰 10Y4/1	細砂～粗砂混じりシルト 細礫混	第2a(8)層
16	灰 7.5Y5/1	細砂～粗砂混じりシルト 礫2mm混	第3-1a(11)層
17	灰 10Y4/1	細砂混じりシルト 中砂～粗砂多く混	第3-1a(12-1)層
18	オリブ黒 7.5Y3/1	細砂～中砂混じりシルト 極粗砂～細礫混	第3-2・3a(13)層
19	灰 5Y4/1	細砂混じりシルト 粗砂～細礫若干混	第3-2・3a(14)層
20	暗オリブ灰 2.5GY3/1	中砂混じりシルト～細砂 暗青灰シルト～中砂が大きなブロック状に混	
21	暗オリブ灰 2.5GY3/1	中砂混じりシルト～細砂 中砂～極粗砂質シルトブロック状に混	第4-2a(15-2)層
22		中砂～粗砂 細礫混	
23	暗青灰 10BG3/1	中砂～粗砂質極粗砂混じりシルト	第5-1・2a(15-3)層
24		極細砂～ 極粗砂 φ4～5mmの礫混	
25	オリブ黒 7.5Y3/1	中砂混じりシルト～粗砂 φ5mmの礫混	第5-3a(16)層
26		極細砂～粗砂 φ3mmの礫混	
27	暗灰 N3/0	細砂混じりシルト 極粗砂～礫φ5mm多く混	第5-4a(17)層
28		極細砂～極粗砂 φ2～8mmの礫混	
29	オリブ黒 5GY2/1	極粗砂～φ5mmの礫混じり腐植質シルト	第6a(18)層
30	オリブ黒 5GY2/1	細砂混じりシルト～粗砂 φ8mmの礫混 やや腐植質で植物遺体多い 色調薄い	第6a(18)層
31		細砂～中砂・中砂～粗砂φ3～7mmの礫混	
32	暗青灰 5B3/1	細砂混じりシルト 極粗砂～φ2mmの礫混	第7a(19)層
33		根痕に19層が顕著に混 シルト～極粗砂 φ2～8mmの礫混	
34	暗灰 N3/0	細砂～中砂混じりシルト 極細砂～φ3mmの礫混	第7a(20)層
35	灰 7.5Y5/1	極細砂混じりシルト～粗砂 φ2～15mmの礫混	
36	黒 10Y2/1	腐植質 細砂混じりシルト	第8a(21)層
37	オリブ黒 7.5Y3/1	細砂混じりシルト 極粗砂～φ5mmの礫混	第8a(21)層

は全体として上方に粗粒化する氾濫堆積物である。この層は南西部では約 0.8mの厚さで堆積し、第 1 面を平坦化させた。層中には多種かつ多量の遺物が含まれている。

旧耕作土の直下より第 1 a (2 - 2) 層まで 8 層分の a 層を確認した。すべての層が存在していない地点も多い。第 1 a (1 - 1) 層は 3 区東半では攪乱により削られていたが、旧耕作土と似た層相を示し、おおむね中砂～粗砂混じりシルトで粗粒の砂礫を多く含む。擾乱を受けていることから耕作土層と考えられる。第 1 b (1 - 1) 層の粗砂～極粗砂が部分的に存在する。第 1 a (1 - 2・3) 層は暗色の細砂～中砂混じりシルトで、ともに擾乱を受け耕作土層と考えられる。第 1 a (1 - 2) 層と第 1 a (1 - 3) 層は層界が明瞭ではないが、第 1 a (1 - 3) 層は第 1 a (1 - 2) 層に比べ粗粒の砂を多く含み、暗色の強さにより分かれる。第 1 a (1 - 3) 層は第 1 a (1 - 2) 層の水田耕作土下部の可能性がある。第 1 a (1 - 4～1 - 7) 層はシルト混じり細砂～粗砂・極粗砂～細礫混じり細砂・中砂混じりシルトで、全体として上方に細粒化する。擾乱を受け下面に小溝が見られることからこれらの層も耕作土と考えられる。その中でも第 1 a (1 - 5) 層が最も暗い色調である。3 区の北東部では第 1 b (1 - 5) 層が存在するが、この層は第 1 a (1 - 6) 層上面の溝を埋めている層と思われる。第 1 a (1 - 6) 層下面の溝は深さ約 0.4mで規模が大きい。3 区中央部では、第 1 b (1 - 6) 層の淘汰が悪い砂礫を挟む。3 区の第 1 b (1 - 7) 層より下層は、ラミナが見られる氾濫堆積物であることから、第 1 b (1 - 6) 層は 4 区北部の土石流による堆積と考えられる第 1 b 層に対応する可能性が高い。第 1 a (1 - 7) 層は 3 区東壁で厚く存在する。シルト混じり極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の非常に粗いブロック状を呈し、ブロックにはラミナが見られることから、第 1 a (1 - 6) 層時の耕作が深くなされていたための現象であろう。下面は水平で直線的であるためこの層も耕作土層の可能性もある。また、旧耕作土上面で、1・9 区と 3 区の間溝が設けられていた。1・3 区東壁では攪乱のため確認できなかったが、3 区西壁断面では第 1 a (1 - 6) 層の段階から継続して溝が存在しており、人為的に埋められたり、砂礫により埋まったりした様子がわかる。第 1 a (1 - 7) 層の段階の溝は確認できなかった。第 1 b (1 - 7) 層は調査区全面に 0.15～0.28mの厚さで広がり、3 区北西部では約 0.4mの厚さがあり、第 1 a (2) 層を大きく削っている。

島島 (図45、写真図版14-3) 3 区北東部から北部中央で確認した。第 1 a (2) 層上面の遺構で

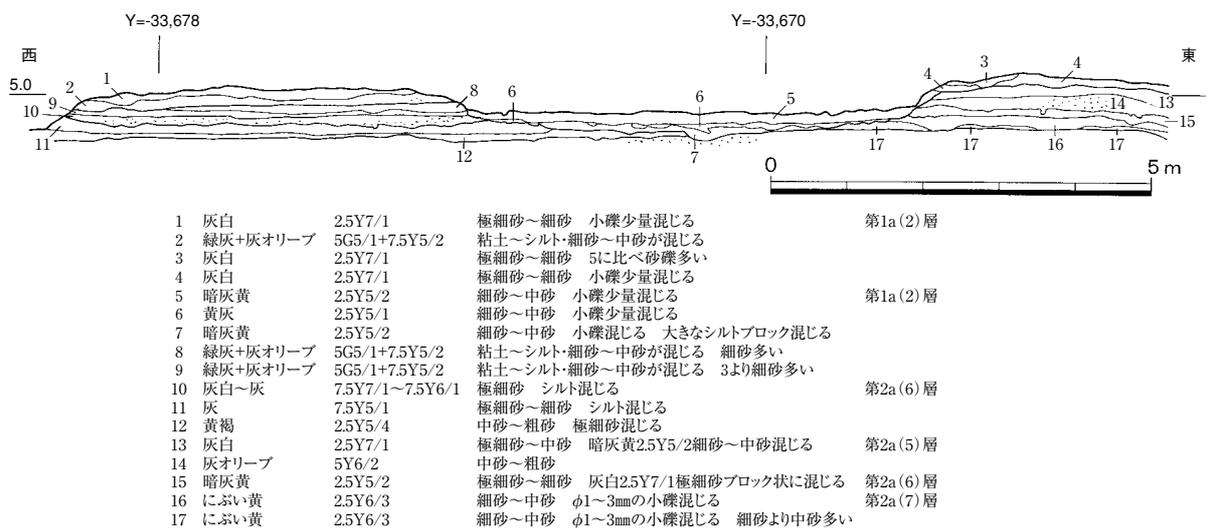


図45 3 区第 1 面458・459島島断面図

ある。北東部は南北約24m、東西約22mの範囲に広がる。島島上部を畑とし、周囲は1段低い第2面耕作土層まで掘り下げて田面としている。東半部では東西方向に幅約3.4mを掘り下げ、その両側には南北方向の畝が並ぶ。畝の上部は削られているが、畝間溝の芯芯距離で2.0～2.6m、高さ0.18～0.38mである。西半分では畝が残っていなかったが、この部分にも同様に南北方向の畝が一面広がっていたと想定できる。北部中央では458島島・459島島の周りを耕作面としている。458島島は南北6.8m以上、東西約5.2m、459島島は南北9.2m以上、東西3.2m以上である。上部は耕作により削平されているため畝は残っていない。

平面形が不明瞭であったため図示していないが、第1a(4-2)層上面の島島を1区の2箇所で見出した。上部は第1b(3・4)層により大きく削られていた。1区18区画の西半部で見出した島島は、耕作土層が粗いブロック状を呈し、ブロック中にはラミナが残るものがある。耕作土層は確認できなかったが北側には耕作面の一部と思われる箇所が存在する。1区41畦と重複して見出した島島は、畦の周囲に帯状の高まりとして残存していたのみである。

ところで第2面の1区6畦と12畦の間の45区画、3区32畦・33畦の南側約3mにあたる範囲では上層に第1b(4-2)層が見られず、第2a(5-1)層を削り非常に粗いブロック状となっていることから、耕耘されていた状況が看取できる。第1b(4-2)層は第2面の中でもより低い1区38・40区画、9区19区画に厚く堆積する。第1b(4-2)層上面からは足跡が多く見られる。これらのことから第1b(4-2)層の堆積後、耕作地を復旧し始めた段階で、第1b(3・4)層が堆積したと考えられる。

(2) 第2面 (図46～52、写真図版14・15)

第2面は第1b(3・4・4-2)層に覆われていたため、非常に良好な状態で遺構を検出することができた。北東が高く、南西に向けて低くなる。第1面において島島を検出した3区北東部のX=-138,558、Y=-33,664付近で1段大きく下がり、さらに3区66畦・63畦・347畦・27畦(1区34畦)、1区28畦・27畦・3畦が結ぶ線を境にして西側・南側へ大きな段差となる。3区南西部、1区中央部・南部、9区では9区19区画に向けて比較的緩やかに標高が下がる。標高は3区北東部で約5.4m、9区19区画で約4.0m、高低差は1.4mである。

第2面は全面に耕作地が広がる。第1a(4-2)層により削られている部分、第1面の島島耕作面部分と3区北東部では上面が見出できなかった。なお、1区6溝と12畦の間の耕作地は第2面の調査時点では第1a(4-2)層を認識できなかった。

1区1島島 (図48、写真図版15-6・22-1) 1区東部で見出した長方形の島島である。断面形は低い半円形で、東西32.0m以上、南北約6.0m、周囲からの比高は約0.5mである。第2b(6)層を芯として、極細砂～細礫混じりシルトのブロックを多く含む灰色細砂～粗砂を積み上げて耕作土としている。上面ではわずかに東西方向の溝の痕跡が観察できた。断面観察により第2(6)層から第2(5)層まで継続して耕作されていることがわかる。また、西部は1区第3面島島48と重複する。瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、中国製磁器が少量出土した。下限は江戸時代前期である。

1区2島島 1区東部で見出した長方形の島島である。断面形は上面が比較的レベルで、東西16m以上、南北約5.5m、周囲からの比高は約0.4mである。灰色細砂～粗砂混じりシルトを芯として、灰色細砂混じりシルトを積み上げて耕作土としている。1区2島島の形成段階を検討すると、1区3畦の第2(6)層下面と、2島島の芯になる灰色細砂～粗砂混じりシルト上面の高さの差は約0.1mと小さい。また、

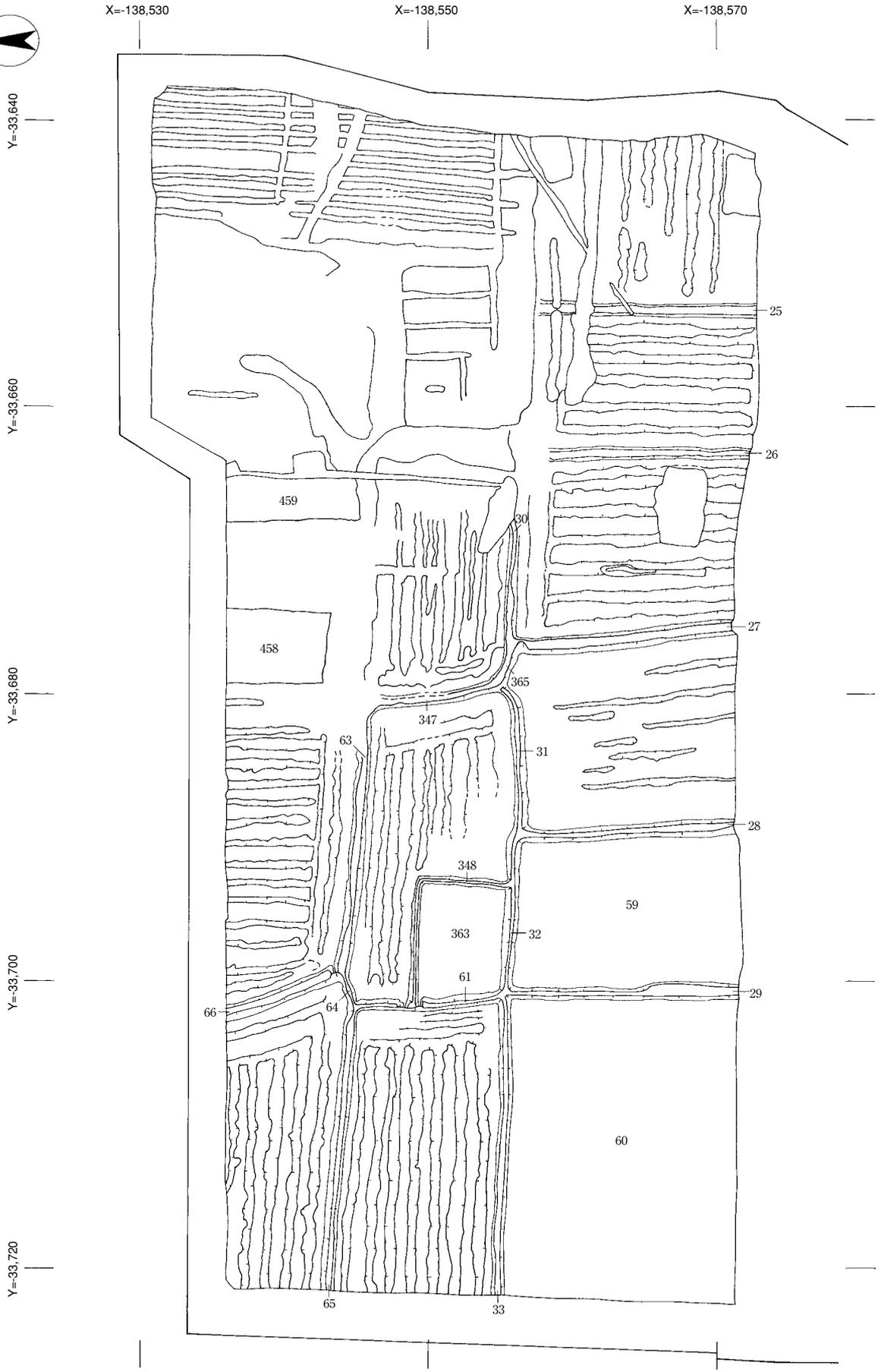


图46 3区第2面平面图

X=-138,570

X=-138,590

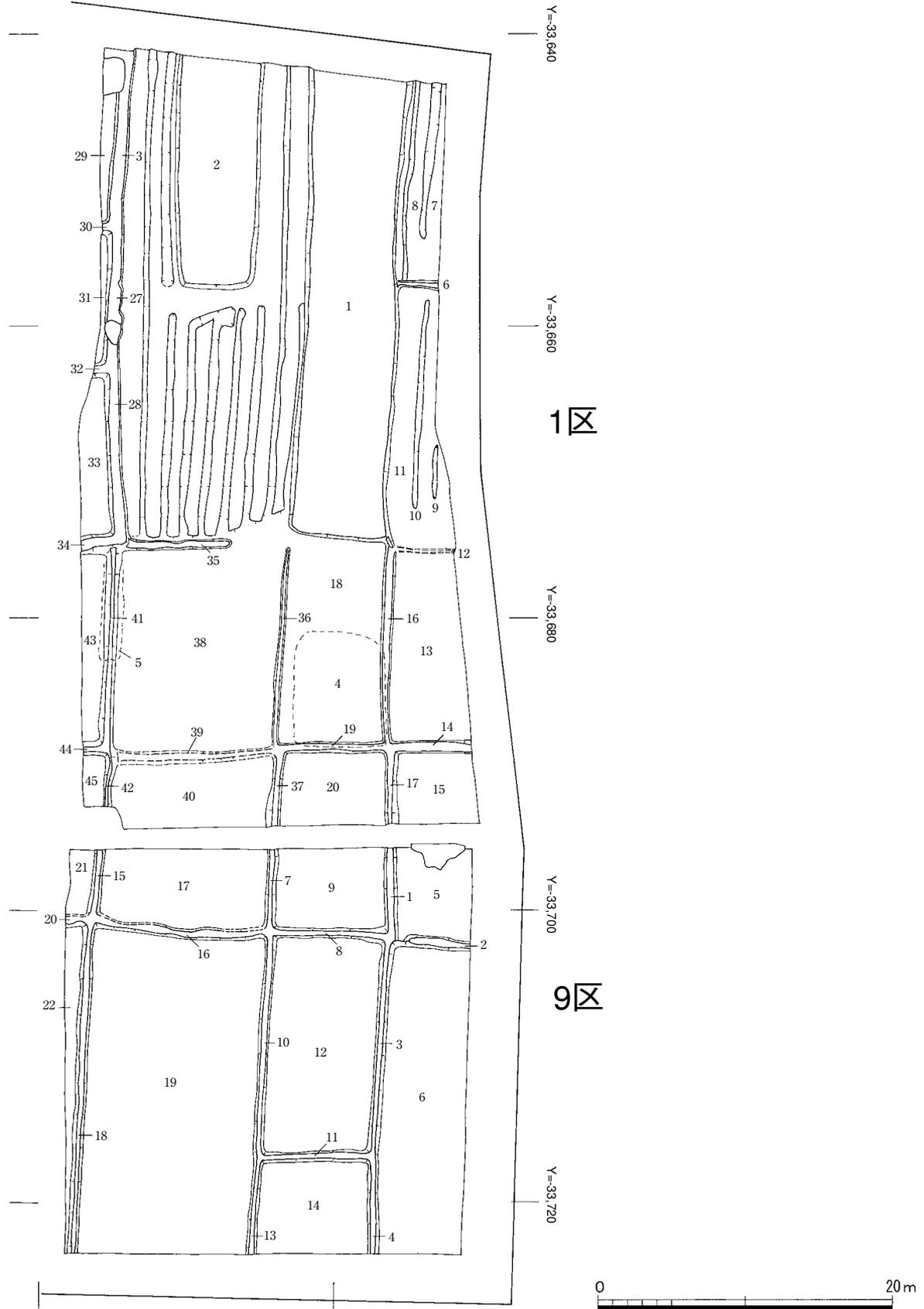
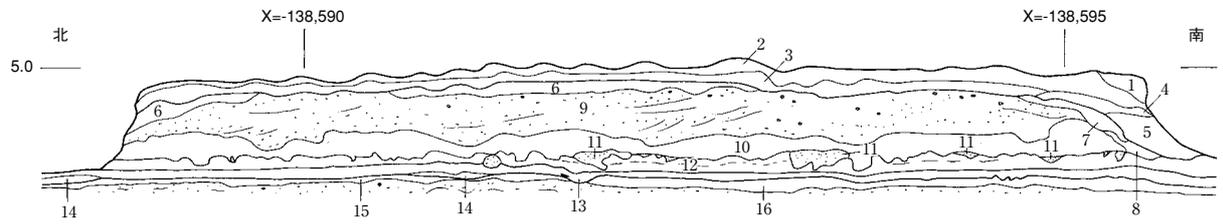
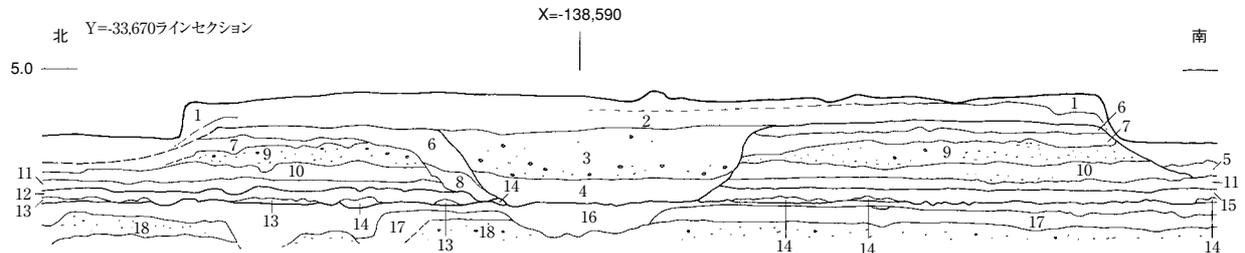


图47 1区·9区第2面平面图



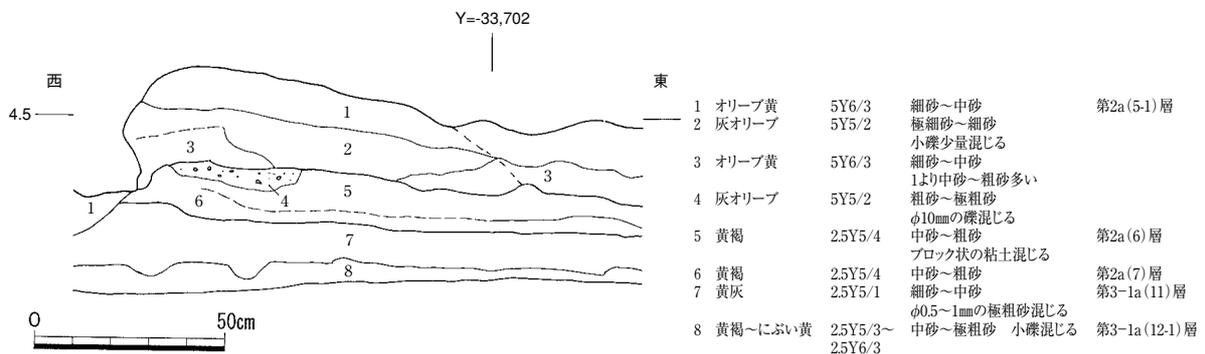
1	オリーブ灰	2.5GY5/1	細砂混じりシルト	粗砂～φ3mmの小礫混じる	2がブロック状に混じる	
2	灰	5Y5/1	細砂～中砂混じりシルト	φ5mmの小礫・極細砂質シルトが	ブロック状に混じる	第2a(5)層
3	オリーブ灰	2.5GY5/1	中砂～極粗砂混じりシルト	φ5mmの小礫混じる		第2a(5-2)層
4	オリーブ灰	2.5GY5/1	細砂混じりシルト	φ7mmの礫・中砂～極粗砂混じりシルト・極粗砂質シルトが	ブロック状に混じる	
5	オリーブ灰	2.5GY5/1	4に比べブロック粗い	シルト～中砂のラミナ有		第2a(6層)
6	オリーブ灰	5GY6/1	中砂～極粗砂砂質シルト	φ5mmの小礫混じる		
7	オリーブ灰	2.5GY5/1	粗砂質シルト	中砂～φ5mmの小礫混じる	木片を多く含む	
8	オリーブ灰	2.5GY5/1	粗砂質シルト	粗砂～φ5mmの小礫混じる		
9			中砂～φ20mmの礫			第2b(6層)
10	緑灰	10GY5/1	極細砂～細砂混じりシルト	粗砂～φ2mmの小礫混じる		第2a(7層)
11			中砂～φ2mmの小礫	下部にシルト～細砂		
12	緑灰	10GY5/1	細砂混じりシルト	粗砂～φ5mmの小礫混じる	下部に礫多い	
13	緑灰	5G5/1	細砂～中砂混じりシルト	粗砂～φ3mmの小礫混じる	シルトブロック目立つ	
14	灰	5Y4/1	細砂～中砂混じりシルト	粗砂～φ2mmの小礫混じる		第3-1a(12)
15	暗青灰	5B4/1	細砂～中砂混じりシルト	極細砂～中砂・極粗砂～φ3mmの小礫混じる		第4-2a(15-2)層
16	暗青灰	5B4/1	細砂～中砂混じりシルト	粗砂～φ3mmの小礫混じる		第4-2a(15-2)層



1	灰	7.5Y5/1	細砂～中砂混じりシルト	極粗砂～φ5mmの小礫・ラミナがあるシルト～中砂のブロックが混じる		第2a(5)層
2	灰	7.5Y5/1	細砂～粗砂混じりシルト	φ10mmの礫多く混じる		第2a(5)層
3	オリーブ灰	2.5GY5/1	細砂混じりシルト	極粗砂～φ5mmの小礫・ラミナがあるシルト～極細砂・中砂～粗砂など	ブロック状に混じる	第2b(5)層
4	灰	5Y5/1	中砂～φ8mm礫混じりシルト	細砂混じりシルトのブロックが混じる		第2a(6)層
5	灰	7.5Y5/1	細砂～中砂混じりシルト	粗砂～φ5mmの小礫が混じる		
6	灰	5Y5/1	中砂～φ8mmの礫混じりシルト	細砂混じりシルトのブロックが混じる		第2a(6)層
7	灰	5Y5/1	中砂～φ8mmの礫混じりシルト	シルトブロック僅かに混じる		第2a(6)層
8	灰	5Y5/1	中砂～φ8mmの礫混じりシルト	7に比べ砂質		
9			粗砂～φ7mmの礫	細砂～中砂のラミナ有	下部はシルト～極細砂	第2b(6)層
10	灰	7.5Y5/1	中砂～粗砂混じりシルト	粗砂～φ5mmの小礫・シルト～極細砂のブロックが混じる		第2a(7)層
11	灰	10Y4/1	細砂～粗砂混じりシルト	細砂～中砂・φ3mmの小礫混じる		第2a(8)層
12	灰	5Y5/1	細砂～粗砂混じりシルト	細砂～中砂・φ5mmの小礫混じる		第3-1a(11)層
13	オリーブ黒	7.5Y3/1	細砂～中砂混じりシルト	極粗砂～φ3mmの小礫混じる		第3-1a(12-2-4)層
14	灰	7.5Y4/1	細砂～粗砂混じりシルト	中砂～粗砂・φ3mmの小礫混じる		第3-1a(12-1)層
15	灰	5Y5/1	細砂～粗砂混じりシルト	12に比べ砂質	ブロック顕著 φ8mmの礫混じる	第3-1a(11)層
16	オリーブ黒	10Y3/1	細砂～粗砂混じりシルト	φ3mmの小礫・シルトブロック混じる		第4-2a(15-2)層
17	灰	5Y4/1	極細砂～中砂質シルト	極粗砂～φ6mmの礫混じる		第4-2a(15-2)層
18	暗青灰	5BG4/1	粗砂～φ3mmの小礫混じりシルト			第5a(15-3)層

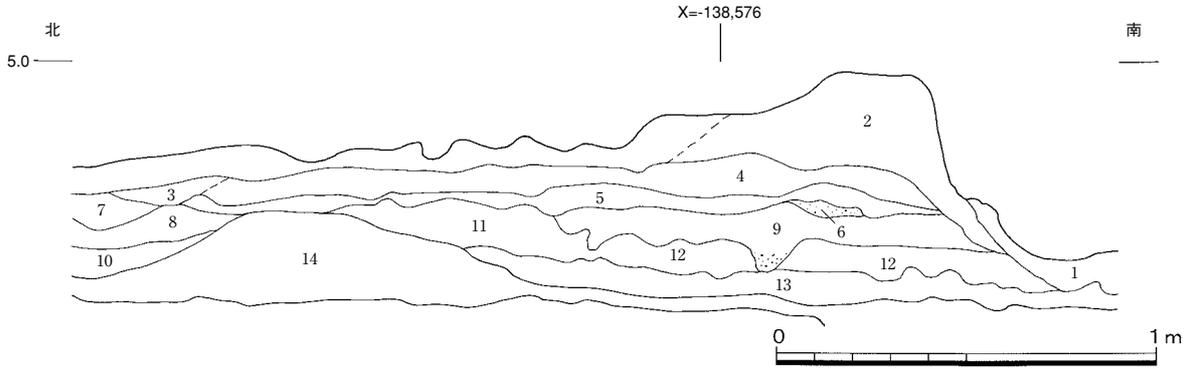


図48 1区第2面1島島・第3面48島島断面図



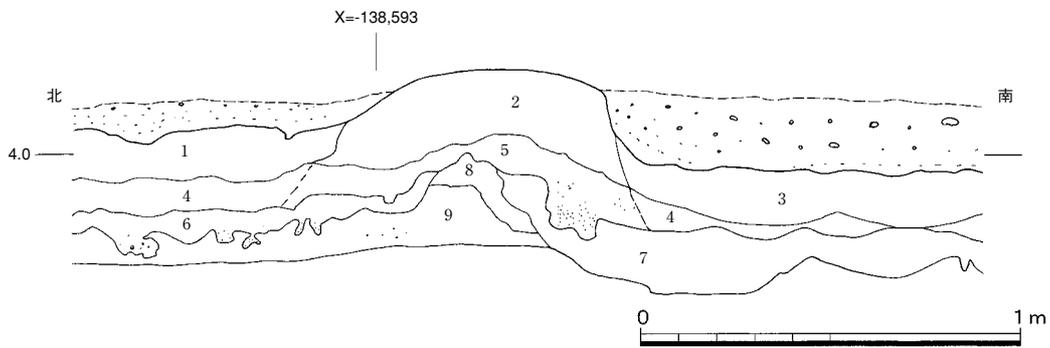
1	オリーブ黄	5Y6/3	細砂～中砂		第2a(5-1)層
2	灰オリーブ	5Y5/2	極細砂～細砂	小礫少量混じる	
3	オリーブ黄	5Y6/3	細砂～中砂	1より中砂～粗砂多い	
4	灰オリーブ	5Y5/2	粗砂～極粗砂	φ10mmの礫混じる	第2a(6)層
5	黄褐	2.5Y5/4	中砂～粗砂	ブロック状の粘土混じる	
6	黄褐	2.5Y5/4	中砂～粗砂		第2a(7)層
7	黄灰	2.5Y5/1	細砂～中砂		第3-1a(11)層
8	黄褐～にぶい黄	2.5Y5/3～2.5Y6/3	φ0.5～1mmの極粗砂混じる	中砂～極粗砂 小礫混じる	第3-1a(12-1)層

図49 3区第2面66島島断面図



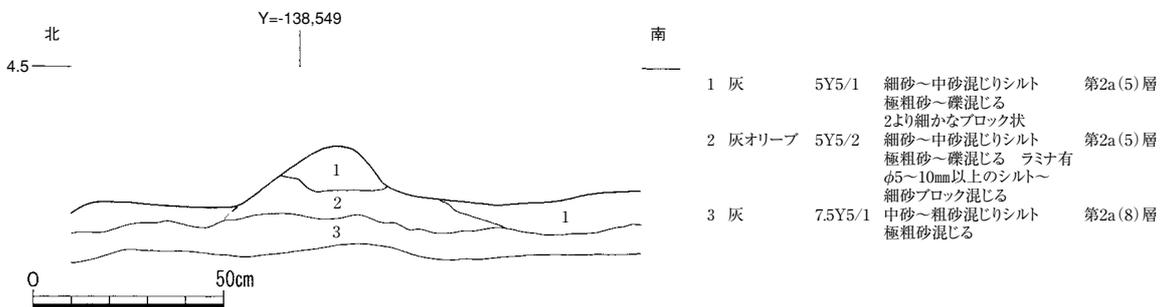
1	暗青灰	5B4/1	中砂～粗砂混じりシルト 極細砂質シルト・粗砂～φ5mmの小礫がブロック状に混じる	第2a(5-1)層
2	暗青灰	5BG4/1	中砂～φ5mmの小礫混じりシルト φ10～20mmの極細砂質シルトのブロック多い	第2a(5-1)層
3	青灰	5BG5/1	細砂混じりシルト 粗砂～小礫多く混じる 極細砂質シルト・極粗砂～φ3mmの小礫がブロック状に混じる	第2a(5-2)層
4	青灰	5BG5/1	3に比べブロック状小さい φ8mmの礫混じる	第2a(5-2)層
5	青灰	5BG5/1	細砂～粗砂混じりシルト 粗砂～φ5mmの小礫混じる 砂部分多い ラミナ有	第2a(6)層
6			細砂～礫φ10mm乱れたラミナ 極粗砂より大きいもの多い	第2b(6)層
7			細砂～極粗砂 ラミナ有	
8	灰	10Y5/1	9に比べブロック状小さく、砂少ない	第2a(6)層
9	灰	10Y5/1	中砂～粗砂混じりシルト φ5mmの小礫混じる シルト・中砂～極粗砂ブロック状に混じる	第2a(8)層
10	オリーブ灰	5GY5/1	細砂～極粗砂混じりシルト φ5mmの小礫混じる 部分的に細砂混じりシルトと粗砂～φ2mmの小礫が混じる	第2a(7～10)層
11	青灰	5BG5/1	極細砂質シルト 中砂～極粗砂φ7mmの礫混じる 細砂～中砂混じりシルトがブロック状に混じる	第2a(7～9)層
12	オリーブ灰	5GY5/1	10に比べ中砂～φ5mmの小礫ブロック状に混じる	第2a(7～9)層
13	灰	10Y4/1	細砂～中砂混じりシルト 極粗砂～φ5mmの小礫混じる	第2a(10)層
14	灰	7.5Y5/1	細砂～中砂混じりシルト φ6～7mmの礫・粗砂～極粗砂ブロック状に混じる 上部に13層混じる	第3-1a(11)層

図50 1区第2面3畦断面図



1	暗青灰	10BG4/1	極細砂～細砂質シルト 細砂～粗砂質シルト・粗砂～極細砂がブロック状に混じる	第2a(5-1)層
2	暗青灰	10BG4/1	11に比べφ5～8mmの礫多く混じる 粗砂～極粗砂混じる	第2a(5-1)層
3	青灰	5B5/1	細砂～中砂質シルト 粗砂～極粗砂混じる 極細砂質シルトがブロック状に混じる	第2a(5-1)層
4	青灰	5BG5/1	細砂～粗砂混じりシルト やや砂質	第2a(5-2)層
5	青灰	5BG5/1	細砂～粗砂混じりシルト 4に細砂～中砂がブロック状に混じる	第2a(5-2)層
6	青灰	5BG5/1	細砂～中砂混じりシルト 粗砂～極粗砂混じる 極粗砂混じりシルトが点々と混じる	第2a(6)層
7	暗青灰	5BG4/1	極細砂～粗砂混じりシルト 極細砂～細砂混じりシルトがブロック状に混じる	第2a(6)層
8	暗青灰	5BG4/1	極細砂～粗砂混じりシルト 7に比べブロックが小さいが砂質強い	第2a(6)層
9	オリーブ灰	5GY5/1	細砂～粗砂混じりシルト 粗砂～極粗砂混じる	第2a(7)層

図51 9区第2面4畦断面図



1	灰	5Y5/1	細砂～中砂混じりシルト 極粗砂～礫混じる	第2a(5)層
2	灰オリーブ	5Y5/2	2より細かなブロック状 細砂～中砂混じりシルト 極粗砂～礫混じる ラミナ有 φ5～10mm以上のシルト～細砂ブロック混じる	第2a(5)層
3	灰	7.5Y5/1	中砂～粗砂混じりシルト 極粗砂混じる	第2a(8)層

図52 3区第2面348畦断面図

1区2島島南東部では第2b(6)層が粗い攪拌を受け砂礫の中に耕作土ブロックが点在する状況で存在するが、北側および西側では細粒化し $Y = -33,650$ 付近では砂混じりのシルトとなる。また砂礫を多く含む部分が直線状に成形された痕跡を示さない。以上の点から1区2島島は1島島よりも新しく、第2a(5-2・3)層の段階で形成されたと考えられる。瓦器、須恵器、焼締陶器が少量出土した。下限は江戸時代前期である。

畦(図49~51、写真図版14-5・15-3~5) 調査区全体に分布する。東西または南北方向に並び、ほかの畦とは十字形あるいはT字形に交差する。方向や交差の形がやや歪むのは、いずれも段差の影響を受けた箇所である。断面形は半円形のものが多く、幅は下場で0.8~1.0m、上場で0.4~0.6m、高さ0.1~0.4mである。耕作面に標高差がある場合は、3区66畦・1区3畦・9区4畦に示す通り、低い耕作面側の畦の側面は垂直に近く、高い耕作面側の側面の斜度は比較的緩い。上面は頂部を低い面側に寄せるなどの特徴をもつものが多い。また、3区66畦南端・3区348畦と61畦交差部両側・1区36畦東端・9区2畦北端は、畦が途切れている部分があり、水口と考えられる。なお、第1(3・4)層形成段階の耕作により、南北方向の1区35畦・39畦、9区16畦、3区30畦・347畦は大きく削られており残存状態は良くない。

第2面の畦間距離は南北方向の畦はやや不揃いであるが、比較的検討しやすい東西方向の畦の南北距離では、3区63畦の南側から順に約11.0m、19.8m、10.4m、7.6mである。

3区348畦(図52、写真図版14-2) 3区中央部で検出したL字形の畦である。断面形は半円形で、幅約0.3m、高さ約0.15mとほかの畦と比較して規模が小さい。断面観察からは3区348畦の下に第2a(8)層が通るため、盛土された後は北側の耕作地では耕耘されていないことが想定でき、また上面は長期にわたり放置されたような堆積は観察できないため、3区348畦は他の畦より後に形成されたと考えられる。3区348畦に囲まれた3区363区画は、ほかの耕作地の区画と異なり上面に凹凸がほとんどなく水平であった。成立には特別な機能が想定できる。出土遺物はない。

耕作地(写真図版14-3・4) 畦に囲まれた耕作地は、すべてほぼ方形である。面積は最も大きな3区60区画で400㎡以上、最も小さな3区363区画で約50㎡、次いで小さな1区20区画で約84㎡である。耕作地には畝のある箇所と畝のない箇所があり、前者は比較的高い部分、後者は3区南西部・1区西部・9区の比較的低い部分に分布する。畝の大部分は検出時にある程度上面を掘削したにもかかわらず、断面では第1b(4-2)層のシルトが深くまで入り込んでいることから、非常に粗いブロックで盛り上げられていたことが想定できる。3区63畦北側耕作地の畝は最も残存状況がよく、畝間溝の芯芯距離で1.2~1.7m、高さ0.03~0.07mである。ほかの畝もほぼ同様であったと考えられる。畝の有無により畑・水田の区別を付けることは、畝のない3区66畦や3区61畦にも水口が作られていることからみて不可能である。むしろ、耕作地での畝の分布状況は、第2面が埋まった時期を検討する材料になると思われる。第2面に関わる遺物は第2a(5・6)層を掘削中に出土したもので、下限は江戸時代前期に属する焼締陶器(図77-99・100)である。第2a(5)層は径5mmを越えるようなシルトのブロックを含むため、長期にわたって耕作されていたとは考えられない。これらのことから、第2a(5)層は江戸時代前半と推定することができる。

(3) 第3面(図53~56、写真図版16)

耕作などによる攪拌を受けて削平されている部分が多い。これは3区南西部・1区西部・9区の比較的低い部分に顕著であった。そのため遺構の残存状況が最適の部分进行调查した。図53・54は1つの図面

として掲げているが、遺構検出面が場所により異なっており、3区東部から中央部では第2 a (6) 層上面、1区西部から9区は第2 a (6) 層下面、1区東部は第2 a (7) 層上面となる。

1. 3区東部から中央部

3区北東部から北部中央には111区画・112区画・116区画を中心に第2 b (5-3) 層が厚く堆積しており、特に111区画・112区画には中礫～大礫が供給されている。これらの礫は同地区の第1 a (2) 層にも多く含まれていることから、堆積当初はかなりの厚みがあったと考えられる。一方、110区画・108畦南側の耕作地では比較的厚みは少なかったが、北から南南西方向の攪乱にみられるように、第2 b (5-3) 層の洪水によって第3面を削られている。攪乱は不整形な溝状で、幅が広がる部分は第5-3 b (16) 層まで深く抉っている。

畦(図55、写真図版16-3) 東西または南北方向に並び、ほかの畦とは十字形あるいはT字形に交差する。第2面の畦と位置的に重複するものも多い。断面形は半円形のものが多く、幅は下場で約0.8m、上場で約0.5m、高さ0.06～0.3mである。形態的な特徴は第2面の畦と同様で、耕作面に標高差がある場合は図55の3区113畦に示す通り、低い耕作面側の畦の側面は垂直に近く、高い耕作面側の側面は斜度が比較的緩い。上面は頂部を低い面側に寄せるなどの特徴をもつ。第2 b (5-3) 層が薄い部分の畦の上部は第2 a (5-1～3) 層段階での耕作により削られている部分が多い。132畦・133畦・134畦は第2 a (5) 層の畦の成形時や耕作によって削られ、完全な形ではない。132畦南側の段差は第2 a (5-1) 層段階の耕作などによって削られたことによってできたものである。

第3面の畦間距離は東西方向の畦の南北距離では、3区106畦の南側から順に9.0m、9.3m、後述する1区59畦は第2 a (7) 層段階のものであるが、第2 a (6) 層段階でもほぼ同じ位置である。3区115畦との距離は18.8m、1区59畦と1区1島畠との距離は12.6m、そして1区1島畠の幅が6.4mである。3区115畦と1区59畦の間の距離および、1区59畦と1区1島畠の南端までの距離を2分すると9.3～9.5mとなる。第3面段階では東西方向の畦の間隔は9.0～9.5mを基準としていたものと考えられる。

溝 117溝は東部の115畦に接する南側、137溝は中央部付近の136区画東側で検出した。断面は浅いU字形で、それぞれ幅0.6～0.9m、深さは0.13～0.2m、幅約0.5m、深さ約0.1mである。これらは第2 b (5-3) 層の堆積時に削られた可能性があるが、畦の溝側の肩がほぼ直線的であることから畦際の溝と考えられる。106畦南側にも類似するくぼみがあるが、畦の対面の肩が直線的ではなく底面は凹凸が著しい。

耕作地(写真図版16-1・2) 畦に囲まれた耕作地は、すべてほぼ方形である。面積は最も大きな3区130区画で約110㎡、最も小さな3区116区画で約81㎡である。第2 a 層形成時の耕作により削られている部分が多く、畝などの残存状況は良くない。373～376畝は上面や畝間の凹凸が著しく、畝間の芯芯距離は約1.4m、高さ約0.04mである。

2. 1区西部から9区

東西方向の島畠に関わる調査である。9区24島畠は第2 a (6) 層の洪水を契機として作りかえられているため、この遺構に限り第2 a (6-1・2) 層を使用する。島畠とその田面の耕作土は第2 a (5) 層形成段階で削られているため、島畠の芯となる第2 b (6) 層の残存状況により規模を復元している。

1区48島畠(図48、写真図版15-6) 第2面1区1島畠の西部に重複する。1区1島畠の西部が二股になった部分で、北側は南側に比べて長く、田面の平面形はL字形になる。北側は東西約21.2m、南



X=-138,530

X=-138,550

X=-138,570

Y=-33,640

Y=-33,660

Y=-33,680

Y=-33,700

Y=-33,720

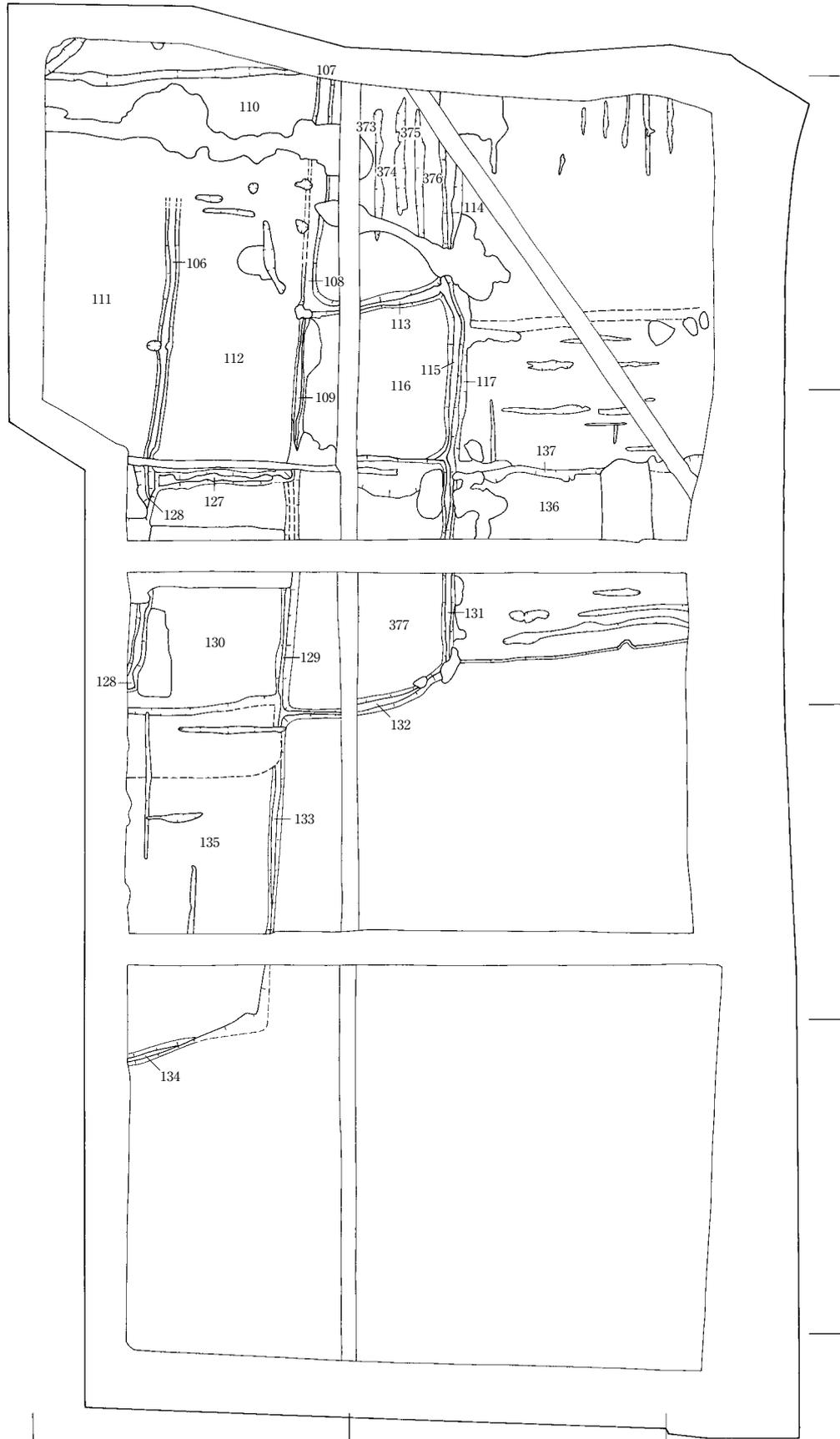


图53 3区第3面平面图

X=-138,570

X=-138,590

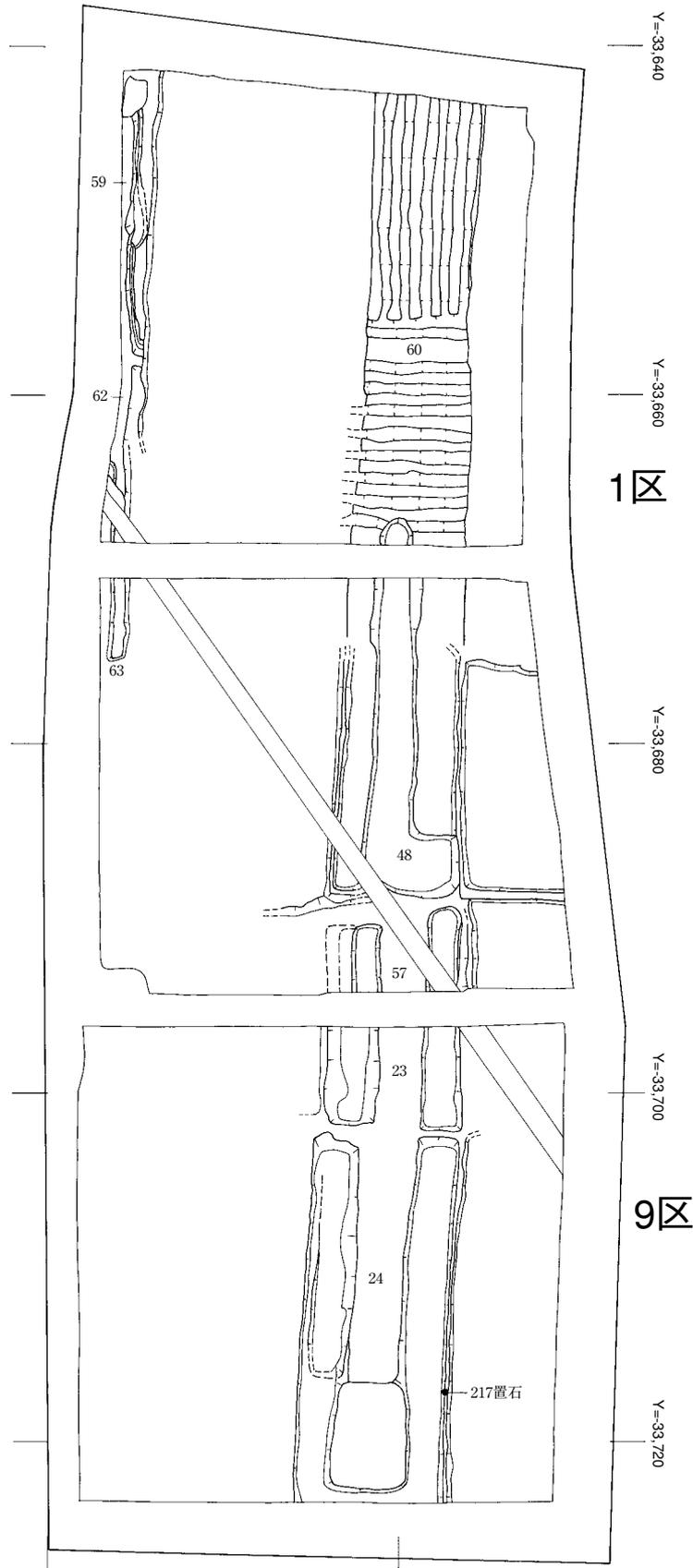


图54 1区·9区第3面平面图

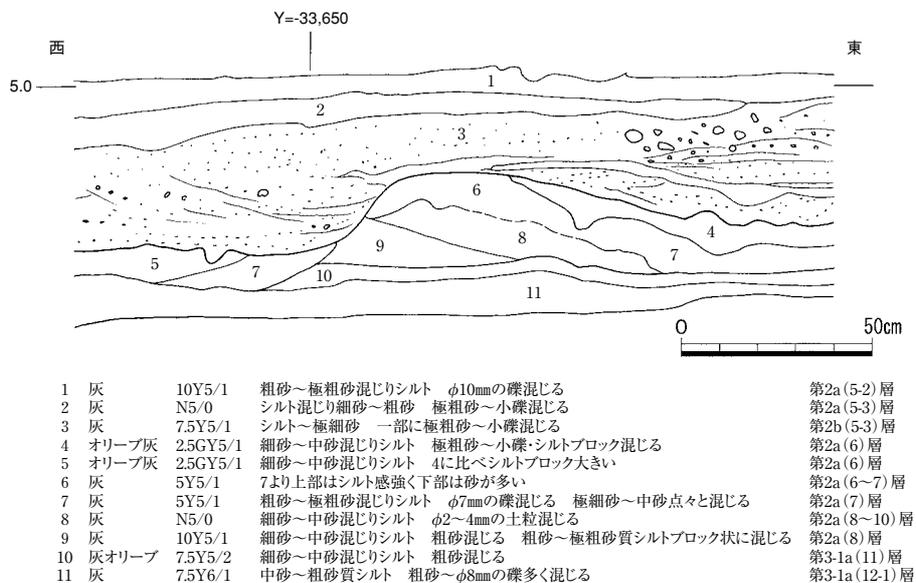


図55 3区第3面113畦断面図

北約 2.8m、南側は東西約17.6m、南北約 2.6m、田面は南北で最長約 6.0mである。Y = -33,673付近には第2 a (7) 層の南北方向の畦があり、この付近から島嶼には西へ下がる段差があったものと思われる。二股部分の外側にある高まりは擬似畦畔で、内側は第2 a (5) 層、外側は第2 a (6) 層によって削られて第2 b (6) 層が畦状に残ったものである。外側が第2 a (6) 層によって削られることから1区48島嶼の幅も擬似畦畔の付近に想定できる。二股部分は第2 a (5) 層の形成段階でY = -33,675付近まで削られ、田面は埋められて第2面の状況になる。断面観察では島嶼に伴う第2 a (6) 層段階の盛土層や耕作土層、田面の耕作土が認められるが、遺構検出段階で田面部分を第2 a (6) 層下面の土坑と考えて掘削したために、田面耕作土層上面を検出できなかった。

1区57島嶼 (9区23島嶼) 1区西部から9区にわたって検出した。第2 b (6) 層堆積後、北側・南側の田面を復旧し中央部を島嶼としている。平面形はほぼ方形で、東西約12.8m、南北約 2.7m、周囲からの比高は約 0.1mである。芯である第2 b (6) 層は、1区では下部のやや暗色のシルトのみが残存していた。9区Y = -33,696付近から西ではその上層の第2 b (5) 層の砂礫層も含む。これは下層の第2 a (7) 層が西に向けて緩やかに低くなっているためである。上面は削平されていたが、第2面9区8畦の下にのみ島嶼の耕作土層が残存していた。

9区24島嶼 (写真図版16-6) 1区57島嶼 (9区23島嶼) との境にあたる、Y = -33,702付近には第3面の畦が南北に通るため、この東側の耕作面は西側と比べて高くなる。また田面の位置がややずれる部分があることから遺構名称を分けているが、一連の島嶼である可能性が高い。北側・南側の田面を復旧し中央部を島嶼としているが、第2-2面と第3面段階では形状が少し異なる。後者の段階では東西約21.8m、南北約 3.0mで、前者の段階では第2 a (5) 層により削られたため詳細は不明であるが、南北畦は第2面9区11畦として踏襲されており、西端から約7.2 mを縮小させて水田としている。室町時代の瓦器片や付木などの木製品が出土した。

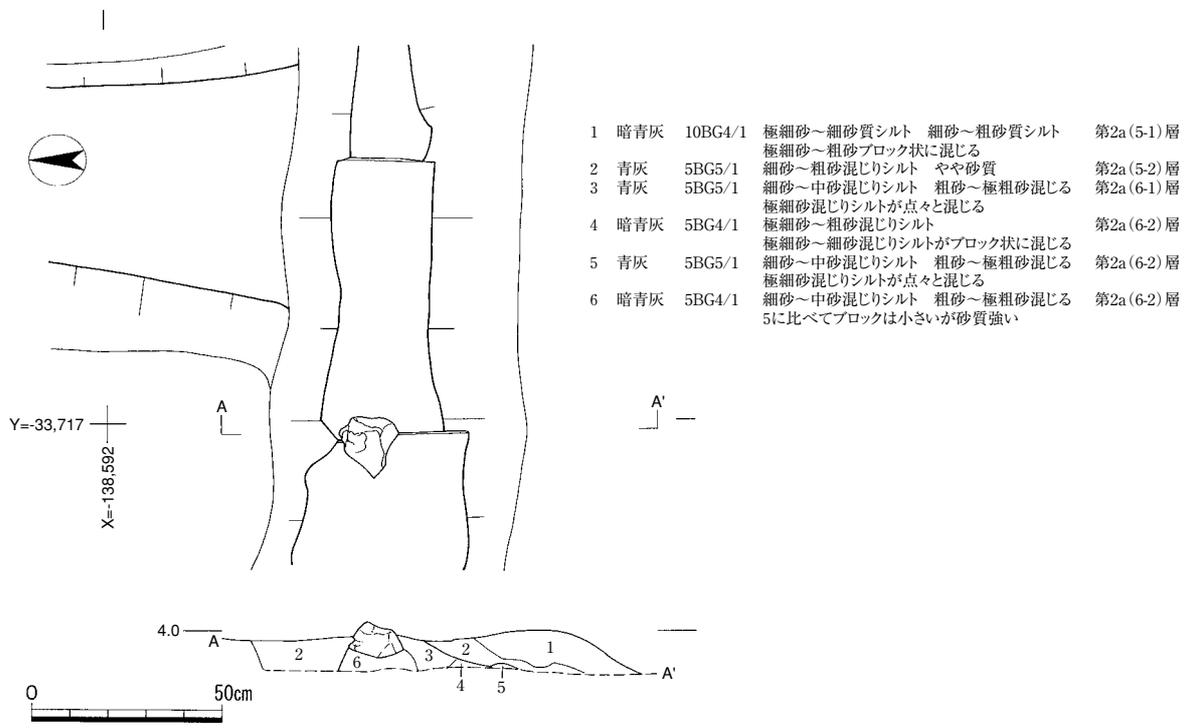


図56 9区217置石実測図

9区 217置石 (図56、写真図版16-7) 南北方向の畦と南の東西方向の畦が接する地点で 217置石を検出した。217置石は大きさ約30cmの自然石で、第2 a (6-2) 層上面に置かれており、第2 a (6-1) 層に覆われることから、南北畦を作るときの目印とされたものと考えられる。

ここで、3・1・9区の第1面から第3面の島島の変遷をまとめる。まず、調査区南部では第2 b (6) 層の砂礫が厚く堆積し、東西方向の耕作地の区画に1区57・9区24島島が形成される。その後、9区24島島の西端部分を縮小させて水田化する。第2面の第2 a (5) 層が形成される際に、48島島の東半を拡大し、新たに1区2島島が形成されるとともに西部は水田化する。島島が形成されてきた区画北側や1区の中央部を中心に第1 b (4-2) 層が堆積すると、水田化していた1区18耕作地部分や1区41畦周辺に新たに島島を形成する。時をおかずして第1 b (3・4) 層が堆積し、それまでの島島は完全に砂に覆われたのち、新たに3区北東部で 458・459島島が形成される。第1面が完全に第1 b (1-7) 層で埋没すると、その後は島島が形成されることはなくなる。

3. 1区東部

1区60畦 1区1島島の基底面のほぼ中央で検出した南北方向の畦である。断面形は半円形で、幅約2.0m、高さ約0.4mである。断面観察から、約1.0m程度の幅の畦を拡張したことが分かる。畦の上面も耕作面であった可能性がある。出土遺物はない。

耕作地 (写真図版16-4) 60畦を挟み、東側では東西方向の畝、西側では南北方向の畝を検出した。断面形は凹凸のある半円形で、畝間溝の芯芯距離で1.0～1.3m、高さ0.1～0.2mである。1区1島島以外の島島下層でも、畝間溝の存在や第2 b (6) 層の攪拌された状況から畝が作られていたと考えられる。第2 b (6) 層の下部がやや擾乱を受けている状況から、一定期間放置されたのち砂礫により埋まったものと思われる。

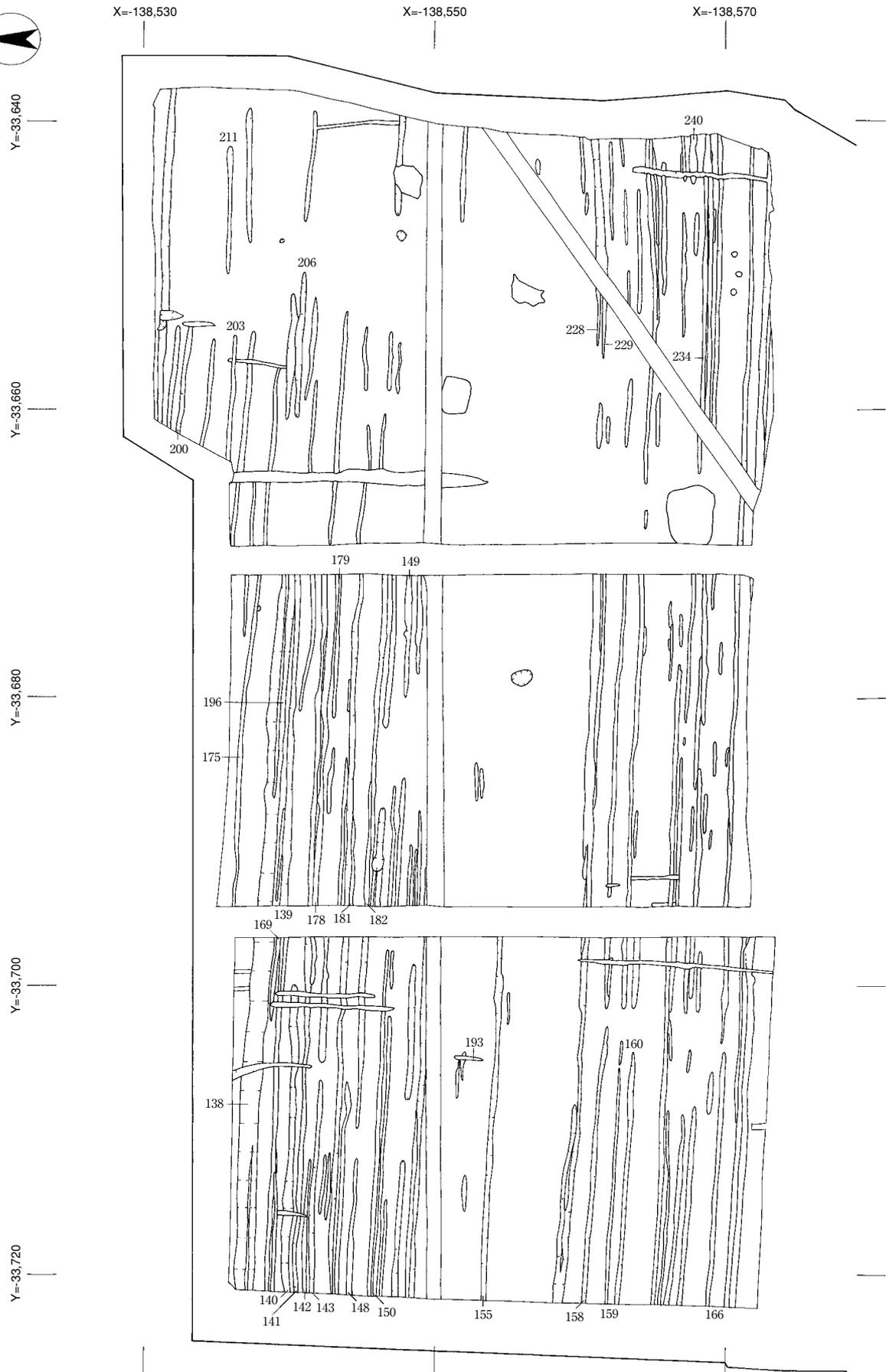


图57 3区第4面平面图

X=-138,570

X=-138,590

Y=-33,640

Y=-33,660

1区

Y=-33,680

Y=-33,700

9区

Y=-33,720

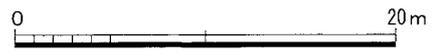
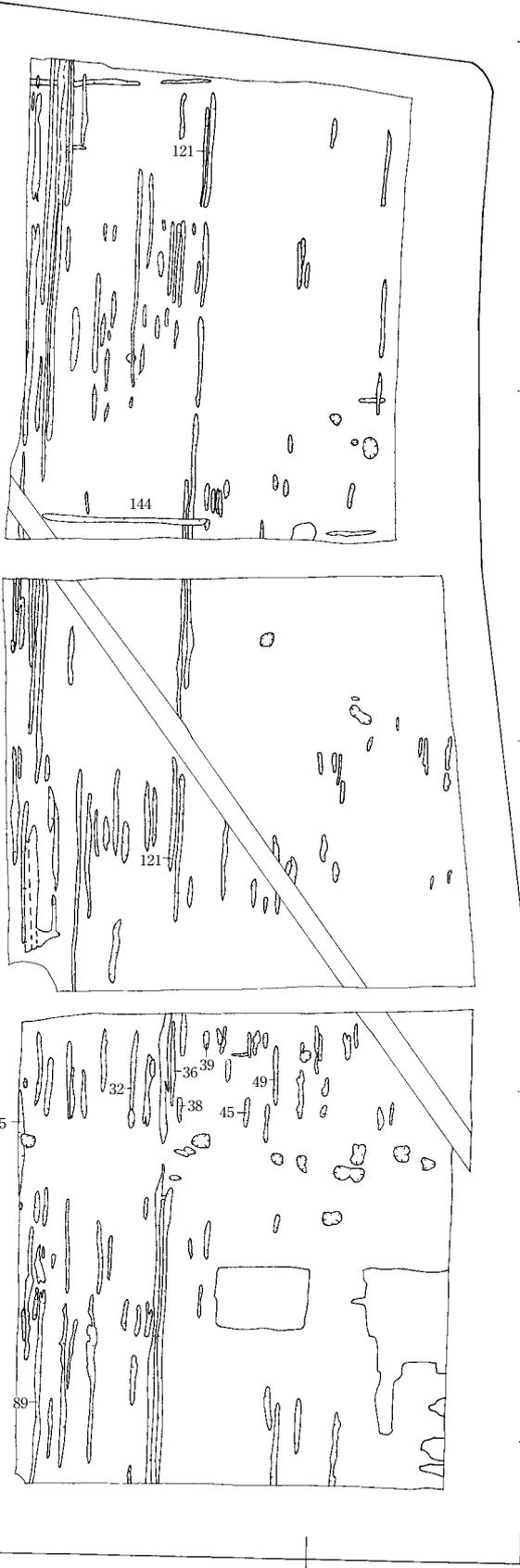


图58 1区·9区第4面平面图

1区59畦・62畦・63畦 1区北東部で検出した東西方向の畦である。第2面3畦・27畦・28畦とほぼ同じ位置に重複するが、中心は少し北側にずれた位置にある。第2a(6)層下面の検出状況であるが、断面形は半円形で、幅約0.5m、高さ約0.2mである。出土遺物はない。

(4) 第4面(図57~60、写真図版17)

1. 3区・1区・9区第4面(図57・58、写真図版17-1~6)

第2面・第3面の精査を行った第2a(5-1)層から第2a(7)層より下層には、複数の耕作土層が重層していることが断面観察により分かったが、それぞれの層の厚さが薄く、層の広がりが限定される状況にあったので、最も残存状況が良好と予想できた第3-1a(12-1)層まで一括して掘削し、第4面として精査を行った。

耕作溝(写真図版17-4) 3区・1区・9区全体に分布する。3区のX=-138,550南側は分布が希薄に見えるが、遺構検出の掘削が深かったためであり、本来はこの部分にも耕作溝が分布していたことを掘削中に確認している。前段階の耕作により削られて途切れている部分があるが、溝は東西または南北方向に並び、東西方向のものが大部分を占める。幅0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mのものが多くを占めるが、3区北部、3区南部から1区・9区北端、1区121溝はやや規模が大きく、幅約0.3m、深さ約0.05mである。これらの中には3区138溝のように複数の溝が重複するものがある。溝の埋土は第3-1a(12-1)層とほぼ同質のものや、溝の肩付近に細砂~極粗砂のラミナが入るもの、溝の底部に砂礫が堆積しているもの、下層のブロックを多く含むものなどがある。溝の間隔は粗密はあるが、1.0~2.0mである。出土遺物は小片がほとんどであるが、少量の鎌倉時代から室町時代の土師器、瓦器、中国製磁器を除けば縄文土器、弥生土器、飛鳥時代以前の土師器、須恵器などの混入品が占める。第3-1a(11)層下面に属する1区144溝から鎌倉時代の瓦器碗の細片が出土していることから、第3-1a(12-1)層は鎌倉時代をさかのぼらないと推定することができる。

耕作地(写真図版17-2・6) 耕作による攪拌を受け削平されたため、畦は残っていない。比較的規模の大きい耕作溝が東西方向に伸びる3区北部、3区南部から1区・9区北端では、耕作面の東西方向の標高差が0.9mあり、なだらかに東から西へ傾斜をしている。また、比較的規模が小さい溝が多くを占める部分でも、東西の標高差が0.8mあり、水田となるような水平の区画は存在しないことから全体が畑として利用されていたと推定できる。

なお、南北方向については3区138溝、3区149溝、3区155溝、1区121溝の南約1.6mを境として南側が下がる段差があり、それぞれ耕作地の区画があったと考えられる。各区画の段差は北から順に0.15m、0.1m、0.14m、0.06mで、区画の間隔は北から順に8.6m、10.4m、28.4mである。

2. 3区第4-2面(図59・60、写真図版17-7・8)

第3-2a(12-2~12-3上層)層は擾乱を受け、下面に耕作溝が見られることから耕作土層と考えられる。第3-2a(12-2)層は3区南東部、北西部を除いた1区や9区南東部では、第4-1面の段階では削られ残存していない。第3-2a(12-3上層)層も範囲をやや狭めるがほぼ同様の残存状況である。一方、X=-138,547付近より北側の3区北西部では第3-2a(12-3上層)層の下層に第3-2b(12-3上層)層が存在しており、この範囲では第3-2a(12-3下層)層上面が良好な状態で残存していることが想定できた。そのため、第4-2面としてX=-138,550より北側のみを対象として精査を行った。また3区のX=-138,547付近より南では第3-2a(12-3上層)層の下部に第3-2b(12-3上層)層が粗い攪拌を受けた層が存在するのみである。

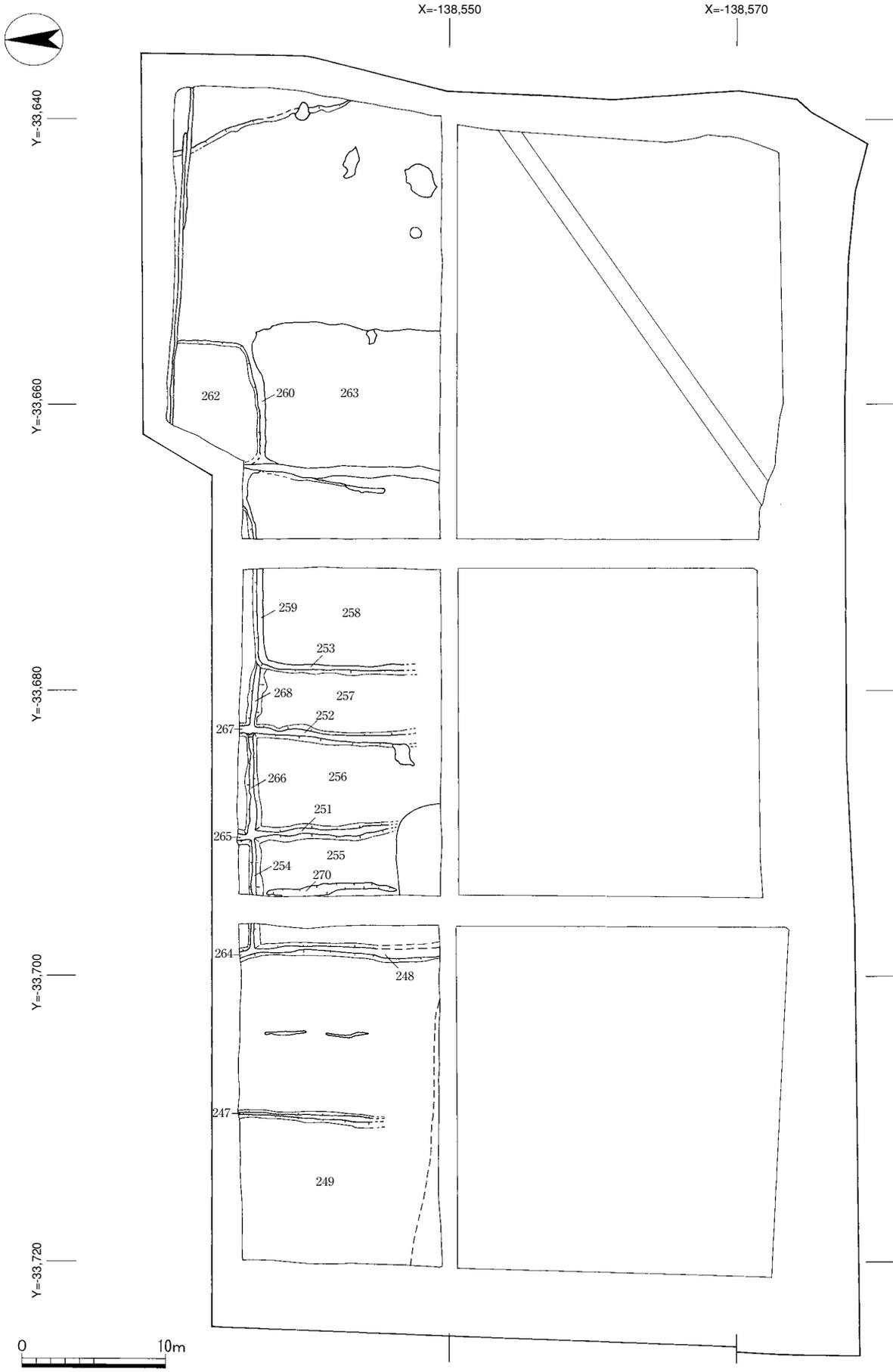


图59 3区第4-2面平面图

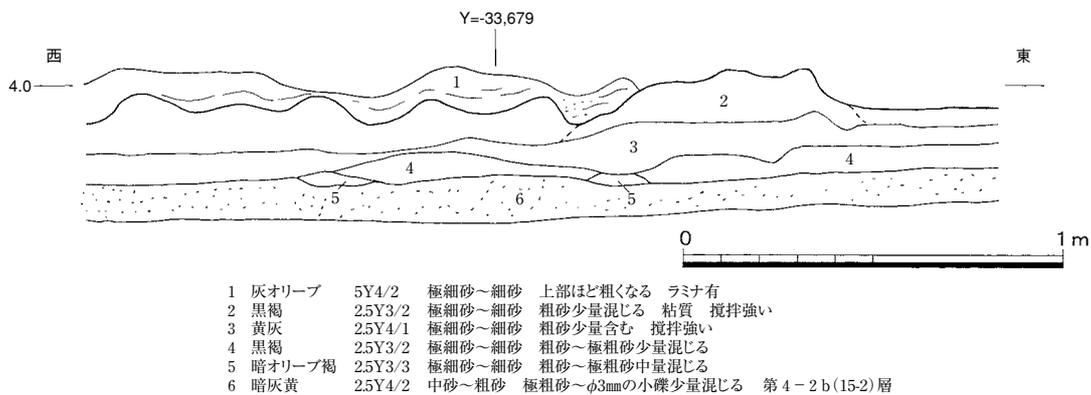


図60 3区第4-2面253畦断面図

畦（図60、写真図版17-8） 東西および南北方向の畦を検出した。X = - 138,547付近より南側では第4-1面の耕作により削平される。

3区北部中央で検出した形状が最もよく残っていた南北方向の3区253畦は、断面形は低い半円形で、幅は下場で約0.7m、上場で約0.4m、東側で高さ0.1mである。3区第3面の畦と比較して高さが低い。3区260畦は最も低い。また、254畦は上面の凹凸が著しく西側では上面が明瞭に検出できなかった。畦間距離は不揃いである。比較的高低差があるところは南北方向の畦の間隔が狭い傾向があり、地形を完全に克服できていない状況が窺える。

耕作地 畦に囲まれた耕作地は、すべてほぼ方形であったと推定できるが、耕作地の面積にまとまりを見いだすことはできない。3区249区画の西の畦は西壁断面で確認できなかったことから3区250区画より東西の幅がやや広いと思われる。なお、3区250区画・255区画の中央に南北方向の3区270溝があるが、性格は不明である。出土遺物は小片がほとんどで、わずかに時期を特定できるものとして、250区画から平安時代後期の瓦器碗片、251区画から平安時代中期から後期の灰釉陶器皿片が出土していることから、第4-2面の時期は平安時代後期以降と推定することができる。

(5) 第5面（図61～65、写真図版18・19）

1. 3区・1区・9区第5面（図61～図64、写真図版18・19）

第4-1a層を掘削し、第5面として精査を行った。第4-1a層は調査区西端の一部をのぞき面的な広がりをもたず、畦の下で削られずに残存しているか遺構埋土として存在するのみである。

土坑（写真図版18-2・19-4） 3区北東部・南西部、1区南西部、9区東部を中心に大小の土坑を検出した。小さなものには円形、規模が大きくなると不整形な平面形が多く、直径0.1～6.0m、深さ0.1～0.7mと様々である。直径1m以下の土坑は一部を除きほぼ単一の埋土で埋まっており、おおむね次の3種類に分けることができる。①：オリーブ灰色粗砂～極粗砂混じりシルト、②：暗青灰色細礫をわずかに含む細砂～中砂混じりシルト、③：暗オリーブ灰色の比較的泥質な極細砂～細砂混じりシルトがブロック状をなすものである。埋土には土器の小片が1～2点入るものもあるが、大部分は遺物が混じらない。

1区188土坑（図63、写真図版19-3） 中央部で検出した。平面形はほぼ円形で、直径約0.6m、深さ約0.2mである。埋土は②である。古墳時代中期の土師器小型丸底壺が出土した（図75-54）。土器はほぼ完形で、土坑西寄りに口縁部をやや西北西に傾向けた状態で置かれていたことから埋納されたもの

と考えられる。上部の一部に欠損があるものの、壺内部に破片が入っていたことから土圧により割れたものである。

9区 128土坑 (図64、写真図版19-6) 南部中央で検出した。平面形は円形で、直径約 0.3m、深さ約 0.15mである。埋土は③である。古墳時代中期から後期の土師器杯が出土した (図75-56)。土坑上部が削平を受けているため土器も同様に上部が削られているが、ほぼ完形で土坑西寄りに口縁部を土坑の中央に向けた状態で置かれていたことから埋納されたものと考えられる。

3区 334土坑 (写真図版18-3) 北部中央で検出した。東側が攪乱されるが、平面形は楕円形で、長径 3.0m以上、短径約 2.0m、深さ約 0.3mである。埋土はオリーブ黒色中砂～粗砂混じりシルトで、古墳時代後期の土師器・須恵器がまとまって出土した (図76-57～66)。土器に時期差がなく、出土状況からみて廃棄土坑と考えられる。第6面で検出した3区 409・421土坑付近では、第6面への掘削中に3区 334土坑と同時期の土師器、須恵器が多く出土した。また3区第6面 409土坑から出土した土器と3区 334土坑の土器が接合するものがあるため、409土坑は第6面で検出した遺構であるが、334土坑と一連の第5面の遺構であった可能性が高い。

9区 163土坑 北部中央で検出した。平面形はほぼ円形で、直径約 0.7m、深さ約 0.3mである。埋土は③である。飛鳥時代の土師器小片、須恵器杯身 (図76-80) が出土した。

1区 246土坑 西端で検出した。第6面で検出したが、埋土から第5面の第4-1a層下面の遺構である。平面形はほぼ円形で、直径3m以上、深さ約 0.8mである。古墳時代前期の土師器片が出土した。

3区 382土坑 西部で検出した。第6面で検出したが246土坑と同様、第5面の第4-1a層下面の遺構である。平面形は円形であるが、424流路と重複しているため詳細は不明である。埋土は暗灰黄色中砂で、弥生時代後期から古墳時代前期の土師器片が出土した。

3区 298土坑 (写真図版18-4・5) 南西部で検出した規模の大きい土坑である。平面形は不整形で、南北約 6.4m、東西約 4.8m、深さ約 0.7mである。埋土は下位に青黒色腐食質極細砂質シルト、中位にオリーブ黒色泥質な細砂～中砂混じりシルトのブロック、上位に粗砂～細礫質シルトが染み込むように混じる粗砂混じり極粗砂～細礫である。古墳時代中期の土師器片が出土した (図75-55)。同様の平面形・深さとも大きく複数の埋土が重層する土坑は、ほかに3区 342土坑、9区 196土坑・193土坑・192土坑、1区246土坑 (第6面で検出) がある。

5区で検出した遺構群が第4-1a層下面に帰属し、時期は古墳時代前期から飛鳥時代であることを合わせると、第4-1a層下面に帰属する3区・9区・1区第5面の遺構の時期も、古墳時代前期から飛鳥時代と考えられる。

なお9区では第4-2a層は路線中央セクションより南東部に残存していたのみであるため、下層遺構の一部 (121土坑・134土坑・169土坑・180溝・181流路など) を第5面で掘削している。

2. 9区第5-2面 (図65)

181流路と周辺に残る第4-2b層を掘削し、第5-2面として精査を行った。

9区 181流路 南部で検出した東から南方向の蛇行する流路である。第5-1a層上面の遺構である。途中で輪郭が不明瞭になる。断面形はU字形で、幅 1.0～1.5m、深さ約 0.2～0.4mである。底面の凹凸が激しく部分的に土坑状にくぼむところがある。埋土は細礫～直径7mmの礫を含む中砂～極粗砂まじりの砂礫である。周辺も第5-1a層を浅く削っている。第5-1a層が流路の肩部に垂れ下がる状況や下位の堆積物が全くなかったことから、第5-2b層が堆積する際に削りこんだ流路と考えられる。

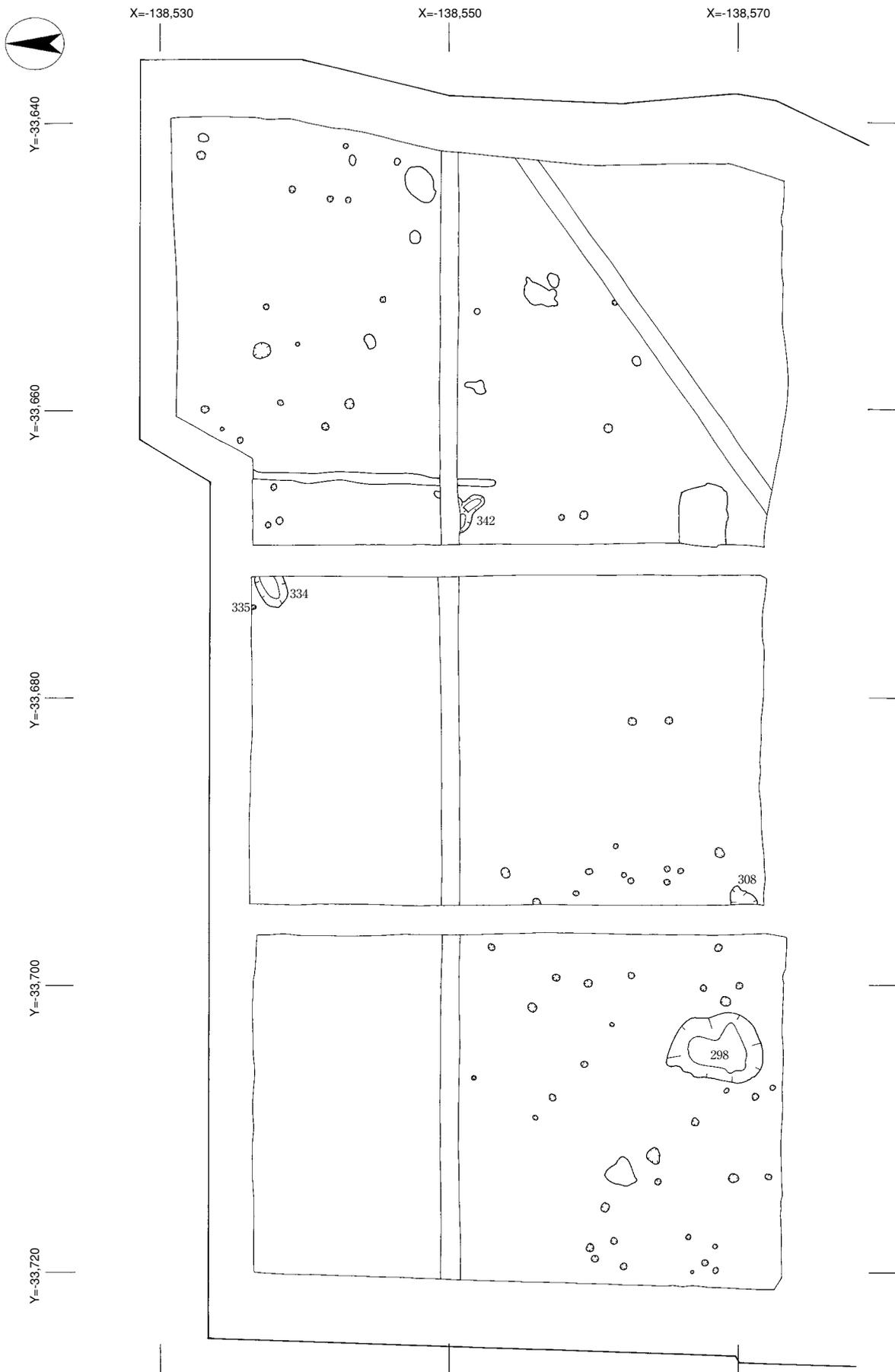


图61 3区第5面平面图



图62 1区·9区第5面平面图

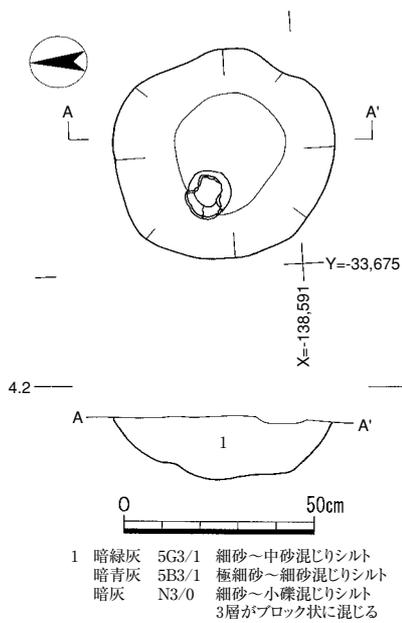
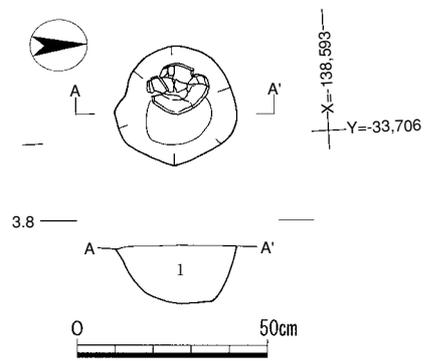


図63 1区第5面188土坑実測図



1 暗オリーブ灰 2.5GY4/1 極細砂～細砂混じりシルト
 第4-1a(13)層

図64 9区第5面128土坑実測図

遺物の出土量はわずかであるが、弥生時代中期の土器片が1点出土している。

3. 9区第5-3面(図65)

第5-2面の調査後、第5-1a層を掘削し、第5-3面として精査を行った。多数の土坑、溝、落込みを検出した。

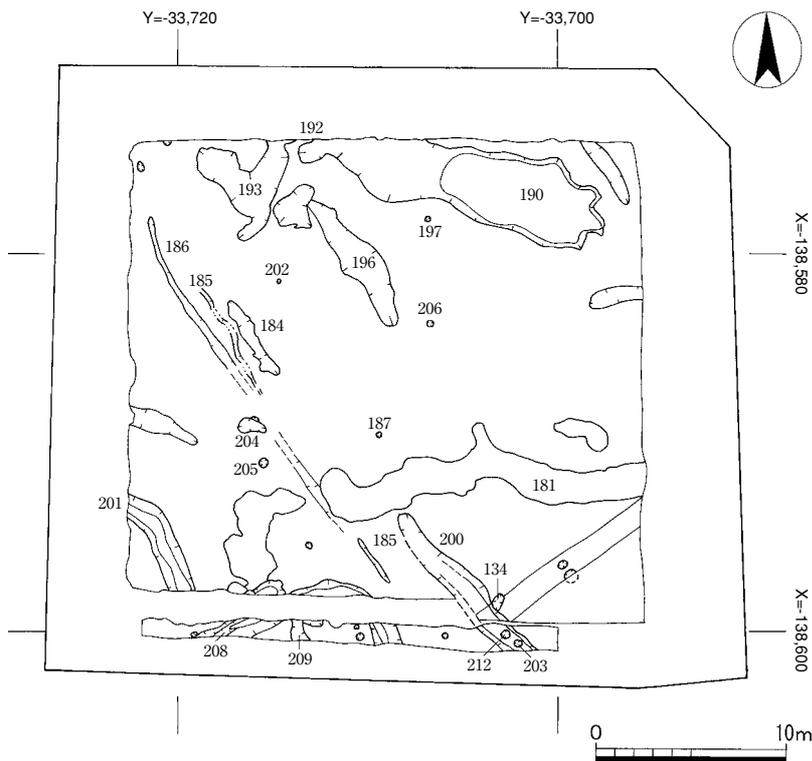


図65 9区第5-2・5-3面平面図

9区 134土坑(写真図版19-5) 南東部で検出した。第5-1a層下面の遺構である。平面形は不整形な円形で、長径0.8m以上、短径0.4m以上、深さ0.3mである。埋土は黒褐色細砂～中砂混じりシルトで炭化物を含む。縄文時代晩期の土器が出土した(図74-12~15)。

9区 184土坑 西部で第5-3層を掘削中に検出した。平面形は細長く長径約4.8m、短径約0.6m、深さ0.2mである。埋土は下部にオリーブ黒色細砂～中砂混じりシルトで上部に砂を多く含む。出土遺物はない。

9区 190落込み・191落込

み・199 落込み 北部第6面で検出した。第4-2a層と第5-1a層との区別ができなかったが、第5-3a層の起伏の凹みに堆積したものと思われるため、第5-1a層に属する遺構であると推定する。いずれも平面形は不整形で、深さ約0.1mである。埋土は極粗砂～細礫が混じる暗青灰色極細砂質シルトである。190 落込みから縄文土器、弥生土器、石器剥片が出土した。

9区 200溝 南部で検出した南東から北西方向の溝である。断面形はU字形で、幅約1.2m、深さ約0.1mである。埋土はオリーブ黒色中砂～粗砂混じりシルトである。南西側肩部は、第5-1a層形成段階に削られている。底面には加工痕とみられる凹凸があるため溝と判断した。出土遺物はない。

9区 201溝 南西部で検出した南東から北東方向の屈曲する溝である。断面形はU字形で、幅約1.4m、深さ約0.2mである。埋土は下部から粗いブロック状の層、暗色で泥質の層、砂礫質なブロック状の層、後二者を削るラミナをもつ砂の層に分かれる。屈曲部分では粗いブロック状の部分が厚く暗色で泥質の層が薄い。溝が掘られた後しばらくその状況が続き、埋められたあと再び溝が掘削された状況を示すものと考えられる。弥生時代中期の土器片が出土した。

9区 208溝 南西部で検出した、東北東から西南西方向の溝である。調査区南側溝と重複したため、形状の詳細は不明であるが、断面形は浅いU字形で、幅約0.4～0.5m、深さ約0.05mである。埋土は中砂～極細砂で180溝と酷似することから、第4-2a層下面の遺構であると考えられる。出土遺物はない。

9区 185溝・186溝 西部で検出した南東から北西方向の同一の溝である。第5-1a層上面の181流路に切られる。断面形はU字形で、幅約0.2m、深さ約0.2mである。底面には直交する方向の楕円径の窪みが2列または交互に並ぶ工具痕がのこる。埋土は灰色極細砂～細砂質シルトで、下部は中砂～粗砂が多い。出土遺物はない。

190 落込み、201溝などの出土遺物の時期と、1区・2区では第5-1a層から弥生時代前期の土器が数点出土していること、第4-2b層からの遺物量は少ないが弥生時代中期の土器が出土していることなどから、第5-1a層の時期は縄文時代晩期から弥生時代中期であると考えられる。

(6) 第6面 (図66、写真図版20)

1区では全面にわたり第5-2b層が第5-3a層を覆っていたことから、第5-3a層上面を第6面として精査を行った。3区・9区でも同一の遺構面での精査を目指したが、3区北東部では第5-3b層が露出しており、また、その周囲や3区中央部南半、3区西部中央、9区中央部から南東部では第5-1a層と接しており、第5-3a層上面を検出することができなかった。なお、3区では第4-1a層から第5-1a層までb層を挟まないため、順次a層下面で遺構検出を行った。全体としては北東から南西方向に緩やかに傾斜する。

1区 247流路 (写真図版20-4) 3区と1区・9区の境目で検出した東から西方向の蛇行する流路である。247流路北岸は南岸より標高が高く、その縁辺を流れている。調査区側溝と重複したため形状の詳細は不明であるが、断面形はU字形で、幅1.5～3.5m、深さ0.7～0.8mである。埋土は細砂～極粗砂が主体で、明瞭なラミナが観察できる。上部ではラミナが不明瞭となり、第5-2b層は淘汰の悪い砂礫となる。247流路の肩には第5-3a層が垂れ込み、その下にもラミナがある砂礫層が存在するため、第5-3a層が形成される初期から流れていたと考えられる。縄文時代晩期の土器片が出土した。

1区 248流路 東部で検出した東から西方向に向けて蛇行する流路である。第5-1a層上面の遺構である。9区181流路と一連の流路で、間が途切れているのは第5-2b層が比較的厚い部分では第

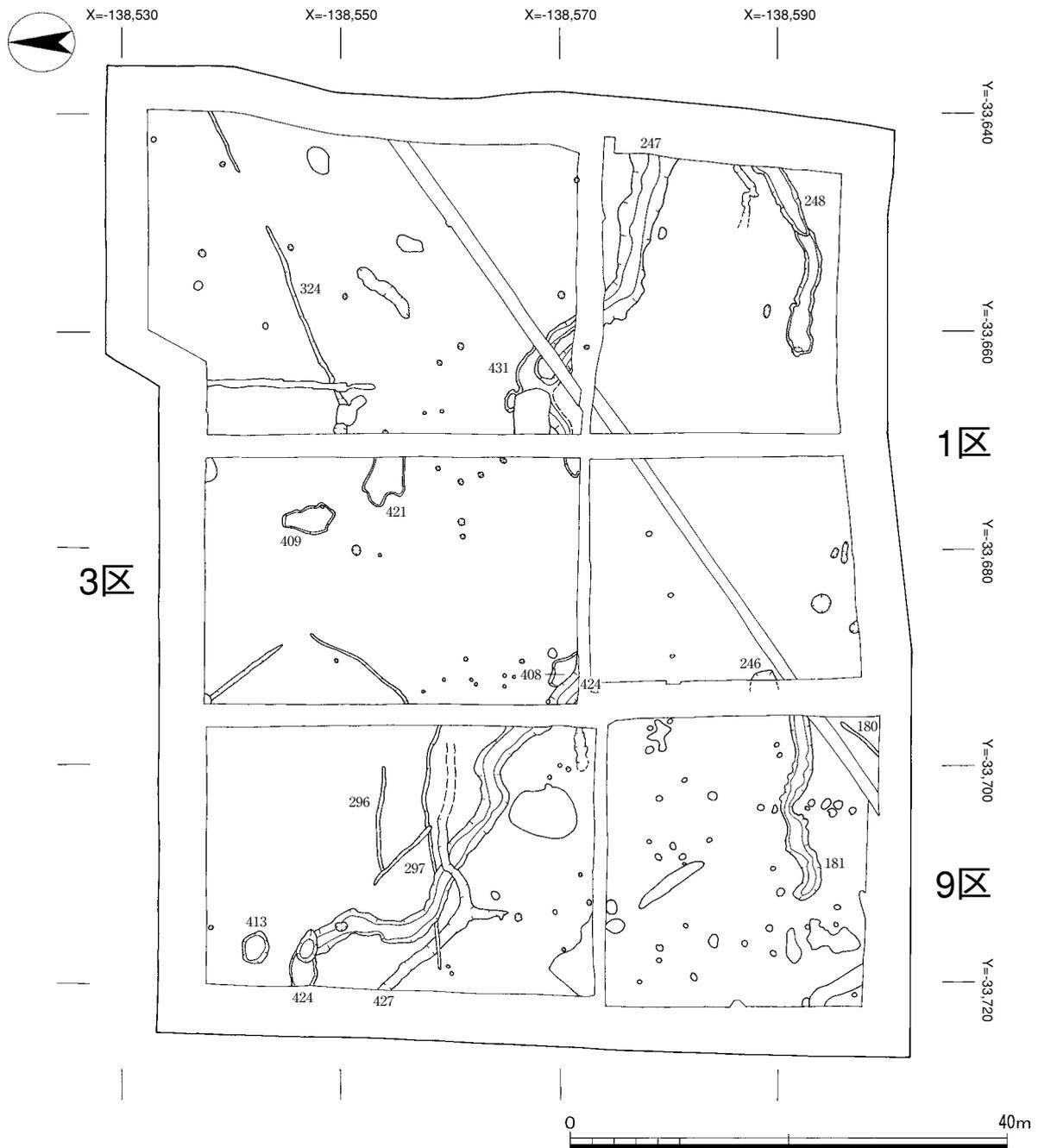


図66 1区・3区・9区第6面平面図

5-3 a層の削り込みが少ないためである。断面形はU字形で、幅約1.8m、深さ0.2~0.4mである。

3区 427溝 3区では小規模な溝を数条検出した。427溝は西部で検出した。断面形はU字形で、幅0.5~1.0m、深さ約0.3~0.4mである。溝の底面には2段の段差がある。埋土の下部2層はシルト混じり細砂~粗砂と、極細砂~細砂質シルト層が非常に粗いブロック状の層を含む。段差の加工部がその状況に対応するので、人工的に掘削され、かつ、掘り直しが行われた可能性が高い。時期不明の土器片が出土した。

3区 408土坑 中央部で検出した。第5-1 a層下面の遺構である。平面形は不整形で、南北約4.8m、東西約3.0m、深さ約0.1mである。底面の凹凸が著しい。埋土は黒褐色細砂混じりの中砂である。縄文

時代晩期末の土器が出土した（図74-16~18）。弥生時代前期の土器を含めこの時期の遺物が出土する範囲は、3区408土坑の周囲から1・9区にかけての範囲に限られる。3区第5-3b層から縄文時代晩期の土器片が出土しているが（図74-28）、出土地点は第5-1a層下面の遺構がある範囲であり、第5-2b層が存在せず第5-1a層と第5-3a層が接していたため、第5-1a層の土器が混入した可能性が高い。

3区413土坑 北西部で検出した。平面形はほぼ円形で、直径約0.6m、深さ約0.2mである。埋土は黒褐色腐植質シルトでほかの同一層準の土坑埋土とは異質である。根株痕の可能性はある。出土遺物はない。

(7) 第7面（写真図版21）

第5-3a・b層を掘削し、検出した第5-4a層上面を第7面として精査を行った。3区・1区・9区全体にわたる最終遺構検出面である。第5-4b層の起因する高まりが3区と1区に分かれて存在するが、顕著な遺構はない。3区では高まりは、東部から中央部にかけてはX=-133,550~X=-133,560の間が高く、西部では北西方向に向きを変えて広がる。また、1区西部では高まりが2つに分かれ第6面247流路の南側に沿うものと9区の南東部に向かうものがある。

第5-3層・5-4a層からは土器の細片がわずかに出土したのみで時期を特定できなかったが、層位的状況から縄文時代晩期から後期に属すると考えられる。

(8) 第8面（図67、写真図版21）

3区・1区・9区の一部で第5-4a・b層を掘削し、検出した第6a層上面を第8面として精査を行った。範囲は3区では道路計画路線中央に設置した北東から南西方向のセクション沿い幅2mの部分、1区では路線中央セクションを中心とする幅20mの部分、9区では路線中央セクション北側の幅10mの

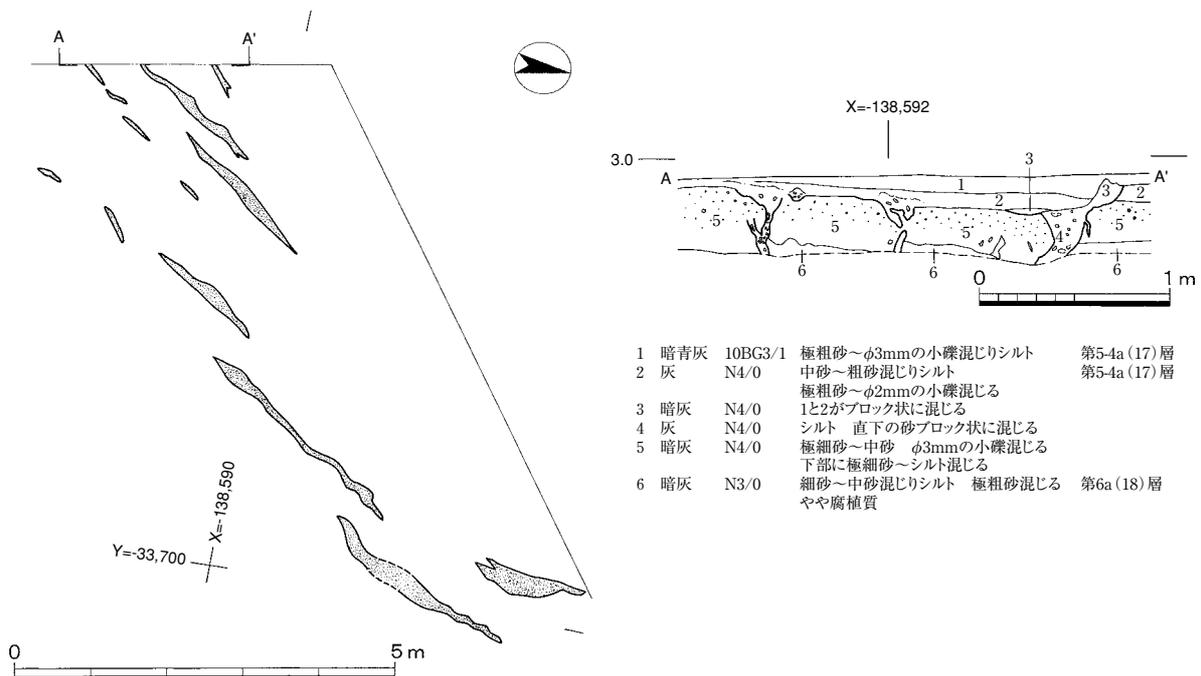


図67 9区地震痕跡実測図

部分である。

地震痕跡（図67、写真図版22-2・3） 9区で第6 a層上面に中砂が落ち込む長短の亀裂を数条検出した。いずれも北東から南西方向に伸び、亀裂の南東側はやや高く、北西側に低くなりかける部分に集中している。断面の観察では亀裂は下端が第7-1 a層まで達しているものがあり、上端は第5-4 a層の黒色化が弱い下部の上面で止まり、第5-4 a層の上面までは達していないことがわかった。第5-4 a層の形成途中で起こった地震の痕跡と考えられる。

流路 1区の北端で検出した東から西方向の蛇行する流路である。1区北壁崩落の危険があったため掘削していない。形状の詳細は不明であるが、3区南側から1区北部を流れ、1区北西端へ向かう。

下層確認 第6 a層から下層の確認を4地点で行った。3区では①地点 $X = -138,540$ $Y = -33,650$ 、1区では②地点 $X = -138,580$ $Y = -33,675$ 、9区では③地点 $X = -139,595$ $Y = -33,700$ と④地点 $X = -138,582$ $Y = -33,717$ の地点である。第8 a層中にb層が2層存在し、さらにa層を確認したため第8-1~4 a層に分け、④地点で第6 a層上部、第7 a層上部、第8-1 a層の土壌の年代測定を行った。

第6 a層の上部は暗色が強いやや腐植質な砂礫が若干混じるシルト層、下部は上部に比べ暗色が弱く砂礫混じりシルトである。①地点では上部と下部の間に砂礫が流路状に入る砂礫層が存在する。下部の③地点では上部はBP 3,620±40年の測定値が出ている。縄文時代後期の年代である。第6 b層は上方に細粒化する礫混じりの砂層で、第8面が高まりがある②・③地点ではその上部に上方に粗粒化する細礫~中礫混じりの砂層が入る。④地点では存在しない。第7 a (19)層は第6 a層上部より暗色が弱い砂礫が混じるシルト層である。BP 3,920±40年の測定値が出ている。下部は暗色が弱い砂礫混じりシルト層である。第7 b (19)層は礫混じりの砂層で、②地点ではラミナをもつ。下部は②地点ではシルト、①・③地点では植物遺体がラミナ状に入る極細砂質シルトである。④地点ではT.P. 0.8mから下はやや暗色の極粗砂が混じる粗砂層が0.1m以上続く。第8 b層の可能性ある。第7 a (20)層は確認していない。第7 a (20)層は礫が混じる砂混じりシルト層である。③地点ではシルト層である。①・②地点では第7 b (20)層はシルト~細砂、②地点では砂礫のラミナが明瞭な流路が存在する。③地点では植物遺体のラミナが混じるシルト層で上層の下部を含め乱れた状態で、変形していると思われる。①・②地点では第8 a層は上位が腐植質砂混じりシルト、下位には砂礫が多く混じる。③地点では砂層を挟み、第8-1、第8-2、第8-3層に分かれる。2区との対比から第8-1 a層は縄文時代前期から中期である。第8 bは締まりが強いシルト混じりの砂層である。③地点では上部は植物の根痕が著しい。T.P.約-2.8mで黒色層と、炭化していない植物遺体を含む泥炭層が存在する。

9. 2区の遺構（図68~73）

2区は南北約30m、東西約45mの三角形の調査区である。ただし、西部を中心に著しい湧水があったため西端部分は十分な調査・観察ができなかった。

(1) 第1面

第1面より上位の層は1・3・9区の層とおおむね対応する。旧耕作土の直下の第1 a (1-1)層はなく、旧耕作土の下部には第1 (1-2)層がブロック状に入る。1・3・9区の層と比べて、南壁断面では旧耕作土から第1 a (1-1~3)層は薄く、第1 a (1-4)層は厚い。第1 a (1-7)層に相当する層は確認できなかった。

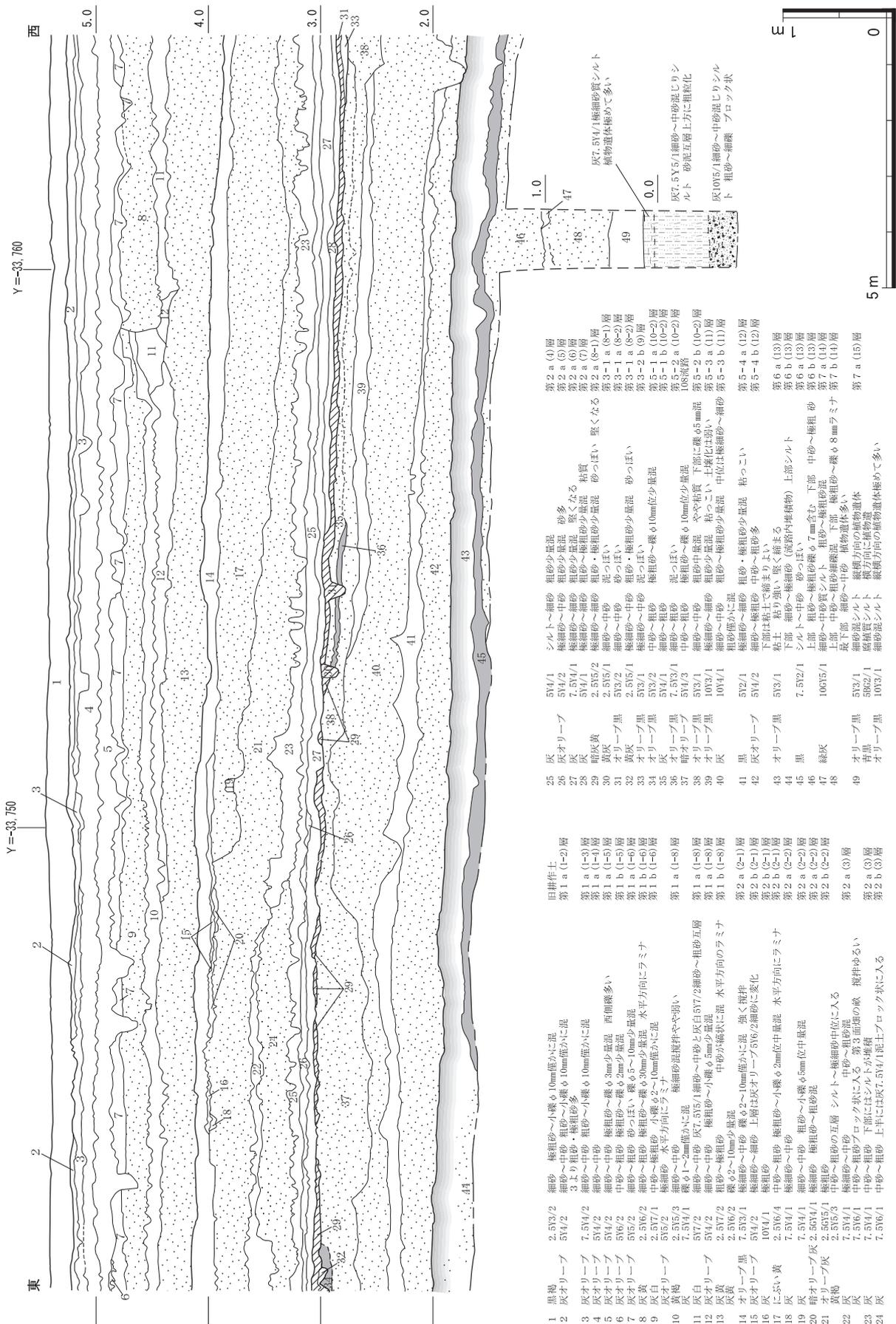


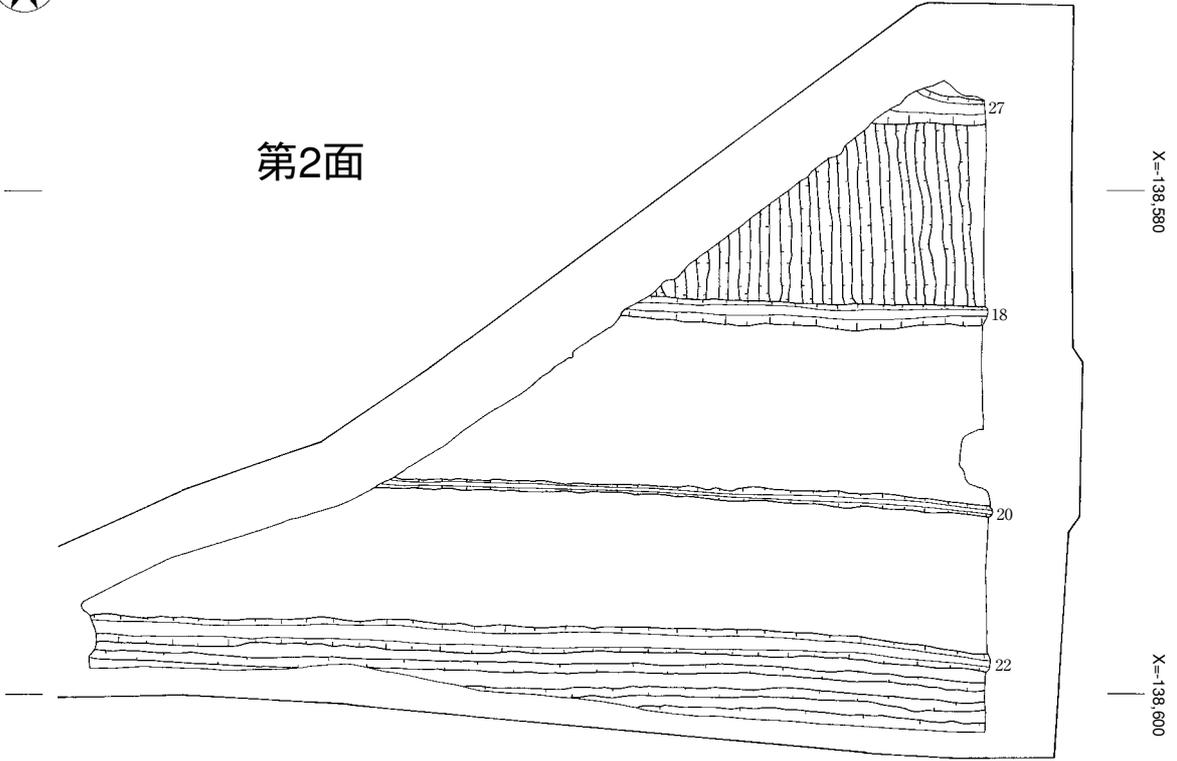
図68 2区南壁断面図



Y=-33,760

Y=-33,740

第2面



第3面

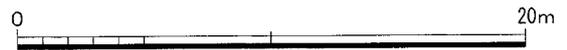
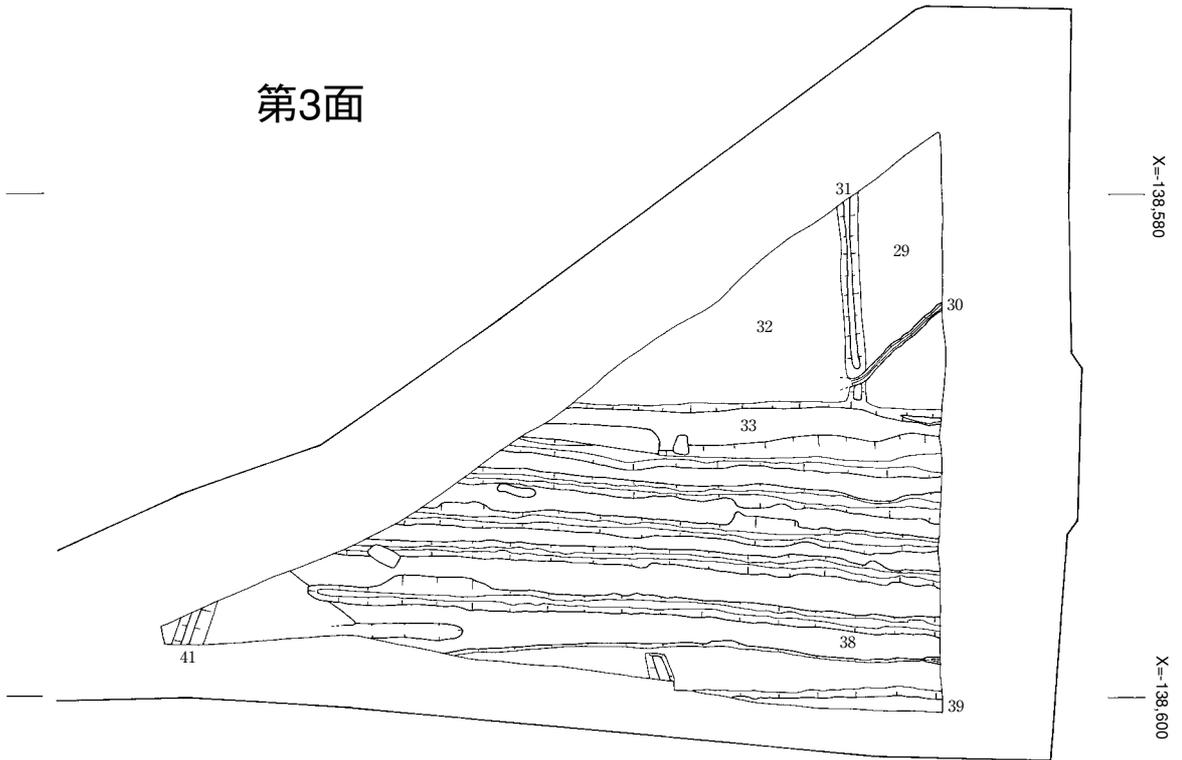


图69 2区第2面、第3面平面图

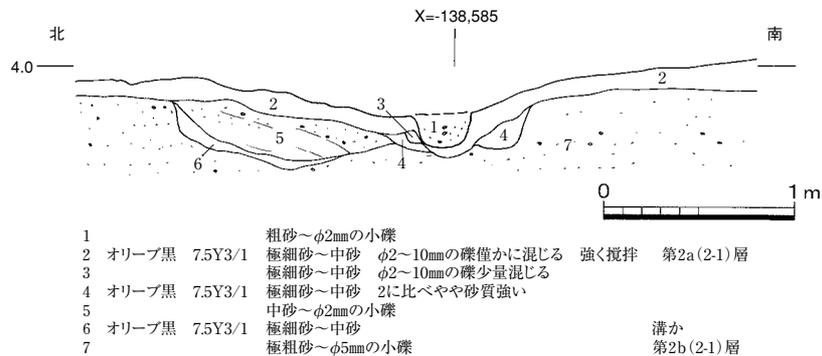


図70 2区第2面18溝断面図

第1b(1-8)層は最下部にシルト～細砂が互層となる薄層で構成され、その上位は全体として上方に粗粒化する礫混じりの砂層である。重機により第1b(1-8)層の上部までを掘削した後、人力で掘削し第1a(2)層上面を検出した。

第1面(第1a(1-8)層上面)は1・3・9区の第1面と対応する遺構面である。1・3・9区と同様に面としての調査は行わなかった。1・3・9区では調査区のほぼ全体に耕作地の畝が広がっていたと想定している。2区では畝状の高まりは見られなかったが、 $Y = -33,738$ と $Y = -33,758.5$ 付近には畦状の高まりがある。

(2) 第2面(図69・70、写真図版23)

耕作地(写真図版23-1～3) 東西方向に長い区画の畑を4列検出した。18溝・20溝・22溝により区画される。東西方向の長さは両端ともに調査区の外へ続いたため不明である。南北方向の長さは溝の芯芯距離で北から約8.2m、約7.4m、約5.7mで、南端の畑は調査区外へ広がる。南北方向の断面形は低い半円形である。北端の畑は南北方向、南端の畑は東西方向の畝をもつ。前者の畝間溝の芯芯距離は幅約3.4m、後者のそれは幅約3.6mである。畝は非常に低く、高さは約0.07mである。一方、中央部2列の畑には畝が作られていない。畑を区画する溝は断面形はU字形で、幅0.5～0.7m、深さ0.2～0.3mである。

18溝(図70、写真図版23-4) 畑を区画する東西方向の溝である。断面形はU字形で、幅約1.0m、深さ約0.4mである。埋土は細砂～中礫で、出土遺物はない。第2面より下のオリブ黒色極細砂～中砂層の上にも砂が堆積しており、少なくとも1回の掘り直しが行われていたことがわかる。この部分も溝であったと考えられる。

南壁断面の $Y = -33,749.5$ 付近で確認した第2b(2-1)層のにおい黄色中砂～粗砂層と、第2b(2-2)層のオリブ灰色シルト層の間には高低差が約0.2mあり、耕作地の区画となる段差があったと推定できる。調査区東壁の北端でもこの第2b(2-2)層を覆う層に相当する砂礫層が存在する。これらのことから第2面の畑の区画の下には $Y = -33,749.5$ の付近に区画をもつ耕作地があり、低い部分を中心に砂礫で埋まったあと、第2面の畑の区画が形成されたものと考えられる。

(3) 第3面(図69・71、写真図版24)

第2a(2)層を掘削後、下面に数条の耕作溝が見つかったが、確認のみとし第2b(2)層を掘削し、第3面を検出した。

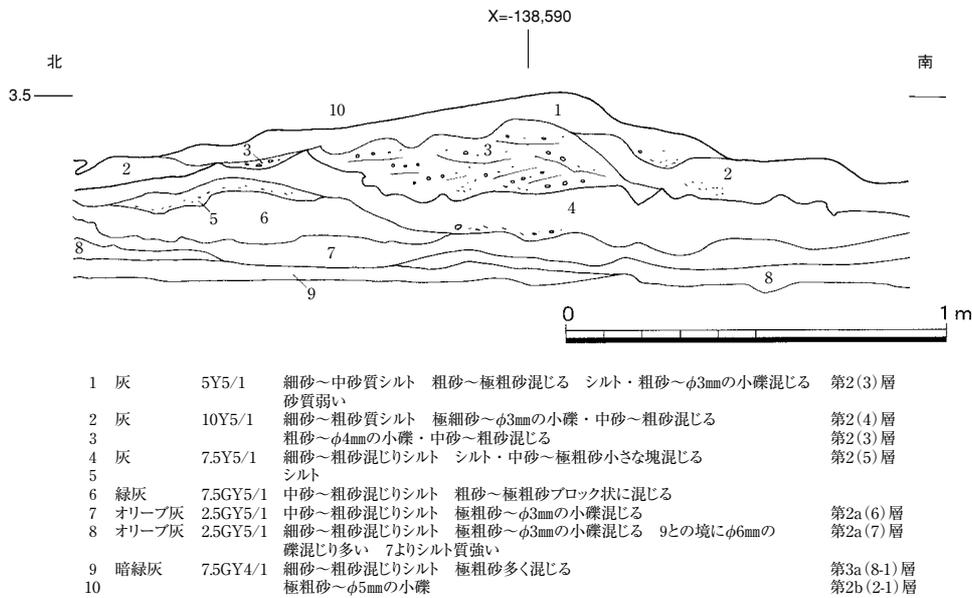


図71 2区第3面33畦断面図

耕作地（写真図版24-3） 南部で検出した。北端は33畦、南端は39畦に区画され、東側は調査区外に広がる。西側は第2b(2)層に上面が削られている。なお、41畦は第2面の下の耕作地に関わる畦であるが、南壁と北壁の断面から復元しているため第3面の耕作地との直接的関係は不明である。東西方向の畝をもち、畝間溝の芯芯距離は1.5～2.5mで、畝は非常に低く、高さ0.05～0.1mである。畝や畝間溝はいずれも非常に凹凸が激しく、耕作土は非常に粗いブロックを多く混入する。38畝と39畦の間には約2.6mの幅がある。この部分には周囲より粗粒のラミナがある砂礫が堆積し耕作土のブロックを含む。畝が存在したかどうかは不明であるが、上面が削られているものと考えられる。39畦は上面の幅0.55mを確認したのみで、南側は調査区の外へ続くが、平面調査のあと小段を掘削した南壁断面から、33畦と同様に段差を持ち、下部には砂礫の芯があることが判明した。33畦も含め、島島として利用されていた可能性もある。

水田 北部で検出した方形区画の水田である。南端は東西方向の33畦に区画され、南北方向の31畦が取り付く。29区画には30溝が作られる。29・32区画は踏み込みが顕著に見られた。踏み込みの中にはヒトの足跡に砂礫がラミナを残しながら落ち込むような様相で、荷重痕と考えられるものが一面に広がっていた。

33畦（図71、写真図版24-2） 中央部で検出した東西方向の畦である。比較的規模が大きく、断面形は台形で幅は下場で約2.6m、上場で約1.4m、高さ約0.5mである。Y=-33,750付近で西側が低い段差があり、幅が狭くなる。北側の上面は第2b(2)層に削られている部分があるが、第2b(3)層を芯としてその上に盛土されている状況が分かる。

31畦（写真図版24-4・5） 北部で検出した水田を区画する南北方向の畦である。断面形は低い位置にある耕作面の側面が急斜面で、上面は頂部を西に寄せ、東側面は勾配が緩い。3・1・9区の第2面の畦と同様の形状をしている。幅約0.8m、高さ約0.15mである。33畦に取り付く南端近くで途切れている部分があり、水口と考えられる。

30溝 北東部で検出した31畦の水口に取り付く北東から南西方向の溝である。幅約 0.2m、深さ約0.05 mである。底面の凹凸が顕著なので人為的に掘られたものと考えられる。29区画の中央に向かって伸びていることからたまった水を排水する機能があったと想定できる。

時期を示す遺物は出土していないが、第3面は3・1・9区の第3面と対応すると考えられるため、江戸時代前期の耕作地である。

(4) 第4面

33畦から南に第2 b (3) 層を認めたので、これを除去した面を第4面として精査した。全体的状況は第3面に近似する。第3面33畦の下層では幅約 1.0m、高さ約0.25mの畦を同じ位置で認め、その南側では6条の東西方向の畝を検出した。39畦下層では畦を認めていない。畝の上部は第2 a (3) 層により削られており遺構の残存状況が悪いため、第2 a (4) 層上面が検出できた部分は畝間溝の下部に限られるが、多くは第2 a (3) 層下面の溝で削られている。また、Y = -33,750付近を境として、畝は完全に削平され検出できなかった。第3面33畦・39畦もこの付近から西に低くなることから、第2 b (3) 層は南東部に厚く堆積し、西部および33畦より北側には堆積が少なかったことが推定される。

(5) 第5面 (図72、写真図版25)

第2 a (5) ~ 3-1 a (8-1) 層はいずれも擾乱を受け耕作土と考えられる。全体的に上方に細粒化する傾向があり、第2 a (5・6) 層には極粗砂~細礫がほとんど含まれず、第2 a (7) 層と第

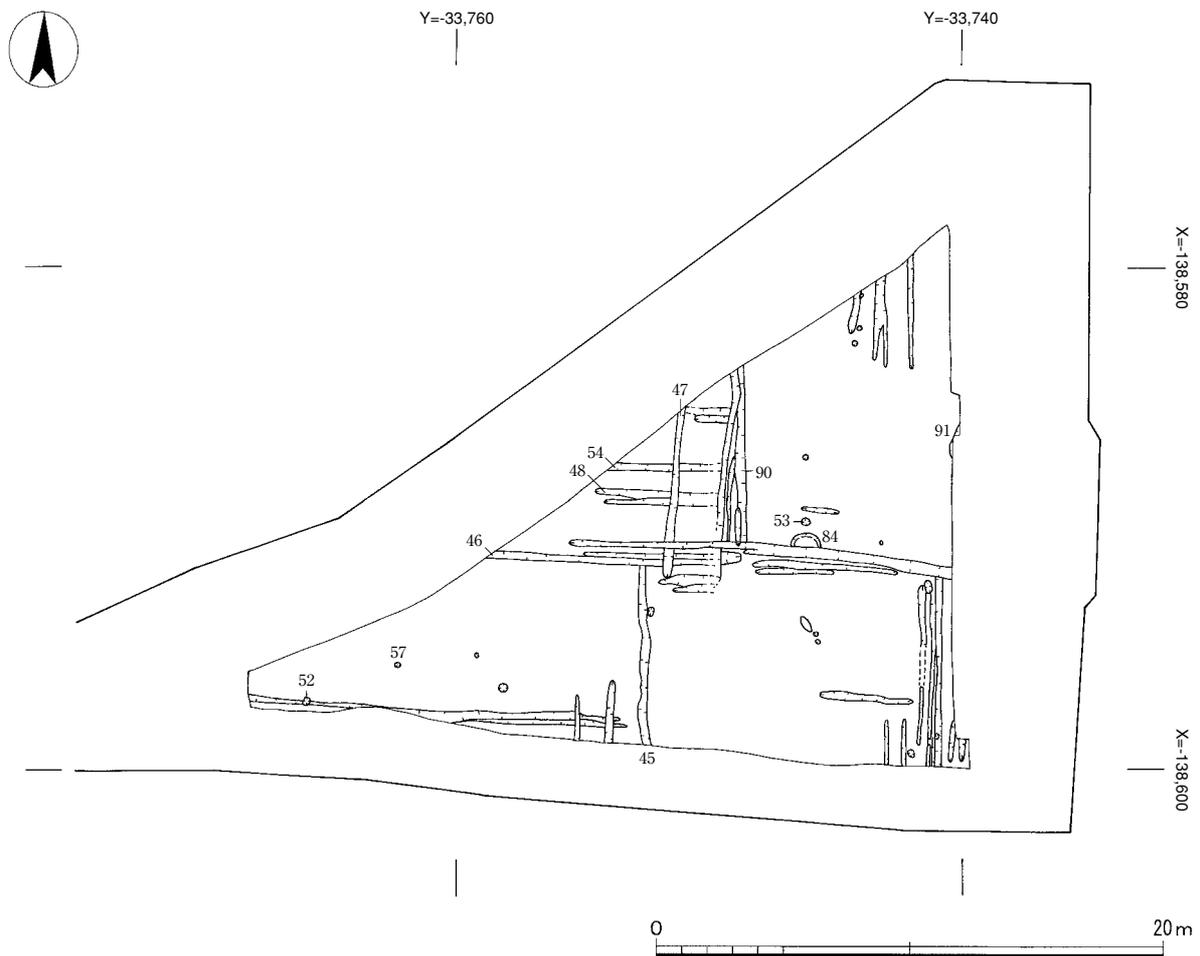


図72 2区第5面平面図

3-1 a (8-1) 層との境には細礫～中礫を若干含む。第3-2 a・3 a (9) 層は第2 a (8-2) 層と比較して暗色が強く泥質で土器の細片を多く含む。第2 a (4) 層から第3-1 a (8-1) 層まで一括して掘削した。第3-1 a (8-2) 層直下の層は東部で第5-1 b層、中央部で第5-1 a層、北西部は第4-2層、Y=-33,763より西側では第3-2 a・3 a (9) 層となっていた。第5面は第3-1 a (8-2) 層下面検出後、第3-2 a・3 a (9) 層が一部にしか残っていなかったため、第3-1 a (8-2) 層下面および、より上位の遺構を掘削する前に、第3-2 a・3 a (9) 層を掘削して精査を行った。第3-2 a・3 a (9) 層が残存する部分の第5面はT.P.3.75mでほぼ水平である。

耕作溝 調査区全体に疎らに分布する。第3-1 a (8-2) 層下面の遺構である。東西または南北方向に並ぶ。幅0.4～0.7m、深さ0.05～0.1mである。90溝より西側の東西方向の溝は東へ続かず、また、東側がわずかに高いことから、この部分に耕作地の区画が存在したと推定できる。

84土坑 中央部で検出した。平面形は楕円形で、東西約1.2m、南北約0.7m、深さ約0.3mである。埋土は第3-1 a (8-2) 層と中砂～細礫がブロック状に混じっており、砂礫のラミナが土坑の底面や側面に沿って観察できる。出土遺物はない。東端部で検出した91土坑も同様である。

小土坑 調査区全体に疎らに分布する。直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mである。第4-1 a (9) 層は耕作によって削られ残存していないが、3・1・9区の層準から第4-1 a層下面に属する小土坑が8基ある。いずれも単一の埋土で埋められており、下層のブロックを多く含まない。第4-2 a層は中央部から北西部に、第4-2 b層はY=-33,750より西の北部に残存していたが層厚が薄く分布が限られており、第5-1 a・2 a層と分けて掘削することが難しいため、一括して掘削した。第5-1・2 a層は3・1・9区と同様に分けることができなかった。第4-2 a層は第5-1 a層に比べて泥質で砂礫を多く含まないが、土坑の埋土を区別することはできなかった。南東部でこれらの埋土の小土坑を4基検出した。

第3-2・3 a (9) 層は土師器片を包含していたが、時期を明確に示す遺物の出土はない。3・1・9区の層準から、第5面の時期は平安時代後期以降である。

(6) 第6面 (図73、写真図版25)

第6面は緩やかに北西方向に標高が下がる。東部は第5-2 b層の堆積段階で削られている部分が多く、北東部は第5-3 a層が全く存在していない。

106 流路 東部で検出した、南から北方向の蛇行する流路である。南側では輪郭が不明瞭となる。断面形は浅いU字形で、幅0.8～1.5m、深さ約0.1mである。埋土は粗砂～細礫である。出土遺物はない。

107 流路 (写真図版25-3) 調査区中央部で検出した、南から北方向の蛇行する流路である。断面形はU字形で、幅約1.0m、深さ約0.15mである。埋土は粗砂～細礫で中礫をわずかに含む。出土遺物はない。107流路の底面には第5-3 a層が存在し、その下面には107流路の影響が認められないため、107流路は第5-2 b層の堆積時のものであると推定できる。

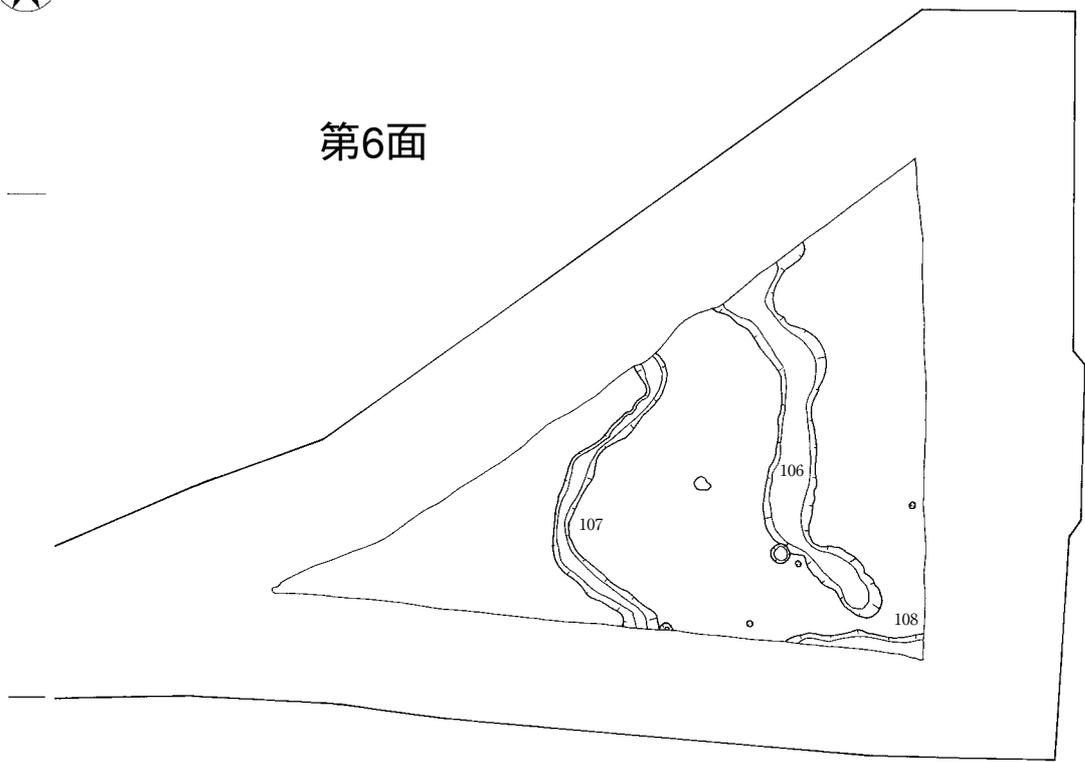
108 流路 南部で検出した東から西方向の蛇行する流路である。調査区南側溝と重複したため形状の詳細は不明であるが、106流路・107流路と比較してやや深い。埋土は粗砂～細礫で中礫をわずかに含む。出土遺物はない。層位的関係は明らかではないが、106流路・107流路と方向が異なる。106流路・107流路よりやや古く第5-2 b層堆積前に形成されていた可能性がある。



Y=-33,760

Y=-33,740

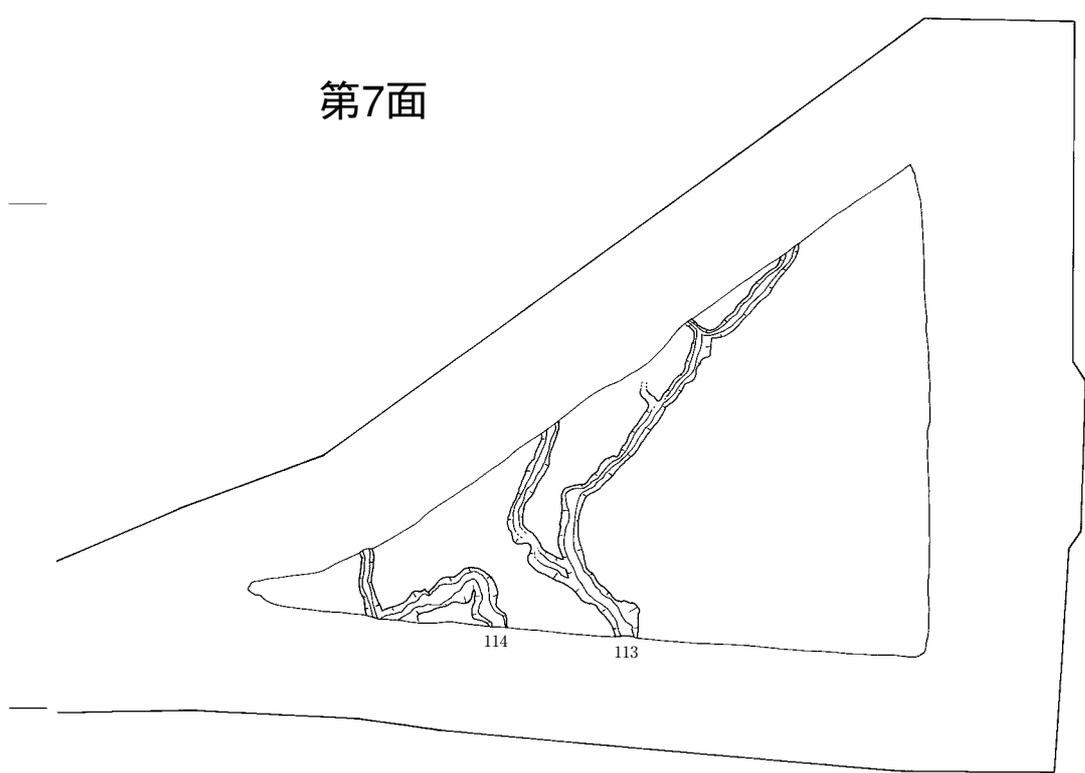
第6面



X=-138,580

X=-138,600

第7面



X=-138,580

X=-138,600



图73 2区第6面、第7面平面图

(7) 第7面 (図73、写真図版25)

第5-3b層は上方に細粒化する氾濫堆積物である。第5-3a層と一括して掘削し、第7面を検出した。東部のX=-138,590付近が最も高く、T.P.2.6mで、北西方向に緩やかに傾斜する。

113流路 中央部で検出した南北方向の流路である。調査区内で分岐する。断面形は浅いU字形で幅約1.6m、深さ約0.1mである。埋土は灰オリーブ色中砂～粗砂である。出土遺物はない。水が流れる際に浅く第5-4a層を削り込んだものである。

114流路 西部で検出した南から北方向の強く蛇行する流路である。断面形はU字形で、幅約0.5m、深さ約0.3mである。埋土は灰オリーブ色中砂～粗砂である。出土遺物はない。

第5-4b層は最下部の極細砂質シルト、上方に細粒化する極粗砂～細礫混じり細砂～粗砂で、全体としては淘汰がよくないが、第5-4b層が厚く第7面の標高が高い部分の下部にはラミナがある。

なお、第7面より下層は以下の状況である。

第6a層の下部は暗色が濃い砂礫混じりのシルトで、調査区南東隅でその上面に属する流路を認めた。流路の下部は確認できていない。

なお第6a層より下層はX=-138,593 Y=-33,760の地点で下層確認のための掘削を行った。第6b層は中砂～極粗砂で上部には細礫～径7mmの礫が混じり、全体として上方に粗粒化する。

第7a(14)層は第7b(14)層がやや暗色となっているような状況であり、厚さが薄く層界が明瞭ではないが、下層確認トレンチ全域に存在しており、ほかの部分では比較的暗色が濃く層厚もある。第7b(14)層の最下部は厚さ約0.07mのやや暗色を呈する細砂混じりシルト、その上位は細砂～中砂とともに縦・横方向に残存する植物遺体が多い。上部はラミナがある極粗砂～径8mmの礫を多く含み、上方に細粒化し細礫を含む中砂～粗砂になる。第7a(15)層は暗色が強い腐植質シルトで下部は極細砂が混じる。第7b(15)層はやや暗色のシルトで緑灰色の部分で帯状、斑文状に含む。黒色の有機物が斑点状に多く混じる。

第8-1a層は、暗色が強い極細砂質シルトで植物遺体を非常に多く含む。第8-1b層はT.P.-0.5mより下部は砂泥が粗いブロック状を呈し、顕著に生物擾乱を受けている。その上部は砂泥の互層で上方に細粒化する。植物遺体も上方に向けて多くなる。注水植物の地下茎がよく残存していた。この状況から第8-1b層は干潟の堆積物と考えられる。最上部のT.P.0～0.1mにおける年代測定の数値はB.P.4,380±40年である。以上のことから、縄文時代中期中葉まで干潟が続きその後、第7b(15)層の最下部まで後背湿地であったと考えられる。

(8) 2区西側

本体工事の進捗に伴い実施した追加調査である。2区南辺の西延長上、讃良川堤防北側で行った。調査は東から順に、A区・B区・C区の小調査区を設定して行った。各区とも堤防と民地に挟まれた狭小な調査区であり、かつ、2区の調査で遺構面深度が深いことがわかっていた。そのため壁面の崩壊および作業上の安全を考慮して、各遺構面直上まで機械掘削を行い、時間の短縮と安全面を確保することにした。それぞれ2区第6面に対応する遺構面直上まで機械掘削を行った後、遺構の精査を目指したが、湧水が著しかったため、土層断面観察を中心とする調査を行うこととした。

A区からC区で江戸時代前期から縄文時代の土層を確認した。基本的な層序は2区と同じである。江戸時代後半の耕作土層・洪水砂層の下に、大きく分けて順に江戸時代前期の耕作土層、江戸時代前期の洪水砂層、平安時代から室町時代の耕作土層、縄文時代から古墳時代の包含層が堆積している。江戸時

代前期の耕作土層はA区からC区にかけてほぼ水平に広がるが、洪水砂層より下の土層は西に向けて傾斜している。縄文時代から古墳時代の包含層はA区とC区ではC区のほうが約0.6m低い。遺構は江戸時代前期の耕作土層で畑の畝、縄文時代から古墳時代の遺構面で土坑とみられる落込みを認めた。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土したのみである。

註

- 1) (財)大阪府文化財調査研究センター 2001年 『長尾代地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター 調査報告書 第61集
- 2) (財)大阪府文化財センター 2002年 『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第77集
(財)大阪府文化財センター 2003年 『門真西地区、讚良郡条里遺跡西地区、讚良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第93集
(財)大阪府文化財センター 2003年 『讚良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第101集
- 3) 層序の確認にあたっては、近隣の調査担当者の御教示・助力を得た。
- 4) (財)大阪府文化財センター 2002年 『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター 調査報告書 第77集
- 5) 鬼界アカホヤ火山層の確認にあたっては、井上智博氏の御教示・助力を得た。

第4章 遺物

1. 遺物の概要

調査では1区から10区を併せて整理用コンテナに61箱の遺物が出土した。出土遺物には土器・瓦類・埴輪・土製品・石製品・金属製品・木製品などの種類がある。出土遺物の大部分は土器が占め、その他の種類の遺物は少ない。

調査では、遺物包含層・遺構を掘り進めながら遺物を採集したが、新しい時代の遺物包含層・遺構埋土に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。これは頻繁に耕作による攪拌が繰り返されたことと、たびたび起こった洪水により高位にある遺跡の遺物が調査地へ流入・散布したことが主な原因と推定している。

以下では、各時代の遺物の概要を述べるが、混入した遺物も調査地周辺の歴史的状況を明らかにする重要な資料と考えることから、これらの主要なものも合わせて掲載する。なお、個々の遺物の詳細については巻末の遺物観察表（表8～13）にまとめてあるので参照して頂きたい。

2. 土器

土器には縄文土器・弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・施釉陶器・磁器などがある。ここでは、第8層から第1層に分けて、時代の古いものから順に遺物包含層・遺構埋土から出土した土器を掲載したのち、混入したことが確実な土器を紹介する。なお、遺物包含層については各調査時での層名を用いている（表1参照）。

(1) 第8層

7区10a層・9b層（図74・図版26 1～3） いずれも鉢体部の小破片である。2は排土に混入していたものであるが、採集日の作業内容からこれらの遺物包含層から出土したと判断できる。刻目突帯などの特徴から北白川下層Ⅲ式から大歳山式に分類できる。縄文時代前期後半から末に属する¹⁾。

(2) 第7層

7区第5面29土坑（図74・図版26 4・5） 焚火跡である29土坑の周辺に散布していた鉢体部である。4と同一個体の破片がほかにも出土している。縄文の特徴などから縄文時代中期に属すると推定できる。なお、29土坑にともなう木炭の年代測定ではB.P.4250±40年という数値が得られた。

8区9b層（図74 6） 鉢体部の小破片である。縄文の特徴などから縄文時代中期に属すると推定できる。

5区19層（図74 7・8） とともに鉢体部である。8の縄文の特徴などから縄文時代中期に属すると推定できる。

(3) 第6層

該当する時代の遺構・遺物包含層から出土した土器に図示できるものはない。

(4) 第5層

5区第6面488流路（図74 9） 鉢口縁部である。形式的に顕著な特徴はないが、縄文時代晩期に属すると推定できる。

4区第6面126流路(図74 10) 深鉢体部の小破片である。口縁部の形態や外面のケズリから滋賀里Ⅲb式以降と推定できる。縄文時代晩期中葉から後葉に属する。

9区第5-1面134土坑(図74・図版26 11~15) 12~15は深鉢口縁部、11は体部である。9区5-1面は第4-1a層に相当するが、埋土からこの土坑は第5層に対応すると判断した。また、11は遺物包含層からの出土であるが、出土位置からこの土坑にともなうと判断した。11・15はやや古い特徴を示すが、12~14は口縁端部の突帯の形態などから船橋式から長原式に分類できる。縄文時代晩期末に属する。

3区第6面408土坑(図74・図版26 16~18) 16は深鉢口縁部、17・18は体部である。18はやや古い特徴を示すが、16・17は突帯の形態などから船橋式から長原式に分類できる。縄文時代晩期末に属する。

3区16b層(図74 19) 深鉢口縁部である。長原式に分類できる。縄文時代晩期末に属する。

9区15-3層(図74 20~22) 20・21は深鉢口縁部、22は壺もしくは深鉢体部である。長原式に分類できる。縄文時代晩期末に属する。

2区10層(図74・図版26 23~27) 23・24は壺口縁部、25・26は甕口縁部、27はおそらく壺底部である。いずれも磨滅による損傷を受けているため調整技法の詳細が不明であるが、形態の特徴などから弥生時代前期に属すると推定できる。

3区16b層(図74・図版26 28) 甕口縁部である。口縁部と体部の境目に明瞭な沈線が巡る。弥生時代前期に属する。

1区15-3層(図74 29) 甕体部である。磨滅による損傷を受けているため調整技法の詳細が不明であるが、弥生時代前期に属すると推定できる。

9区15-3b層(図74 30・31) 30は壺体部、31は底部である。30は小破片ながら外面の櫛描文が明瞭に認められる。弥生時代中期に属する。31は小さい底径などから弥生時代後期から古墳時代前期に属すると推定できる。

5区第4面450流路(図74 32) 大型壺底部である。450流路の肩部より出土した。弥生時代中期に属すると推定できる。

9区15-3b層(図74 33) 壺口縁部である。弥生時代後期に属する。

3区第6面382土坑(図74 34) 甕口縁部である。弥生時代後期に属すると推定できるが、体部内面の調整がケズリであれば古墳時代前期に属する。

(5) 第4層

5区第4面440井戸(図75・図版27 35~46) 今回の調査で最も良好な一括資料が得られた遺構からの出土土器である。器種は土師器のみで須恵器は含まない。二重口縁壺(35)・小型丸底壺(36)・甕(37~42)・高杯(43~45)のほかに製塩土器(46)がある²⁾。38・43のようにやや古い特徴を示すものを含むが、時期的なまとまりは良好である。古墳時代中期に属する。

5区12層・13層(図75 47~49) 5区第3面の柱穴群西部に拡がる土器片を多く含む整地土層から出土した。小破片が多い。器種は土師器(47・48)と須恵器(49)がある。土師器には壺・甕(48)・杯(47)・高杯など、須恵器には杯蓋・杯身(49)などがある。特に土師器の高杯柱状部を13個体以上認めており、高杯の占める割合が多かったと考えられる。古墳時代中期から後期に属する。

5区415土坑(図75・図版27 50~53) 上記の5区13層下面で検出した、土坑からの出土土器であ

る。器種は土師器のみで須恵器を含まない。甕（52・53）・高杯（50・51）などがある。古墳時代中期に属するが、甕体部内面の調整技法がケズリであることなどに5区 440井戸出土土器よりも古い特徴を示す。

1区第5面 188土坑（図75・図版28 54） 1点のみ完形で出土した土師器の小型丸底壺である。古墳時代中期に属する。

3区第5面 298土坑（図75 55） 土師器の甕口縁部である。体部の破片も出土したが、接合することができなかった。古墳時代中期に属する。

9区第5—1面 128土坑（図75・図版28 56） 1点のみほぼ完形で出土した土師器の大型杯である。古墳時代中期から後期に属する。

3区第5面 334土坑（図76・図版28 57～66） 小破片が多い。土坑を覆う遺物包含層から出土した破片と接合できる個体が多く、それらをまとめて掲載した。器種は土師器（57・58）と須恵器（59～66）がある。土師器には甕がある。甕口縁部は短く立ち上がるものと外反するもの（57・58）があり、少なくとも3個体以上を認めた。須恵器には杯蓋（59・60）・杯身（61～64）・提瓶（65）・甕（66）がある。杯類は7個体以上を認めた。大型のもの（59・62）から小型のもの（63）までである。前者はTK10型式、後者はTK 209型式に分類できる³⁾。また、61・63には底部外面にヘラ記号がある。66は大型甕口縁部で杯類よりも古い特徴を示す。古墳時代後期に属する。

5区第3面遺構群（図76・図版28 67～79） 建物1・建物2の柱穴および周辺の柱穴・溝から出土した。いずれも小破片で相互に接合することはほとんどない。器種は土師器（70・71・76～79）と須恵器（67～69・72～75）がある。土師器には甕（70・76・77・79）・杯（78）・高杯（71）がある。甕には口縁部が立ち上がるもの（76）と外反するもの（70）がある。また、79は長胴甕体部である。須恵器には杯蓋（67・68）・杯身（69・73～75）・甕（72）がある。時期幅はあるが全体としては古墳時代後期から飛鳥時代に属する。

9区第5面 163土坑（図76 80） 須恵器の杯身（80）のほか、器形不明の土師器の破片が出土した。80はTK 217型式に分類できる。飛鳥時代に属する。

7区第4面28流路（図76・図版28 81・82） 土師器には甕（81・82）がある。81は完形、82は体部下半がほぼ完形で出土した。7区第4面は第7a（8）層に相当するが、断面の検討からこの流路は第2面に対応すると判断した。飛鳥時代から奈良時代に属する。

（6）第3層・第2層

第3層・第2層はともに耕作により頻繁に攪拌が繰り返された。そのため出土土器はほとんどが細片となっており、同時に本来の層位的関係が攪乱されているものが多いと推定できる。また、埋納された痕跡をとどめる土器が出土することもなかった。これらの点を考慮して第3層・第2層から出土した土器をまとめて掲載して紹介する。

第3層・第2層（図77 83～116） 器種は土師器（83～90）、瓦器（91～96）、須恵器（97・98）、焼締陶器（99～104）、灰釉陶器（105・106）、施釉陶器（107・108）、磁器（109～116）がある。土師器には小型皿（83～85）・中型皿（86・87）・大型皿（88・89）・甕（90）がある。平安時代に属するもの（83・88・90）、鎌倉時代から室町時代に属するもの（84・85）、室町時代後半に属するもの（86・89）、江戸時代前期に属するもの（87）に分類できる。87の口縁部数箇所には煤が付着することから灯明皿として使用したことが分かる。瓦器には小型皿（91・92）・椀（93）・鉢（94・95）・火鉢がある。

大和産が大部分を占める。平安時代後期に属するもの(93)から室町時代に属するもの(96)がある。須恵器には杯蓋・杯身・鉢(97・98)がある。鉢は東播産である。平安時代から鎌倉時代に属するものがほとんどを占める。焼締陶器には播鉢(99・100)・壺(101～103)・甕(104)がある。備前産(100・102・103)、信楽産(99・101・104)の順に割合が多く常滑・丹波などそのほかの産地のものは少ない。室町時代に属するものが多いが、江戸時代前期に属するもの(99・100)もある。灰釉陶器には椀(105)・皿(106)がある。105は平安時代前期に属するが、106は自然釉が付着するのみであることから平安時代後期に属すると考えられる。施釉陶器には椀(107・108)・皿・鉢がある。いずれも瀬戸・美濃産で灰釉または鉄釉を施す。室町時代から江戸時代前期に属する。磁器には青磁鉢(109)・青磁椀(110・111)・青磁盤・白磁鉢(112・113)・白磁椀(114)・青花皿(115)・青花椀(116)がある。すべて中国産で115は漳州窯系、116は景德鎮窯系の製品である。

型式変化が最も著しい土師器皿をみると平安時代後期に属するもの(83・88)から江戸時代前期に属するもの(87)があり、ほかの器種でもこの時期の特徴を示すものが多い。しかし、少量ながら平安時代前期・中期の特徴を示すもの(90・105)を認めている。また、1区2島島上部(1区5層)出土の焼締陶器播鉢(99・100)が第2層下限の遺物になるが、これらは江戸時代前期に属する。これらのことから第3層・第2層出土土器は平安時代前期・中期のものを含みつつ平安時代後期以降に増加し、途切れることなく江戸時代前期までのものを含むことを指摘しておく。

(7) 第1層

3区・1区・9区の第2層上面を覆う分厚い洪水砂層からは様々な時代に属する土器が出土したが、下限と考えられる土器を抽出した。

3区・1区・9区3層・4層(図77 117～122) 器種は土師器(117～121)、磁器(122)がある。土師器には小型皿(117～120)・中型皿(121)がある。119の口縁部には煤が付着することから灯明皿として使用したことが分かる。磁器は椀(122)がある。肥前産の染付である。土師器、磁器とも江戸時代前期に属する。

(8) その他の出土土器

上記の遺物包含層・遺構埋土出土土器以外の主要な土器をここに掲載する。3区・1区・9区・2区の第1層から出土した混入品が多くを占める。

縄文土器(図78～80・図版29 123～198) 縄文土器は大きく中期に属するもの(123～155)、後期に属するもの(159～187)、晩期に属するもの(188～198)に分けて掲載した。

123～142は船元式に分類できる。中期前葉から中葉に属する。全体の形態が分かる個体はないが、いずれも深鉢と考えられる。123・124・128・133は波状口縁である。外面に突帯を貼り付けるもの(123～128・131～133)が多く、そののち竹管による刺突文を施す(123～135)。123は加えて口縁端部外面に二枚貝による刺突文がある。141・142はヘラ描き沈線文を施す。また、口縁部内面には縄文・撚糸文を施す(123～128・133・135)。136～139は体部破片であるが、細かい縦位の縄文からこの型式に属することが分かる。なお、140は縄文に似せた沈線文を施す個体である。

143～155は北白川C式に分類できる。中期後葉に属する。155はキャリパー形の深鉢、そのほかの個体も深鉢と考えられる。149～151・155は波状口縁である。143～150は密な沈線文、153～155は刺突文を施す。151は口縁端部に分厚い突帯を貼り付ける。152は底部の破片である。

なお、156は浅い沈線文を施すが、胎土に繊維状のものが見られるので早期に属する可能性がある。

157 は磨滅による損傷を受けているため調整技法の詳細が不明であるが、押型文であるとする早期に属する可能性がある。158は刺突文を施すが、他地域産の土器と考えられる。

159～166は中津式に分類できる。後期前葉に属する。全体の形態が分かる個体はないが、いずれも深鉢と考えられる。159～162・164は波状口縁で、159・161は頂部に突起を付加する。159～165は縄文を磨り消したのち、沈線文を施す。166は底部外面にも縄文を施す。

167～170は縁帯文土器に分類できる。後期前葉から中葉に属する。170をはじめ、いずれも深鉢と考えられる。口縁端部は外側へ肥厚し、縄文（167・169・170）、刺突文（168）を施す。170は加えてヘラ描き沈線文がある。

171は元住吉山式の特徴をもつ。後期中葉に属する。また、172・173も後期中葉に属すると考えられる。174は注口土器の注口である。1点のみ出土した。

175～187は後期後葉から晩期初頭に属すると考えられる土器である。175～177は浅鉢で、175の文様は簡略化が進んでいる。宮瀧式あるいは滋賀里Ⅰ式に属する。176は波状口縁である。178～187は粗製の深鉢で、多様な形態がある。178・182は竹管による簡素な沈線文を施すが、ほかは条痕（179・181・185・186）やナデ（180・182～184・187）で調整する。また、焼成が良好であることもこれらの特徴である。

188～196は滋賀里式に分類できる。晩期前葉から中葉に属する。188は浅鉢、189～196は深鉢である。188・189は波状口縁である。197は船橋式、198は長原式に分類できる。晩期末に属する。調整技法はナデが主で、突帯には刻目がない。

弥生土器（図80 199～219） 弥生土器は後期に属するものを掲載した。

199～201・204・205は広口壺、202は長頸壺である。200は器壁が分厚く特異な口縁部形態を取る個体である。管見のおよぶ限り類例を知らないが、調整技法・胎土などの特徴から弥生土器に含めた。203は口縁部を拡張して櫛描文・浮文で装飾しており、204のような櫛描文で飾る体部であったと考えられる。211～219はいずれも甕で体部外面はタタキで仕上げる。211～214は底部で、突出する平底（211・212）と小さな平底（213・214）がある。208は甕脚台部で東海地方の影響が考えられる。器壁が厚いことから後期前半に属する⁴⁾。206は脚部が大きく広がる高杯である。また、207は内湾傾向の高杯脚部で東海地方の影響が考えられる⁵⁾。209は大型鉢、210は有孔鉢である。

土師器（図81 220～251） 土師器は大きく古墳時代前期から中期に属するもの（220～238）と飛鳥時代から奈良時代に属するもの（239～251）に分けて掲載した。220～222は二重口縁壺で、220は丁寧な調整を施す。223～225は直口壺である。224・225は古墳時代中期に属すると考えられる。226・227は小型丸底壺、228は小型器台で、いずれも丁寧な調整を施す。なお、小型鉢は認めていない。229～232は小型土器で、229～231は甕、232は高杯を模したものであろう。233～236はいずれも体部内面をケズリで調整する甕で、特に233～236は器壁が薄いことや口縁部の形態から庄内式の甕の特徴を備える。237は口縁部を拡張することから日本海側の地域の影響が考えられる⁶⁾。また、238はいわゆるS字状口縁台付甕脚台部の破片であり、東海地方の影響が考えられる⁷⁾。

239～241は杯で、241は飛鳥時代に属する。239・240は時期の特定が難しい。242・243は奈良時代に属する皿である。242の方が新しい特徴を示す。244は大きな平高台をもつ皿である。245～249は甕、250は鍋、251は甌である。図示していないが、甌の把手の破片も出土している。

須恵器（図82 252～276） 須恵器は、古墳時代中期から平安時代前期の各時代に属するものを掲載

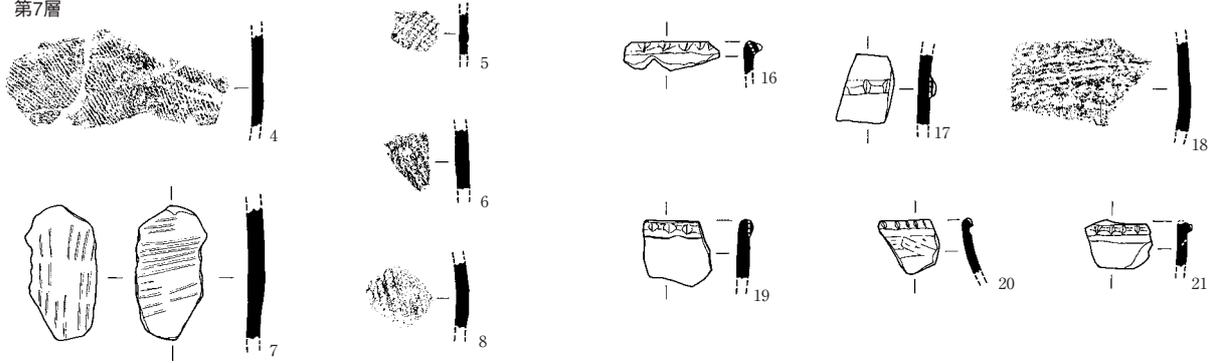
第8層



第5層



第7層



第5層

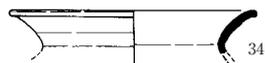
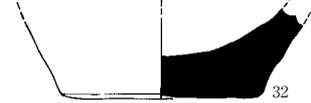
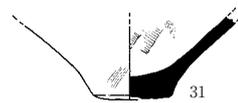
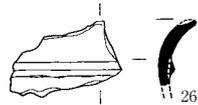
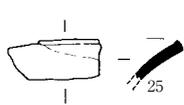
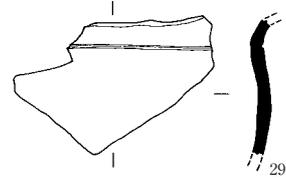
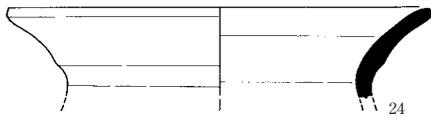
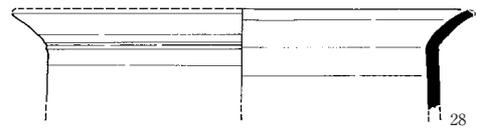
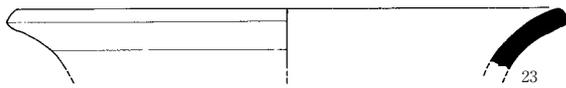
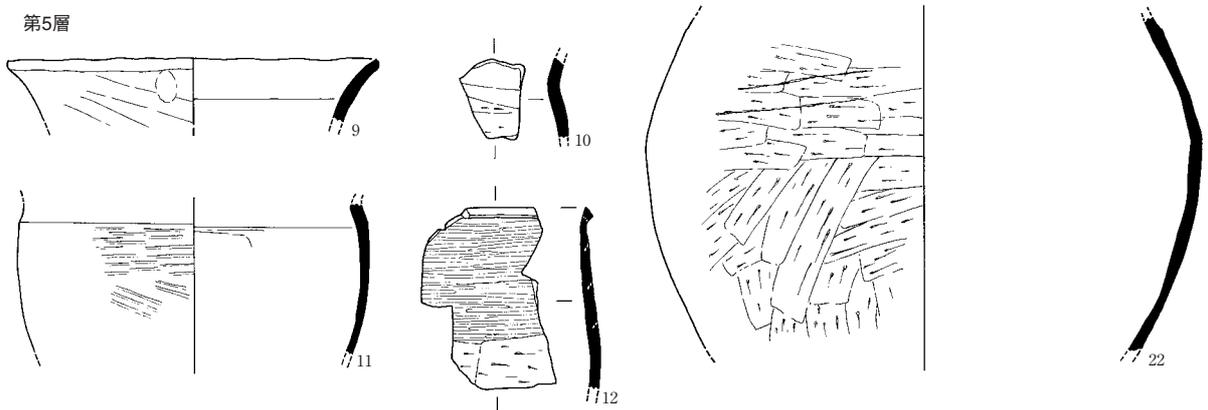


图74 土器拓影·実測图(1)

第4層

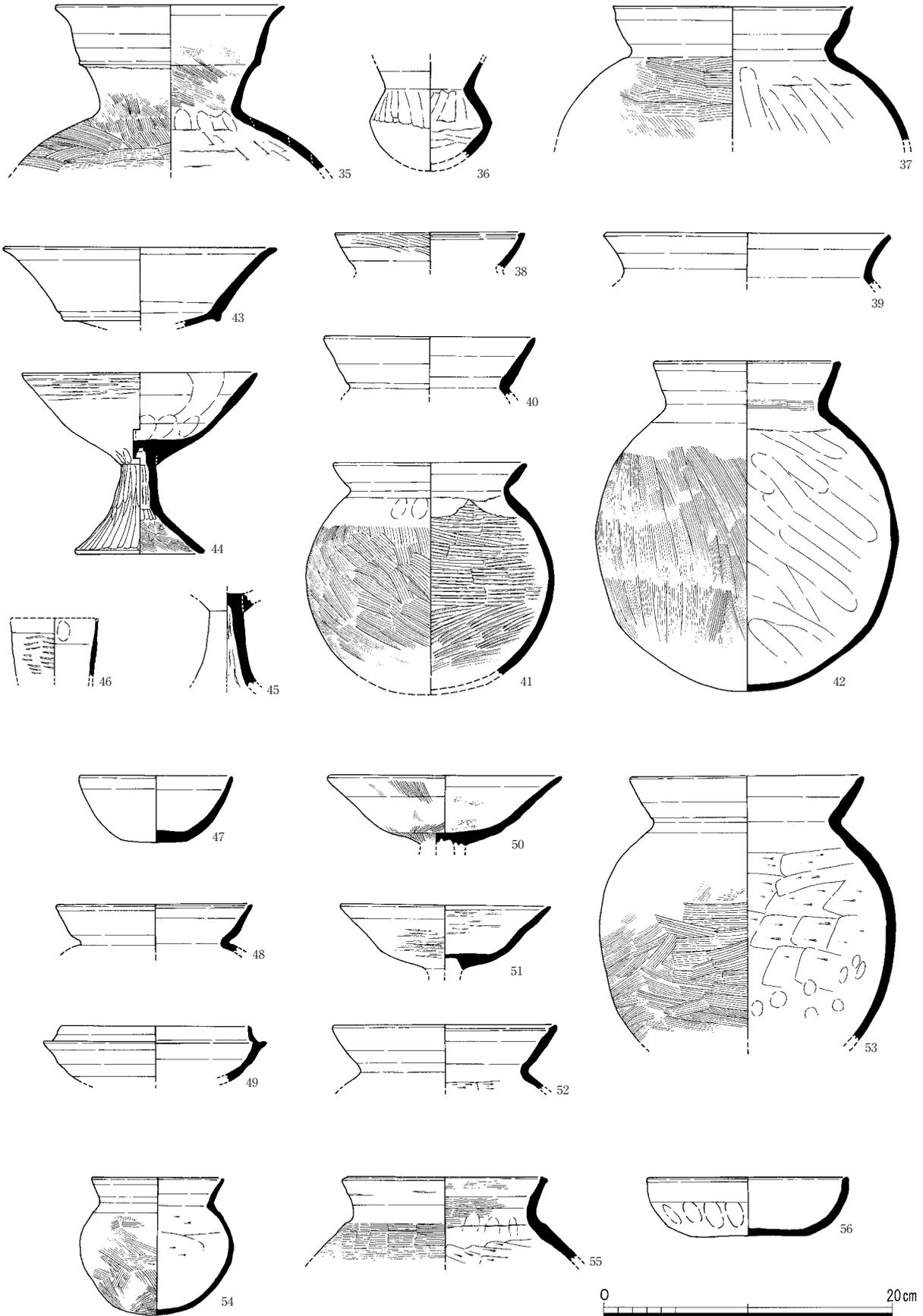


图75 土器実測图(2)

第4層

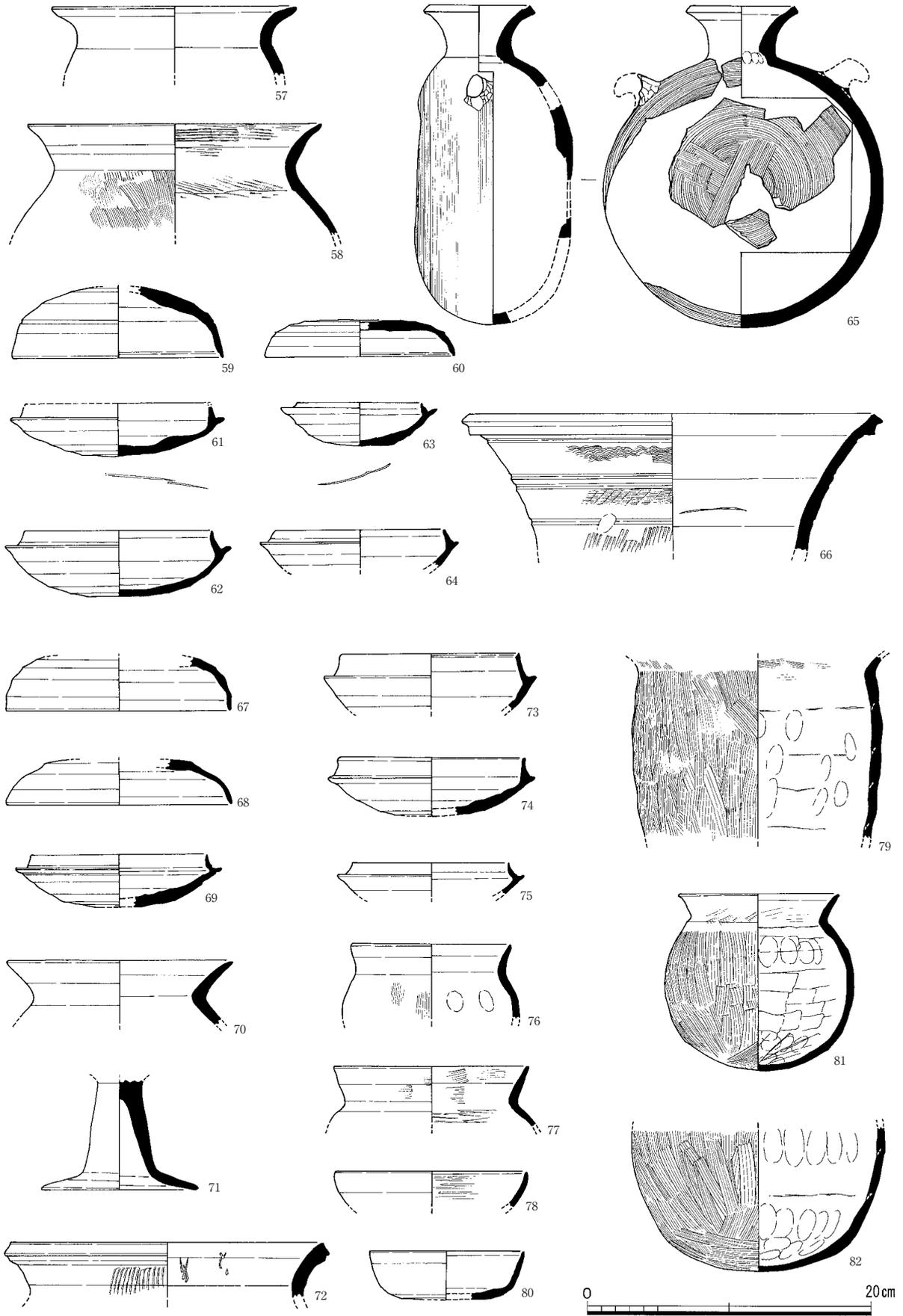


图76 土器实测图(3)

第3層・第2層

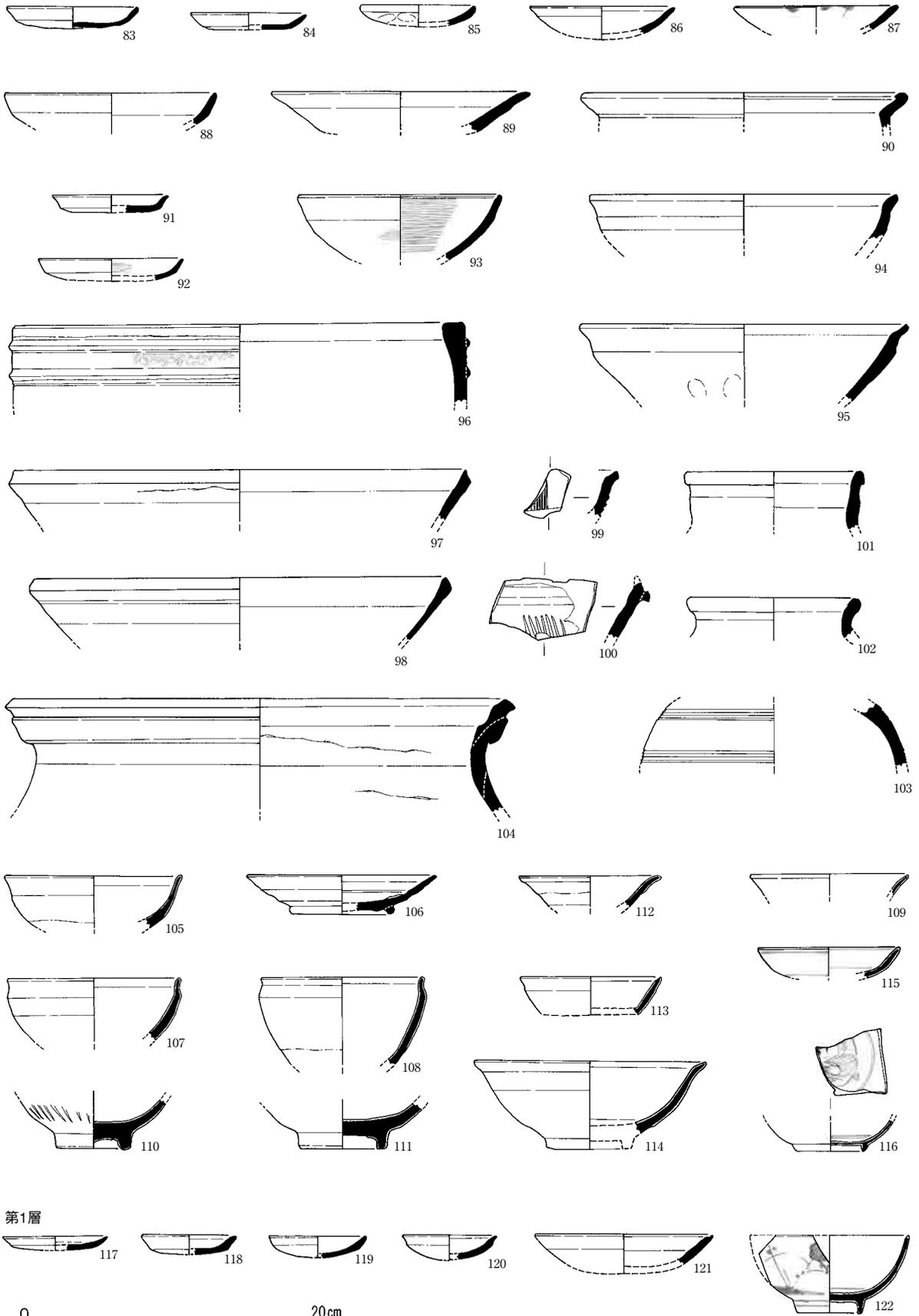


图77 土器実測图 (4)

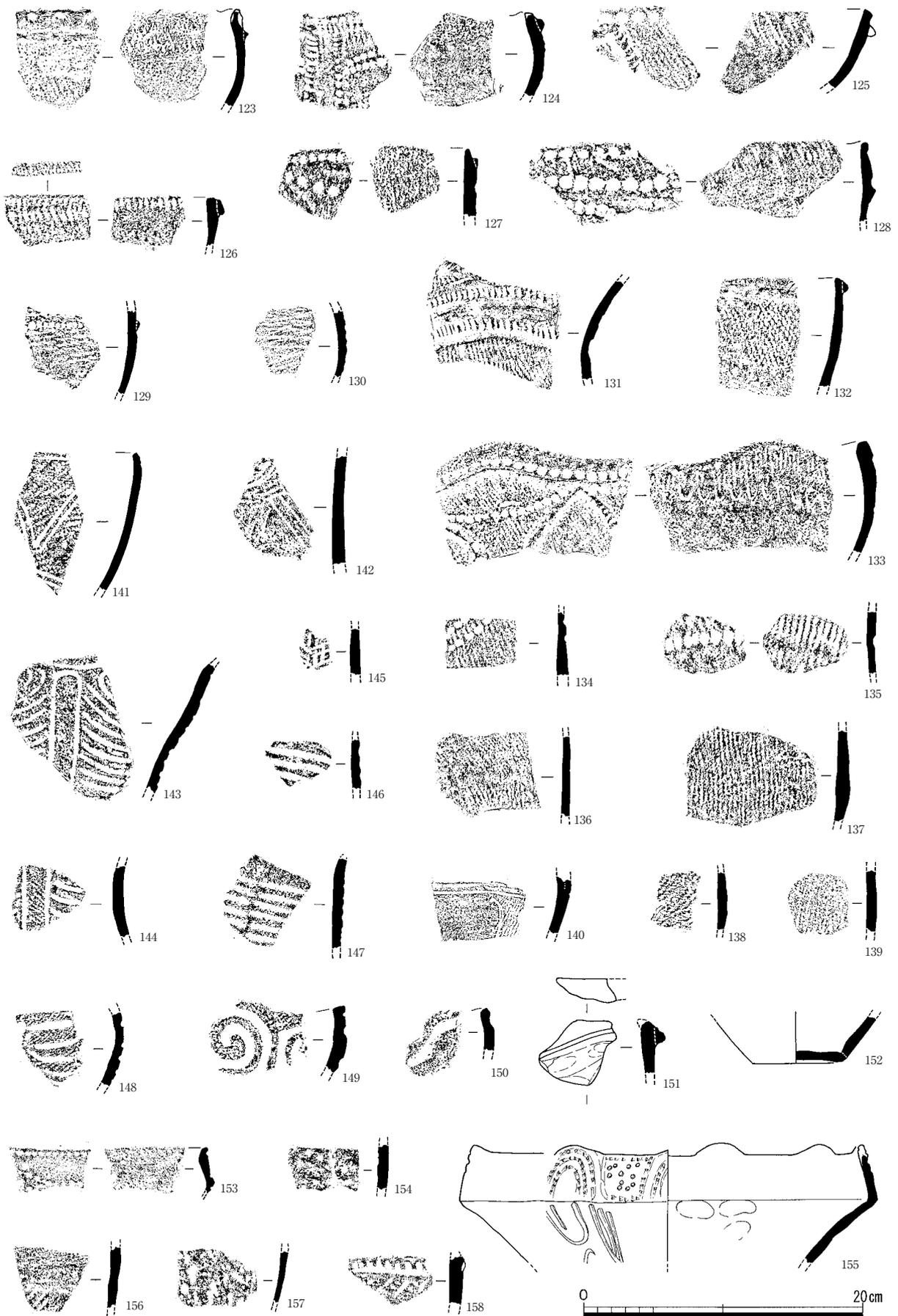


图78 土器拓影·实测图(5)

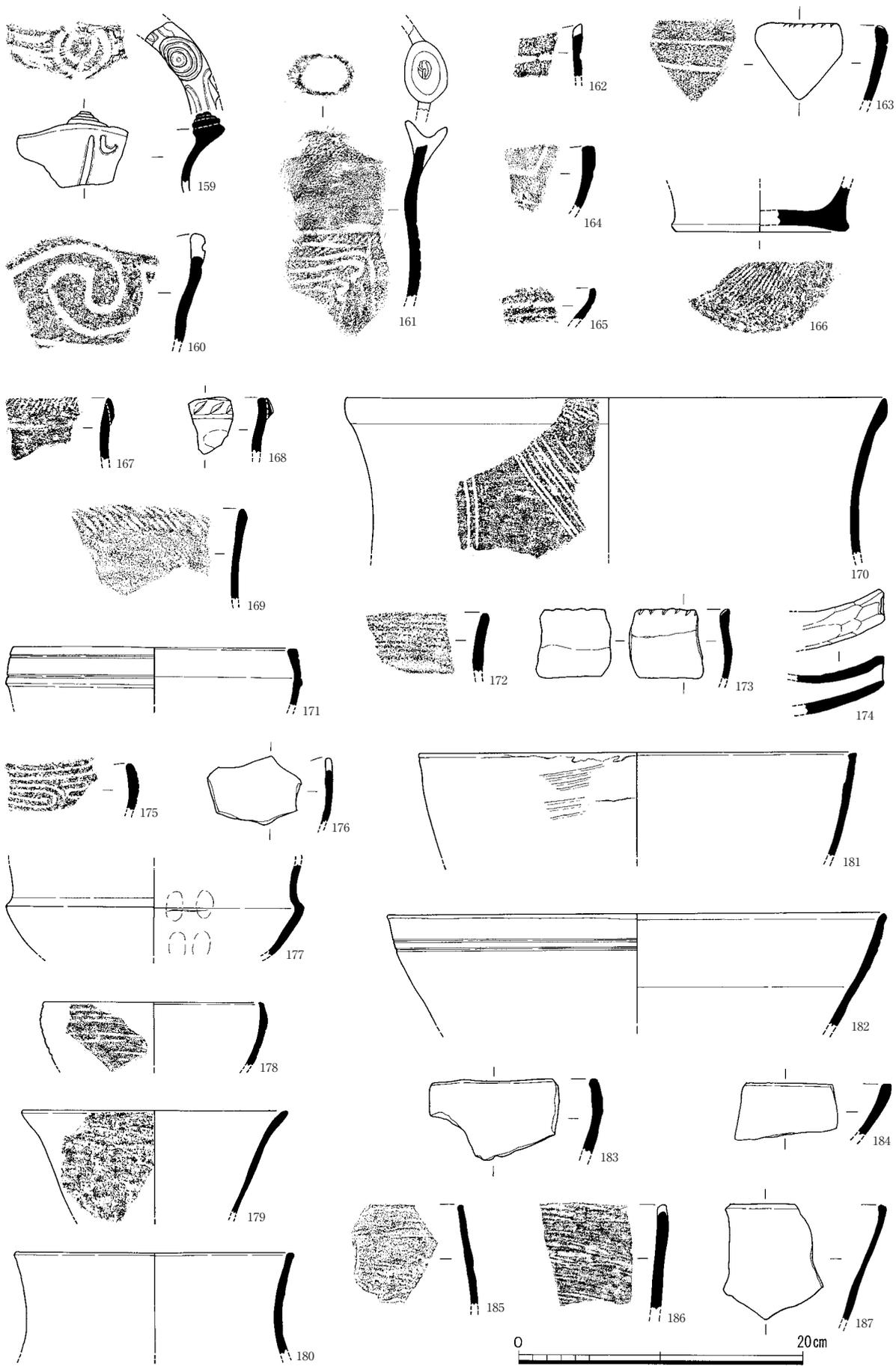


图79 土器拓影·实测图 (6)

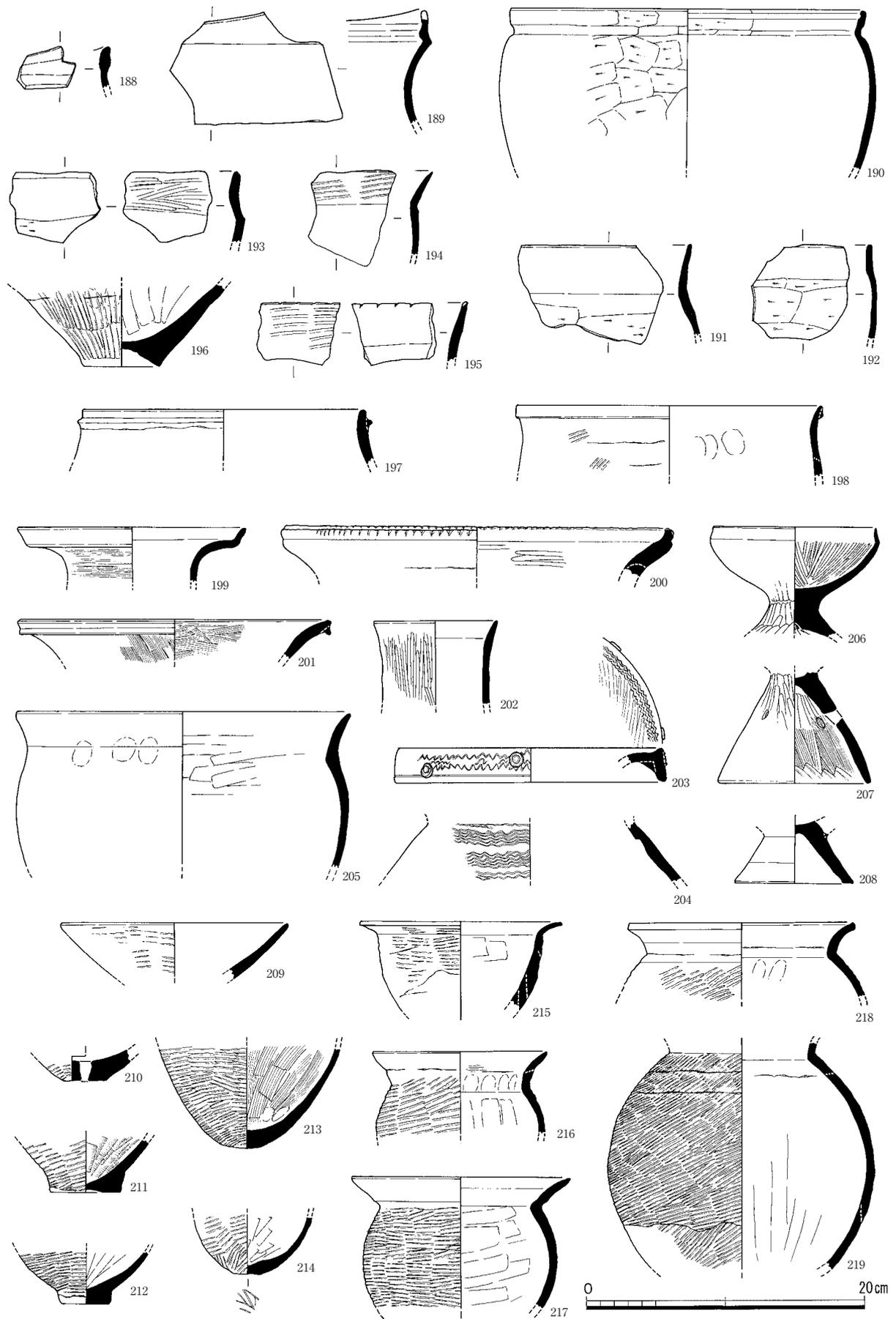


图80 土器实测图（7）

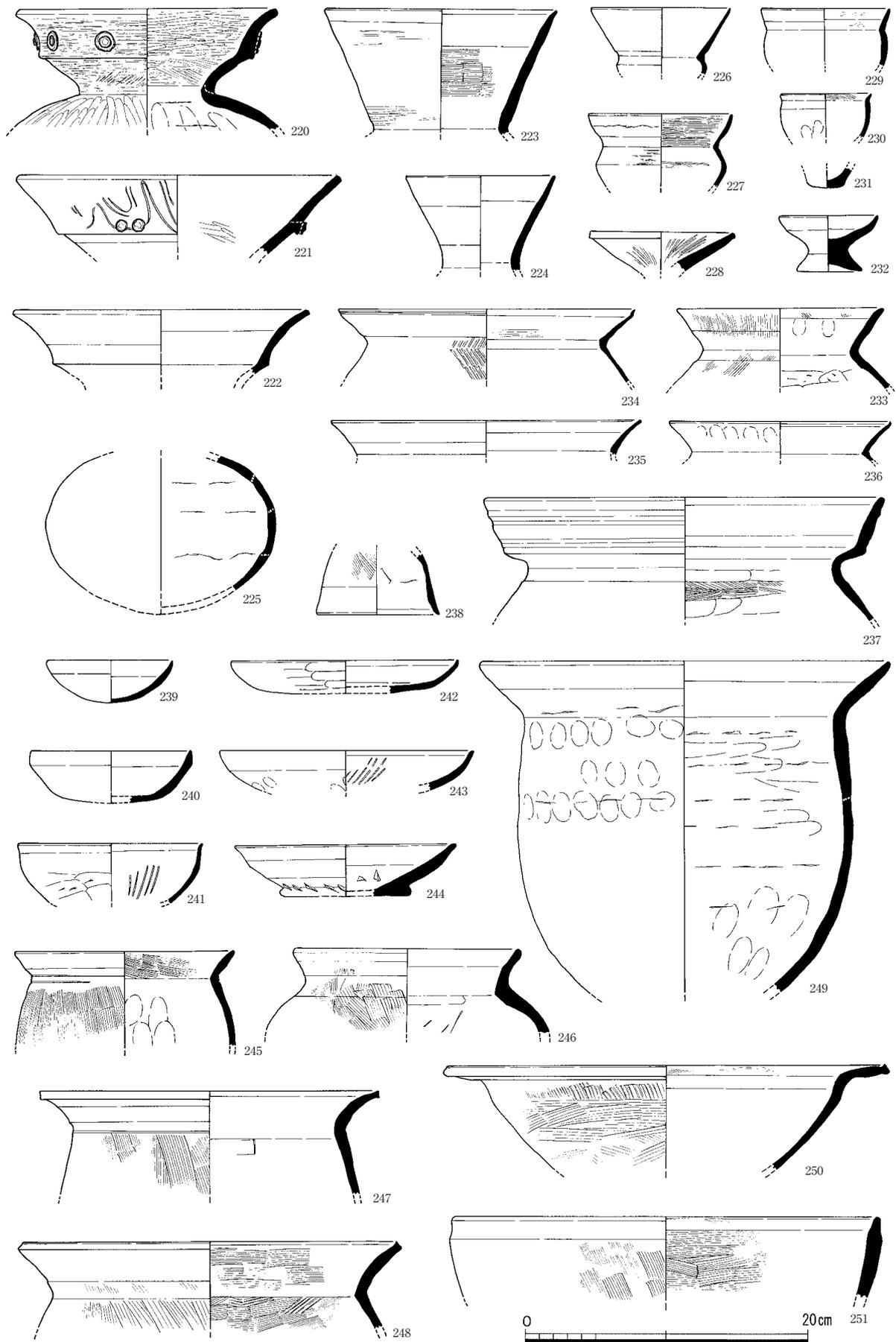


图81 土器实测图(8)

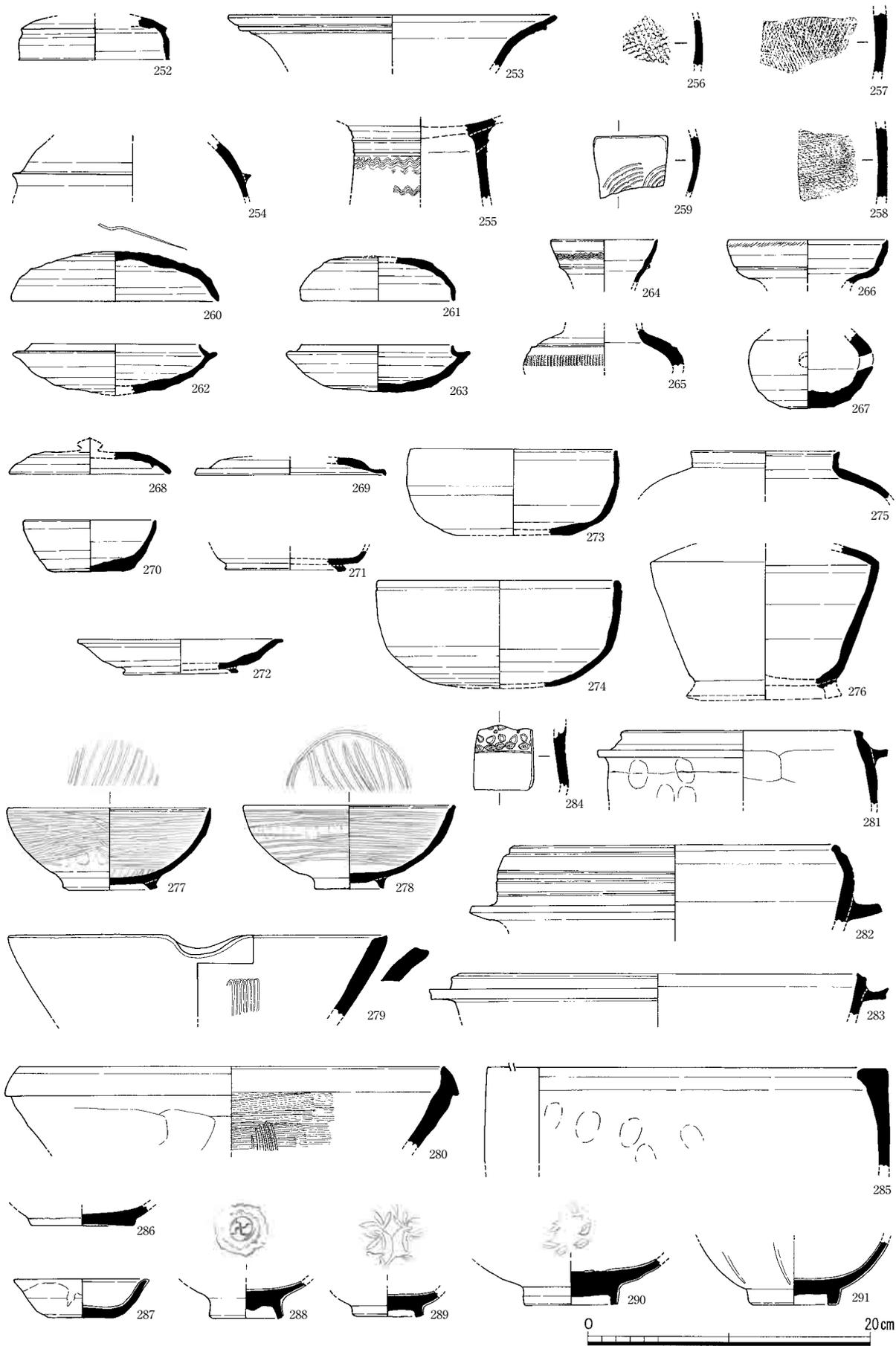


图82 土器拓影·实测图(9)

した。

252 は杯蓋、253は甕口縁部で、形態・調整技法・胎土・焼成の特徴からいわゆる初期須恵器に分類できる。古墳時代中期に属する。254・255は器台の破片と考えられる。時期の特定は難しいが、古墳時代中期に属すると推定できる。256～259は韓式土器甕体部の破片である。256 は格子タタキ、257・258 は縄蓆文がのこる。また、259は土師質で内面に同心円文タタキがのこる。古墳時代中期に属する。

260・261は杯蓋、262・263は杯身、264～267は椀で、いずれも古墳時代後期に属する。260・262・264・265は古い特徴、261・263・266・267は新しい特徴を示す。260 の天井部外面にはヘラ記号がある。また、267 の内面には透孔を削り抜いた粘土片が付着する。

268・269は杯蓋、270・271は杯身、272 は皿で、268・270は飛鳥時代、269・271・272 は平安時代前期に属する。273・274は大型鉢で、内外面に丁寧な調整を施す。275は短頸壺、276は長頸壺である。273～276は飛鳥時代から奈良時代に属する。

瓦器 (図82 277～285) 平安時代後期から室町時代の各時代に属するものを掲載した。

277は楠葉産、278は大和産の椀である。ともに平安時代後期から鎌倉時代に属するが、278の方が新しい特徴を示す。279・280は播鉢で、279は片口を作る。281～283は鍋もしくは釜で、鏝が巡り、体部外面には煤が付着する。284は小型香炉、285は火鉢である。これらの多くは大和産と考えられ、鎌倉時代から室町時代に属する。

緑釉陶器 (図82 286) 緑釉陶器は1点のみ出土した。椀底部である。緑釉はほとんど剥離している。洛北産である。平安時代前期に属する。

施釉陶器 (図82 287) 灰釉を施す小型鉢である。瀬戸・美濃産である。室町時代に属する。

磁器 (図82 288～291) いずれも中国製青磁椀である。288～290は底部内面に印刻で多様な文様を施す。291は胎土や釉薬の特徴から中国南部の製品と考えられる。時期の特定は難しいが、鎌倉時代から室町時代に属すると推定できる。

3. 瓦類

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・棧瓦・埴がある。出土状況からみて、すべて混入したものと判断できる。大部分が小破片で、文様の全容が明らかな個体はない。また、磨滅による損傷を受けているため調整の詳細が不明な個体が多い。

軒丸瓦 (図83・図版30 292・293、296～298) 文様には蓮華文 (292・293) と巴文 (296～298) がある。欠損が多いが、292は複弁八葉蓮華文、293は重弁八葉蓮華文であると推定できる。巴文はいずれも三巴文で、右回り (296・298) と左回り (297) がある。298は珠文の一つに范傷がある。292・293は白鳳時代から奈良時代、296～298は鎌倉時代に属する。

軒平瓦 (図83 294・299～302) 文様には重弧文 (294)、唐草文 (299～301)、連珠文 (302) がある。299は周縁に木目の浮き出し、302は珠文の間に范傷がある。294は凸面に粗い格子タタキを施す。294 は白鳳時代から奈良時代、299～302は鎌倉時代に属する。

丸瓦・平瓦 白鳳時代から奈良時代に属するものと鎌倉時代から室町時代に属するものに分類できる。前者の平瓦の中には凸面に294と同じ格子タタキをもつものがある。後者にはコビキ痕をのこすものがある。

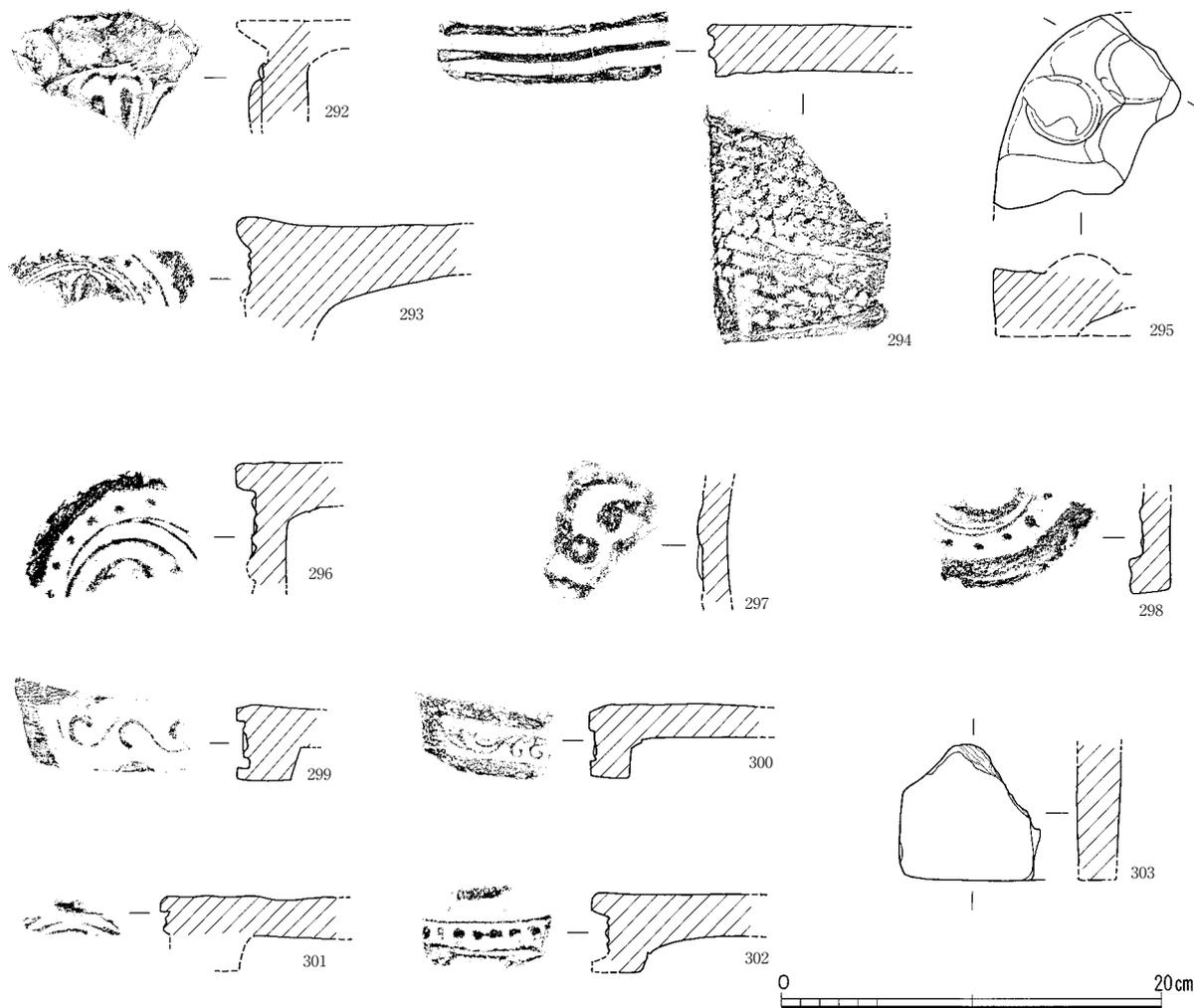


図83 瓦類拓影・実測図

鬼瓦（図83・図版30 295） 1点のみ出土した。全容は不明であるが、大粒の連珠文を外縁に沿って配する。白鳳時代から奈良時代に属すると推定できる。

棧瓦 少量しか出土していない。江戸時代に属する。

埴（図83 303） わずかしか出土していない。いずれも小破片だが、方形の板状をしているので、敷埴であると推定できる。時期は不明である。

4. 埴輪・土製品

土器・瓦類以外の土製品には、埴輪・竈・製塩土器・焼塩壺などがある。

埴輪（図84・図版30 304～308） 出土状況からみて、すべて混入したものと判断できる。小破片のため種類・部位の特定が難しく、また、磨滅による損傷を受けているため調整の詳細が不明な個体が多い。円筒埴輪（304～307）と形象埴輪（308）がある。

円筒埴輪には口縁部（304・305）と胴部（306・307）の破片がある。基底部の確実な破片は認めていない。307は籬の下に円形の透孔をもつので少なくとも籬が2条以上めぐる3段以上の埴輪であったと推定できる。調整は304の口縁部内面の一部に2次調整のヨコハケを認めるが、ほかの多くは1次調整のみである。

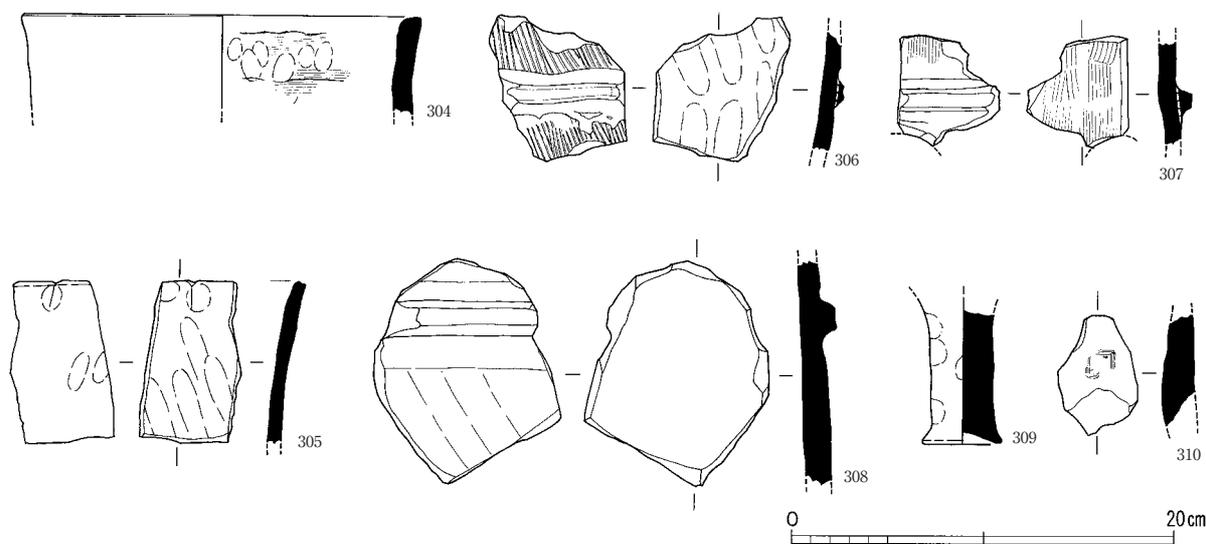


図84 埴輪・土製品実測図

形象埴輪は種類の特定が難しい。308は板状の厚手の体部に幅の太い直線的な籬が貼り付くことから家形埴輪の破片と推定できる。このほかに蓋形埴輪の笠部と推定できる破片が出土している。

なお、黒斑をもつ破片は認めていない。このことと形態・技法の特徴から出土した埴輪は古墳時代中期から後期に属すると判断できる。

竈 移動式竈と推定できる破片がわずかに出土している。1点が4区12層から出土したほかは混入品である。すべて小破片のため図示していない。外面はハケ・ナデ、内面はナデによる調整を施す。内面に煤が付着するものがある。古墳時代中期から奈良時代に属すると推定できる。

製塩土器（図84 309） わずかしか出土していない。309は中実の長い支脚の破片である。渥美半島の製塩土器のC 1類に類似していることから飛鳥時代に属すると推定できる⁸⁾。製塩土器杯部の破片は先に掲載した5区第4面440井戸出土の46のみしか認めていない。

焼塩壺（図84 310） 1点のみ出土した。外面に刻印があるが、判読できない。江戸時代前期に属する。

5. 石製品

石製品には、ナイフ形石器・石鎌・スクレイパー・楔形石器・砥石・石臼などがある⁹⁾。出土状況からみて多くは混入したものである。

ナイフ形石器（図85・図版30 311） 1点のみ出土した。サヌカイト製である。横長剥片を斜位に用いる。旧石器時代に属する。

翼状剥片（図85 312・313） 2点出土した。ともにサヌカイト製である。形態は整っておらず、2次加工はない。旧石器時代に属する。

旧石器はこれら3点のみで、すべて第1層から出土した混入品である。

石鎌（図85・図版30 314～318） 4点出土した。すべてサヌカイト製である。315以外は一部を欠損している。314は有茎式、315は平基無茎式、317は凹基無茎式である。315は大振りだが、314の方が重い。316は焚火跡である7区29土坑にともなうので縄文時代中期に属することが分かる。ほかのも

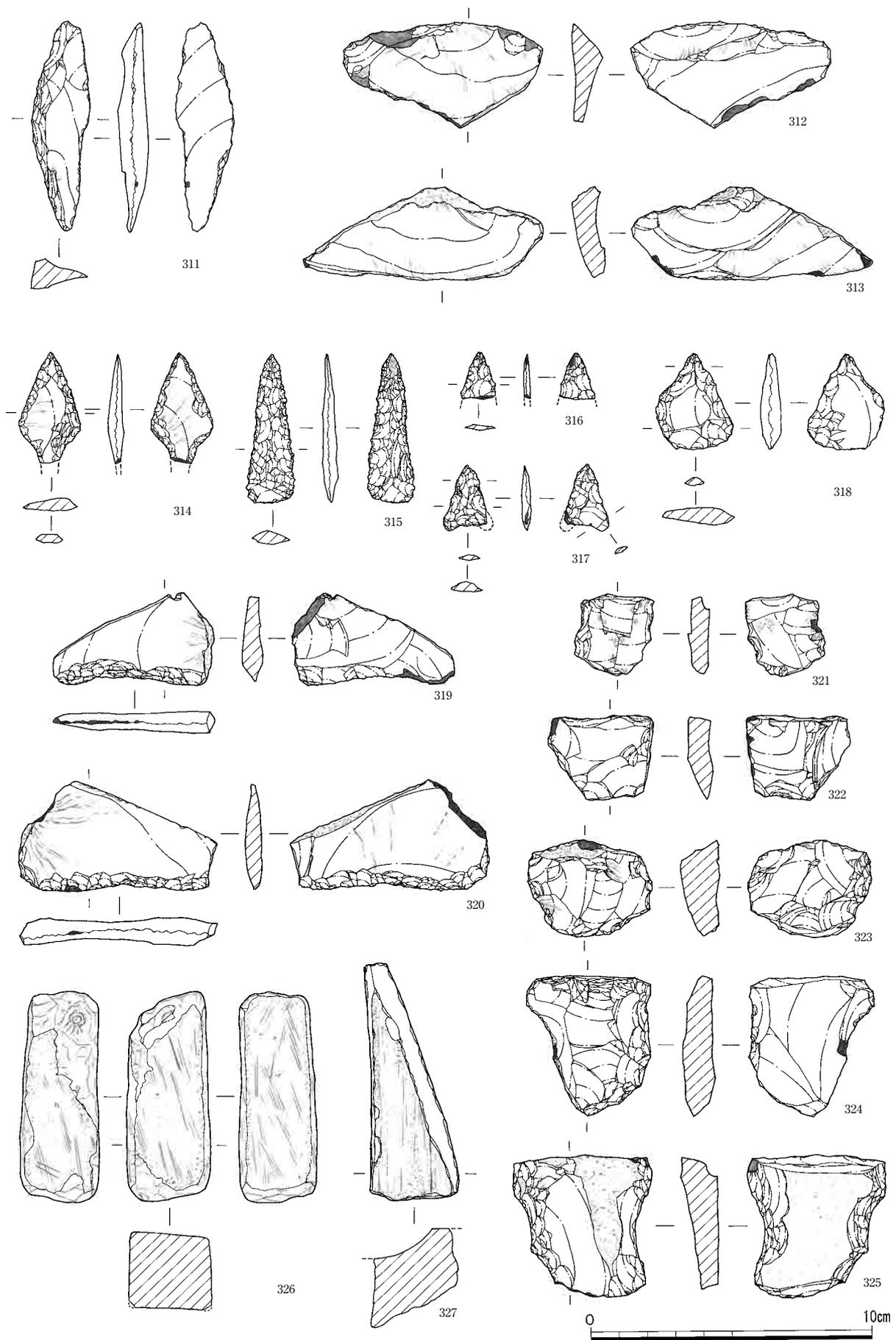


图85 石製品実測図

のも縄文時代に属すると推定できる。318は石鏃の未製品と考えられるが、楔形石器の可能性もある。サヌカイト製である。

スクレイパー（図85・図版30 319・320） 2点出土した。ともにサヌカイト製である。320は一部を欠損している可能性がある。サイドスクレイパーで、刃部は両面より2次加工を施す。縄文時代に属すると推定できる。

楔形石器（図85・図版30 321～325） 5点出土した。すべてサヌカイト製である。大小さまざまな形態のものがある。321は熱を受けた痕跡である細かい亀裂・剥離が表面全体に観察できる。いずれも縄文時代に属すると推定できる。

砥石（図85 326） 1点のみ出土した。粘板岩製か。方柱形ですべての側面に使用痕があり、反りが目立つ面もある。端部の穴はあるいは紐孔を加工しようとしたものと考えられる。室町時代から江戸時代前期に属する。

石臼（図85 327） 1点のみ出土した。砂岩製である。下臼の受皿部の小破片である。加工面は丁寧に研磨するが、ほかは割損する。江戸時代に属すると推定できる。

6. 金属製品

金属製品はわずかしこ出土していない。銅製品と鉄製品がある。

金環（図86・図版31 328） 1点のみ出土した。中実で切れ目のある環形の耳飾である。銅製の芯に金箔を貼り付けるが、大部分が剥離している。9区第2（6）層から出土したが混入品であることは明らかで、古墳時代後期に属する。

銅銭（図86 329） 1点のみ出土した。銭銘は篆書体の政和通寶である。政和通寶は北宋の銅銭で初鑄は1111年であるが、出土したものは重さが2gしかなく、また、銭銘や外縁・内郭の段に不鮮明な部分があることから模鑄銭と判断できる。室町時代から江戸時代前期に属すると推定できる。

煙管（図86・図版31 330） 1点のみ出土した。銅製の吸口である。製作は丁寧に属する。

鉄釘 5区第2（5・6）層から細い棒状の鉄製品が1点出土した。鉄釘の破片と考えられる。小片のため図示していない。江戸時代前期に属する。

環状鉄製品（図86 331） 鉄板を湾曲させて綴じ合わせている形態から何かを締め付ける用途に使われたと考えられる。出土した遺物包含層の時期から室町時代から江戸時代前期に属すると推定できる。

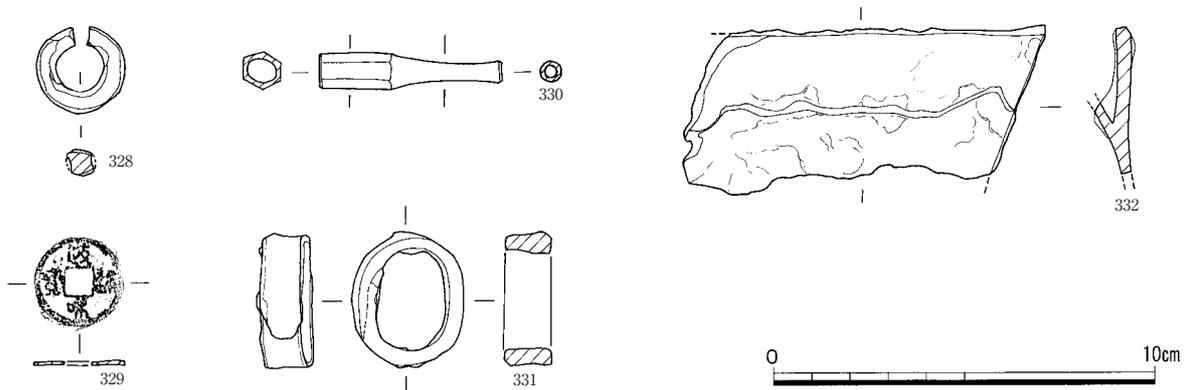


図86 金属製品実測図

不明鉄製品 (図86 332) 2枚の鉄板を合わせた形態である。残存部分からは刃部の加工は認められない。用途は不明である。出土した遺物包含層の時期から平安時代から江戸時代前期の間としか限定できない。

これらのほかに鉄製品がわずかに出土したが、いずれも用途を特定することができなかった。

7. 木製品

木製品はおもに耕作土層や流路から出土した。箸・漆器椀・結物・付木・杭などがある。

箸 (図87 333) 1点のみ出土した。一方が折損しているが、先端部が細くなる形状と円形の断面

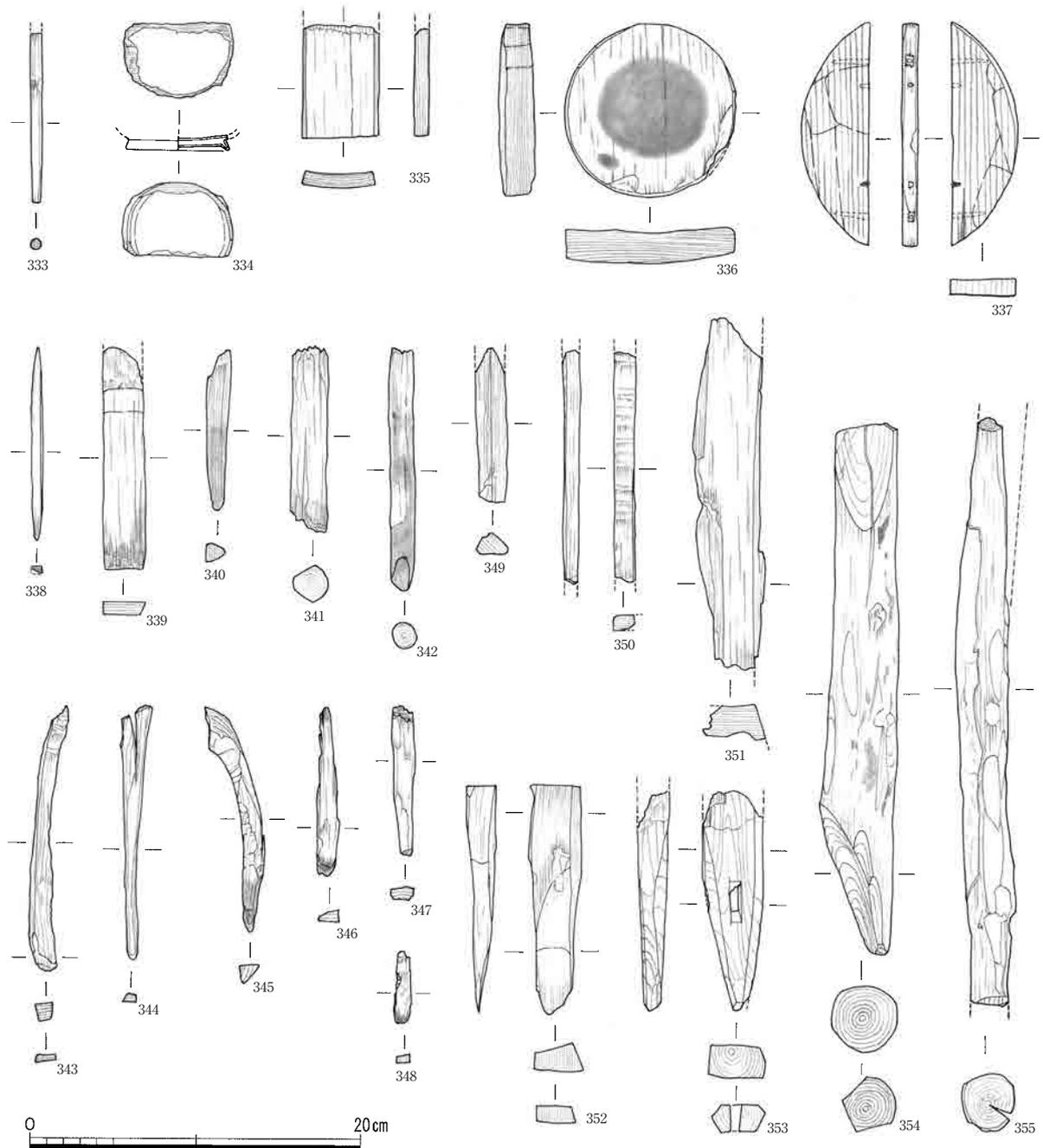


図87 木製品実測図

から箸の破片と判断できる。江戸時代前期に属する。

漆器椀（図87・図版31 334） 底部の破片である。外面に黒漆、内面に朱漆を塗布する。粗製品である。江戸時代前期に属する。このほかに3区第3層から漆膜片が出土した。

結物（図87 335） 1点のみ出土した。樽または桶の部材の破片である。直径約28cmに復元できる。江戸時代前期に属する。

円盤形木製品（図87・図版31 336） 片面の中央部が強く焦げている。用途は不明であるが、あるいは鍋敷きなどとして用いられたものか。江戸時代前期に属する。

板状木製品（図87 337） 半月形の板状の形状である。側面の4箇所が目釘穴があることから、元はほかの部材と結合した円盤状の形態であったと推定できる。円盤形ならば直径約16cmに復元できる。用途は結物の底部などが推定できる。江戸時代前期に属する。

付木（図87・図版31 338～348） 12点出土した。細長い棒状でいずれも先端部が炭化していることから火種として使用されたと判断できる。加工痕のある棒状木製品を転用したもの（338～340）、木の枝をそのまま使用したもの（341・342）、粗く切り割った木片を使用したもの（343～348）に分類できる。先端部は炭化して細くなるものが多い（338～340・342～345・347・348）。346は両端とも炭化しており、繰り返し使用されたことが分かる。9区24島島の周辺から出土したものが多くを占める。江戸時代前期に属する。

棒状木製品（図87 349～351） いずれも長軸方向の加工があるが、用途は不明である。349は古墳時代中期、351は古墳時代から奈良時代に属する。350は混入品である。

楔形木製品（図87 352） 形態から楔形木製品としたが、楔としての使用痕は不明である。江戸時代前期に属する。

杭（図87 353～355） 角材を転用したもの（353）と丸木を使用したもの（354・355）に分類でき、後者がほとんどを占める。先端部の加工は斜めに切り尖らせるもの（354）と円錐形に尖らせるものがある。多く出土した木製品であるが、地面に打ち込むという使用法から時期の特定が難しい。354・355は古墳時代後期から奈良時代に属する。353は江戸時代前期の混入品である。

8. その他の出土遺物

上記以外の出土遺物を紹介する。

動物遺体 10区第3（8）層、3区第4－1面166溝、1区第2（5）層から1点ずつウマの歯が出土した。いずれも室町時代以降に属する。1区第2面48島島および第2～第3（6～12－1）層から1点ずつ動物の骨が出土した。小片で遺存状況が不良なので種の同定は行っていない。

植物遺体 9区第2～第3（6～12）層よりモモの種が1点出土した。5区第8面では樹木の根株を検出した。樹種はクスギ節である。これらのほかに5区第3面390流路や4区第6面124流路などから流木が出土した。樹種の同定は行っていない。

木炭 7区第5面29土坑にともなって出土した。篩を用いて細片まで採集した。樹種はコナラ節である。この資料については年代測定を行った。

註

- 1) 縄文土器の形式および年代については宮野淳一・宮本飛鳥氏の御教示を得た。
- 2) 広瀬和雄 1992年「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩」『弥生文化博物館研究紀要』1 大阪府弥立生文化博物館
- 3) 須恵器の型式は以下の文献に準拠した。
1966年『陶邑古窯址群 I』平安学園考古クラブ
田辺昭三 1981年『須恵器大成』角川書店
- 4) 1992年『山中遺跡』財)愛知県埋蔵文化財センター
- 5) 1990年『廻間遺跡』財)愛知県埋蔵文化財センター
- 6) 1986年『「月影式」土器について』石川考古学研究会
1985年『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』埋蔵文化財研究会
- 7) 1990年『廻間遺跡』財)愛知県埋蔵文化財センター
- 8) 立松彰 1984年「知多半島における製塩土器の編年」『知多古文化研究』I
- 9) 旧石器時代・縄文時代の石器については竹原伸次氏の御教示を得た。

第5章 自然科学分析

1. 讚良郡条里遺跡古環境分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻本裕也・斎藤崇人・田中義文

はじめに

讚良郡条里遺跡は、生駒山地西麓部の氾濫原上に立地する（図88～90）。本遺跡における周知の遺跡範囲は、沖積扇状地から沖積低地にかけて広がっている。遺跡範囲内では、西に向かって沖積扇状地からおもに後背湿地からなる沖積低地面へと地形面が推移していく。このうち沖積扇状地面は、離水時期が異なるいくつかの地形面によって構成されている。相対的な水位は、沖積扇状地から沖積低地に向かって上昇傾向にあり、西側へ行くに従ってより湿潤な表層地質の環境が形成される。このような西側に向かって湿潤化する環境・地形勾配が認められる讚良郡条里遺跡において、今回調査が行われた03-3調査区は、発掘調査結果から沖積扇状地に位置すると判断される。本調査区における扇状地の離水時期は縄文時代晩期以降と推定され、本調査区の南西側に位置する、讚良郡条里遺跡03-5や讚良郡条里遺跡03-4調査区とは地形発達過程が大きく異なっている。本報告では、調査区で確認された縄文時代の古環境復元を目的として、調査区内で確認された古土壌堆積物を中心に、放射性炭素年代測定と花粉分析を行い、堆積物の形成年代や古植生に関する情報を得る。

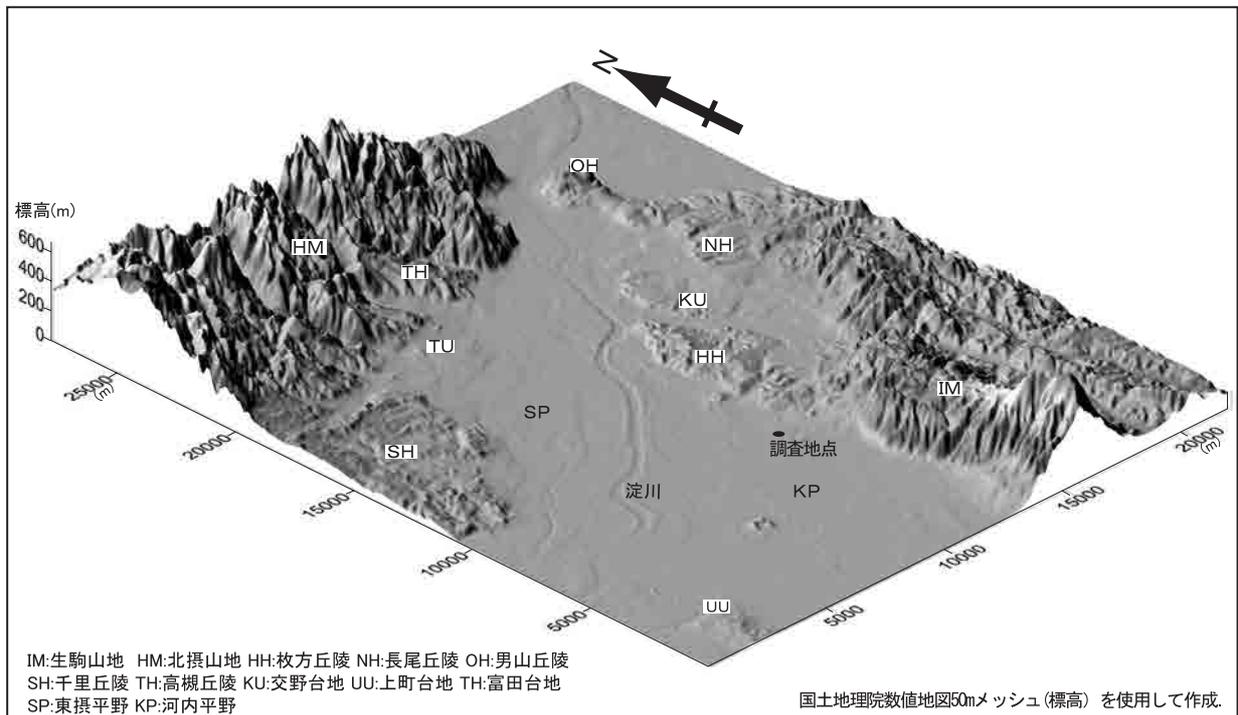


図88 遺跡位置図

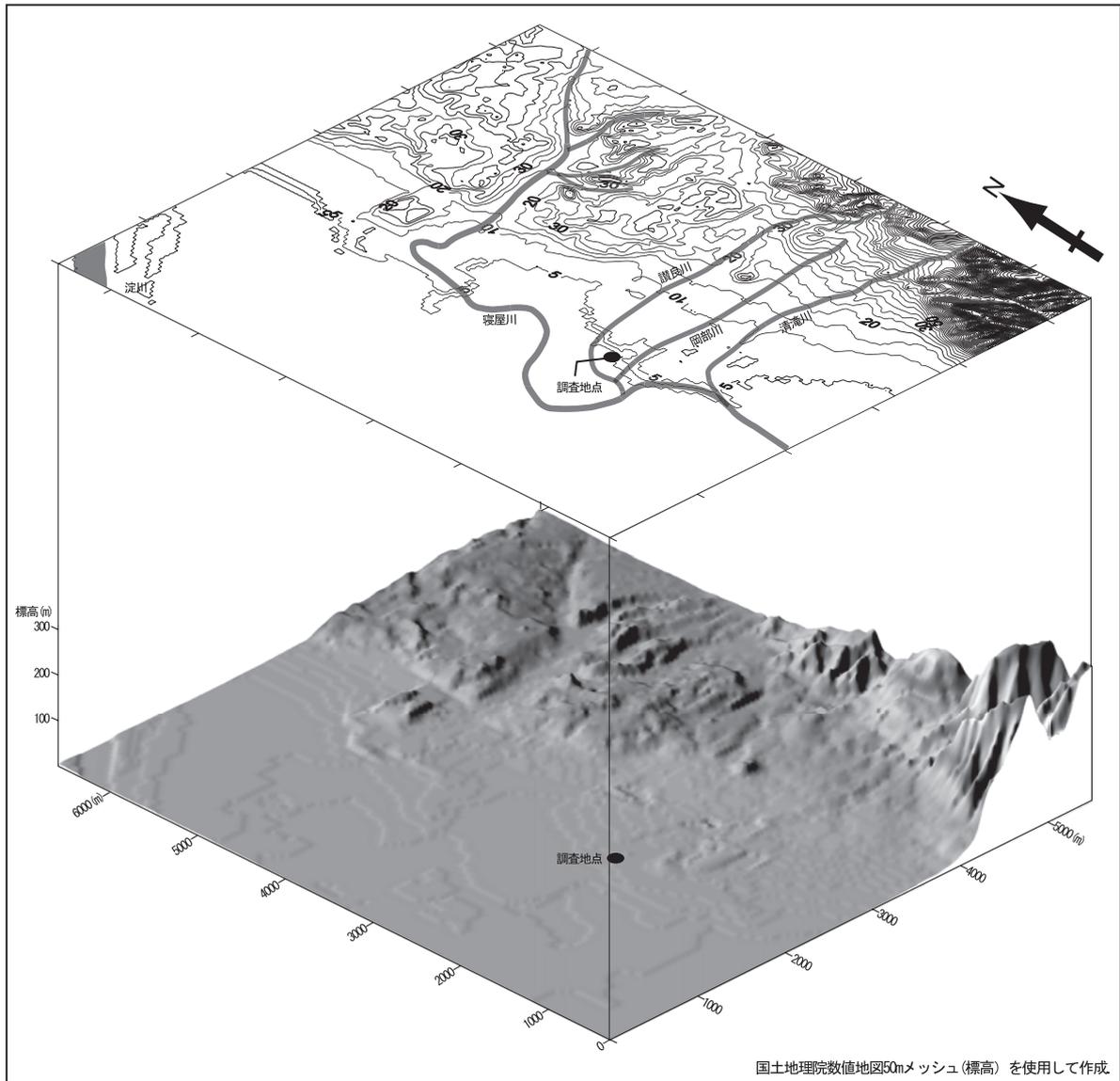


図89 遺跡等高線図

1. 調査地点の層序

分析調査は、9区および2区の深堀調査地点で採取された堆積物について実施する。調査地点の層序を模式柱状図として図91に示す。以下に調査地点における堆積層の層相について記載する。

(1) 9区深堀地点

深堀調査地点では標高2.6~0.1mの堆積物が観察された。この間の堆積物は基本的に氾濫堆積物とその上部に発達する古土壌からなるユニットの累重からなる。以下に層相について記載する。

第6 a (18) 層：暗灰～黒色を呈し見かけ上塊状をなす細礫混じり細粒砂質泥～中礫・細礫混じり細粒砂質泥。泥はおもにシルトで構成され、上方細粒化する。下位層への侵食は認められない。植物根痕などの著しい生物擾乱や土壌発達による構造が顕著に認められる。1 cm以下の集合体ないし偽礫（ブロック土）が密に確認される。上面で埋没樹が検出されている。

第6 b (18) 層：灰色を呈し、水平層理・葉理をなす砂礫～細粒砂からなる。礫のサイズは、中礫～細礫からなり、上方細粒化がよく観察される。

第7 a (19) 層：暗灰～黒色を呈し見かけ上塊状をなす細礫混じり砂質シルト～シルトからなる。下

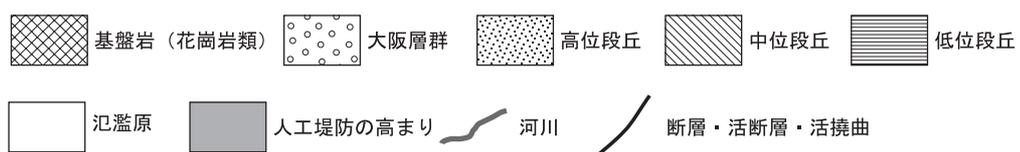
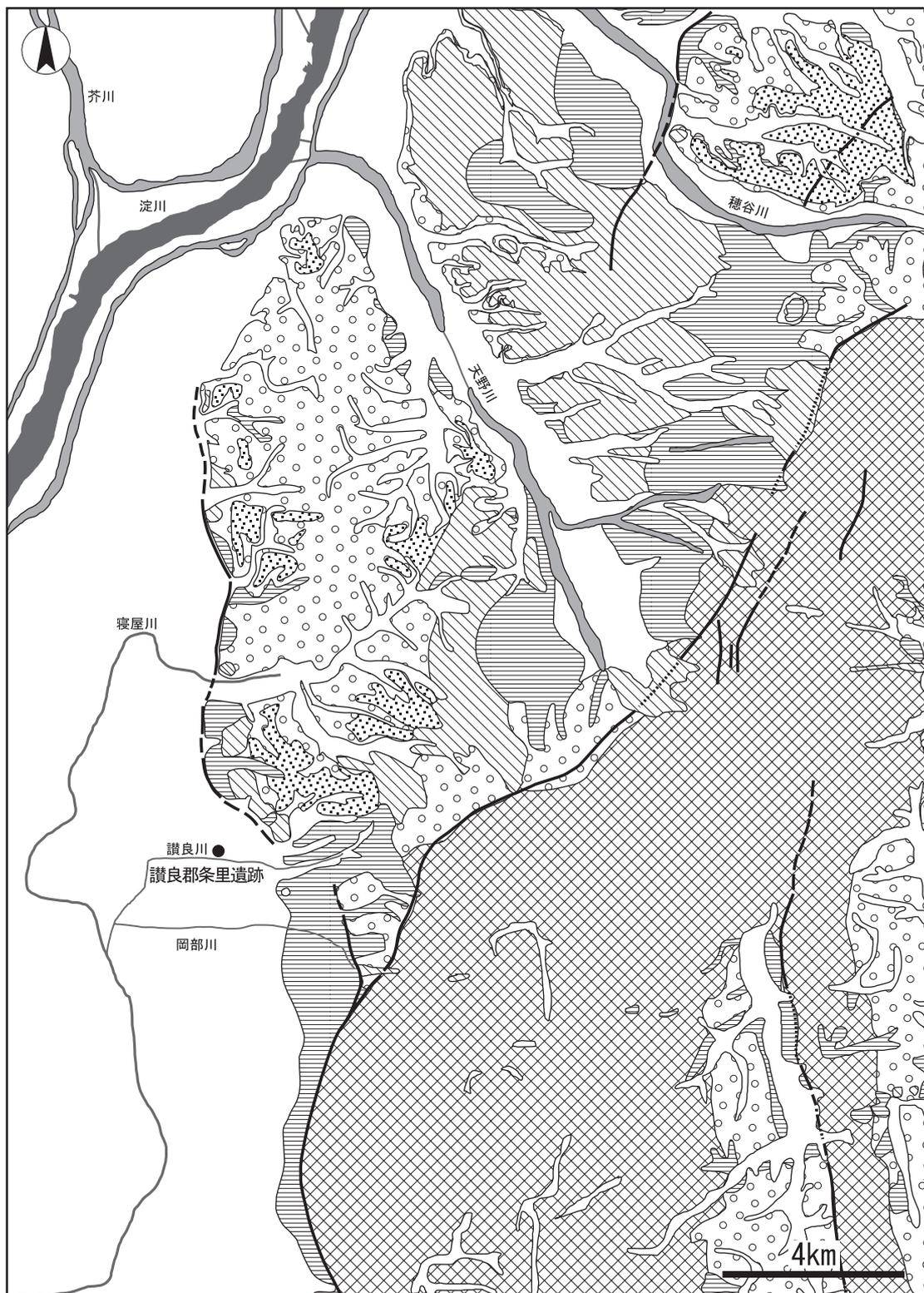


図90 讚良郡条里遺跡周辺地質図（宮地・田結庄・寒川，2001より作成）

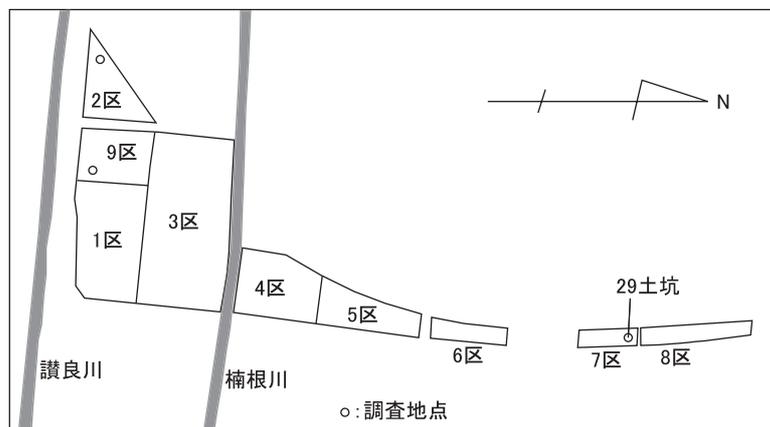
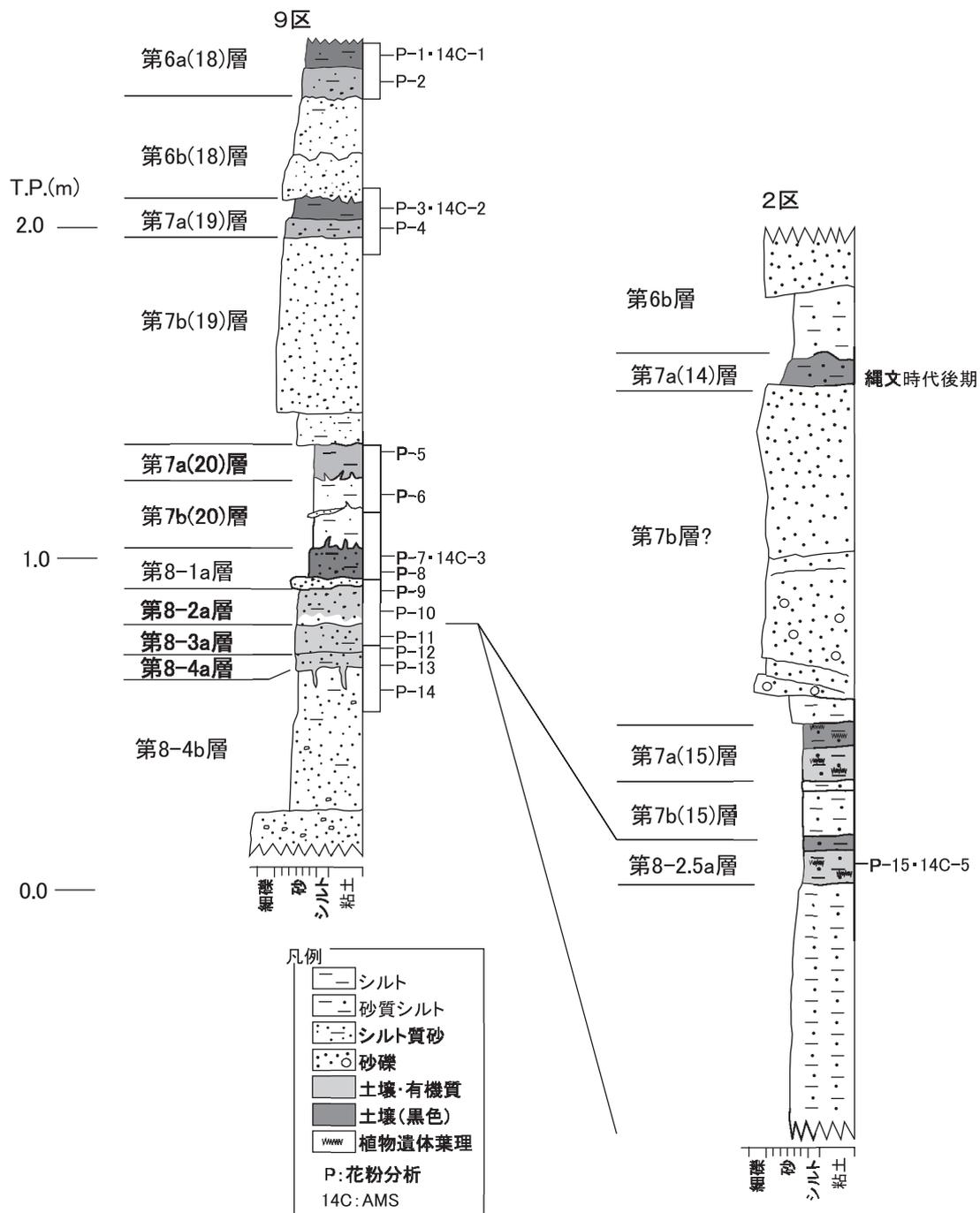


図91 調査地点の位置と層序

位層への侵食は認められない。植物根痕などの著しい生物擾乱や土壌発達による構造が顕著に認められる。1 cm以下の集合体ないし偽礫（ブロック土）が密に確認される。

第7 b (19) 層：灰色を呈し、水平層理・葉理をなす砂礫～細粒砂からなる。礫のサイズは、中礫～細礫からなり、上方細粒化が観察される。下部には灰色を呈し、見かけ上塊状をなす細粒砂混じり粘土質シルトが存在する。

第7 a (20) 層：暗灰色を呈し、水平葉理をなす細粒砂混じり粘土質シルトからなる。泥層中に細かな植物片が含まれる。植物根痕などの生物擾乱が認められる。

第7 b (20) 層：灰色を呈し、見かけ上塊状をなす細粒砂混じり粘土質シルトからなる。泥層中に細かな植物片が含まれる。また、細粒砂をレンズ状に挟在する。

第8 - 1 a 層：黒色を呈し見かけ上塊状をなす中粒砂混じり砂質シルトからなる。下位層への侵食は認められない。植物根痕などの著しい生物擾乱や土壌発達による構造が顕著に認められる。1cm以下の集合体ないし偽礫（ブロック土）が確認される。最下部には灰色を呈し、葉理をなす中粒砂からなる。植物根痕などの生物擾乱が確認される。

第8 - 2 a 層：灰色～暗灰色を呈するシルト混じり中粒砂～細粒砂からなる。植物根痕などの著しい生物擾乱や土壌発達による構造が顕著に認められる。1 cm以下の集合体ないし偽礫（ブロック土）が確認される。

第8 - 3 a 層：暗灰～黒色を呈し見かけ上塊状をなす細礫混じりシルト質細～中粒砂。下位層への侵食は認められない。植物根痕などの著しい生物擾乱や土壌発達による構造が顕著に認められる。

第8 - 4 a 層：灰色を呈する際礫混じりシルト質細粒砂。上方細粒化がよく観察される。上部は樹木の植物根痕などの著しい生物擾乱が顕著に認められる。

第8 - 4 b 層：灰色を呈し、中礫・細礫・極粗粒砂からなる砂礫からなる。クラストサポート。

(2) 2区調査地点

本調査地点の堆積層の層相および層序対比について発掘調査時の所見に基づいて記載する。

第6 b 層：灰色を呈する中粒砂～粗粒砂～砂質シルトからなる。

第7 a (14) 層：黒色を呈し見かけ上塊状をなす中粒砂混じり砂質シルトからなる。下位層への侵食は認められない。植物根痕などの著しい生物擾乱や土壌発達による構造が顕著に認められる。

第7 b 層?：灰色を呈し層理・葉理をなす礫混じり砂。おもに中粒砂～極粗粒砂からなる。

第7 a (15) 層：灰～暗灰色を呈し、層理・葉理をなす砂質～砂質シルトからなる。植物遺体の葉層を挟在する。

第7 b (15) 層：灰色を呈し、層理・葉理をなす砂質～砂質シルトからなる。

第8 - 2.5 a 層：灰～暗灰色を呈し、層理・葉理をなす砂質～砂質シルトからなる。植物遺体の葉層を挟在する。植物根痕などの生物擾乱や土壌発達による構造が認められる。層位的には9区第8 - 2 a 層と第8 - 3 a 層の間の層準に対比される。

第8 - 2.5 b 層：灰色を呈する砂質シルトからなる。

2. 試料

分析は9区では、縄文時代の古土壌3層準それぞれについて、年代測定用試料3点（上位より¹⁴C-1、¹⁴C-2、¹⁴C-3）を採取し、分析を行う。また花粉分析用試料は上層で2点（1-2）、中層で2点（3-4）、下層で10

点(5-14)を採取し、分析を行う。2区では、植物遺体葉理を狭在する砂質泥堆積物から年代測定用試料1点(^{14}C -5)と花粉分析用試料2点(15-16)を採取し、分析する。7区で検出された29土坑中の炭化物に関しては年代測定(^{14}C -4)と樹種同定を行う。また、5区で検出された立木1点については、樹種同定を実施する。

また、2区で検出されている植物遺体の葉理を伴う堆積物についても年代測定と花粉分析を行い、堆積物の時代観や古植生に関する情報を得る。また5区で検出された立木の樹種同定、7区で検出された29土坑中の炭化物の樹種同定・年代測定も併せて実施する。

3.分析方法

3-1.放射性炭素年代測定

(1) 前処理と測定過程

試料は、前処理として、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去を行う。前処理後、以下の化学処理を行う。

AAA処理(酸・アルカリ・酸処理)

HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去

NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去

HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去

酸化($\text{C} \rightarrow \text{CO}_2$)

試料をバイコール管に入れる。1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を同じバイコール管に入れる。管内を真空にして封じきり、 500°C (30分) 850°C (2時間)で加熱する。

精製($\text{CO}_2 \rightarrow \text{CO}_2$)

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。

還元($\text{CO}_2 \rightarrow \text{C}$: グラファイト)

真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で10時間以上加熱する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用した。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。なお測定については、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 測定結果

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、BPとはbefore presentの略とされるが、before physicsの簡略形とも言われている(中村,1999,木庭,2000)。誤差として表現される \pm 以下の数値は、年代値の標準偏差である(木庭,2000)。年代値の誤差とは確率的な意味をもち、誤差($\pm 1\sigma$)である場合、まったく同様な測定を繰り返したとき、誤差範囲内に入る確率が68.3%であることを意味する(中村,2001)。

暦年較正（標準偏差:One Sigmaに相当）については、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。暦年較正年代値とは、¹⁴C放射年代と樹木年輪年代との対応データを用いて計算された年代値である（中村,2001）。¹⁴C年代測定では、大気中の放射性炭素年代濃度が過去数万年にわたって変化しないことが前提の一つとなっているが、放射性炭素年代濃度は過去2万年余りの間でも変動していることが判明している（木庭,2000）。よって、¹⁴C年代値については、基準年（0BP=AD1950）を単純にずらすだけでは暦年代へ変換することが不可能である（中村,1999,2001）。このため、歴年代に近い年代を求めようとする場合には、過去の放射性炭素年代濃度の変化が記憶されている樹木年輪の¹⁴C放射年代と年輪年代の対応データを参照する必要がある（木庭,2000）。本報告で使用しているStuiver et al（2005）の暦年較正曲線は、樹木年輪と年輪でカーブ出来ない年代範囲については高精度質量分析計によるサンゴのトリウム²³⁰Th/²³⁴U年代の成果や海底堆積物の縞模様を計数を用いて作成されている（木庭,2000,中村,2001）。

3-2.花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3-3. 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。一方炭化材は、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

4. 結果

4-1. 放射性炭素年代測定結果

結果を表4に、暦年較正結果を表5に示す。

表4に記載される補正年代とは、測定試料の炭素同位体分別の補正を行った年代値のことである。炭素同位体分別の補正とは、試料によって異なる $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を $^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値=-25‰に規格化することを指す（中

表4 放射性炭素年代測定結果

試料番号	地点等	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
¹⁴ C-1	9区断面	腐植質土壌	3,620±40	-20.72±0.81	3,550±40	IAAA-41047
¹⁴ C-2	9区断面	腐植質土壌	3,920±40	-19.61±0.74	3,830±40	IAAA-41048
¹⁴ C-3	9区断面	腐植質土壌	3,340±40	-24.46±0.80	3,330±40	IAAA-41049
¹⁴ C-4	7区29土坑	炭化材	4,250±40	-25.25±0.82	4,250±40	IAAA-41050
¹⁴ C-5	2区断面	植物遺体	4,380±40	-27.61±0.89	4,420±40	IAAA-41051

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表5 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
		cal BC	cal BC	cal BP	cal BP		
¹⁴ C-1	3,621± 38	cal BC 2,030	- cal BC 1,987	cal BP 3,980	- 3,937	0.405	IAAA-41047
		cal BC 1,984	- cal BC 1,921	cal BP 3,934	- 3,871	0.595	
¹⁴ C-2	3,916± 37	cal BC 2,467	- cal BC 2,398	cal BP 4,417	- 4,348	0.669	IAAA-41048
		cal BC 2,382	- cal BC 2,346	cal BP 4,332	- 4,296	0.331	
¹⁴ C-3	3,336± 37	cal BC 1,683	- cal BC 1,667	cal BP 3,633	- 3,617	0.143	IAAA-41049
		cal BC 1,662	- cal BC 1,647	cal BP 3,612	- 3,597	0.148	
		cal BC 1,643	- cal BC 1,600	cal BP 3,593	- 3,550	0.409	
		cal BC 1,565	- cal BC 1,531	cal BP 3,515	- 3,481	0.300	
¹⁴ C-4	4,247± 38	cal BC 2,906	- cal BC 2,868	cal BP 4,856	- 4,818	0.677	IAAA-41050
		cal BC 2,804	- cal BC 2,782	cal BP 4,754	- 4,732	0.251	
		cal BC 2,768	- cal BC 2,763	cal BP 4,718	- 4,713	0.046	
		cal BC 2,716	- cal BC 2,713	cal BP 4,666	- 4,663	0.026	
¹⁴ C-5	4,377± 42	cal BC 3,077	- cal BC 3,073	cal BP 5,027	- 5,023	0.032	IAAA-41051
		cal BC 3,023	- cal BC 2,919	cal BP 4,973	- 4,869	0.968	

RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用計算には表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

村,2001)。同位体分別とは、生物中の放射性炭素¹⁴C濃度については大気のその濃度に比べ少なくなる可能性が高く、その程度が同属であっても種によって異なったり、同じ個体でも部位によって異なったりする現象について呼ばれる。また $\delta^{13}\text{C}$ は、¹³C/¹²C を化石PDB (炭酸カルシウムからなる白亜紀の米国南カロライナ州Peedee層産箭石<やいし:Belemnite>の鞘) の比で標準化した値である (木庭,2000)。

表5に示した相対比は、1 σ の範囲内に存在する暦年代校正值の確からしさを示す確率である。その数値は百分率によって表現され、その数値が大きいほど確率が高いと判断することができる。なお、暦年較正年代値に用いられているCalは、calibratedを意味している (木庭,2000)。暦年較正年代値については、測定試料の歴史上の意義を示すAD、BCで表される歴史年代 (historical dates) と別物であることに留意する必要があるが指摘されている (中村,1999)。

4-2.花粉化石

結果を表6、図92に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。いずれの試料においても花粉化石の保存状態は悪く、全体的に破損あるいは溶解しているものが多く、同定不能の花粉が多く認められる。これらに関しては、正確な個数の把握が困難であることから、結果表より除いてある。また、ほとんどの試料において、炭化あるいは弱分解した微細植物片が多産する。以下、地点別に述べる。

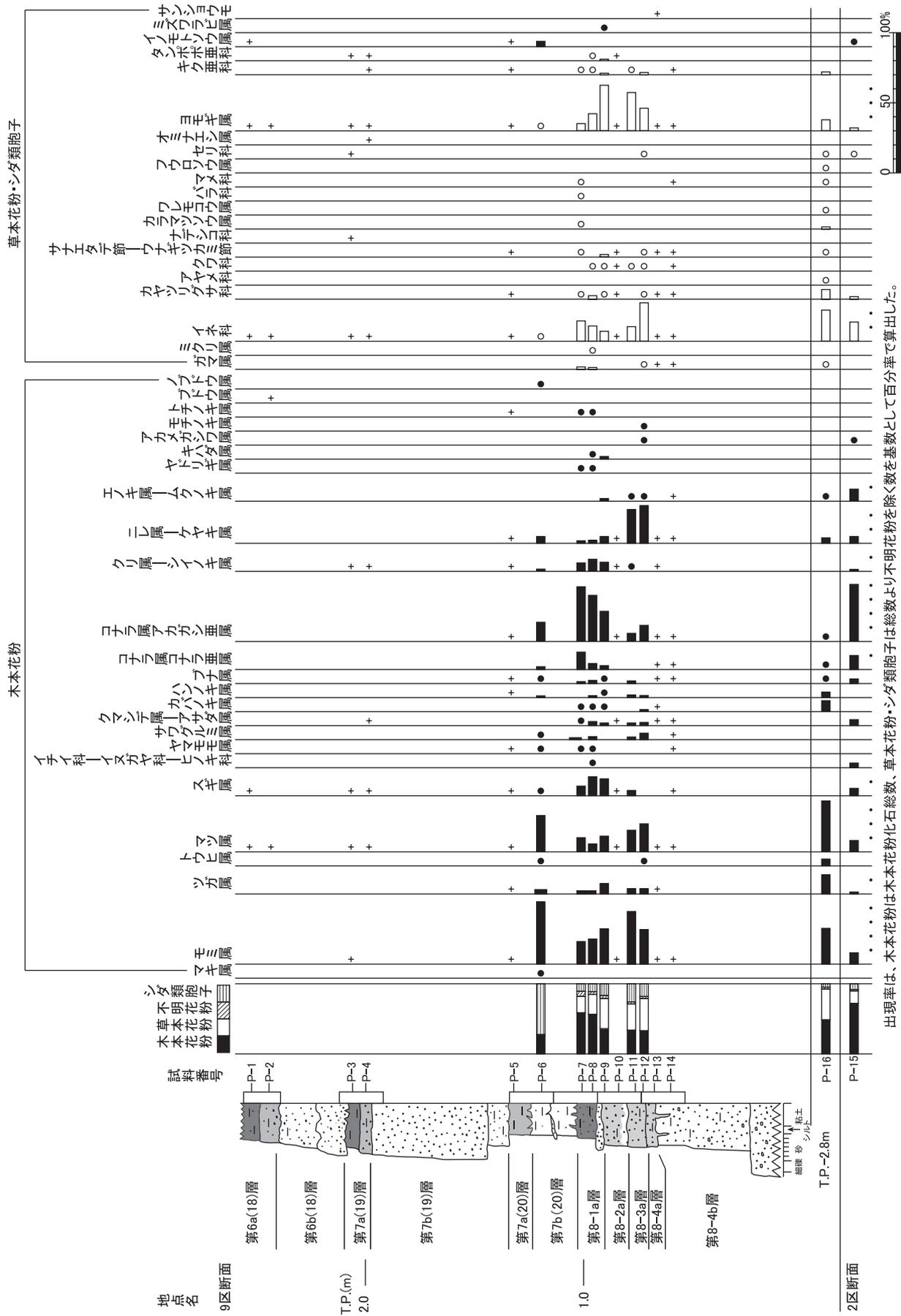
9 区断面

試料番号P-1~P-5、P-10、P-13、P-14では花粉化石の産出状況が悪く、定量解析が行えるだけの個体数を得ることができなかった。検出された花粉についてみると、木本花粉ではモミ属、マツ属、スギ属などが、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが多く認められる。

試料番号P-6ではシダ類胞子の占める割合が高い。花粉化石はほとんどが木本花粉により占められており、モミ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属が多産する。その他ではツガ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉はイネ科、ヨモギ属がわずかに検出される。試料番号P-7~P-9についてみると、木本花粉ではモミ属、アカガシ亜属が多く産出し、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属-シイノキ属、ニ

表6 花粉分析結果

種類	上段:調査区 下段:試料番号															2区
	9区															
	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10	P-11	P-12	P-13	P-14	P-16	
木本花粉																
マキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モミ属	-	-	2	-	17	113	35	25	27	14	39	32	28	17	26	
ツガ属	-	-	-	-	4	8	5	3	8	-	4	5	1	-	14	
トウヒ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	5	
マツ属単維管束亜属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属複維管束亜属	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属(不明)	5	1	2	1	17	64	20	8	12	3	16	26	7	2	37	
スギ属	3	-	2	1	2	1	15	19	13	3	4	-	-	2	-	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒギ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	
サウグルミ属	-	-	-	-	-	2	3	3	-	-	2	6	-	2	-	
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	2	-	-	2	4	2	1	2	3	1	1	-	
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	2	2	-	8	
ハンノキ属	-	-	-	-	1	3	-	2	1	-	2	2	-	-	4	
ブナ属	-	-	-	-	2	2	3	3	1	-	2	-	1	2	1	
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	5	27	6	3	-	-	-	2	2	1	
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	2	35	85	46	23	4	6	15	6	3	1	
クワ属-シイノキ属	-	-	1	1	2	4	13	12	7	1	1	-	1	-	-	
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	1	12	4	3	5	3	25	35	9	11	4	
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	1	-	4	1	
ヤドリギ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
キハダ属	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
トチノキ属	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ノブドウ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉																
ガマ属	-	-	-	-	-	-	6	3	-	-	-	1	1	3	1	
ミクリ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	2	2	14	4	10	2	50	26	20	16	31	104	46	46	45	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	7	-	3	6	2	1	-	1	1	3	14	
アヤメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	2	2	1	1	1	-	2	-	
サナエタテ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	2	-	2	-	5	1	-	3	1	2	1	
ナデシコ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カラマツノキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	
ワレモコウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
バラ科	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
マメ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	
フウロノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
セリ科	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2	
オミナエシ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	34	21	31	21	3	3	18	29	92	66	81	61	17	23	16	
キク亜科	-	-	-	1	1	-	3	1	3	-	1	6	-	2	4	
タンポポ科	-	-	1	1	-	-	-	2	3	1	-	-	-	-	-	
不明花粉	-	2	10	4	5	6	27	10	13	4	9	11	4	12	6	
シダ類孢子																
イノモトノキ属	2	-	-	-	2	37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズワヅ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
他のシダ類孢子	36	19	10	5	94	665	40	28	48	27	79	71	22	16	10	
合計																
木本花粉	8	2	7	5	50	255	218	140	107	29	104	130	58	47	102	
草本花粉	36	23	50	28	23	5	86	70	127	86	114	179	66	82	91	
不明花粉	0	2	10	4	5	6	27	10	13	4	9	11	4	12	6	
シダ類孢子	38	19	10	5	96	702	40	28	49	27	79	71	23	16	10	
総計(不明を除く)	82	44	67	38	169	962	344	238	283	142	297	380	147	145	203	



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図92 花粉化石群集の層位分布

レ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が多く産出する。また、ガマ属ミクリ属、ミズワラビ属など、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も認められる。

試料番号P-11、P-12の木本花粉では、モミ属、マツ属、ニレ属-ケヤキ属が多く産出し、ツガ属、アカガシ亜属などを伴う。草本花粉はイネ科、ヨモギ属が多く産出し、ガマ属などもわずかながら検出される。

2 区断面

9区断面の試料に比べると保存状態は良好であり、残渣中には未分解～弱分解の微細植物片が多く、炭化植物片は少ない。試料番号P-15は木本花粉の割合が高く、アカガシ亜属が最も多く産出し、モミ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属なども検出される。試料番号P-7～P-9についてみると、木本花粉ではモミ属、アカガシ亜属が多く産出し、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属-シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が多く産出する。また、ガマ属、ミクリ属、ミズワラビ属など、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も認められる。

試料番号P-11、P-12の木本花粉では、モミ属、マツ属、ニレ属-ケヤキ属が多く産出し、ツガ属、アカガシ亜属などを伴う。草本花粉はイネ科、ヨモギ属が多く産出し、ガマ属などもわずかながら検出される。

4-3. 樹種同定

分析の結果、5区で検出された立木はコナラ亜属クヌギ節、7区で検出された焼土坑から検出された炭化材の樹種はコナラ亜属コナラ節である。以下に各種類の解剖学的特徴を記載する。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

5. 考察

5-1. 9区深堀地点

(1) 放射性炭素年代および生層序対比による堆積層の年代について

9区深堀地点の堆積層は、先述したように層相から氾濫堆積物からなることが推定される。氾濫堆積物中には、顕著な土壌発達層準が存在し、その古土壌層の放射性炭素年代測定値は、補正年代値で第6a(18)層上部が 3620 ± 40 yrsBP、第7a(19)層上部が 3920 ± 40 yrsBP、第8-1a層が 3340 ± 40 yrsBPを示した。暦年較正值は約3,500～4,400 cal.BPの範囲内である。年代値の新旧が層序と一致していないが、古土壌のような腐植質堆積物の年代測定値は、二次的な古い炭素の影響を受け、年代値の変動幅が大きいとされている。本地点の結果も、そのような影響による可能性がある。

考古遺跡における縄文時代の放射性炭素年代測定値は、谷口（2001）が関東・中部地方で行われた放射性炭素年代測定値に基づいて、縄文時代各時期の年代値を推定している（暦年較正年代値は、 2σ に相当する年代値を示している）。それによると、縄文時代前期が6300～4800yrsBP（暦年較正值：5300～3630/3550calBC）、縄文時代中期が4800～4050yrsBP（暦年較正值：3630/3550～2580/2510calBC）、縄文時代後期が4050～3000yrsBP（暦年較正值：2580/2510～1260/1230/1220calBC）、縄文時代晩期が3000～2400yrsBP（暦年較正值：1260/1230/1220～410calBC）となることを暫定的に推定している。この年代値と比較すると、今回の年代値は、いずれも縄文時代後期の範囲に収まることになる。ただし、関東・中部地方を中心としたデータとの比較であり、今後、近畿地方におけるデータの蓄積をもって再評価していく必要がある課題である。

一方、花粉化石群集の層位変化をみると、第8-3a層より下位ではニレ属-ケヤキ属が多産するのに対し、その直上の第8-2a層より上位ではカシ類が多産する組成を示す。近畿地方では、縄文海進最盛期以降になると、落葉樹が急速に減少し、アカガシ亜属を中核に、シイノキ属、ヤマモモ属、マキ属などいわゆる「照葉樹林」を形成する樹種群の花粉が優勢となることが確認されている（前田,1984;古谷・田井,1993）。この常緑広葉樹が優勢になる時期への移り変わりは、アカガシ亜属とコナラ亜属の出現率が逆転するアカホヤ火山灰の降灰後であり（松江・七山,2001）、常緑広葉樹林の拡大は約5000～4000年前に最盛期となることが指摘されている（高原,1998）。今回の場合はP-9より上位でアカガシ亜属が極大となるが、これは土壌化している層準の放射性炭素年代測定値と併せてみると調和的である。

以上の結果から、調査地点の第8-1a層より上位の古土壌を含む堆積物は縄文時代後期頃に形成された可能性が高いと判断される。当時の調査地点は、安定した土壌形成が行われる期間を挟在する氾濫堆積物が累重する氾濫原の堆積環境であったことが推定される。また、標高1.0mより下位の堆積物は、花粉化石群集が地域性をもった花粉化石群集であるとするれば、生層序学的に約5000～4000年前より古い時期に形成された堆積物ということになるが、後述するように本層準で多産するニレ属-ケヤキ属は局地的な植生を反映している可能性があり、今後、より下位層準の年代測定および讚良郡条里遺跡全調査区における堆積層の層相変化、それに基づく地形発達過程を踏まえ、再評価する必要がある課題である。

（2）花粉化石群集からみた古植生

本地点における花粉化石の産状をみると、第8-1a層の古土壌より下位層準では比較的多産するが、それより上位では花粉化石の保存状態が悪く、花粉化石の産出が少なかった。また、多産する層準でも破損ないし溶解した花粉化石が認められる。花粉・胞子の分解作用の要因としては、科学的・生物的・物理的な作用が考えられるが、今回の場合は、保存状態からいずれの作用の影響も要因として考えられる。花粉・胞子の酸化作用に対する抵抗力は、花粉・胞子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致し（Havinga,1964）、花粉に比較してスポロポレニンの量が多いとされるシダ類胞子は風化作用の影響を受けても化石として残りやすく（Brooks & Shaw,1971）、花粉化石でも外膜が厚いものなどは残りやすいとされる（徳永・山内,1971など）。このように花粉化石は好气的条件下では風化作用により分解消失することが知られている。今回の花粉化石群集は全体的にシダ類胞子や針葉樹花粉化石が多いが、これらは風化に強く残りやすい種類であることから相対的に割合が高くなっている可能性がある。また、草本花粉で多産するイネ科やヨモギ属は、風媒花で花粉生産量が多いことに加え、花粉外膜は厚くて形が特徴的なため風化が進んでも同定しやすいことから、残りやすい種類の割合が増加しているとみられる。これらの保存状態を考慮しながら、古植生について検討する。

第8-3a・8-4a層の古土壌層を中心に確認された花粉化石群集は、保存状態から風化に対する抵抗性が強い針葉樹花粉などが過大評価されている可能性がある。ただし、風化に弱い広葉樹花粉の種類も比較的多く確認されることなどから、当時の植生を概ね反映しているものと判断される。

本層準の花粉化石群集は、モミ属・マツ属の針葉樹とニレ属-ケヤキ属を中心とした落葉広葉樹の種類が多産しており、常緑広葉樹のアカガシ亜属を伴う組成を示している。このうちニレ属-ケヤキ属は、大阪湾岸域で行われた完新統の花粉分析結果には例をみないほどの多産傾向を示している。生駒山西麓域では、このような落葉広葉樹の目立つ花粉化石群集は鬼虎川遺跡35次のアカホヤ火山灰を挟在する縄文時代早期の層準において確認されている（パリノ・サーヴェイ,1986）。ただし、鬼虎川遺跡ではニレ属-ケヤキ属などに随伴して、落葉広葉樹のコナラ亜属も比較的多産しているが、今回の結果ではコナラ亜属が全く確認されず、随伴する種類構成も単調である、などの違いが確認される。特にコナラ亜属花粉は河内平野で行われた完新統の花粉化石群集において随伴種として必ず確認される種類であり、今回の花粉群集が特異なものであることが認識される。このような特異な花粉化石群集が確認された原因としては、堆積物の堆積環境の違いに起因する可能性が高い。鬼虎川遺跡の群集は海生堆積物で確認されたものであり、花粉化石は後背の陸域から堆積物とともに搬入されたもの、生駒山地やその遠方より飛来したものなど広域から供給されたものに由来するのに対して、本遺跡の花粉群集は古土壌で確認されたものであることから、調査地点近辺の植生より供給されたものの影響を強く反映しているように思われる。

一般に花粉分析が行われる場所は森林に接した池や沼、湿原などの閉鎖的な堆積盆で行われており、その結果の解釈を行う上での基礎研究も同様な堆積環境を示す場所の成果が主体である。例えば、塚田(1978)では、そのような堆積盆における花粉化石群集を構成する各種類の出現頻度は、母植物における花粉生産量や散布様式などの違い、堆積環境の違いによる化石群集の形成過程の違いなどによって、実際の植生とは異なるものとなっており、花粉生産量と植生との対応関係について、実際の植生より過大に表現する花粉群（マツ属・ハンノキ属・カバノキ属・ハシバミ属など）、実際の植生とほぼ同率に表現する花粉群（スギ、トウヒ属、モミ属、ツガ属、ブナ属、サワグルミ属、コナラ亜属、ニレ属、クマシデ属など）、実際の植生より過小に表現する花粉群（カラマツ属、シナノキ属、ヤナギ属、カエデ属および虫媒種など）の3群に区分できることを指摘している。今回の場合、調査地点の堆積環境が開放系で、かつ土壌発達が行われる状況で形成されたものであることから、上記の湖沼などの例を適用することはできない。土壌の花粉分析研究は、日本では森林土壌を中心にした成果がある（三浦,1990、三宅・中越,1998など）。それらによると、森林土壌中の花粉分析結果は局地的な植生を強く反映し、調査地域の森林群落の動態を把握する上で有効であることを指摘している。今回の調査地点の土壌が森林土壌に由来するかは判断が付かないが、花粉化石群集の層位的な変遷が全体的にばらついていることを合わせ考えると、局地的な植生を強く反映した群集である可能性が高く、今回のニレ属-ケヤキ属の多産もまた、局地性を強く反映した結果と考えられる。

したがって、当時の調査地点周辺にはニレ属-ケヤキ属やサワグルミ属・クマシデ属・トチノキ属といった落葉広葉樹の種類が分布し、群落を形成していた可能性が推定される。これらの要素は河畔林などを構成する要素でもあり、調査地点の堆積環境変遷とも同調する結果といえる。また、常緑広葉樹のアカガシ亜属や多産する針葉樹についても調査地点周辺の森林植生を構成する要素であったと推定される。これまで大阪湾岸域で実施された花粉分析結果では、アカガシ亜属の増加より遅れて、温帯性針葉

樹の花粉化石が増加し（高原,1999）、顕著となるのは縄文時代晩期以降である（那須,1989）とされる。ただし、今回の結果をみる限り、アカガシ亜属が増加する以前に温帯性針葉樹要素が多産していることになる。これは花粉化石の保存の問題を考慮したとしても、当時の山地斜面から扇状地における森林植生の構成要素として、これら針葉樹の種類が普通に認められたことを示す結果として重要である。また、イネ科やヨモギ属などの草本花粉の出現頻度が高いことから、調査地点が森林植生に覆われるような場所ではなかったことが推定される。

このように古土壌における花粉分析結果はより小さな空間スケールでの植生の動態を把握する上で有効であることが窺える。ただし、土壌の場合、その形成期間や堆積物中での花粉化石の分解消失といった保存状態の問題もあり、これらを考慮した解釈が必要となってくる（三宅・中越,1998）。また、土壌発達は今回のような扇状地や山地斜面に限って起こっているものではなく、低地でも起こっている。河内平野に位置する池島遺跡で確認されている縄文時代晩期～弥生時代前期にかけて形成されている土壌（いわゆる4黒）などが相当する。これまで河内平野で行われてきた花粉分析結果には土壌発達層準の成果も多いことが認識されることから、各地点の花粉分析成果について、このような観点からの再解釈が必要と思われる。

9区の第8-2a層と第8-3a層の間の層準に相当する、2区深堀地点の放射性炭素年代測定値で 4380 ± 40 yBPを示す層準の花粉化石群集は、アカガシ亜属が優占することが特徴である。本層準は扇状地扇の前面に広がる低地の堆積物と考えられる。したがって、花粉化石群集が反映している植生は後背地の比較的広い範囲を想定しておく必要があり、4300年前頃の調査地点近辺には照葉樹林要素であるアカガシ亜属が分布域を拡げていたことが推定される。

第8-2a層と第8-1a層の古土壌層準では、アカガシ亜属が多産する組成に変化する。この時期には調査地点近辺において照葉樹の主要素であるカシ類・シイ類などが分布するようになったことが示唆される。これらの常緑広葉樹は陰樹であり、植生遷移における極相林を構成する要素であり、安定した土地条件に林分を形成する。このこと、本層準における古土壌が下位層準の古土壌よりも顕著な土壌構造が確認されることは同調している結果といえる。安定した土壌発達は調査地点近辺における照葉樹林の分布拡大を促した可能性が高い。当時の照葉樹林要素としてヤマモモ属なども認められたものと判断される。先述の鬼虎川遺跡（1998）のほか、北島遺跡（1996a）でも縄文時代前期以降に照葉樹林が成立していたことを示唆する結果が確認されている。今回の結果とも同調する結果とみさせるが、花粉化石群集における草本花粉の出現頻度を比較した場合、明らかに本地域の方が草本花粉の占める割合が高いことが窺える。この違いは、調査地点の地形発達過程の違いを反映している可能性が高い。なお、いわゆる「照葉樹林」には上記にあげた種類の外、クスノキ科も重要な要素としてあげられる。ただし、クスノキ科は花粉外膜が極めて薄く（Fegri&Iversen,1989）、化石として検出された事例はない。クスノキ科の種実は堅いものが多いので検出される可能性は高く、またクスノキ科には葉に植物珪酸体を作るものがある（杉山,2000）。今後は植物珪酸体分析・種実化石分析も平行して行うことにより、当時の植物相に関する情報を得ていく必要があるだろう。なお、第6a層上面で確認された埋没樹はコナラ亜属クヌギ節であったことから、土壌形成期にはクヌギないしアベマキが分布していたことが窺える。

標高-2.8mの有機質シルト層中の花粉化石群集は、モミ属・ツガ属・トウヒ属・マツ属といった針葉樹の種類が多産することが特徴である。このほかカバノキ属・ハンノキ属などの落葉広葉樹の種類を伴うが、種類構成は単調である。本層準の年代については現時点では不明であるが、下記するような暖温帯

性の種類は確認されない。このような花粉化石群集は、神並遺跡（パリノ・サーヴェイ,1996b）や西ノ辻遺跡（パリノ・サーヴェイ,1996c）で確認されている最終氷期の堆積物中の花粉化石群集や、讃良郡条里条理遺跡03-4調査区で確認されているATを挟在する堆積物中で確認されている花粉化石群集（未公表）などで確認される種類構成と類似する。このことから最終氷期の植生を反映している可能性が高いと判断される。

5-2 7区29土坑の放射性炭素年代

7区29土坑内より出土した炭化材の放射性炭素年代は、 4250 ± 40 yBPを示している。先述の谷口（2001）のによる縄文時代の年代値と比較すると、縄文時代中期後半の年代に類似することになる。本遺構からは船元式の土器が出土しており、年代測定結果とは同調的である。炭化材の樹種はコナラ亜属コナラ節であったことから、この時期の森林植生を構成する要素としてコナラ節が分布していたことが推定される。

引用文献

Brooks, J. & Shaw, G. 1971, Recent developments in the chemistry, biochemistry, geochemistry and post-tetrad ontogeny of sporopollenins derived from pollen and spore exines. "Pollen: Development and Physiology" (ed. Heslop-Harrison, J.) 99-114, Butterworths, London.

Habinga, A. J. 1964, Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. *Pollen et Spores*, 6: 621-635.

前田 安夫, 1984, 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷. *日本植生誌 近畿*, 宮脇 昭編著, 至文堂, 87-99.

松江 実千代・七山 太, 2001, 神戸市和田岬沖コアよりみた完新世中～後期における植生変遷, *日本花粉学会第42回大会講演要旨*, 14.

杉山 真二, 2000, 植物珪酸体（プラント・オパール）分析. *考古学と自然科学 3 考古学と植物学*, 辻 誠一郎編著, 同成社, 189-213.

Knut Feagri and Johs. Iversen, 1989, *Textbook of Pollen Analysis*, The Blackburn Press, 328p.

古谷 正和・田井 昭子, 1993, 大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花化石. *大阪層群*, 市原 実編著, 創元社, 247-255.

高原 光, 1996, 近畿地方の植生史. *図説 日本列島植生史*, 安田 喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 114-137.

徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・孢子. *化石の研究法*, 共立出版株式会社, 50-73.

木庭元晴, 2000, 「畿内およびその周辺の考古遺物・遺跡の空間的・時系列的データベース作成-考古編年による放射性炭素年代軸の確立-」. *関西大学文学部*, 83p.

中村俊夫（1999）放射性年代測定. 長友恒人編, 「考古学のための年代測定学入門」, 古今書院, 2-36.

中村俊夫（2001）放射炭素年代とその高精度化. *第四紀研究*, 40, 445-459.

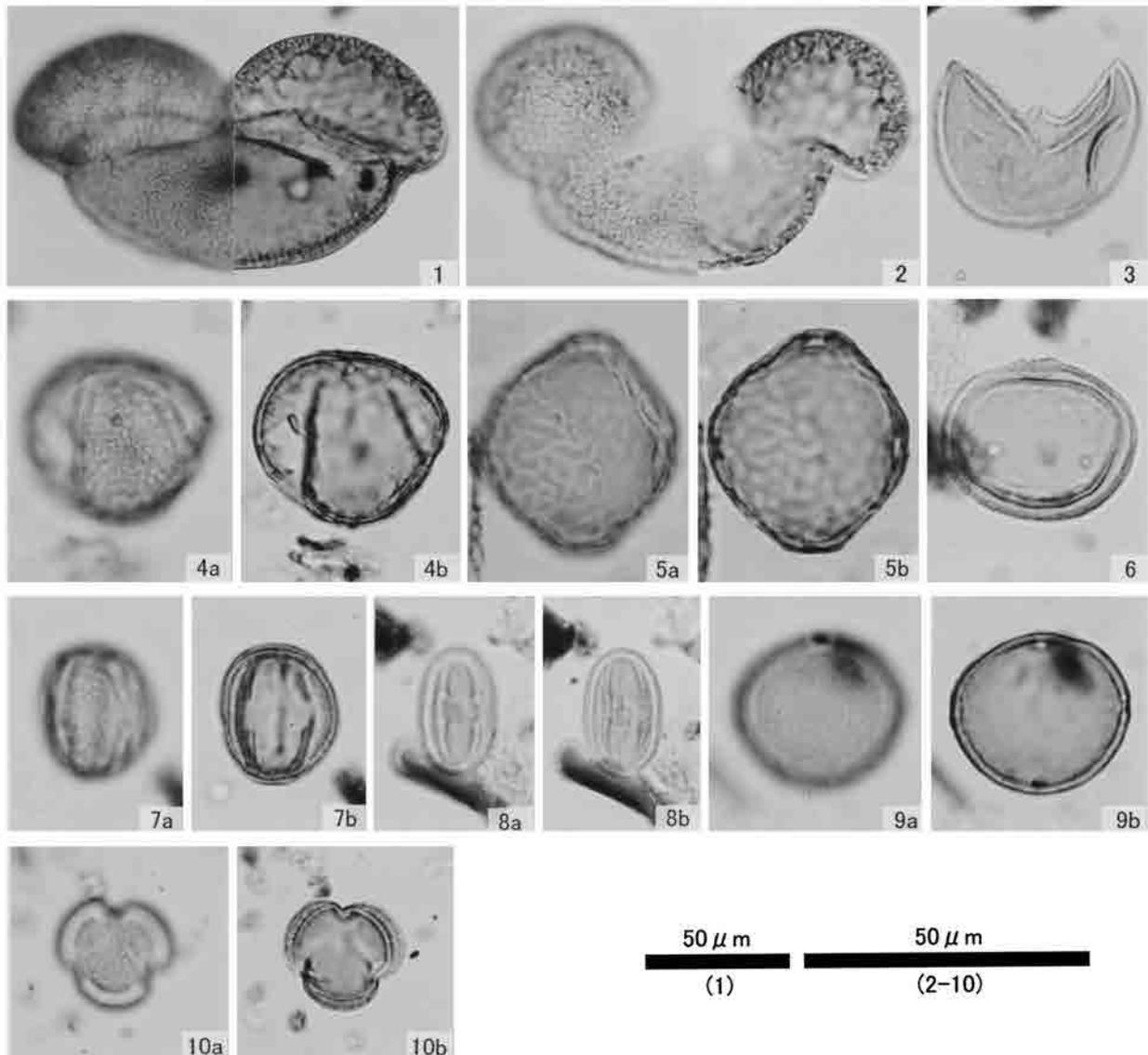
パリノ・サーヴェイ, 1996a, 3.3 珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元. 「北島遺跡の耕作地跡と古環境-寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第一次発掘調査報告書」, (財) 東大阪市文化財協会, 71-130

パリノ・サーヴェイ, 1996b, V. 自然科学分析. 「神並遺跡 X IV - 第二阪奈道路建設に伴う神並遺跡第14次発掘調査報告書」, (財) 東大阪市文化財協会, 70-89.

バリノ・サーヴェイ,1996c,西ノ辻遺跡32次調査区の古環境復元.「西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告」,(財)東大阪文化財協会,71-130

三浦 修,1990,森林土壌の花粉分析-方法論的問題と森林群落の動態研究への適用.植生史研究,5,3-18.

三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,1,15-30.



- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1. モミ属(P-6) | 2. マツ属(P-6) |
| 3. スギ属(P-7) | 4. コナラ属コナラ亜属(P-15) |
| 5. ニレ属-ケヤキ属(P-15) | 6. イネ科(P-7) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(P-6) | 8. クリ属-シイノキ属(P-7) |
| 9. エノキ属-ムクノキ属(P-15) | 10. ヨモギ属(P-16) |

図93 花粉化石

2. 植物珪酸体分析

株式会社パレオ・ラボ

鈴木 茂

1. はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。この珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたものを植物珪酸体と言ひ、機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などがある。そのうち機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。このような研究成果から、近年植物珪酸体分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。

讚良郡条里遺跡では古墳時代前期～中期の水田畦畔と推定できる遺構が検出されており、このことから推察される水田稲作について検証する目的で遺跡より採取された土壌試料について植物珪酸体分析を行った。以下にその結果・考察について示し、得られた機動細胞珪酸体から稲作の有無を中心に遺跡周辺のイネ科植物について検討した。

2. 試料と分析方法

分析用試料は4区調査区北壁より採取された8試料（図94）と、97区画および98区画のそれぞれ15a層1試料（計2試料）の総計10試料である。以下に各試料の土相について簡単に記す。

調査区北壁の試料1（11層）はにぶい黄褐色の極細砂～中砂で、平安時代の耕作土ではないかと考えられている。試料2（13層）は暗灰黄色の極細砂で、古墳時代中期から飛鳥時代ではないかと考えられている。試料3（14a層）は褐色の極細砂で、時代は同じく古墳時代中期から飛鳥時代ではないかと考えられている。試料4（14b層）は黄褐色の洪水砂（細砂～中砂）である。試料5（15a層）は黒褐色のシルト質細砂で、上面で水田畦畔を検出しており、時代は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられている。試料6（15b層）は黒褐色のシルト質細砂、試料7（16-1層）は黒色のシルト～細砂で、時代は弥生時代と考えられている。試料8（16-2層）は黒色のシルトから極細砂である。また試料9（97区画）や試料10（98区画）の15a層も黒褐色のシルト質細砂である。植物珪酸体分析はこれら10試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～

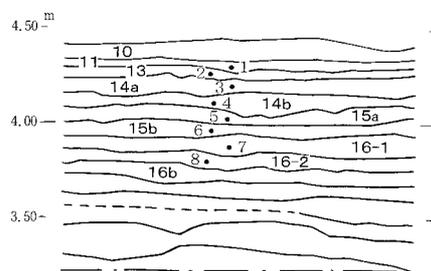


図94 試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準

表7 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数

試料番号	層位	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	11層	14,200	30,600	1,100	1,100	1,100	0	3,300	14,200
2	13層	30,300	38,100	2,200	0	0	1,100	1,100	12,300
3	14a層	9,000	30,500	3,400	1,100	2,300	0	2,300	6,800
4	14b層	900	5,600	0	0	0	0	3,700	1,900
5	15a層	5,600	32,800	3,400	1,100	6,800	1,100	9,000	14,700
6	15b層	6,500	17,400	2,200	0	3,300	1,100	5,400	4,400
7	16-1層	0	20,300	2,400	1,200	14,400	0	9,600	9,600
8	16-2層	0	14,100	0	1,200	12,900	1,200	4,700	7,000
9	15a層	3,500	13,900	3,500	0	5,800	0	2,300	2,300
10	15a層	2,200	6,700	1,100	0	7,800	0	3,300	2,200

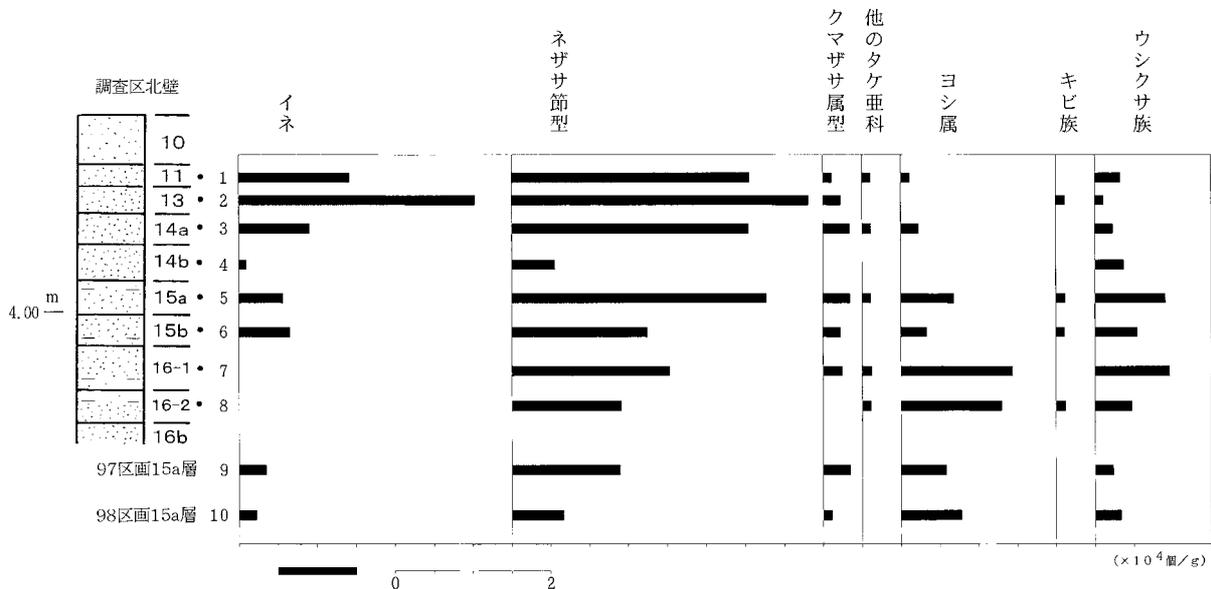


図95 機動細胞珪酸体分布図

30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により微細粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。

3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め(表7)、それらの分布を図95に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

調査区北壁：下部の2試料(7,8)を除く6試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数的には多くが5,000個以上で、最も多い試料2では30,000個を越え、少ない試料4では900個であった。イネ以外ではネザサ節型が最も多く、大まかな傾向としては上部に向かい増加し、その上部試料では30,000個を越えている。ヨシ属はイネが検出されていない下部2試料で10,000個以上と、機動細胞珪酸体の生産量が小さいヨシ属としては非常に高い数値を示している。ウシクサ族は中下部試料で10,000個弱とやや多

く検出されるが、上部では 3,000個前後に減少している。その他クマザサ属型やキビ族が若干検出されている。

97・98区画の15a層：両試料ともイネの機動細胞珪酸体が観察されたが、個数的には 3,000個前後である。最も多く検出されたのは試料9ではネザサ節型、試料10ではヨシ属となっており、その他クマザサ属型やウシクサ族が若干得られている。

4. 稲作について

上記したように調査区北壁試料では試料6（15b層）より上位でイネの機動細胞珪酸体が検出されており、試料4を除き5,000個以上を示している。ここで検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当たり 5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000個を目安に、イネの機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。本遺跡において水田畦畔と推定できる遺構が検出されている15a層の試料5では 5,600 個を示しており、上記に従うと稲作が行われていた可能性は高いと推察され、水田遺構の存在を支持する結果が得られたと判断されよう。また上位の平安時代の耕作土が考えられている11層（試料1）や13層（試料2）についても同様に稲作の存在が支持されたと判断されよう。

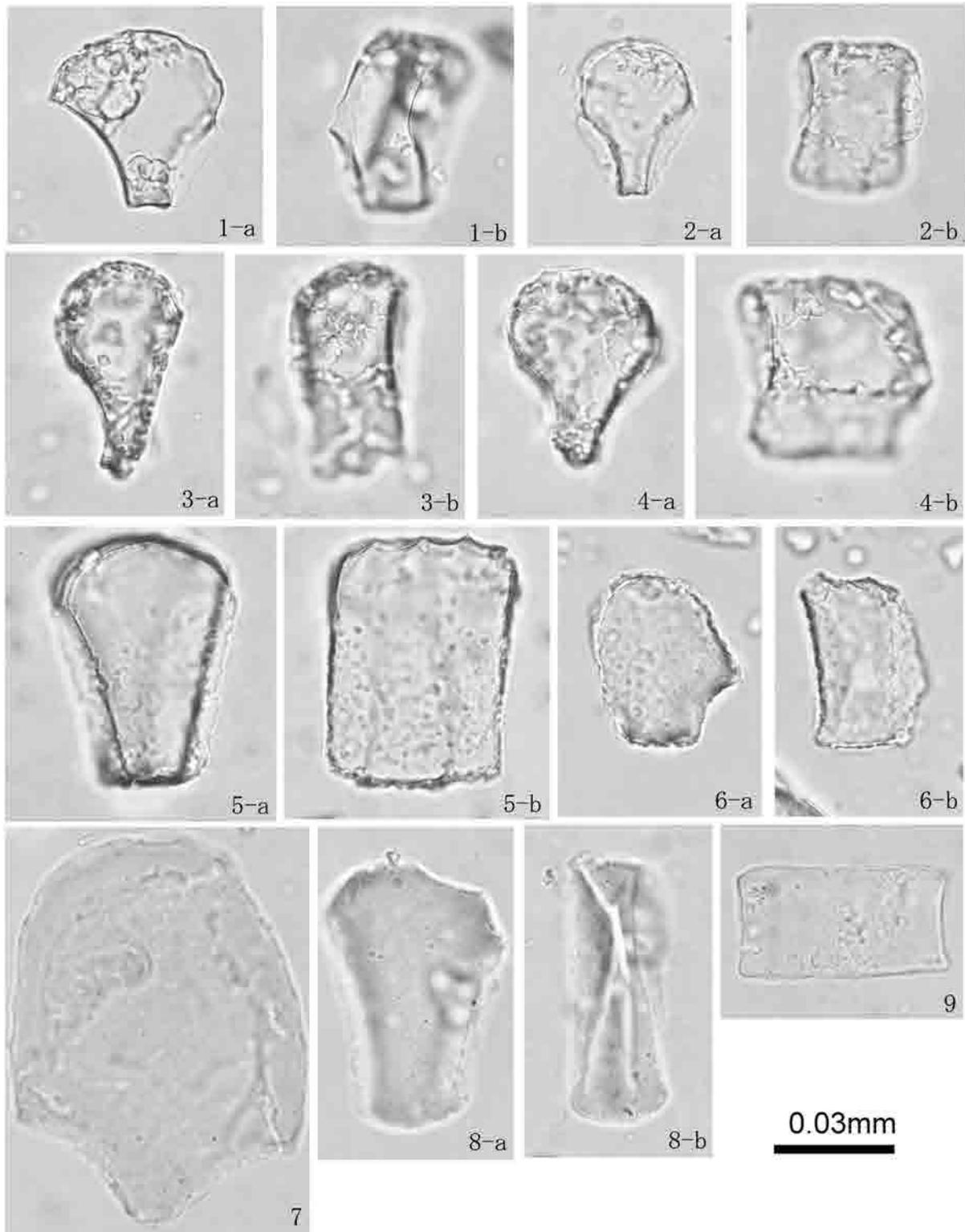
一方97・98区画の15a層（試料9,10）におけるイネの機動細胞珪酸体個数は 3,000個前後と上記の 5,000 個に達していない。これについて宮城県仙台市の富沢遺跡における分析結果をみると、水田跡の遺構検出面試料の平均が 3,000個とやや低く、その要因としてイネの機動細胞珪酸体密度が高い上部層が洪水によって流出したためではないかと推察されている（古環境研究所 1991）。讚良郡条里遺跡においても15a層の直上は洪水層（14b層）であることから、検出個数が小さい要因として富沢遺跡と同様にイネの密度が高いと推測される本来存在した上部層が洪水によって削られてしまっていることが考えられる。また耕作年数が短いなど何らかの要因でイネの機動細胞珪酸体密度が低かったことも考えられるのではないと思われる。こうしたことや調査区北壁試料では稲作を支持する個数が得られており、畦畔と推定できる遺構も検出されていることなどから97・98区画においても稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。

5. 遺跡周辺のイネ科植物

上記したように讚良郡条里遺跡では古墳時代前期～中期において水田稲作が行われるようになり、それ以前の弥生時代（16-1層）ではヨシやツルヨシといったヨシ属が多く生育しており、一部にはヨシ属の大群落が形成されていたとみられる。このヨシ原を古墳時代になって切り開き水田稲作が行われるようになったと考えられ、ヨシ原は急速に縮小したことが推測される。

最も多く検出されているネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）については開けた日のあたる場所での生育が考えられ、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）についても同様である。このネザサ節型のササ類については稲作の開始とともに急増しており、稲作にともなって古代人の活動が活発になり、それとともに住居周辺などに増えた空き地に侵入し、増加したものと推測される。なおケネザサは現在の関西の山麓や丘陵地に最も普通にみられるササである（北村・村田 1984）。

キビ族について、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培植物か他の雑草類であるかの分類は難



- 1～4：イネ (a：断面、b：側面)
 1：No.3、2：No.6、3：No.9、4：No.10
 5：ネザサ節型 (a：断面、b：側面) No.6
 6：クマザサ属型 (a：断面、b：側面) No.5
 7：ヨシ属 (断面) No.5
 8：ウシクサ族 (断面) No.5
 9：キビ族 (側面) No.5

図96 植物珣酸体

しいのが現状である。しかしながら上記したように水田稲作が考えられていることからこのキビ族は水田に関係した雑草類、すなわちタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族と推測される。またそれ以前のキビ族についてはヨシ属が生育するような湿地を好むイヌビエなどの雑草類に由来するキビ族ではないかと思われる。

以上のように、弥生時代の讃良郡条里遺跡低地部ではヨシやツルヨシといったヨシ属が多く生育しており、周辺丘陵部や微高地上にはケネザサなどのネザサ節型のササ類が生育していた。その後低地部では古墳時代前期～中期頃にこのヨシ原を切り開き水田稲作が行われるようになり、一時洪水で中断したとみられるが少なくとも分析試料最上位の平安時代までは続いたと推測される。

引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－. 考古学ジャーナル, 227, p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－. 考古学と自然科学, 11, p.9-20.
- 古環境研究所（1991）仙台市富沢遺跡第30次調査におけるプラント・オパール分析. 富沢遺跡－第30次調査報告書第I分冊－縄文～近世編, 仙台市教育委員会, p.389-404.
- 北村四郎・村田 源（1984）原色日本植物図鑑 木本編〔Ⅱ〕. 保育社, 545 p.

第6章 まとめ

今回の讃良郡条里遺跡03-3の調査では、縄文時代から各時代にわたる調査地の変遷を明らかにすることができた。第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う讃良郡条里遺跡の発掘調査は、現在も継続しており歴史の変遷は、現在、調査・整理作業が進められている隣接する讃良郡条里遺跡03-2・03-4の調査をはじめ、一連の発掘調査成果を総合して行われるべきものであるが、ここではその一部として今回の調査で得られた知見をまとめておくこととしたい。

(1) 縄文時代から弥生時代中期（図97）

検出した主な遺構には、流路・焚火跡・土坑などがある。

流路は8区から4区で検出した。また、3区・1区・9区・2区では最終調査面より下層についても、側溝部分の断面観察などによって多数の流路が存在することを確認している。流路はすべて基本的に東から西に向かって流れている。規模が大きいものは少なく、継続的に同じ場所を流れていた痕跡を示すものほとんどない。これらのことから流路の多くは洪水を契機として周囲よりも低い部分に位置を変えながら流れた痕跡と考えることができる。

調査地西端にあたる2区の下層確認では、縄文時代中期にあたる海浜部堆積状況を認めることができた。このことから、調査地が河内湾のなだらかな海浜部に位置していたことが分かる。また、5区で検出した根株や花粉分析の結果から、周囲には落葉樹の林が広がっていた状況が推定できる。土砂の堆積は縄文時代中期には少なく後期・晩期になると急速に進むことから、後期・晩期には海岸線の後退に伴って河川活動が活発にしていたことであろう。

7区で検出した縄文時代中期の焚火跡はこのような環境の元にあった調査地を訪れた人々がいたことを示す明確な証拠である。焚火周辺で採集した石器片から石器製作が行われたことが分かる。おそらく、後述するように讃良川上流域に位置する遺跡から狩猟などのために調査地まで行動を広げていた様

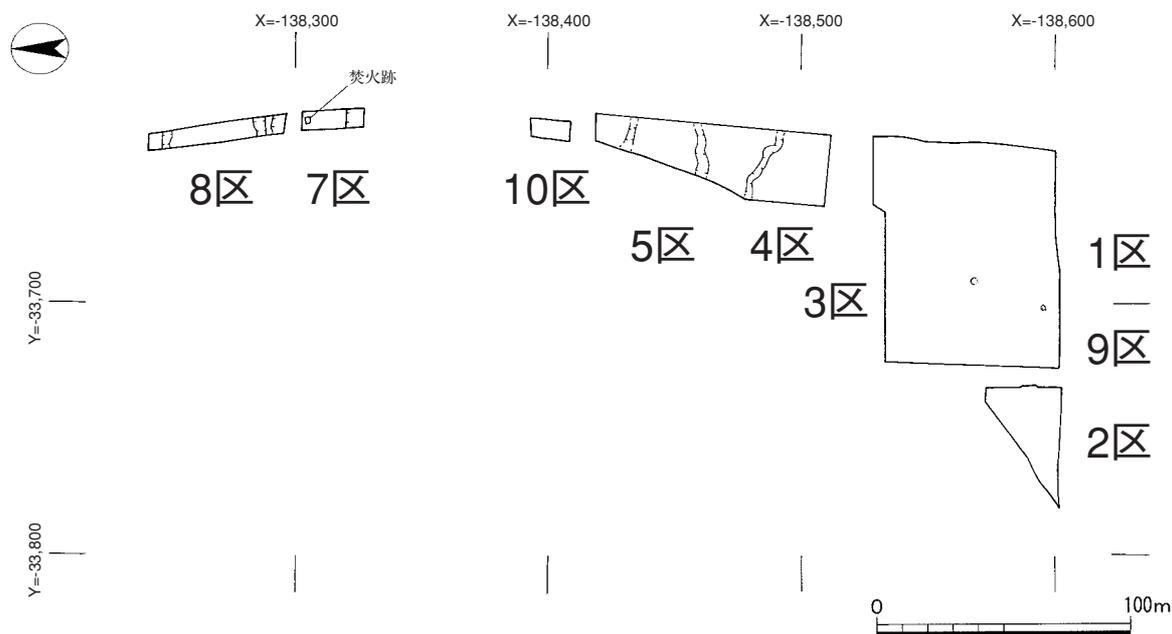


図97 遺跡変遷図（1）

子が想像できる。やがて、縄文時代晩期以降になると土坑などの遺構や出土遺物が増加することから、人々の活動がより頻繁におよぶようになったと評価することができる。

なお、5区の下層確認では、T.P.2.48mでアカホヤ火山灰層を確認することができた。顕微鏡による観察の結果、火山灰の特徴をもつ火山ガラスが多数確認された。また、この層が水平堆積を示すことなどからも、比較的安定した状態であると推定した。これは平成12年度に行った確認調査でも当調査区にあたる地点で検出しており、火山灰分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰層（B.P.7300年）であることがその後明らかとなっている。これは周辺地域との層位的関係を明らかにする上で重要な成果であった。

（2）弥生時代後期から古墳時代前期（図98）

検出した主な遺構には、流路・小区画水田・小土坑などがある。

流路は引き続き調査地各所に分布している。基本的に東から西に向かって流れること、洪水を契機とするものが多いことなどは前段階と同じであるが、規模を比較すると小さくなっている。また、ほぼ直線的に延びるものがあり、中には人為的に掘削された様相を呈することから溝と思われるものがある。

小区画水田は4区北部で検出した。おそらくはより広い範囲に広がっていたと推定できる。植物珪酸体分析の結果からイネが栽培されていたことが確認できた。先に述べた「直線的な流路」を水路として利用していた可能性が充分考えられる。出土遺物がないため時期を確定することは難しいが、遅くとも古墳時代前期には成立していたと考えられる。植物珪酸体分析からは、これ以後、継続してイネの栽培が行われていたことが確認できた。

小土坑は主に調査地南部で検出した。土坑の直径・深さともに小さいことから建物柱の痕跡とは考え難く、これらは建物の一部としては捉えられなかった。性格は不明である。しかしながら、小区画水田の存在から調査地の近接地にこの時期の集落が所在していたことは間違いのないであろう。

（3）古墳時代中期から飛鳥・奈良時代（図99）

検出した主な遺構には、井戸・土坑・小土坑・掘立柱建物・柱穴・溝・流路などがある。

古墳時代中期から後期の遺構は調査地南半部を中心に検出した。これらの遺構や包含層中からの遺物

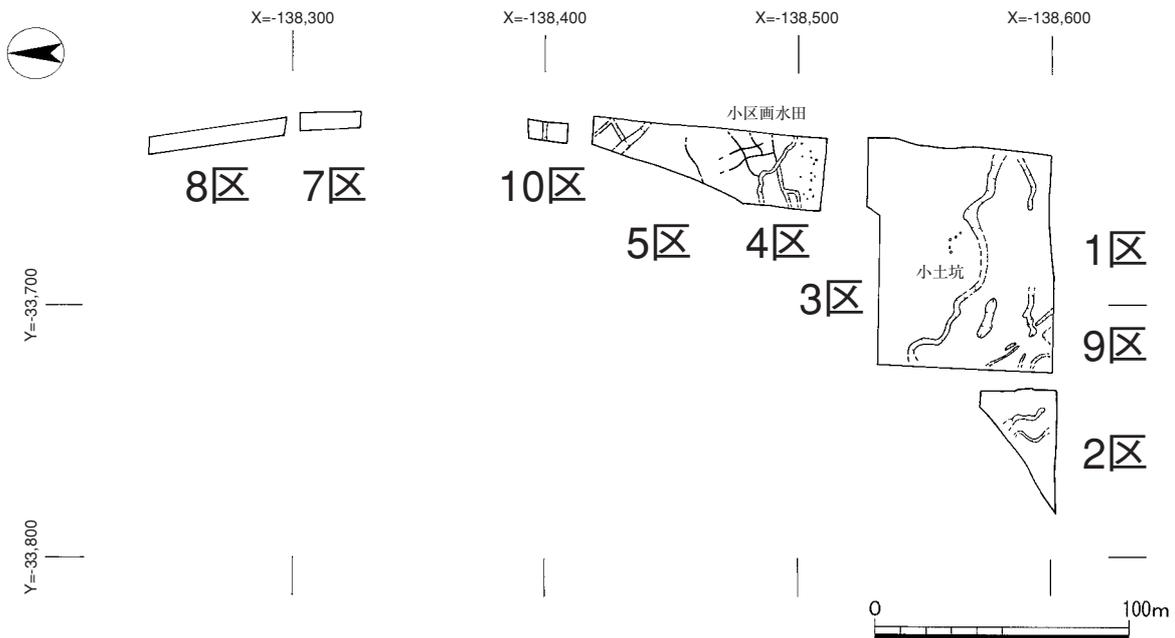


図98 遺跡変遷図（2）

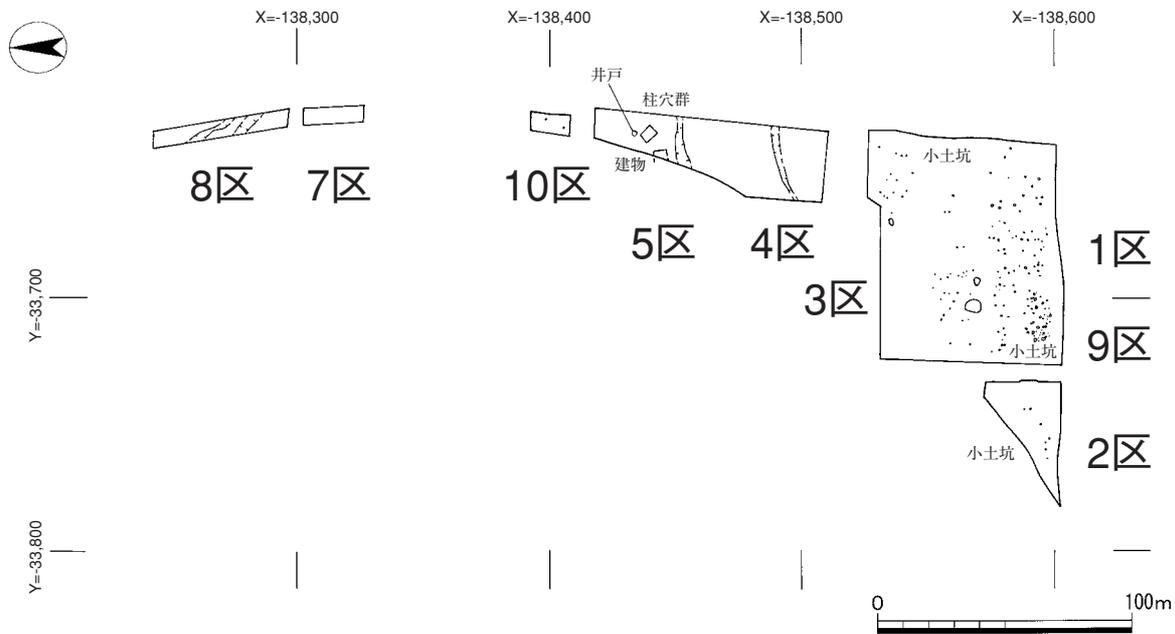


図99 遺跡変遷図（3）

出土量は前段階よりも確実に増加している。特に5区440井戸・415土坑からは古墳時代中期の完形の個体を含む良好な土師器の一括資料を得ることができた。多数検出した土坑の性格は不明であるが、中には前段階よりも直径・深さの規模が大きいものがある、狭い範囲に集中する部分もあることから小規模な掘立柱建物の一部が含まれている可能性がある。

古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の遺構は5区を中心として検出した。当時はこの部分が調査地の中で最も高所にあっていたことによるもので、このことは5区東壁の断面観察からも確認することができた。復元することができた掘立柱建物は2棟のみであるが、多数の柱穴の存在からより多くの建物や柵などの構築物があったことが推定できる。また、溝を数条検出したが、何らかの機能をもつものであることが考えられる。遺構が集中する高所は西側へ延びることから、集落はさらに西へ広がっていると考えられる。

（4）平安時代から室町時代（図100）

検出した主な遺構には、畦・溝がある。

この段階の遺構はたび重なる耕作による攪拌を受けたため遺存状況は非常に悪く、遺構を明確に検出することができたのは、楠根川に沿った4区南部・3区北部の一部にとどまる。

検出した畦は東西・南北方向に並んでいることから、条里制に基づく地割の規制を受けていると判断できる。遺存部分が少ないため確証には欠けるが、南北方向に長い耕作地が並んでいるようである。多くは水田として使用されていたものであろう。ただし、畦の間隔は必ずしもそろってはいない。出土遺物が少なく、また、細片であるため時期を確定することは難しいが、遅くとも平安時代後期には条里制が施行されたと考えられる。4区南部・3区北部の耕作地を覆っていた砂層は楠根川の氾濫によるものであることは堆積状況から明らかである。この位置に楠根川が流れていたことが推察される。このことから讃良川も現在の位置に固定されていたと推定できる。

（5）江戸時代（図101）

検出した主な遺構には、島畠・畑・水田・畦・溝・耕作溝などがある。

耕作地の状況は江戸時代前期に起こった洪水による砂層の堆積により埋没した3区・1区・9区・2区で良好に観察することができた。島畠は3区・1区・9区で検出した。規模はあまり大きくはないが、1区1島畠・48島畠・9区23島畠では形状を次々と作り替えている状況を明らかにすることができた。畑は南西部を除く3区および1区東部を中心に検出した。3区北東部が高まりとなっているのは楠根川からの洪水砂層が厚く堆積したことに起因する。畦により区画された中に東西・南北方向に平行する畝を作る。また、2区では東西方向に細長い畑を検出した。溝により区画され、断面形は低い半円形の形状を示す。水田は3区南西部・1区西部・9区に広がる。畦により方形に区画され、大きさには差異がある。一部の畦には水口が作られる。

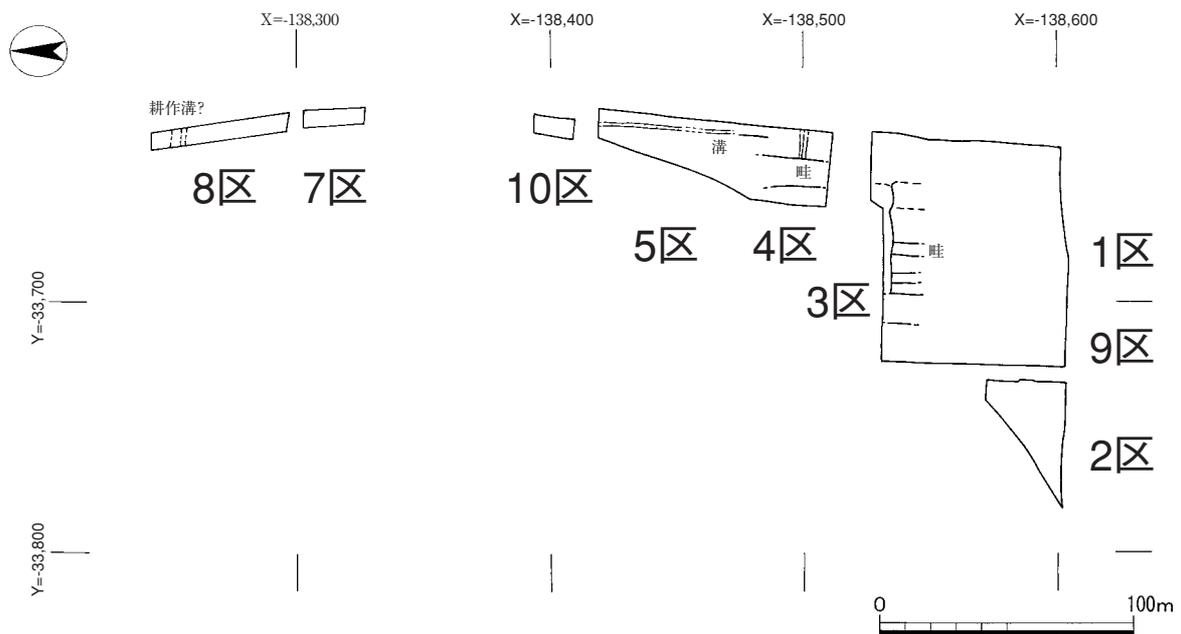


図100 遺跡変遷図(4)

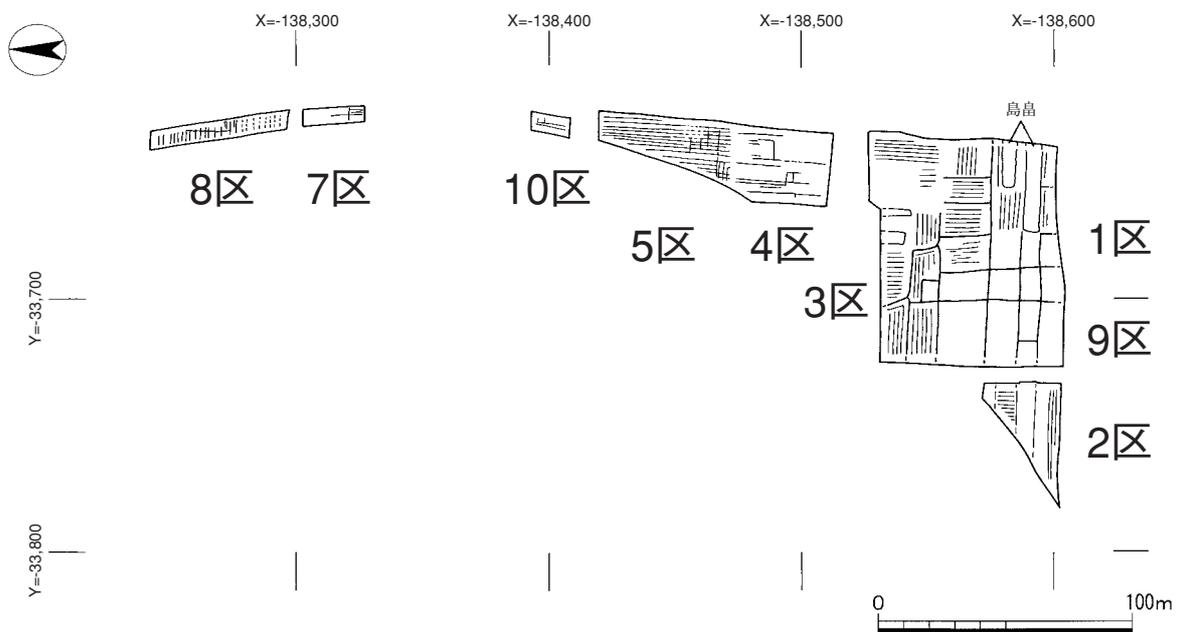


図101 遺跡変遷図(5)

一方、4区より北側は耕作によりたび重なる攪拌を受けたため検出できた遺構のほとんどが濃密に分布する耕作溝である。そのため水田あるいは畑として利用されたかは明確にすることはできなかった。あるいは4区で南北方向の畦が遺存していることや調査区内での高低差があまりないことなどから多くは水田として使用されていたものであろうか。

島畠や畦の断面の観察から、調査地がたびたび洪水による被害を受けていたことが分かった。堆積した洪水砂層を取り除いたり積み上げたりして、繰り返し耕作地が復旧された。島畠・畑・水田が並立する状況はこうした行為の結果である。地形・地目に合わせて作物を選択したのであろう。あるいは同じ耕作地を水田・畑として利用して、二毛作が行われていたのかもしれない。しかしながら、そのために一応は東西・南北方向に畦が並ぶものの耕作地の大きさには差異が生じており、条里制に基づく等面積の地割からは大きくかけ離れたものとなるに至った。讃良郡条里遺跡全体としては多くの場所に条里遺構の坪境は残存しているが、その間隔は変化が生じているのである。耕作地としての使用は、近現代まで連続と続けられた。

(6) 出土遺物

3区・1区・9区・2区を覆う江戸時代前期の洪水砂層を中心に多量・多様な遺物が出土した。現在の国道170号線（大阪外環状線）付近が地形上の傾斜変換点にあっており、その部分の讃良川北側の堤防が決壊したため、近場の調査地周辺に上流域から流されてきた多量の遺物が分厚い砂層とともに堆積したのであろう。旧石器時代から江戸時代にわたる遺物が出土した。

旧石器は少量ながらもナイフ形石器などが出土しており、上流域での遺跡の存在が期待できる。縄文時代は縄文土器・石器の出土量からみて中期から後期の大規模な遺跡が讃良川上流域に所在することが想定される。弥生時代についても特に中期から後期の遺物が多く、同様に上流域の遺跡の存在が想定できる。古墳時代も引き続き同じ状況にある。少量ながら初期須恵器・韓式系土器が出土しており、渡来人の痕跡をうかがうことができる。また、埴輪も出土した。円筒埴輪・朝顔形埴輪が多くを占めるが、家形埴輪や蓋形埴輪も含まれる。上流域の更良岡山古墳群などの遺物と考えられる。飛鳥・奈良時代の土器も多い。瓦は白鳳時代のものは讃良寺遺跡、平安時代後期から鎌倉時代のものは国守廃寺が関係すると考えられる。平安時代以降の土器類も多い。京都産緑釉陶器や中国製白磁・青磁などが出土しており、各地域との活発な交流があったことが推定できる。

遺物 觀 察 表

表8 土器観察表

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
1	403	縄文土器	鉢	内湾する。外面に断面三角形の突帯。	外面は突帯貼付ののち縄文。内面は指頭圧痕ののちナデ。	7区、17D 3a、10a層		褐灰色	やや密	良	—	
2	399	縄文土器	鉢	やや外反する。外面に突帯。	外面は縄文。内面は横方向のナデ。突帯貼付か。	7区、排土		黒褐色	粗	やや軟	—	
3	400	縄文土器	鉢	やや内湾する。外面に突帯。	外面は縄文。内面は指頭圧痕ののち横方向のナデ。	7区、17D 3a、9b層		黒褐色	粗	軟	—	縄文不明瞭。
4	467	縄文土器	鉢	やや内湾する。	外面は細かい縄文。内面はナデ。	7区、17D 3a、29土坑		灰黄褐色	やや密	良	—	
5	468	縄文土器	鉢	—	外面は縄文。内面はナデ。	7区、17D 3a、29土坑		灰白色	やや密	良	—	
6	405	縄文土器	鉢	—	外面は縄文。内面はナデ。	8区、17C 4f、9b層		灰白色	やや密	やや軟	—	縄文不明瞭。
7	392	縄文土器	鉢	—	外面は縦方向の条痕。内面は横方向の条痕。	5区、17E 4d、19層		にぶい黄色	やや粗	良	—	
8	393	縄文土器	鉢	やや内湾する。	外面は縄文。内面はナデ。	5区、17E 4e、19層		褐色	粗	良	—	外面撚糸文の可能性。
9	396	縄文土器	鉢	口縁部は外反して開き、端部は丸くおさまる。	外面は左上りのナデ。内面はナデ。	5区、17E 4~5d、488流路	口径：19.4	暗灰黄色	粗	軟	15	
10	355	縄文土器	深鉢	口縁部は僅かに屈曲して外反気味に開く。	体部外面はケズリ、内面はナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ。	4区、17E 5j、126流路		にぶい黄色			—	
11	440	縄文土器	深鉢	体部は内湾する。	体部外面は条痕、頸部外面はヨコナデ、内面はナデ。口縁部は内外面ともナデ。	9区、17F 10j・18F 1j、15-1層	口径：17.8	にぶい黄褐色	粗	軟	10	条痕不明瞭。
12	441	縄文土器	深鉢	口縁部は体部から僅かに内傾する。口縁端部外面に突帯が巡る。	体部外面はケズリ、口縁部外面はミガキ。内面は横方向のナデ。	9区、18F 1j、134土坑		にぶい黄褐色	やや粗	やや軟	—	
13	472	縄文土器	深鉢	口縁端部外面に突帯。	口縁部は内外面ともナデ。突帯に刻目。	9区、18F 1j、134土坑		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	
14	471	縄文土器	深鉢	口縁端部外面に突帯。	口縁部は内外面ともナデ。突帯に刻目。	9区、18F 1j、134土坑		にぶい黄褐色	粗	軟	—	
15	469	縄文土器	深鉢	口縁部はほぼ直立する。	口縁部外面は条痕、内面は横方向のナデ。	9区、18F 1j、134土坑		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	
16	330	縄文土器	深鉢	口縁端部外面に突帯。	口縁部は内外面ともナデ。突帯に刻目。	3区、17F 10g~h、408土坑		にぶい赤褐色	粗	軟	—	
17	332	縄文土器	深鉢	口縁部外面に突帯。	口縁部は内外面ともナデ。突帯に刻目。	3区、17F 10g~h、408土坑		にぶい黄褐色	粗	軟	—	
18	331	縄文土器	深鉢	体部はやや内湾する。	体部外面は横方向の条痕文。内面はナデ。	3区、17F 10g~h、408土坑		にぶい黄色	粗	軟	—	
19	338	縄文土器	深鉢	口縁端部外面に突帯。	口縁部は内外面ともナデ。突帯に刻目。	3区、17F 9f、16b層		浅黄色	やや粗	やや軟	—	
20	446	縄文土器	深鉢	口縁部は内傾する。口縁端部外面に突帯。	口縁部外面はケズリ。内面はナデ。突帯に刻目。	9区、18F 1j、15-3a層		黒褐色	粗	軟	—	
21	439	縄文土器	深鉢	口縁端部外面に突帯。	口縁部は内外面ともナデ。突帯に刻目。	9区、18F 1j、15-3a層		浅黄色	粗	軟	—	
22	457	縄文土器	深鉢	体部は倒卵形。	体部外面上半は横方向、下半は縦方向のケズリ。内面はナデ。	9区、18F 1j、15-3a層		暗灰黄色			15	
23	224	弥生土器	壺	口縁部は緩やかに外反して開く。	表面の損傷のため調整不明。	2区、18F 6i、10層	口径：28.6	浅黄色	粗	やや軟	10	
24	218	弥生土器	壺	口縁部は緩やかに外反して開く。頸部に鈍い段が巡る。	表面の損傷のため調整不明。	2区、18F 4~7、h~j、10b層	口径：22.0	にぶい黄色	粗	やや軟	10	
25	220	弥生土器	甕	口縁部は外反して開き端部に面をもつ。	表面の損傷のため調整不明。	2区、18F 6i、10層		にぶい黄色	粗	軟	—	
26	221	弥生土器	甕	口縁部は外反して開き端部は丸くおさまる。頸部に鈍い段が巡る。	表面の損傷のため調整不明。	2区、18F 6i、10層		灰黄褐色	粗	軟	—	
27	223	弥生土器	壺	平底。	表面の損傷のため調整不明。	2区、18F 6i、10層	底径：6.2	灰黄褐色	やや粗	やや軟	10	
28	339	弥生土器	甕	口縁部は屈曲して外反気味に開く。端部は丸くおさまる。	体部・口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面に沈線。	3区、18F 3f、16b層	口径：23.6	にぶい黄色	粗	やや軟	10	
29	167	弥生土器	甕	口縁部は体部から緩やかに屈曲して開く。	外面の調整は不明。内面はナデ。頸部外面に沈線。	1区、17F 7j、15層		黄褐色	粗	やや軟	—	
30	431	弥生土器	壺	体部は球形か。	内外面ともヨコナデ。外面に櫛描文。	9区、18F 2j、15-3b層		明黄褐色	粗	軟	—	
31	430	弥生土器	壺	やや突出する。底面中央は僅かに凹む。	底部外面はナデ。体部内外面ともハケののちナデ。	9区、18F 2h、15-3b層	底径：3.9	明黄褐色	密	堅	—	底部完存
32	406	弥生土器	壺	厚い平底。	底部・体部は内外面ともナデ。	5区、17E 4f、450流路	底径：10.7	明黄褐色	粗	やや軟	—	底部完存
33	429	弥生土器	壺	口縁部は外反して大きく開き、端部は拡張して面をつくる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。口縁端部はヨコナデののち端面に櫛描文。	9区、18F 3j、15-3b層	口径：23.2	灰黄色	やや粗	良	10	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
34	314	弥生土器	甕	口縁部は屈曲・外反して開き端部は丸くおさまる。	体部・口縁部は内外面ともヨコナデ。	3区、18F 1g、382土坑	口径：12.8	にぶい黄橙色	密	堅	10	体部内面はケズリの可能性。
35	437	土師器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して二段に外反して開き端部は丸くおさまる。	体部外面はハケ、内面は工具によるナデ。頸部外面はハケののちヨコナデ、内面はハケ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸		明褐色	粗	やや軟	30	
36	357	土師器	壺	体部は厚目で外面に鈍い稜が巡る。口縁部は屈曲して直線的に開く。小型。	体部外面下半は内外面とも横方向のナデ、上半は内外面とも縦方向のナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸		灰黄色	やや粗	良	20	体部外面に黒斑。
37	29	土師器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して内湾気味に開き端部に内傾する面をもつ。	体部外面はハケ、内面は左上りのナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：16.6	にぶい黄褐色	やや粗	良	25	口縁部と体部は直接接合しない。
38	28	土師器	甕	口縁部は内湾気味に開き端部は肥厚して内傾する面をもつ。	口縁部外面はハケののちヨコナデ、内面はヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：13.2	にぶい黄褐色	密	堅	20	
39	359	土師器	甕	口縁部は屈曲して外反気味に開き端部にあまい面をもつ。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：19.4	にぶい黄褐色			10	
40	360	土師器	甕	口縁部は屈曲して直線的に開き端部は丸くおさまる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：14.6	灰黄色	粗	良	10	
41	8	土師器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して直線的に開き端部は丸くおさまる。	体部は内外面ともハケののちヨコナデ。頸部は内外面ともハケののちヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：13.0	にぶい褐色	やや粗	良	50	体部外面に煤、内面に炭化物が付着。
42	70	土師器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して内湾気味に開き端部は肥厚して内傾する面をもつ。	底部・体部外面はハケ、内面は左上りのナデ。頸部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：12.8	にぶい黄褐色			80	体部外面に煤が付着。
43	6	土師器	高杯	口縁部は屈曲・外反して開き端部は丸くおさまる。外面に稜が巡る。	調整不明。	5区、17E 4d、440井戸	口径：19.0	褐色	やや粗	軟	20	
44	11	土師器	高杯	脚部は中空の柱状部から裾部が直線的に開き端部は丸くおさまる。杯部は内湾気味に開き端部は丸くおさまる。	脚部外面は縦方向のミガキ、裾部内面はハケ、柱状部内面はシボリ。杯部外面はナデののち横方向の細かいミガキ、内面はナデ。	5区、17E 4d、440井戸	口径：30.2 器高：12.8	にぶい黄褐色	やや粗	良	80	杯部のミガキは不明瞭。
45	72	土師器	高杯	中空の柱状部から裾部が開く。	調整不明。	5区、17E 4d、440井戸		明赤褐色	密	軟		柱状部完存
46	371	土製品	製塩土器	ほぼ直立し端部は丸くおさまる。	杯部外面はタタキ、内面はナデ。口縁部はヨコナデ。	5区、17E 4d、440井戸		にぶい黄褐色	密	やや軟	—	脚台が付く形態か
47	434	土師器	杯	体部・口縁部は内湾して開き、端部は丸くおさまる。	調整不明。	5区、17E 5g、12層	口径：10.4 器高：4.7	にぶい黄褐色	粗	やや軟	50	
48	367	土師器	甕	口縁部は屈曲して直線的に開き端部は僅かに内傾する面をもつ。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 4c、12層	口径：13.4	にぶい黄褐色	粗	やや軟	20	
49	445	須恵器	杯身	受部は外上方に開く。立ち上り部は内傾・外反する。	底部外面は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	5区、17E 6g～h、12層	口径：17.0	灰白色	やや粗	良	10	
50	7	土師器	高杯	杯部は口縁部が僅かに屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	外面はハケ。内面はハケののちナデ。	5区、17E 5e、415土坑	口径：30.0	褐色	やや粗	やや軟	80	
51	10	土師器	高杯	杯部は口縁部が僅かに屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	内外面ともナデののち横方向の細かいミガキ。	5区、17E 5e、415土坑	口径：14.6	にぶい褐色	やや粗	良	25	杯部
52	461	土師器	甕	口縁部は屈曲して内湾気味に開き端部は肥厚して内傾する面をもつ。	体部外面はナデ、内面はケズリ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5e、415土坑	口径：15.3	にぶい黄褐色	粗	やや軟	10	
53	462	土師器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して内湾気味に開き端部は肥厚して内傾する面をもつ。	体部外面はハケ。内面は指オサエののちケズリ。頸部・口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5e、415土坑	口径：16.0	褐色	粗	軟	25	体部外面下半に煤が付着。
54	9	土師器	壺	体部は球形。口縁部は屈曲して直線的に開き端部は丸くおさまる。端部は僅かに肥厚する。小型。	体部外面はハケののちナデ。内面はケズリののちナデ。頸部・口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 8j、188土坑	口径：9.2	にぶい黄褐色	やや密	良	60	外面に黒斑1箇所。
55	433	土師器	壺	口縁部は外上方に直線的に開き端部は面をもつ。	体部外面はハケ、内面はケズリ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデ。	3区、18F 1g～h、298土坑	口径：13.4	灰白色	粗	良	80	口縁部・体部外面に煤が付着
56	407	土師器	杯	体部・口縁部は内湾して開き端部は肥厚する。	底部・体部外面はオサエののちナデ、内面は丁寧なナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	9区、18F 1j、128土坑	口径：13.6 器高：4.2	にぶい黄褐色	粗	良	50	
57	327	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反して開き端部は丸くおさまる。	体部は内外面とも調整不明。口縁部は内外面ともヨコナデ。	3区、17F 8b、12-3(下)～12-4層	口径：17.0	にぶい黄褐色	粗	やや軟	15	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
58	436	土師器	甕	口縁部は緩やかに外反して開き端部は丸くおさまる。	体部外面はハケ、内面はケズリ。頸部・口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデ。	3区、17F 8d、334土坑	口径：20.6	橙色	粗	やや軟	50	
59	460	須恵器	杯蓋	天井部は扁平で口縁部は内湾して垂下し端部は内傾する面をもつ。	天井部外面は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	3区、17F 8f、15層	口径：14.9	灰色	粗	良	25	天井部内面中央に当具痕か。
60	450	須恵器	杯蓋	天井部は平坦で口縁部は内湾して垂下し端部は内傾する面をもつ。	天井部外面は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	3区、17F 8d、12-2~12-4層	口径：13.4	灰白色	密	やや軟	20	
61	449	須恵器	杯身	底部は扁平で内湾し受部は水平に開く。立ち上り部は内傾する。	底部外面は左回りの回転ケズリ。内面中央はナデ。他はヨコナデ。	3区、17F 8d、334土坑		灰白色	密	良	10	一部に薄い自然釉。底部外面にヘラ記号。
62	459	須恵器	杯身	底部は扁平で内湾し受部は水平に開く。立ち上り部は内傾し端部は外反する。	底部外面は左回りの回転ケズリ。内面中央はナデ。他はヨコナデ。	3区、17F 8e、12-3(下)~12-4層	口径：13.2 器高：4.7	灰白色	やや粗	良	10	底部外面にヘラ記号か。
63	328	須恵器	杯身	底部は扁平で内湾し受部は外上方に開く。立ち上り部は短く内傾する。	底部外面中央はヘラ切り、周辺は左回りの回転ケズリ、内面中央はナデ。他はヨコナデ。	3区、17F 8b、12-3(下)~12-4層	口径：8.7 器高：3.1	褐灰色	やや粗	やや軟	30	底部外面にヘラ記号。
64	448	須恵器	杯身	受部は外上方に開く。立ち上り部は内傾する。	底部外面は回転ケズリ(方向不明)。他はヨコナデ。	3区、17F 8d、334土坑	口径：13.8	青灰色	密	良	20	
65	473	須恵器	提瓶	体部は扁球形で肩部の2箇所把手が付く。口縁部は屈曲・外反して開き端部は面をもつ。	体部外面はカキメ、内面はタタキののちヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部中央部に円盤充填。把手接合面はヘラで凹凸をつける。	3区、17F 8f、16a層	口径：7.2	灰色	密	良	70	
66	329	須恵器	甕	口縁部は外反して開き端部は面をもつ。外面に突帯。	口縁部下外面はタタキののちヨコナデ。他はヨコナデ。外面に沈線・櫛描文。	3区、17F 8b、12-3(下)~12-4層	口径：28.6	灰色	密	堅	10	
67	444	須恵器	杯蓋	天井部は扁平で口縁部は内湾して垂下し端部は丸くおさまる。	天井部外面は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	5区、17E 5e、350溝	口径：15.6	灰白色	やや粗	良	10	
68	453	須恵器	杯蓋	天井部は平坦で口縁部は内湾して垂下し端部は丸くおさまる。	天井部外面はヘラ切りののちナデ。他はヨコナデ。	5区、17E 5e、350溝	口径：15.8	灰白色	密	良	20	
69	454	須恵器	杯身	底部は扁平で受部は水平方向に開く。立ち上り部は内傾して外反する。	底部外面は左回りの回転ケズリ。内面中央はナデ。他はヨコナデ。	5区、17E 5e、350溝	口径：12.4	灰白色	やや粗	やや軟	20	一部に自然釉。
70	455	土師器	甕	口縁部は屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	体部外面は縦方向のナデ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5e、350溝	口径：15.8	にぶい黄橙色	密	良	25	
71	465	土師器	高杯	中空の柱状部から裾部は屈曲して開き端部は丸くおさまる。	柱状部・裾部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5e、350溝	底径：5.5	明赤褐色	粗	良		柱状部完存
72	358	須恵器	甕	口縁部は外反して開き端部は肥厚して面をもつ。	外面はタタキののちヨコナデ。他はヨコナデ。	5区、17E 5e、350溝	口径：22.0	灰色	密	堅	20	内面の一部にヘラ状工具痕。
73	369	須恵器	杯身	受部は短くやや外上方に開く。立ち上り部は内傾して端部は内傾する面をもつ。	底部外面は回転ケズリ(方向不明)。他はヨコナデ。	5区、17E 4e、333柱穴	口径：12.5	灰色	やや粗	やや軟	10	
74	376	須恵器	杯身	底部は扁平で受部は短く水平方向に開く。立ち上り部は直立する。	底部外面は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	5区、17E 5f、365柱穴	口径：13.0	灰白色	やや粗	やや軟	10	
75	377	須恵器	杯身	受部は外上方に開く。立ち上り部は内傾して外反する。	内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5e、361柱穴	口径：11.2	灰白色	やや粗	良	10	
76	452	土師器	甕	口縁部は僅かに屈曲して直線的に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はハケ、内面は指オサエ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5e、361柱穴	口径：11.0	にぶい褐色	やや密	やや軟	50	
77	378	土師器	甕	口縁部は屈曲して直線的に開き端部は丸くおさまる。	体部外面は調整不明。内面は工具によるナデ。口縁部は内外面ともハケののちヨコナデ。	5区、17E 5e、361柱穴	口径：13.6	にぶい褐色	粗	やや軟	10	
78	374	土師器	杯	口縁部は内湾して開き端部は丸くおさまる。	外面はナデ。内面は横方向のミガキ。	5区、17E 4e、332柱穴	口径：13.4	にぶい黄橙色	粗	やや軟	10	
79	356	土師器	甕	体部は長胴形。口縁部は屈曲して開く。	体部外面はハケ、内面は指オサエののちナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデ。	5区、17E 4c、側溝		明褐色	粗	良	20	
80	432	須恵器	杯身	底部は平底。体部・口縁部は屈曲して直立し端部は丸くおさまる。	底部外面はヘラ切りののちナデ。他はヨコナデ。	9区、18F 1h、163土坑	口径：10.8	灰白色	密	やや軟	10	底部内面に自然釉。
81	5	土師器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	底部・体部外面はハケ、内面は指オサエののちナデ。頸部は内外面ともハケののちヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	7区、17D 5f、28流路	口径：11.0 器高12.7	にぶい黄橙色	やや密	良	75	

遺物 番号	実測図 番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
82	401	土師器	甕	体部は球形。	底部・体部外面はハケ、内面は指オサエののちナデ。	7区、17D 5f、28流路		にぶい 黄橙色	やや粗	やや軟	底部完 存	内面全面に 炭化物が付 着。
83	318	土師器	皿	口縁部は緩やかに内湾して開き 端部はやや立ち上る。小型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	3区、17F 4g、228・229 溝	口径：9.0	にぶい 黄橙色	密	良	20	
84	298	土師器	皿	口縁部は外上方に開き端部は丸 くおさまる。小型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	3区、17F 8～ 9e、6～11層	口径：4.0	灰白色	密	良	20	
85	126	土師器	皿	口縁部は緩やかに内湾して開き 端部は丸くおさまる。小型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	1区、17F 9j、6b～12層	口径：7.6	にぶい 黄橙色	密	良	25	
86	322	土師器	皿	口縁部は緩やかに内湾して開き 端部は尖る。中型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	3区、17F 7e、5層	口径：10.0	浅黄橙 色	密	堅	10	
87	350	土師器	皿	口縁部は緩やかに内湾して開き 端部は尖る。中型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	4区、17E 4d、5～6層	口径：11.2	灰黄色	密	良	10	口縁端部に 広く煤が付 着。
88	317	土師器	皿	口縁部は内湾して開き端部は立 ち上る。大型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	3区、18F 2e、12-2層	口径：14.4	灰白色	密	良	10	
89	347	土師器	皿	口縁部は緩やかに屈曲して外反 気味に開く。大型。	底部外面は指オサエののちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	4区、17E 4～ 5i、9層	口径：18.0	浅黄橙 色	密	良	20	
90	343	土師器	甕	口縁部は屈曲して短く開き端部 は大きく肥厚する。	内外面ともヨコナデ。	4区、17E 6～ 7j、8a層	口径：21.6	明黄褐 色	粗	軟	10	
91	163	瓦器	皿	口縁部は屈曲して外反気味に開 く。小型。	底部外面は指オサエ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デ。	1区、17F 8h、7～12層	口径：8.0 器高：1.2	灰白色	密	軟	—	
92	383	瓦器	皿	口縁部は屈曲して内湾気味に開 く。小型。	底部外面は指オサエ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デのの内面に暗文。	5区、17E 4c、6～7層	口径：10.0	灰色	密	良	—	
93	466	瓦器	椀	体部は内湾して開き口縁部はや や外反する。	体部外面は指オサエののち一部 にミガキ。口縁部外面はヨコナ デ、内面はやや粗いミガキ。	10区、8層	口径：13.8	暗灰色	密	良	20	
94	422	瓦器	鉢	体部は内湾気味に開き口縁部は 強く外反する。	体部外面はヨコナデ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デ。	9区、18F 1i、24島畠	口径：21.0	灰色	密	良	10	
95	128	瓦器	鉢	体部は直線的に開き口縁部は強 く外反する。	体部外面は指オサエ・ナデ、内 面は丁寧なヨコナデ。口縁部は 内外面ともヨコナデ。	1区、17F 8j、5層	口径：22.2	暗灰色	密	堅	10	
96	292	瓦器	火鉢	体部は直立し端部は拡張して平 坦な面をもつ。外面に突帯。	体部外面はヨコナデ・ミガキの のち印文。内面はヨコナデ。端 面はミガキ。	3区、17F 4～ 5e、6～12-1 層	口径：30.8	暗灰色	密	良	10	
97	305	須恵器	捏鉢	口縁部は直線的に開き端部は外 傾する面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	3区、17F 8g、6～11層	口径：31.0	灰色	密	堅	10	外面に重ね 焼痕。東播 産。
98	152	須恵器	捏鉢	口縁部は直線的に開き端部は外 傾する面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	1区、17F 7i、7～12層	口径：28.2	灰色	やや密	堅	10	東播産。
99	485	焼締陶器	播鉢	口縁部は屈曲して開く。	内外面ともヨコナデ。内面に播 目。	1区、17F 7j、1島畠		にぶい 橙色	やや粗	良	—	信楽産。
100	484	焼締陶器	播鉢	口縁部は上方に拡張する。	内外面ともヨコナデ。内面に播 目。	1区、17F 6i、2島畠		橙色	密	やや軟	—	備前産。
101	303	焼締陶器	壺	口縁部は直立し端部は肥厚す る。	内外面ともヨコナデ。	3区、17F 6f、5層	口径：11.8	明赤褐 色	密	堅	20	信楽産。
102	304	焼締陶器	壺	口縁部は外反して開き端部は玉 縁状になる。	内外面ともヨコナデ。	3区、17F 8g、6～11層	口径：15.0	暗灰黄 色	密	堅	20	備前産。
103	306	焼締陶器	壺	肩部は緩やかに内湾する。	内外面ともヨコナデ。のち外面 に櫛描文。	3区、17F 8g、6～11層		灰赤色	密	堅	—	備前産。
104	310	焼締陶器	甕	口縁部は緩やかに外反開き端部 外面は面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	3区、17F 5d、5層	口径：33.8	にぶい 橙色	粗	堅	10	信楽産。
105	316	灰釉陶器	椀	体部・口縁部は内湾して開き端 部は外反する。	内外面ともヨコナデ。内面・口 縁部外面に釉を刷毛塗する。	3区、18F 2e、12-2層	口径：12.1	灰白色	密	堅	10	
106	313	灰釉陶器	皿	口縁部は外上方に直線的に開き 端部は丸くおさまる。内面に 段。輪高台。	底部外面は糸切り。他はヨコナ デ。貼付高台。口縁部内外面に 薄く釉が付着。	3区、17F 10e ～d、12-2層	口径：13.0 器高：2.7	灰白色	密	良	20	
107	300	施釉陶器	椀	体部は内湾して開き、口縁部は 屈曲して端部は外反する。	体部外面はケズリ。他はヨコナ デ。内外面に施釉。鉄釉。	3区、17F 9f、6～11層	口径：12.0	黒褐色	密	堅	10	瀬戸美濃 産。
108	151	施釉陶器	椀	体部は内湾して開き、口縁部は 屈曲して端部は外反する。	体部外面はケズリ。他はヨコナ デ。内面・口縁部外面に施釉。 鉄釉。	1、17F 7i、 28畦	口径：6.2	暗褐色	密	堅	30	瀬戸美濃 産。

遺物 番号	実測図 番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
109	222	磁器	鉢	口縁部は外反して開く。小型。	内外面に施釉。青磁。	2区、18F 6j、5～6層	口径：11.0	柳ノブ 灰色	密	良	—	中国産。
110	299	磁器	椀	体部は内湾して開く。輪高台。	底部外面はケズリ。削出高台。 外面に刻文。底部外面以外に施 釉。青磁。	3区、17F 9f、6～11層	底径：4.8	柳ノブ 灰色	密	堅	50	中国産。
111	309	磁器	椀	体部は内湾して開く。輪高台。	底部外面はケズリ。削出高台。 底部外面以外に施釉。青磁。	3区、17F 5d、5層	底径：5.8	明柳ノ ブ灰色	やや粗	堅	25	中国産。
112	291	磁器	鉢	体部は直線的に開き口縁部は外 反する。	体部外面はケズリ。内面・口縁 部外面に施釉。白磁。	3区、17F 10 f、6～11層	口径：9.6	灰白色	密	良	10	中国産。
113	125	磁器	鉢	体部・口縁部は屈曲して外上方 に直線的に立ち上り端部は内傾 する面をもつ。	口縁部以外に施釉。白磁。	1区、17F 9j、6b～12層	口径：9.6	明緑灰 色	密	良	20	中国産。
114	312	磁器	椀	体部は内湾して開き、口縁部は 外反する。	体部外面はケズリ。口縁部は内 外面ともヨコナデ。内外面に施 釉。白磁。	3区、17F 7g、5層	口径：16.0	灰白色	密	堅	10	中国産。
115	364	磁器	皿	体部・口縁部は緩やかに内湾し て開き端部は丸くおさまる。	文様を描いたのち内外面に透明 釉。青花。	5区、17E 5f、4層	口径：9.6	灰白色 青色	密	良	10	中国産。
116	127	磁器	椀	体部は内湾して開く。輪高台。	削出高台。文様を描いたのち内 外面に透明釉。青花。	1区、17F 7h、28畦	底径：4.5	白色 紺色	密	堅	30	中国産。絵 柄は獅子。 漆継痕。
117	421	土師器	皿	口縁部は浅く開く。小型。	底部外面は指オサエ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デ。	9区、18F 1h、3～4層	口径：7.2	灰黄色	密	良	25	
118	46	土師器	皿	口縁部は内湾気味に開く。小 型。	底部外面は指オサエ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デ。	1区、17F 5h ～1、3層	口径：3.3	橙色	密	堅	60	
119	17	土師器	皿	口縁部は内湾気味に開く。小 型。	底部外面は指オサエ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デ。	1区、17F 6j、1～3層	口径：6.8	灰白色	細	堅	25	口縁部部の 1箇所に煤 が付着。
120	136	土師器	皿	口縁部は内湾気味に開く。小 型。	底部外面は指オサエ、内面はナ デ。口縁部は内外面ともヨコナ デ。	1区、17F 6j、3層	口径：6.4 器高：1.7	にぶい 橙色	密	良	25	
121	104	土師器	皿	口縁部は緩やかに内湾して開き 端部は尖る。中型。	底部外面は指オサエのちナ デ、内面はナデ。口縁部は内外 面ともヨコナデ。	1区、17F 8j、3層	口径：12.0	浅黄色	密	堅	10	
122	290	磁器	椀	体部・口縁部は内湾して立ち上 り端部は丸くおさまる。輪高 台。	削出高台。文様を描いたのち高 台接地面以外の内外面に透明 釉。染付。	3区、17F 6h、3～4層	口径：10.8 器高：5.4	灰白色 青灰色	密	良	40	肥前産。絵 柄は草花。
123	34	縄文土器	深鉢	口縁部は強く内湾する。波状口 縁。外面に隆帯。	外面は縄文。体部内面はナデ、 口縁部内面は縄文。口縁部外面 に二枚貝と円形の刺突文。内面 に貝殻の押圧に伴う凸面ができ る。	1区、17F 5h、側溝		にぶい 黄橙色	やや粗	良	—	
124	186	縄文土器	深鉢	口縁部は強く内湾する。波状口 縁。外面に隆帯。	外面は縄文。体部内面はナデ、 口縁部内面は縄文。口縁部外面 に半裁竹管による押しき文・円 形の刺突文。	2区、北西壁		灰白色	粗	良	—	
125	116	縄文土器	深鉢	口縁部は内湾する。外面に隆 帯。	外面は縄文。体部内面はナデ、 口縁部内面は縄文。口縁部外面 は円形の大きな刺突文。突帯に 竹管による刻目。	1区、17F 8i、2～3層	口径：23.0	灰色	粗	良	—	
126	48	縄文土器	深鉢	端部は面をもつ。口縁部外面 に隆帯。	外面は縄文、内面はナデ。突帯 に左から右の押しき文、端部に 右から左の押しき文、原体は異 なる。口縁部内面に瓜形文。	1区、17F 5h ～i、3層		灰黄色	粗	良	—	
127	225	縄文土器	鉢	口縁部外面に低い隆帯。	内外面とも縄文。口縁部外面に 押しき文・円形の大きな刺突 文。	2区、北西壁		灰白色	粗	やや軟	—	調整・文様 不明瞭。
128	275	縄文土器	鉢	波状口縁か。外面に低い隆帯。	外面・体部内面はナデ。口縁部 内面は縄文。口縁部外面は竹管 による刺突文。	3区、18F 1g、3～4層		にぶい 黄橙色	粗	軟	—	
129	56	縄文土器	深鉢	内湾する。外面に低い隆帯。	外面は縄文・ナデ、内面はナ デ。突帯の両側に竹管による押 引き文。	1区、17F 5h ～i、3層		浅黄色	やや粗	良	—	
130	243	縄文土器	鉢	内湾する。	外面は縄文、内面はナデ。	3区、17F 10g、3～4層		褐灰色	粗	良	—	
131	287	縄文土器	深鉢	外反する。外面に隆帯。	外面は縄文、内面はナデ。ヨコ ナデのち突帯に刻目。	3区、17F 5g、3～4層		にぶい 黄橙色	粗	良	—	
132	55	縄文土器	深鉢	内湾する。口縁部外面に隆 帯。	外面は縄文。内面・口縁部は ナデ。	1区、17F 8h、側溝		にぶい 橙色	粗	良	—	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
133	337	縄文土器	深鉢	内湾する。波状口縁。外面に隆帯。	外面は縄文。体部内面はナデ、口縁部内面上半は縄文、下半は撚糸文。口縁部外面に円形の大きな刺突文。	3区、17F 7g、3～4層		灰黄色	粗	軟	—	
134	117	縄文土器	鉢	—	外面は縄文、内面はナデ。外面に円形の刺突文。	1区、17F 8i、2～3層		灰色	粗	良	—	
135	398	縄文土器	鉢	—	外面は縦方向のナデ、内面は縄文。外面に円形の大きな刺突文。	7区、17D 3c、28流路		灰黄色	粗	軟	—	口縁部付近か。
136	404	縄文土器	深鉢	—	外面は縄文、内面はナデ。	8区、17C 3～4j、25流路		灰黄色	粗	やや軟	—	内面に炭化物が薄く付着。
137	150	縄文土器	深鉢	—	外面は縄文、内面はナデ。	1区、17F 6j、3層		にぶい黄褐色	粗	堅	—	
138	231	縄文土器	鉢	—	外面は縄文、内面はナデ。	3区、17F 9f、3～4層		黄褐色	粗	良	—	
139	257	縄文土器	鉢	—	外面は縄文、内面はナデ。	3区、18F 2～3f、3～4層		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	外面は撚糸文の可能性。
140	142	縄文土器	鉢	内湾する。	外面は縄文に似せた沈線、内面は工具によるナデ。外面に沈線文。	1区、17F 9h、3層	口径：16.2	にぶい黄褐色	密	やや良	—	外面は縄文の可能性もこのころ。
141	168	縄文土器	深鉢	口縁部は緩やかに内湾する。	外面は縄文、内面はナデ。外面に半裁竹管による沈線文。	1区、排土		にぶい褐色	粗	堅	—	
142	239	縄文土器	深鉢	—	外面は縄文、内面はナデ。外面に半裁竹管による鋭い沈線文。	3区、18F 3e～f、側溝		灰白色	粗	やや軟	—	調整不明瞭。
143	208	縄文土器	深鉢	—	内外面ともナデ。外面に沈線文。	2区、1b層		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	
144	189	縄文土器	鉢	やや外反する。	外面は縄文、内面はナデ。外面に沈線文。	2区、北西壁		灰黄褐色	粗	良	—	
145	395	縄文土器	鉢	—	内外面ともナデ。外面に沈線文。	5区、17E 4～5d、488流路		にぶい黄褐色	粗	軟	—	
146	232	縄文土器	鉢	—	内外面ともナデ。外面に幅の広い沈線文。	3区、17F 9f、3～4層		黄灰色	粗	良	—	
147	50	縄文土器	鉢	—	内外面ともナデ。外面に幅の広い沈線文。	1区、17F 6h、3層		灰黄色	粗	良	—	
148	36	縄文土器	深鉢	内湾する。	外面は縄文、内面は横方向のナデ。外面に幅の広い沈線文。	1区、17F 7i、1～3層		浅黄褐色	粗	やや軟	—	
149	85	縄文土器	深鉢	口縁部は内湾して開き端部に面をもつ。	内外面・端面ともナデ。外面に幅の広い沈線文。	1区、17F 7j、3層		明赤褐色	粗	良	—	
150	37	縄文土器	鉢	波状口縁。	内外面ともヨコナデ。外面に沈線文。	1区、17F 5h、側溝		灰褐色	粗	不良	—	調整・文様不明瞭。
151	277	縄文土器	鉢	口縁部は分厚くなり外面に突帯を付加する。波状口縁。	内外面ともヨコナデ。突帯の上側に沈線。	3区、18F 1g、3～4層		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	
152	370	縄文土器	鉢	やや凹面になる平底。体部は屈曲して外上方に開く。	底部は内外面ともナデ。体部外面は縄文、内面は指オサエのちナデ。	5区、17E 4～5d、488流路	底径：6.4	にぶい黄褐色	粗	軟	25	
153	180	縄文土器	鉢	口縁部は屈曲して内傾し端部は内傾する幅の広い面をもつ。外面に隆帯。	口縁部内外面はヨコナデ。口縁端面は縄文。外面に刺突文。	2区、2b層		にぶい褐色	粗	やや軟	—	
154	226	縄文土器	鉢	—	内外面ともナデ。内面にナデによる突帯と刺突文。	3区、機械掘削中		にぶい黄褐色	粗	軟	—	調整不明瞭。
155	111	縄文土器	深鉢	体部は外反して開き口縁部は屈曲して内傾する。波状口縁。	体部・口縁部は内外面ともナデ。体部外面に沈線文、口縁部外面に細い竹管による刺突文。	1区、17E 8i、3層	口径：23.8	にぶい黄褐色	粗	軟	10	
156	38	縄文土器	鉢	—	外面はナデ、内面はヨコ方向のナデ。外面に沈線文。	1区、17F 5h、側溝		暗灰黄色	やや粗	良	—	内面は条痕の可能性。
157	149	縄文土器	深鉢	器壁が薄い。	内外面ともナデ。外面に刺突文か。	1区、17F 6j、3層		褐色	粗生駒産胎土	堅	—	押型文の可能性。調整・文様不明瞭。
158	335	縄文土器	深鉢	外面に突帯。	外面は縄文、内面はナデ。外面は突帯の下側に沈線、突帯に刻目。	3区、17F 8g、3～4層		黒褐色	粗	軟	—	刻目の原体には3つの単位。
159	39	縄文土器	深鉢	口縁部は外反し端部は大きく拡張する。波状口縁で頂部に2段の円盤状突起を付加する。	口縁部外面はナデ、内面はミガキ、端面はナデで一部に縄文が残る。口縁部外面・端面に沈線文。	1区、17F 5h、側溝	口径：15.0	にぶい黄褐色	粗	良	20	
160	54	縄文土器	深鉢	口縁部は屈曲して内湾気味に開く。波状口縁。	内外面とも丁寧なナデ。外面に凹線文。	1区、17F 6i、3層		暗灰黄色	粗	良	—	
161	57	縄文土器	深鉢	口縁部は屈曲して内湾気味に開く。波状口縁で頂部に杯状突起を付加する。	外面は縄文・ミガキ、内面はナデまたはミガキ。杯状突起はナデ。外面に沈線文。	1区、17F 5h、側溝		黒褐色	粗	やや軟	—	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
162	148	縄文土器	鉢	口縁端部は肥厚する。波状口縁。	内外面ともナデ。外面に沈線文。	1区、17F 6j、3層		灰白色	粗	堅	—	
163	51	縄文土器	鉢	口縁端部は僅かに内湾する。	内外面ともナデ。外面に沈線文。口縁端部内面に浅い刻目。	1区、17F 6h、3層		にぶい褐色	粗	良	—	
164	280	縄文土器	鉢	口縁部は内湾して端部に面をもつ。波状口縁。	外面は磨消縄文、内面はナデ。口縁部外面に沈線文。	3区、18F 2~3g、3~4層		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	
165	164	縄文土器	鉢	口縁端部は僅かに内湾する。	内外面ともナデ。口縁部外面に竹管または棒状工具による沈線文。	1区、17G 10a、3層		にぶい黄褐色	粗	やや軟	—	
166	417	縄文土器	深鉢	やや凹面になる平底。体部は屈曲して立ち上る。	底部外面は縄文、内面は粗いナデ。体部外面はナデ。	9区、18F 1h、3~4層	底径：12.0	黄褐色	粗	やや軟	30	
167	184	縄文土器	鉢	口縁部は外反気味に開き端部外面に粘土帯を付加する。	口縁部外面は条痕、内面はナデ。口縁端部外面に縄文。	2区、北西壁		にぶい黄褐色	粗	良	—	
168	336	縄文土器	鉢	口縁部は外反気味に開き端部は僅かに内湾して外面に粘土帯を付加する。	口縁部内外面はナデ。口縁端部外面に刻目。	3区、18F 3e、3~4層		にぶい黄褐色	粗	軟	—	
169	166	縄文土器	鉢	口縁部は外反気味に開き端部は肥厚する。	口縁部内外面はナデか。口縁端部外面に縄文。	1区、17F 7~8i、1~3層		灰色	粗	やや堅	—	調整不明瞭。
170	40	縄文土器	深鉢	口縁部は外反気味に開き端部外面に粘土帯を付加する。	内外面ともナデ。口縁部外面に沈線文、口縁端部外面に縄文。	1区、17F 9h、1~3層	口径：38.8	褐色	粗	良	10	
171	79	縄文土器	浅鉢	口縁部は屈曲して内傾し端部は面をもつ。	内外面ともナデ。口縁部外面に沈線文。	1区、17F 9~10h、3層	口径：19.0	暗グレー褐色	粗	良	10	
172	52	縄文土器	鉢	口縁部は外反気味に開く。	外面は巻貝による条痕、内面は横方向のナデ。	1区、17F 6h、3層		灰黄色	粗	やや軟	—	
173	147	縄文土器	深鉢	口縁部は僅かに内傾して外面気味に開く。	内外面ともナデか。口縁端部内面に刻目。	1区、17F 6j、3層		浅黄褐色	粗	軟	—	調整不明瞭。
174	458	縄文土器	注口土器	注口部。やや扁平な円筒形で僅かに上方に反る。	外面は粗いミガキ、内面はナデ。	9区、17F 1j、16b層		明褐色	やや粗	良	注口部完存	
175	35	縄文土器	浅鉢	口縁部は内湾し、端部は丸くおさまる。	外面はミガキ、内面はナデ。外面に半裁竹管による沈線文。	1区、17F 8j、1~3層		にぶい褐色	粗	良	—	
176	207	縄文土器	鉢	口縁部は内湾する。波状口縁。	調整不明。	2区、1b層		灰黄色	粗 生駒産胎土	良	—	
177	109	縄文土器	浅鉢	口縁部は屈曲・外反して開く。	調整不明。	1区、17E 8i、3層		にぶい黄褐色	粗	やや軟	20	
178	98	縄文土器	浅鉢	口縁部は内湾し端部は面をもつ。	内外面ともナデ。外面に半裁竹管による沈線文。	1区、17F 5j、3層	口径：15.4	灰色	粗	やや軟	10	
179	121	縄文土器	深鉢	口縁部は外反して開き、端部は丸くおさまる。	外面は条痕、内面はナデ。	1区、17F 8i、2~3層	口径：18.5	にぶい褐色	粗	やや軟	10	
180	288	縄文土器	鉢	口縁部は緩やかに外反して開き端部は面をもつ。	内外面ともナデ。	3区、17F 5g、3~4層	口径：19.4	黒褐色	粗	やや軟	20	
181	97	縄文土器	深鉢	口縁部は内湾気味に開き、端部は面をもつ。	外面は粗い条痕文、内面はナデ。	1区、17F 5j、3層	口径：30.8	にぶい黄褐色	やや粗	良	10	
182	122	縄文土器	深鉢	口縁部は内湾気味に開く。	外面は調整不明、内面はナデ。外面に不明瞭な沈線。	1区、17F 7h、3層	口径：34.8	暗灰黄色	粗	良	10	
183	289	縄文土器	鉢	口縁部は内湾して、端部は肥厚する。	内外面ともナデ。	3区、17F 6h、3~4層		にぶい褐色	粗	やや軟	—	
184	49	縄文土器	浅鉢	口縁部は内湾気味に開き端部は面をもつ。	内外面ともナデ。	1区、17F 6h、3層		暗グレー褐色	粗 生駒産胎土	良	—	
185	87	縄文土器	深鉢	口縁部は内湾する。口縁端部外面に低い稜。	外面は粗い条痕、内面・口縁端部はナデ。	1区、17F 7j、3層		黄灰色	粗	良	—	外面は凹凸が目立つ。
186	203	縄文土器	深鉢	波状口縁。	外面は条痕文、内面はナデ。	2区、1b層		灰黄褐色	粗	良	—	
187	206	縄文土器	深鉢	口縁部は内湾気味に開き端部は面をもつ。	外面は調整不明、内面は横方向のナデ。端面に縄文か。	2区、1b層		灰白色	粗	軟	—	
188	283	縄文土器	鉢	口縁部は外反気味に開き端部は肥厚する。波状口縁で頂部に切込みを入れる。	内外面ともナデ。	3区、17F 9g、3~4層		灰黄色	粗	やや軟	—	
189	131	縄文土器	深鉢	口縁部は外反して開き口縁端部は屈曲して内傾する。波状口縁。	外面は横方向のミガキ、内面・口縁部内外面はヨコナデ。	1区、17F 8j、3層	口径：31.4	にぶい黄褐色	やや粗 生駒産胎土	良	—	ミガキは不明瞭。
190	411	縄文土器	深鉢	体部は倒卵形で、口縁部は屈曲して内湾気味に短く開く。	体部外面はケズリまたは工具によるナデ、内面はナデまたはケズリ。口縁部は内外面ともケズリ、端部はヨコナデ。頸部外面に沈線状の強いヨコナデ。	9区、側溝	口径：25.0	灰黄色	粗	やや軟	10	
191	169	縄文土器	深鉢	口縁部は僅かに屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はケズリ、内面はナデ。口縁部外面は横方向の細かいミガキ、内面はナデ。	1区、排土		灰白色	粗	堅	—	ミガキは不明瞭。
192	276	縄文土器	深鉢	口縁部は僅かに屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はケズリ、内面はナデ。口縁部外面は調整不明、内面はナデ。	3区、18F 1g、3~4層		灰黄色	粗	良	—	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
193	92	縄文土器	鉢	口縁部は僅かに屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はケズリ、内面はナデか。口縁部外面はナデ、内面は条痕。	1区、17F 7i、3層		暗灰黄色	やや粗	堅	—	
194	258	縄文土器	鉢	口縁部は屈曲して外上方に開き端部は尖る。	体部は内外面ともナデか。口縁部外面は条痕、内面はナデか。	3区、18F 2～3f、3～4層		浅黄色	粗	軟	—	調整不明瞭。
195	333	縄文土器	鉢	口縁部は外上方に開き端部は丸くおさまる。	口縁部外面は条痕、内面は丁寧なナデ。口縁端部に刻目。	3区、18F 1f、3～4層		灰黄色	粗	やや軟	—	
196	19	縄文土器	深鉢	底面は大きく凹む。端部は外上方に直線的に開く。	底部外面は棒状工具による圧痕。体部外面は条痕、内面は工具によるナデ。	1区、17F 7i、1～3層	底径：5.4	黄褐色	粗	良	底部完存	
197	96	縄文土器	深鉢	口縁部は内傾する。外面に突帯。	内外面ともナデ。	1区、17F 5j、3層	口径：20.6	浅黄色	粗	やや軟	10	
198	80	縄文土器	深鉢	口縁部は外反気味に開く。端部外面に突帯。	口縁部外面は条痕のちナデ、内面・口縁端部はナデ。	1区、17F 9～10h、3層	口径：22.2	黒褐色	粗 生駒産胎土	良	10	
199	463	弥生土器	壺	口縁部は大きく外反し口縁端部は屈曲して外上方に開き丸くおさまる。	口縁部外面はミガキ、内面はヨコナデ。口縁端部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5f、390流路	口径：16.4	にぶい黄褐色	やや粗	やや軟	20	甕の可能性。
200	135	弥生土器	壺	口縁部は外反して開き端部は上方に尖る。器壁は分厚い。	口縁部外面はヨコナデ、内面は粗いミガキ。口縁端部はヨコナデのち刻目。	1区、17F 6j、3層	口径：27.4	にぶい橙色	粗	良	10	
201	254	弥生土器	壺	口縁部は大きく外反して開き端部を下へ拡張して面をもつ。	口縁部は内外面ともハケ。口縁端部はヨコナデ。	3区、18F 8f、1～4層	口径：22.0	橙色	やや粗	良	10	
202	353	弥生土器	壺	口縁部は直立し端部は外反して開く。	口縁部外面はミガキ、内面はヨコナデ。口縁端部はヨコナデ。	4区、17E 4～6j、61溝	口径：9.0	にぶい黄褐色	粗	良	25	
203	325	弥生土器	壺	口縁部は大きく外反して開き端部を下へ拡張して面をもつ。	口縁部外面はヨコナデ、内面はミガキ。口縁端部はヨコナデのち櫛描文・浮文。	3区、18F 1e、3～4層	口径：19.0	にぶい黄褐色	粗	良	20	口縁部内面に広く黒斑
204	394	弥生土器	壺	肩部は内傾する。	外面は丁寧なナデのち櫛描文、内面はナデ。	5区、17E 4f、390流路		にぶい黄褐色	やや粗	良	—	
205	174	弥生土器	鉢	体部は扁球形。口縁部は屈曲して外上方に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はナデ、内面は粗いミガキ。口縁部外面はヨコナデ、内面は粗いミガキ。	2区、2b層	口径：24.0	にぶい黄褐色	粗	やや軟	10	口縁部外面の1箇所内面に黒斑。内面調整はナデの可能性。
206	464	弥生土器	高杯	脚部は中夾の短い柱状部から裾部は大きく開く。杯部は内湾し、口縁部は僅かに屈曲・内傾して端部は丸くおさまる。	脚部外面はミガキ、内面はシボリのちナデ。杯部外面はミガキ、内面はミガキ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	5区、17E 5f、390流路	口径：11.8	にぶい黄褐色	粗	良	50	杯部外面の1箇所に黒斑。ミガキは不明瞭
207	308	弥生土器	高杯	脚部は内湾気味に開く。透孔は3孔。	外面はミガキ、内面はハケ。	3区、18F 1～2e、3～4層	脚径：11.0	にぶい黄褐色	やや粗	良	50	内面に穿孔1箇所に黒斑。
208	192	弥生土器	脚台	脚部は直線的に開き端部に面をもつ。	底部外面はナデ。脚部は内外面ともヨコナデ。	2区、1b層	脚径：4.3	浅黄褐色	やや密	堅	90	
209	134	弥生土器	鉢	体部・口縁部は内湾気味に開き端部は丸くおさまる。	外面はタタキ、内面はナデ。	1区、17F 6j、3層	口径：16.4	にぶい橙色	粗	やや軟	10	調整不明瞭。
210	271	弥生土器	鉢	体部は内湾気味に立ち上る。底部中央に穿孔。	底部は内外面ともナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	3区、18F 1g、3～4層	底径：3.0	灰白色	粗	やや軟	50	底部外面に穿孔中心の円形圧痕。
211	176	弥生土器	甕	底面中央が僅かに凹む平底。体部は内湾気味に立ち上る。	底部外面はナデ、内面はハケ。体部外面はタタキ、内面はハケ。	2区、2b層	底径：5.0	にぶい橙色	やや粗	良	50	
212	250	弥生土器	甕	平底。体部は内湾気味に立ち上る。	底部外面はナデ、内面は工具によるナデ。体部外面はタタキ、内面は工具によるナデ。	3区、18F 1e、3～4層	底径：3.7	にぶい黄色	やや粗	良	100	
213	141	弥生土器	甕	底部は小さな平底。体部は内湾して立ち上る。	底部外面はタタキのちナデ、内面は指オサエ。体部外面はタタキ、内面はハケ。	1区、17F 6j、3層	底径：2.0	褐灰色	粗	良	底部完存	外面全面に煤が付着。
214	252	弥生土器	甕	底部は小さな平底。体部は内湾して立ち上る。	底部・体部外面はタタキのち一部ナデ、内面は工具によるナデ。	3区、18F 1f、3～4層	底径：1.8	浅黄色	やや粗	良	100	外面の1箇所に黒斑。
215	139	弥生土器	甕	体部は半球形。口縁部は屈曲・大きく外反して開き端部は丸くおさまる。	体部外面下半はタタキのちナデ、上半はタタキ、内面はナデ。口縁部外面はタタキのちヨコナデ、内面はヨコナデ。	1区、17F 6j、3層	口径：14.4	明赤褐色	粗	良	5	
216	123	弥生土器	甕	口縁部は屈曲・外反し端部は丸くおさまる。	体部外面はタタキ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 7h、3層	口径：12.4	にぶい褐色	やや粗	良	25	
217	84	弥生土器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はタタキ、内面はヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 7j、3層	口径：15.6	にぶい黄褐色	粗	良	20	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
218	229	弥生土器	甕	口縁部は屈曲・外反して開く。	体部外面はタタキ、内面はヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	3区、17F 9f、3～4層		にぶい黄橙色	粗	良	20	
219	154	弥生土器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して開く。	体部外面はタタキ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 9i、3層		橙色	粗	良	20	外面に薄く煤が付着。
220	65	土師器	壺	口縁部は強く屈曲して2段に外反して大きく開き端部は面をもつ。	体部外面は粗いミガキ、内面はナデ。口縁部は内外面とも細かいミガキ。外面に浮文。	1区、17F 5h～i、3層	口径：18.0	にぶい橙色	やや粗	良	100	口縁部完存。
221	62	土師器	壺	口縁部は2段に外上方に開き端部は面をもつ。	口縁部外面はヨコナデのちミガキか、内面はミガキ。外面に沈線文・浮文。	1区、17F 10i、3層	口径：22.6	にぶい橙色	やや粗	やや軟	10	
222	428	土師器	壺	口縁部は2段に外反して大きく開き端部は面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	9区、18F 3j、西壁	口径：10.6	赤橙色	やや密	やや軟	10	調整はミガキの可能性。高杯の可能性。
223	137	土師器	壺	口縁部は外上方に直線的に開く。	外面はハケののちナデのち一部ミガキ、内面はハケののちヨコナデ。口縁部はヨコナデ。	1区、17F 6j、3層	口径：8.4	褐色	やや粗	良	10	
224	190	土師器	壺	口縁部は外上方に直線的に開き端部は丸くおさまる。	内外面ともヨコナデ。	2区、18F 6i、側溝	口径：10.4	にぶい褐色	粗	良	20	
225	133	土師器	壺	体部はやや扁球形。	外面は調整不明。内面は指オサエののちヨコナデ。	1区、17F 6j、3層		にぶい橙色	粗	やや軟	30	
226	182	土師器	壺	口縁部は屈曲して外上方に直線的に開き端部は丸くおさまる。器壁は薄い。小型丸底壺。	体部・口縁部は内外面ともミガキか。	2区、北西壁	口径：9.8	橙色	密	やや軟	20	調整不明瞭。
227	301	土師器	壺	体部はやや扁球形。口縁部は屈曲して内弯気味に開き端部は丸くおさまる。小型丸底壺。	体部外面はミガキ、内面はナデ。口縁部外面はミガキまたはヨコナデ、内面はミガキ。	3区、17F 10g、3～4層	口径：10.0	褐色	密	良	25	
228	269	土師器	器台	杯部は外上方に直線的に開き端部は面をもつ。小型器台。	杯部は内外面ともミガキ。端部はヨコナデ。	3区、18F 1g、3～4層	口径：10.2	にぶい褐色	密	堅	20	
229	201	土師器	小型土器	口縁部は屈曲して短く外上方に開く。	体部は内外面ともナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケののちヨコナデ。	2区、1b層	口径：9.0	褐色	やや粗	堅	20	
230	175	土師器	小型土器	体部は半球形。口縁部は屈曲して外上方に尖る。	体部外面は指オサエののちナデ、内面はナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ。	2区、2b層	口径：6.4	にぶい黄褐色	密	良	20	
231	342	土師器	小型土器	底部は小さな平底。体部は緩やかに屈曲して立ち上る。	調整不明。	4区、17E 5j、8a層	底径：2.2	褐色	やや密	やや軟		底部完存
232	346	土師器	小型土器	脚部は中実の柱状部から裾部が短く大きく開く。杯部は内弯して開き端部は丸くおさまる。	脚部外面はヨコナデ、内面は指オサエ。杯部は内外面ともナデ、端部はヨコナデ。	4区、17F 4～5a、8b層	口径：7.0	にぶい褐色	密	良	20	
233	323	土師器	甕	口縁部は屈曲して外上方に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はハケ、内面はケズリ。口縁部は内外面ともハケののちヨコナデ。	3区、18F 1e、3～4層	口径：14.6	浅黄色	密	良	30	
234	115	土師器	甕	口縁部は屈曲して外上方に直線的に開き端部は上方に尖る。	体部外面は細かいタタキ、内面はケズリののちナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17E 8i、3層	口径：20.8	黄褐色	密	良	—	口縁部外面に煤が付着
235	145	土師器	甕	口縁部は屈曲・外反して開き端部は丸くおさまる。	体部内面はケズリか。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 6j、3層	口径：22.0	黒褐色	やや密	堅	—	
236	227	土師器	甕	口縁部は屈曲・外反して開き端部は上方に尖る。	体部内面はケズリ。口縁部外面は指オサエののちヨコナデ、内面はヨコナデ。	3区、機械掘削中	口径：15.4	灰白色	やや粗	やや軟	25	
237	23	土師器	壺	口縁部は大きく外反・屈曲して外上方に直線的に開く。	体部外面はナデ、内面はハケののちナデ。頸部・口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 9h、1～3層	口径：28.0	浅黄色	粗	良	20	
238	172	土師器	脚台	脚部は内弯気味に開き、端部は内傾する面をもつ。	外面はハケ、内面はナデ。端部はヨコナデ。端部は内側に折り曲げる。	2区、2b層	脚径：8.8	にぶい褐色	粗	やや軟	10	
239	408	土師器	椀	体部・口縁部は内弯して開く。	体部外面は指オサエののちナデ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	9区、18E 3h～1、3～4層	口径：8.8 器高：3.0	灰白色	粗	やや軟	25	
240	83	土師器	椀	体部は緩やかに屈曲・内弯して立ち上り端部は上方に尖る。	底部・体部外面は指オサエののちナデ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 7j、3層	口径：11.2 器高：3.8	にぶい黄褐色	やや粗	良	30	
241	45	土師器	椀	体部・口縁部は内弯して開き端部は外反する。	体部外面はケズリ、内面はヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部内面に暗文。	1区、17F 9i、3層	口径：13.0	褐色	密	良	10	
242	31	土師器	皿	口縁部は内弯して開き端部はやや肥厚する。	底部外面はケズリ、内面はナデ。口縁部外面はケズリ、内面はヨコナデ。端部はヨコナデ。	1区、17F 5h、3層	口径：16.0	にぶい褐色	やや粗	良	10	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
243	30	土師器	皿	口縁部は内湾して開き端部は外上方に尖る。	口縁部は内外面ともナデ。端部はヨコナデ。口縁部内面は暗文。	1区、17F 5h、3層	口径：12.0	にぶい 橙色	密	良	25	
244	20	土師器	皿	平高台。口縁部は内湾気味に開き端部は内傾する面をもつ。	底部外面はナデ、側面はヘラによるオサエ、内面はヘラによるオサエのちナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 8i、1～3層	口径：15.6	橙色	粗	良	20	
245	281	土師器	甕	口縁部は屈曲して外反気味に開き端部は丸くおさまる。	体部外面はハケ、内面は指オサエのちナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケのちヨコナデ。	3区、18F 2～3g、3～4層	口径：15.4	にぶい 黄橙色	やや粗	良	20	
246	99	土師器	甕	口縁部は屈曲・外反して開く。	体部外面はハケ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 5j、3層	口径：16.2	明黄褐色	密	堅	10	
247	244	土師器	甕	口縁部は屈曲・大きく外反して開き端部は面をもつ。	体部外面はハケ、内面は指オサエのちナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケのちヨコナデ。	3区、17F 10g、3～4層	口径：24.0	灰黄褐色	やや粗	良	10	
248	67	土師器	甕	口縁部は屈曲して外反気味に開き端部は面をもち上方に尖る。	体部は内外面ともハケ。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケのちヨコナデ。	1区、17F 5h～i、3層	口径：26.4	にぶい 黄橙色	粗	良	20	
249	212	土師器	甕	体部はやや長胴形。口縁部は外上方に開き端部は丸くおさまる。	体部外面は粗いナデ、内面は粗いヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	2区、1b層	口径：28.8	にぶい 黄橙色	粗	やや軟	30	調整は全体に粗雑。
250	1	土師器	鍋	体部は半球形。口縁部は屈曲して水平方向に開き端部は面をもつ。	体部外面はハケ、内面はナデ。口縁部は内外面ともハケのちヨコナデ。端部はヨコナデ。	1区、17F 5h、3層	口径：30.8	橙色	やや粗	良	10	
251	66	土師器	甗	口縁部は内湾気味に開き端部は上方に尖る。	口縁部は内外面ともハケ。端部はヨコナデ。	1区、17F 5h～i、3層	口径：30.1	橙色	やや粗	良	10	
252	362	須恵器	杯蓋	天井部は平坦で口縁部は屈曲して垂下し端部は面をもつ。外面に稜。	天井部外面は回転ケズリ(方向不明)。他はヨコナデ。	5区、17E 5g、4～5層	口径：10.4	灰白色	密	堅	10	天井部外面に自然釉。
253	158	須恵器	甕	口縁部は大きく外反して開き端部は丸くおさまる。外面に突帯。	内外面ともヨコナデ。	1区、17F 9i、3層	口径：23.0	灰白色	密	良	10	
254	296	須恵器	器台か	緩やかに内湾する。外面に突帯。	内外面ともヨコナデ。	3区、17F 8f、1～4層		灰色	やや粗	やや軟	10	
255	183	須恵器	器台か	脚部は円筒形。外面に突帯。	脚部は内外面ともヨコナデ。杯部内面はナデ。脚部外面に櫛描文。	2区、北西壁		灰色	密	良	10	
256	177	韓式土器	甕	—	外面は格子タタキ、内面は丁寧なナデ。	2区、2b層		にぶい 黄橙色	やや粗	良	—	土師質。
257	418	韓式土器	甕	—	外面は縄文、内面は同心円タタキのち丁寧なナデ。	9区、18F 1h、3～4層		褐灰色	密	良	—	須恵質。
258	103	韓式土器	甕	—	外面は縄文、内面はナデ。	1区、17F 7～8i、3層		暗青灰色	密	堅	—	須恵質。
259	210	韓式土器	甕	—	外面はナデ、内面は同心円タタキ。	2区、1b層		浅黄橙色	やや粗	堅	—	土師質。
260	59	須恵器	杯蓋	天井部は扁平で口縁部は内湾して垂下し端部は丸くおさまる。	天井部外面は左回りの回転ケズリ内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	1区、17F 9h、3層	口径：7.4	灰白色	密	堅	10	天井部外面にヘラ記号。
261	90	須恵器	杯蓋	天井部は扁平で口縁部は内湾して垂下し端部は丸くおさまる。	天井部外面はヘラ切りのちナデ、周辺は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	1区、17F 7i、3層	口径：10.7	青灰色	やや密	堅	30	口縁部はややひずむ。
262	95	須恵器	杯身	底部は扁平で受部は水平方向に開く。立ち上り部は内傾する。	底部外面は左回りの回転ケズリ、内面はナデ。他はヨコナデ。	1区、17F 5j、3層	口径：12.0	灰色	密	堅	25	
263	27	須恵器	杯身	底部は扁平で受部は水平方向に開く。立ち上り部は内傾し大きく外反する。	底部外面中央はヘラ切りのちナデ、周辺は左回りの回転ケズリ、内面はナデ。他はヨコナデ。	1区、17F 9i、3層	口径：10.8 器高：3.4	明青灰色	密	堅	100	完形。
264	363	須恵器	甕	口縁部は外上方に直線的に開き端部は丸くおさまる。外面に1条の突帯が巡る。	内外面ともヨコナデ。外面に櫛描文。	5区、17E 4c、6～7層	口径：7.6	灰色	密	堅	10	
265	233	須恵器	甕	体部は肩が張る。	内外面ともヨコナデ。外面に沈線・刺突文。	3区、17F 10f、3～4層		灰白色	やや粗	良	10	
266	138	須恵器	甕	口縁部は屈曲して内湾気味に開き端部は内傾する面をもつ。	内外面ともヨコナデ、外面に沈線。端部外面に弱い刻目。	1区、17F 6j、3層	口径：11.2	灰白色	やや粗	良	20	
267	242	須恵器	甕	体部はやや扁球形。	底部外面は左回りの回転ケズリ、内面は回転ナデ。体部は内外面ともヨコナデ。	3区、17F 10d～e、3～4層		灰色	やや粗	堅	底部完存	底部内面に穿孔による粘土片が付着。
268	4	須恵器	杯蓋	天井部は平坦で口縁部は外下方に垂下する。返り部は短く外反する。	天井部外面は左回りの回転ケズリ。他はヨコナデ。	1区、17F 5h、3層	口径：11.6	灰白色	密	堅	40	

遺物番号	実測図番号	器種	器形	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
269	114	須恵器	杯蓋	天井部は平坦で口縁部は屈曲し端部は下方に尖る。	天井部外面は回転ケズリ(方向不明)ののちナデ。他はヨコナデ。	1区、17E 8i、3層	口径:13.4	灰白色	密	堅	—	
270	349	須恵器	杯身	平底。体部・口縁部は内湾して立ち上り端部は丸くおさまる。	底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はナデ。他はヨコナデ。	4区、17E 6~7i、11層	口径:5.2	灰白色	やや密	やや軟	25	
271	105	須恵器	杯身	体部は緩やかに屈曲して外上方に開く。輪高台。	底部外面はヘラ切りののちナデ、内面はヨコナデ。体部は内外面ともヨコナデ。貼付高台。	1区、10G 10a、3層	底径:9.0	灰色	密	堅	30	
272	82	須恵器	皿	口縁部は外上方に開き端部は外反する。輪高台。	底部外面は回転ケズリ(方向不明)。他はヨコナデ。貼付高台。	1区、17F 7j、3層	口径:13.6 器高:2.5	灰白色	密	やや軟	20	
273	25	須恵器	鉢	体部は内湾して立ち上り口縁部は直立し端部は丸くおさまる。	底部外面はヘラ切りののち不定方向のケズリののちナデ、内面はナデ。他はヨコナデ。	1区、17F 10i、1~3層	口径:15.0	暗灰色	密	堅	20	
274	16	須恵器	鉢	体部は内湾して立ち上り口縁部は直立し端部は丸くおさまる。	底部外面は細かい回転ケズリ(方向不明)、内面はナデ。他は丁寧なヨコナデ。口縁部外面に浅い沈線。	1区、17F 7h、側溝	口径:16.8	青灰色	密	堅	20	
275	216	須恵器	壺	体部は肩が張る。口縁部は屈曲して短く直立し端部は内傾する面をもつ。	体部・口縁部は内外面ともヨコナデ。	2区、東壁	口径:10.4	灰色	密	良	10	肩部外面に蓋の重ね焼痕。
276	120	須恵器	壺	体部は屈曲して外上方に開き肩部は強く屈曲して稜が巡る。輪高台。	体部・肩部外面は丁寧なヨコナデ。内面はヨコナデ。貼付高台。	1区、17F 8i、2~3層		灰色	やや密	堅	20	肩部外面に自然釉。
277	73	瓦器	椀	体部・口縁部は内湾して開く。輪高台。	底部外面はナデ、内面はナデののち暗文。体部・口縁部は内外面とも細かいミガキ。口縁部内面に沈線。貼付高台。	1区、17F 9~10h、3層	口径:14.2 器高:5.9	灰白色	密	やや軟	40	楠葉産。
278	260	瓦器	椀	体部・口縁部は内湾して開く。輪高台。	底部外面はナデ、内面はナデののち暗文。底部・口縁部外面は指オサエ・ヨコナデののち粗いミガキ、内面はミガキ。口縁部内面に沈線。貼付高台。	3区、18F 3f、3~4層	口径:15.0 器高:6.0	灰白色	密	良	30	大和産。
279	415	瓦器	播鉢	口縁部は内湾気味に開き端部は内傾する面をもつ。片口あり。	口縁部外面はナデ、内面は丁寧なナデののち播目。端部はヨコナデ。片口内面は縦方向のナデ。	9区、18F 1h、3~4層	口径:26.4	灰色	密	良	10	
280	113	瓦器	播鉢	口縁部は内湾気味に開き端部は拡張して外傾する面をもつ。	口縁部外面はケズリ、内面はハケののち播目。端部はヨコナデ。	1区、17E 8i、3層	口径:30.0	灰色	良	良	10	
281	416	瓦器	鍋釜	口縁部は内傾し端部は面をもつ。外面に罫が巡る。	体部外面は指オサエ、内面はナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。罫はヨコナデ。	9区、18F 1h、3~4層	口径:15.8	灰色	やや粗	良	10	
282	253	瓦器	鍋釜	口縁部は内湾して端部は丸くおさまる。外面に罫が巡る。	体部内面はヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。罫はヨコナデ。口縁部外面に沈線。	3区、18F 1f、3~4層	口径:2.8	黒褐色	やや密	良	10	外面全面に煤が付着
283	274	瓦器	鍋釜	口縁部はほぼ直立し端部は内上方に尖る。外面に罫が巡る。	口縁部は内外面ともヨコナデ。罫はヨコナデ。	3区、18F 1g、3~4層	口径:28.2	黄灰色	やや粗	良	10	
284	100	瓦器	香炉	体部は円筒形。	外面はミガキ、内面はヨコナデ。外面に沈線・印刻。	1区、17F 5j、3層		灰色	密	堅	—	ミガキは不明瞭。
285	340	瓦器	火鉢	体部は直立し端部は拡張して平坦な面をもつ。	体部外面は調整不明、内面は指オサエののちナデ。端部はヨコナデ。端面はミガキか。	3区、17F 8g、3~4層	口径:47.6	灰白色	密	やや軟	—	
286	110	緑釉陶器	椀	平高台。	調整不明。削出高台。	1区、17E 8i、3層	底径:7.0	灰白色	粗	軟	50	釉薬は大部分が剥離。洛北産。
287	3	施釉陶器	鉢	体部は緩やかに屈曲して立ち上り口縁部は外反気味に開く。	底部外面は回転糸切りののちナデ、口縁部外面はヨコナデ。内面・口縁部外面に施釉。灰釉。	1区、17F 9i、3層	口径:9.4	灰白色	密	堅	30	瀬戸美濃産。
288	14	磁器	椀	輪高台。	底部外面はケズリ。削出高台。底部内面に印刻。底部外面以外に施釉。青磁。	1区、17F 8h、側溝	底径:4.4	灰色	やや粗	良	底部完存	高台の3箇所に目痕。中国産。
289	214	磁器	椀	輪高台。	底部外面はケズリ。削出高台。底部内面に印刻。底部外面以外に施釉。青磁。	2区、2b層	底径:4.5	明緑灰色	密	良	75	中国産。
290	197	磁器	椀	輪高台。	底部外面はケズリ。削出高台。底部内面に印刻。底部外面・内面中央以外に施釉。青磁。	2区、1b層	底径:6.5	カーブ灰色	密	堅	60	中国産。
291	60	磁器	椀	輪高台。体部は内湾して開く。	底部外面はケズリ。削出高台。体部外面に左上がりのケズリによる浅い沈線。底部外面以外に施釉。青磁。	1区、17F 5h、1~3層	底径:6.0	明カーブ灰色	密	堅	50	中国南部産か。

表9 瓦類観察表

遺物番号	実測図番号	種類	文様の特徴	技法の特徴	出土位置	色調	胎土	焼成	備考
292	476	軒丸瓦	複弁八葉蓮華文。	瓦支部裏面上部に丸瓦を当てて接合。瓦当裏面はナデ。	1区、17F 10i、3層	灰白色	やや粗	良	
293	482	軒丸瓦	重弁八葉蓮華文。珠文は粗く巡る。周縁は素文。	接合不明。瓦当裏面はナデ。丸瓦凸面・凹面ともタテナデ。	3区、17F 6d、5層	灰白色	やや密	良	
294	474	軒平瓦	重弧文。	端面をヨコケズリののち施文。瓦支部上縁は幅のせまいヨコケズリ。平瓦凹面は布目。凸面は粗い格子タタキ。	1区、17F 8j、3層	灰色	やや粗	良	
295	475	鬼瓦瓦	大きい珠文。	型で成形。表面・側面はナデ。裏面はケズリ。	1区、17F 9i、3層	灰白色	密	良	
296	479	軒丸瓦	右回り三巴文で尾は長く他の尾に接する。珠文は粗く巡る。	瓦支部裏面上部に丸瓦を当てて接合。瓦当側面上位はタテナデ、下位はヨコナデ。裏面はナデ。接合部はヨコナデ。	2区、北西壁	にぶい黄褐色	密	良	
297	478	軒丸瓦	左回り三巴文。	調整不明。	2区、1b層	灰色	密	やや軟	
298	483	軒丸瓦	右回り三巴文。尾は長い。珠文は粗く巡る。	瓦当珠文下位はヨコナデ。裏面はナデ。瓦支部ははなれ砂が顕著。	9区、18F 1i、3～4層	暗灰色	密	堅	右上から2つ目の珠文に范傷。
299	477	軒平瓦	外行唐草文。周縁は素文。	接合不明。瓦当上縁はヨコケズリ。顎部下面・裏面はヨコナデ。平瓦凹面・凸面ともタテナデ。	1区、17F 8h～I、5層	暗灰色	密	良	
300	43	軒平瓦	外行唐草文。周縁は素文。	接合不明。瓦支部上縁はヨコケズリ。顎部下面・裏面はヨコナデ。平瓦凹面はナデ、凸面はタテナデ。	1区、17F 7i、1～3層	灰色	密	良	
301	481	軒平瓦	唐草子。詳細不明。	顎貼付技法。貼付部はヘラによる格子状のカキメ。平瓦凹面・凸面ともナデ。	3区、17F 6e、5層	灰白色	やや密	良	
302	61	軒平瓦	連珠文。周縁は素文。	接合不明。瓦支部上縁はヨコケズリ。顎部下面・裏面はヨコナデ。平瓦凹面は布目、凸面はタテナデ。	1区、17F 9～10j、3層	灰色	やや密	やや軟	端から3つ目と4つ目の珠文の間に范傷。
303	241	埴	方形の板状。	表面・裏面・側面ともナデか。調整の詳細不明。	3区、17F 10d～e、3～4層	浅黄褐色	粗	軟	

表10 埴輪・土製品観察表

遺物番号	実測図番号	種類	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量 (cm)	色調	胎土	焼成
304	209	円筒埴輪	口縁部は直立し端部は僅かに内傾するあまい面をもつ。	外面はナデ、内面は指オサエののちヨコハク。端部はヨコナデ。	2区、1b層	口径：11.2	にぶい黄褐色	やや粗	良
305	410	円筒埴輪	口縁部は緩やかに外反し端部は面をもつ。	内外面ともナデ。	9区、18E 3h～I、3～4層		橙色	粗	やや軟
306	409	円筒埴輪	断面低いM字形の箍。	外面はタテハク、内面は指オサエ・ナデ。箍は貼付ののち指ナデで仕上げ。	9区、18E 3h～I、3～4層		浅黄褐色	やや粗	良
307	442	円筒埴輪	断面台形の箍。円形の透孔。	内外面ともタテハク。箍は貼付ののち指ナデで仕上げ。外面に赤彩の痕跡。	9区、南壁		橙色	密	良
308	230	家形埴輪	板状。断面台形の箍。	外面はナデ、内面は指オサエののちナデ。箍は貼付ののち指ナデで仕上げ。	3区、17F 9f、3～4層		にぶい黄褐色	粗	良
309	162	製塩土器	中実の脚部から裾部は短く開く。	指オサエ。	1区、17F 10i、11層	脚径：4.0	明黄褐色	粗	堅
310	211	焼塩壺	分厚い円筒形。	外面はナデ、内面は布目か。外面に刻印。	2区、1b層		橙色	粗	軟

表11 石製品観察表

遺物番号	実測図番号	種類	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
311	491	ナイフ形石器	細長い柳葉形。	横長剥片を斜位に用いる。側縁はネガティブ面。片面より調整剥離。	1区、17F 7h、1～3層	7.55	2.00	1.05	12.40	サヌカイト。完形か。表面磨滅。
312	492	翼状剥片	ややいびつな三角形。	2次加工はない。一部に自然面が残る。	1区、17F 7j、3層	3.80	7.10	1.05	26.60	サヌカイト。完形。表面磨滅。
313	493	翼状剥片	ややいびつな三角形。	2次加工はない。側縁のほぼ全体に自然面が残る。	1区、17F 5j、3層	3.30	8.50	1.00	27.33	サヌカイト。完形。表面磨滅。
314	494	石鏃	有茎式。やや丸みをおびた二等辺三角形状。	両面に素材面が残る。側縁のみ調整剥離。	1区、17F 9j、13～14層	4.00	2.20	0.55	4.15	サヌカイト。茎基部欠損。
315	496	石鏃	平基無茎式。細長い三角形状。	細かい調整剥離により側縁は鋸歯状。	5区、17E 4c、13層	5.35	1.75	0.50	3.28	サヌカイト。完形。
316	497	石鏃	三角形状。	細かい調整剥離。	7区、17D 3a、29土坑	1.65	1.20	0.20	0.42	サヌカイト。先端部のみ。
317	495	石鏃	凹基無茎式。側縁は先端付近でやや屈曲。	やや粗い調整剥離。	9区、18F 2h～1、5-1面	2.35	1.55	0.35	1.02	サヌカイト。脚端部的一方を欠損。
318	498	石鏃か	先端は尖る。一辺のみ直線的。	両面に素材面が残る。直線部分の側縁の一部を調整剥離。	9区、17F 10j、13～14層	3.45	2.75	0.70	5.58	サヌカイト。完形。楔形石器の可能性。
319	500	スクレイパー	サイドスクレイパー。刃部はやや内弯する。	両面より調整剥離。一部に自然面が残る。	9区、18F 1h、3～4層	3.35	5.80	0.80	16.12	サヌカイト。完形。表面磨滅により調整剥離は不明瞭。
320	499	スクレイパー	サイドスクレイパー。刃部はやや内弯する。	両面より調整剥離。一部に自然面が残る。	1区、17F 8h、1～3層	3.95	7.10	0.60	27.04	サヌカイト。一部欠損か。表面磨滅により調整剥離は不明瞭。
321	501	楔形石器	不整形な五角形。刃部断面は鈍い。	調整は粗い。	9区、18F 1h、12-3層	2.90	2.80	0.70	7.25	サヌカイト。ほぼ完形。全面に熱を受けた痕跡である細かい亀裂・剥離。
322	502	楔形石器	台形。刃部断面は鋭角。	調整は粗い。	3区、17F 9～10f、3～4層	3.05	3.75	0.80	15.68	サヌカイト。完形。
323	503	楔形石器	楕円形に近い台形。刃部断面は鈍い。	調整は粗い。一部に自然面が残る。	2区、18F 4h～j、1～3層	3.50	4.40	1.40	24.85	サヌカイト。完形。
324	504	楔形石器	側縁の一辺は内弯する。刃部断面は鋭角。	側縁の一辺を片面より調整剥離。	1区、17F 9i、3層	5.05	4.40	1.10	32.61	サヌカイト。完形。表面磨滅により調整剥離は不明瞭。
325	505	楔形石器	側縁の一辺は内弯する。刃部断面は鈍い。	両側縁を両面より調整剥離。一部に自然面が残る。	1区、17F 5h～1、3層	5.05	4.95	1.30	41.76	サヌカイト。先端部欠損か。表面磨滅により調整剥離は不明瞭。
326	507	砥石	方柱形。	すべての側面に長軸方向の使用痕。小口面は自然面。	3区、17F 7f、5層	7.60	2.95	2.85	—	粘板岩か。完形。1箇所に円錐形の穴をあける。
327	506	石臼	受皿部は内弯し端部は水平方向の面をもつ。	丁寧な研磨。	1区、17F 5j、3層	—	—	—	—	砂岩。小破片。

表12 金属製品観察表

遺物番号	実測図番号	種類	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	重さ (g)	備考
328	488	金環	中実。切れ目のある環形。両側面に円周に沿って浅い凹みが巡る。	銅製の芯に金箔を貼付け。	9区、18F 1j、23島畠	13	金箔は内周面の一部と外周面のごく一部にのみ残存。
329	490	銅銭	薄い円盤形で中央に方形の孔。	鑄造。銭面は篆書体「政和通寶」。裏面の外縁の段は不鮮明。	9区、17F 10i、5層	2	中国北宋1111年初鑄。
330	487	煙管	円筒形。先端は断面六角形、口元はすぼまり端部は僅かに開く。	鑄造か。	4区、17E 6～7i、4～6層	8	
331	489	環状鉄製品	扁環形。	両端が薄くなったやや厚手の細長い鉄板を弯曲させて綴じ合わせる。接合不明。	1区、17F 8f、6～11層	28	
332	486	不明鉄製品	板状鉄片の側面により薄い板状鉄片が接合する。	不明。	9区、18F 2h、6～12層	66	

表13 木製品観察表

遺物番号	実測図番号	種類	形態の特徴	技法の特徴	出土位置	法量(cm)	備考
333	525	箸	先端部が僅かに細くなる。断面円形。	詳細不明。	9区、18F 2i、5層	長：10.5 径：0.7	
334	512	漆器椀	輪高台。	挽物。底部外面に黒漆、内面に朱漆。	2区、18F 8～7j、2層	底径：6.4	
335	529	結物	弯曲する細長い板状。	内面は長軸方向の削り。	9区、18F 2j、5層	幅：4.8 厚：0.8	
336	514	円盤状木製品	円盤状。	両平坦面・側面とも削り。詳細不明。	2区、1b層	径：10.3 厚：1.4	完形。片面中央部に焦げ痕。
337	510	板状木製品	半月形の板状。側面に4箇所が目釘穴があり、1箇所には目釘が残る。	両平坦面は長軸方向の粗い削り、側面は丁寧な削り。	1区、17F 8～9i～j、4島畠	幅：4.0 厚：0.9	
338	518	付木	細い棒状。断面長方形。先端部は炭化して尖る。	詳細不明。	3区、17F 7f、3～4層	幅：0.7 厚さ：0.5	箸を転用か
339	530	付木	細長い板状。断面台形。先端部は炭化して僅かに細くなる。	削り。斜交する側面は粗い削り。	9区、18F 1h、24島畠	幅：3.6 厚：1.0	
340	528	付木	細長い棒状。断面隅丸三角形。先端部は炭化して尖る。	詳細不明。	9区、18F 1h、6～12層	幅：1.3 厚：1.2	元は角材か。
341	527	付木	木の枝。先端部は炭化して凹凸がある。	加工痕なし。	9区、18F 2h、7～12層	長：11.4 径2.3	完形。
342	524	付木	木の枝。先端部は炭化して尖る。	加工痕なし。	9区、17F 10j、24島畠	長：15.0 径：1.5	完形。裂目は調査時のもの。
343	511	付木	やや弯曲する木片。先端部は炭化して尖る。	手許の一部は粗い削りにより面をもつ。他は切削り。	1区、17F 7i、第5層	長：16.4	完形。
344	509	付木	先細りの木片。先端部は炭化して尖る。	切削り。	1区、17F 8j、48土坑	長：17.0	完形。裂目は調査時のもの。
345	531	付木	弯曲する先細りの木片。先端部は炭化して尖る。	側面の一部は粗い削り。他は切削り。	9区、18F 1j、24島畠	長：13.8	完形。
346	517	付木	先太りの木片。先端部は炭化して凹凸がある。	切削り。	3区、17F 7f～g、3～4層	長：10.3	完形。
347	515	付木	先細りの木片。先端部は炭化して尖る。	手許の一部は粗い削りにより面をもつ。他は切削り。	2区、1b層	長：9.2	完形。手許も炭化。
348	526	付木	先太りの短い木片。先端部は炭化して尖る。	切削りののち一部に抉り。	9区、18F 3h～i、西壁	長：4.5	手許側の加工痕不明。折れたため短くなった可能性。
349	522	棒状木製品	棒状。断面三角形。	一方の小口は長軸の直交方向に切断。加工痕不明。	3区、18F 1g～h、298土坑	幅：2.0 厚：1.3	一方の小口は調査時に破損。元は角材か。
350	519	棒状木製品	細長い棒状。断面長方形。	丁寧に平面に加工。1面に長軸方向の不等間隔の削り。	3区、17F 7f、3～4層	幅：1.3 厚：1.0	
351	521	棒状木製品	角柱状。	残存する2面は粗く平面に加工。	5区、17F 4f、390流路		ひずみ・反りが激しい。損傷は腐食によるものか。
352	523	楔形木製品	先端が扁平となる角柱状。断面ほぼ長方形。	基部は長軸の直交方向に切断。先端部は粗く削りへら状に加工。	9区、18F 2j、5層	長：14.1 幅：4.2 厚：2.0	完形。ややひずみ・反り。
353	513	杭	先端は尖る。断面は長方形・扁平な六角形。中央に方形の枘穴。	側面を粗く削る。枘穴は両長辺・先端側短辺を加工ののち基部側短辺に切込みを入れて折り取り穿孔。表面・裏面の加工痕は不明瞭。	2区、1b層	幅：3.7 厚：2.0	完形。枘穴のある角材を再加工して転用か。基部の欠損は調査時のもの。
354	520	杭	先端が尖る円柱形。	基部は長軸の直交方向に切断ののち1箇所を斜めにそぎ落とす。先端部は粗く削る。	5区、17F 4f、390流路	長：33.0 径：4.1	完形。
355	516	杭	円柱形。基部・先端部ともに欠損。	先端部は粗く削る。	3区、17F 10h、308土坑	径：3.3	ややひずみ。部分的に樹皮が残る。

写 真 图 版



1 調査地遠景（北東から）



2 調査地遠景（南西から）

写真図版 2



1 8区北部第1面 (北から)



2 8区南部第1面 (北から)



3 8区北部第2面 (北から)



4 8区北部第2面70流路 (北西から)



5 8区南部第3面98流路 (北から)



1 8区北部第5面(北から)



2 8区南部第4面(北から)



3 8区北部第6面(北から)



4 8区南部第5面(北から)



5 8区北部東壁断面(北西から)

写真図版 4



1 7区第1面全景 (北から)



2 7区第2面南部 (西から)



3 7区第4面全景 (北から)



4 7区第4面28流路 (西北西から)



5 7区第5面29土坑 (南東から)



6 7区作業状況 (西から)



1 6区全景（北東から）



2 6区西壁断面（北東から）



3 10区第1面全景（北から）



4 10区第2面全景（北から）



5 10区第3面全景（北から）



6 10区第5面全景（北から）



7 10区第5面16流路（東から）



8 10区西壁断面（北東から）

写真図版 6



1 5区第2面全景（北から）



2 4区第1面全景（北から）



3 4区第2面全景（北から）



4 4区第2面58・59区画（北から）



5 4区第2面51畦（南から）



6 4区第2面56区画（北東から）



1 5区第3面全景（北から）



2 5区第3面建物1（南東から）

写真図版 8



1 5区第3面314・315・316柱穴（北東から）



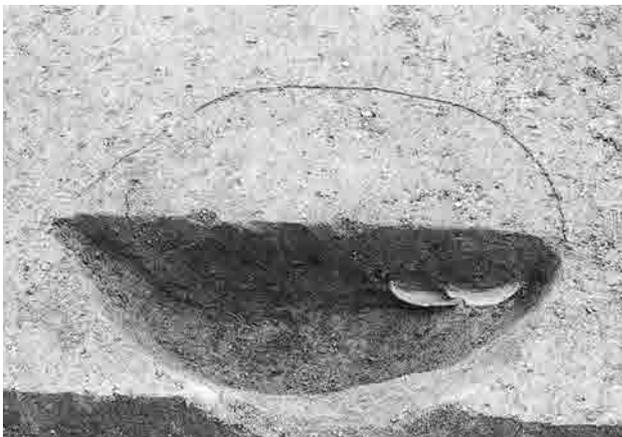
2 5区第3面312柱穴（北東から）



3 5区第3面390溝（西から）



4 5区第3面390溝断面（西から）



5 5区415土坑（西から）



6 5区石鎌出土状況（東から）



1 4区第4面全景（北から）



2 4区第4面61溝（東から）



3 4区第4面62畦検出状況（南から）



4 4区第4面62畦（南東から）



1 5区第4面全景（北から）



2 5区第4面441流路（北西から）



3 5区第4面440井戸土器出土状況（北西から）



4 5区第4面440井戸（北西から）



1 4区第5面水田検出状況（北から）



2 4区第5面99・100・101・103・104区画（南から）



3 4区第5面81畦（南から）



4 4区分析土壌採集断面（北から）

写真図版12



1 5区第5面全景（北から）



2 5区第5面北部（東から）



3 4区第6面全景（北から）



4 4区第6面124流路（東から）



5 5区第6面全景（北から）



6 5区第6面488・489流路（西から）



1 4区第7面全景（北から）



2 4区第7面132流路（東南東から）



3 5区第8面全景（北から）



4 5区第8面根株（西から）



5 5区西壁（南東から）



1 3区第2面全景（西南西から）



2 3区第2面中央部（南西から）



3 3区第2面北東部（南から）



4 3区第2面北西部（南西から）



5 3区第2面66号水口（南西から）



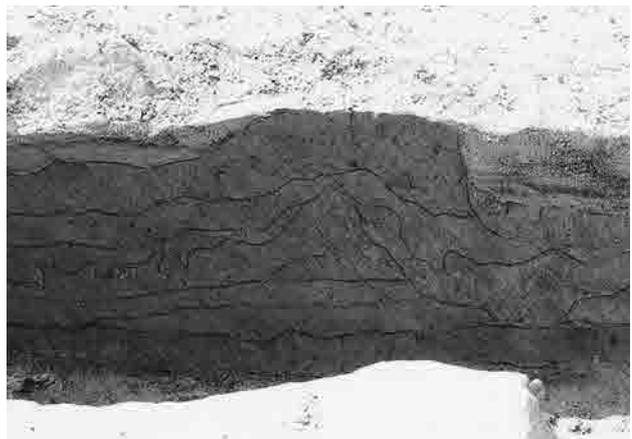
1 1区第2面全景（西から）



2 9区第2面全景（東から）



3 1区第2面3畦（西から）



5 9区第2面4畦断面（東から）



4 1区第2面3畦断面（東から）



6 1区第2面1島・第3面48島断面（北西から）

写真図版16



1 3区第3面中央部(南から)



2 3区第3面東部(北から)



3 3区第3面113畦断面(南から)



6 9区第3面全景(東から)



4 1区第3面東部(北から)



7 9区217置石(北東から)



5 1区第3面南西部(西から)



8 9区金環出土状況(東から)



1 3区第4面全景 (西南西から)



2 3区第4面中央部 (東から)



3 1区第4面全景 (西から)



4 1区第4面耕作溝検出状況 (北東から)



5 9区第4面全景 (東から)



6 9区第4面東部 (北から)



7 3区第4-2面全景 (西から)



8 3区第4-2面251・252・253畦 (南西から)



1 3区第5面全景（西南西から）



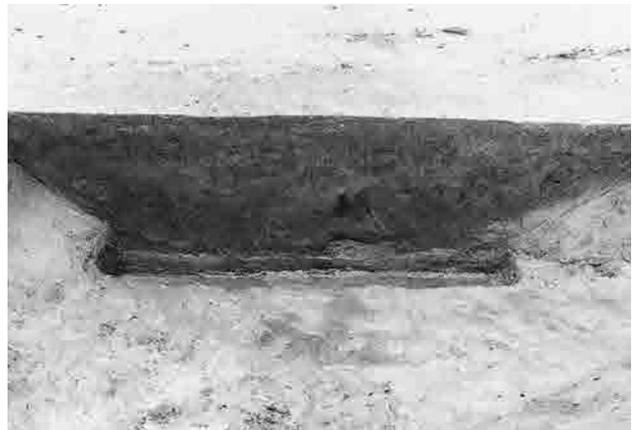
2 3区第5面東部（北から）



4 3区第5面298土坑（北から）



3 3区第5面334土坑（北から）



5 3区第5面298土坑断面（南から）



1 1区第5面全景（西から）



2 9区第5面全景（東から）



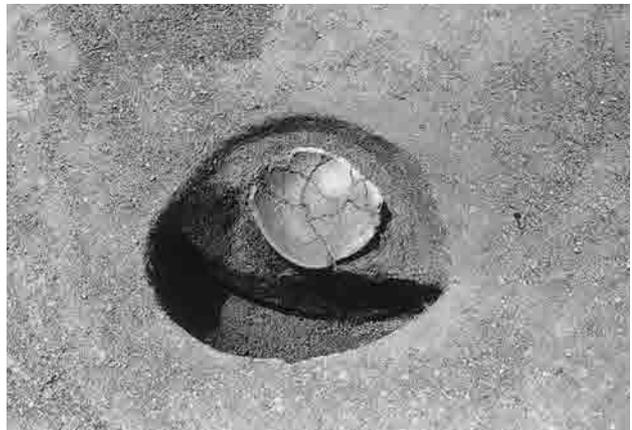
3 1区第5面188土坑土器出土状況（南から）



4 9区第5面南東部（南西から）



5 9区第5-3面134土坑土器出土状況（西から）



6 9区第5面128土坑土器出土状況（東から）



1 3区第6面全景（西南西から）



2 3区第6面東部（北から）



3 1区第6面全景（西から）



4 1区第6面247流路（北西から）



5 9区第6面全景（東から）



6 9区第6面南部（東から）



1 3区第7面424流路(北西から)



2 1区第8面(北東から)



3 3区西壁断面(南東から)



4 3区北壁断面(南から)



5 3区路線中央セクション断面(南西から)



6 1区南壁断面(北西から)



1 1区東壁断面（南西から）



2 9区地震痕跡検出状況（北東から）



3 9区地震痕跡断面（東から）



4 9区下層確認断面（北から）



1 2区第2面全景（北東から）



2 2区第2面北部（東から）



3 2区第2面南部（北から）



4 2区第2面18溝断面（西から）



1 2区第3面全景（北東から）



2 2区第3面33畦（北西から）



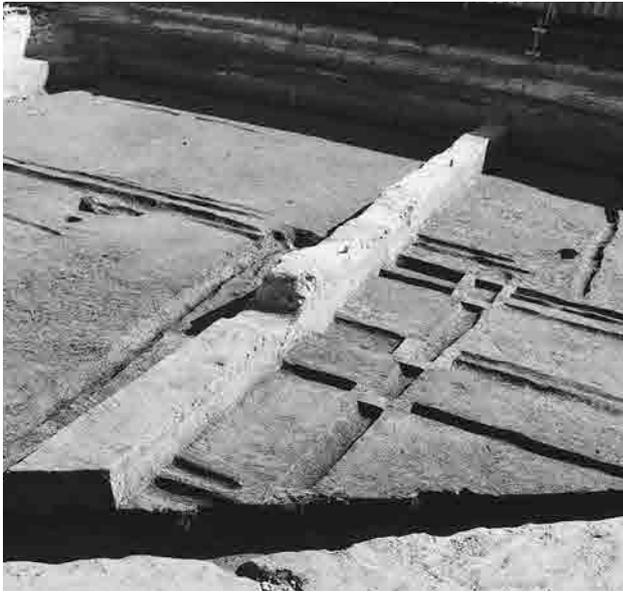
3 2区第3面南部（北から）



4 2区第3面31畦（北から）



5 2区第3面31畦水口（北西から）



1 2区第5面中央部 (北西から)



2 2区第6面全景 (北東から)



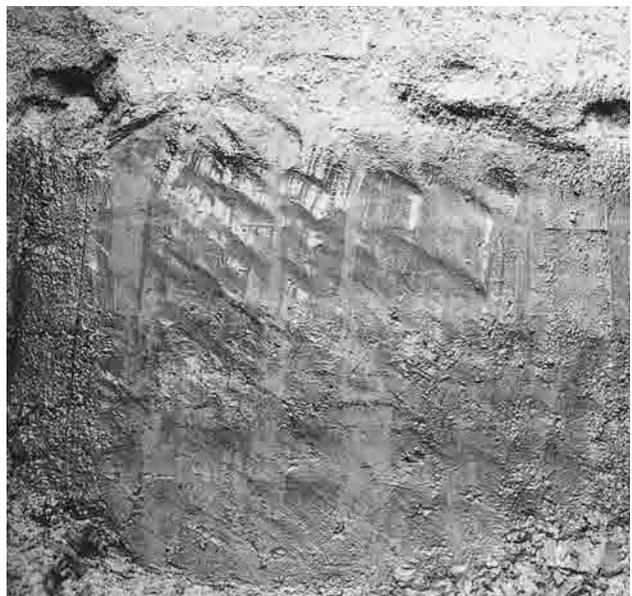
3 2区第6面107流路 (西から)



4 2区第7面全景 (北東から)

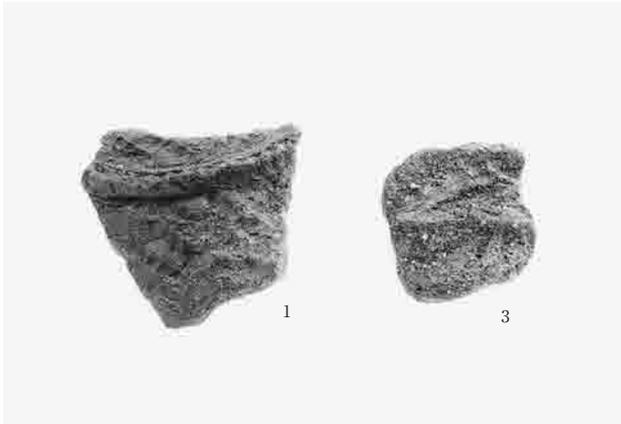


5 2区南壁断面 (北西から)

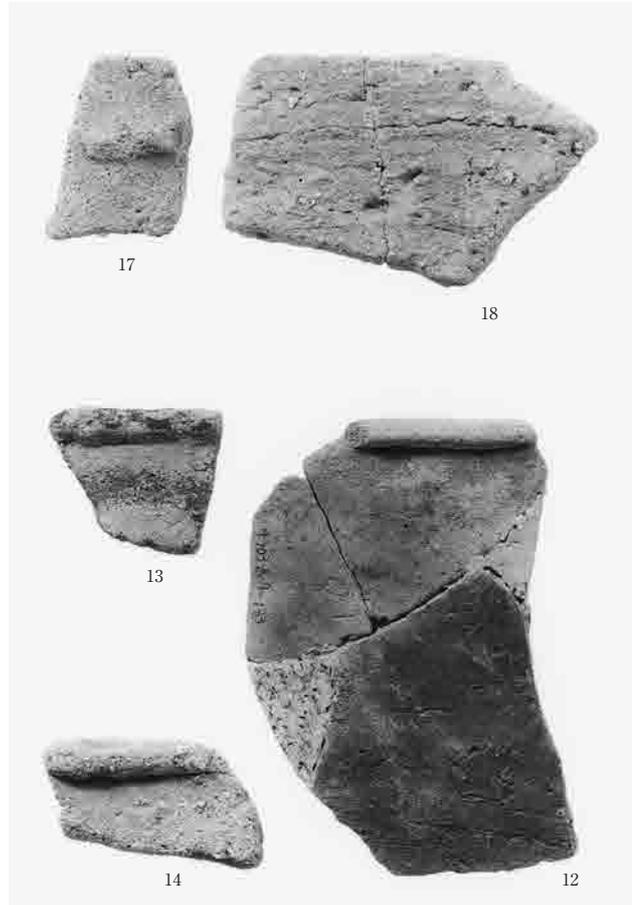


6 2区下層確認断面 (東から)

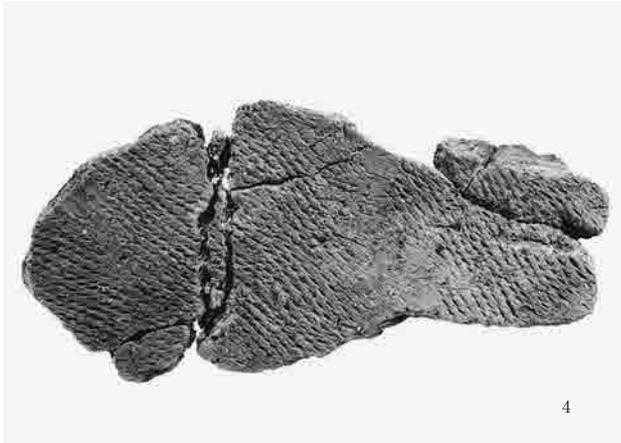
写真図版26



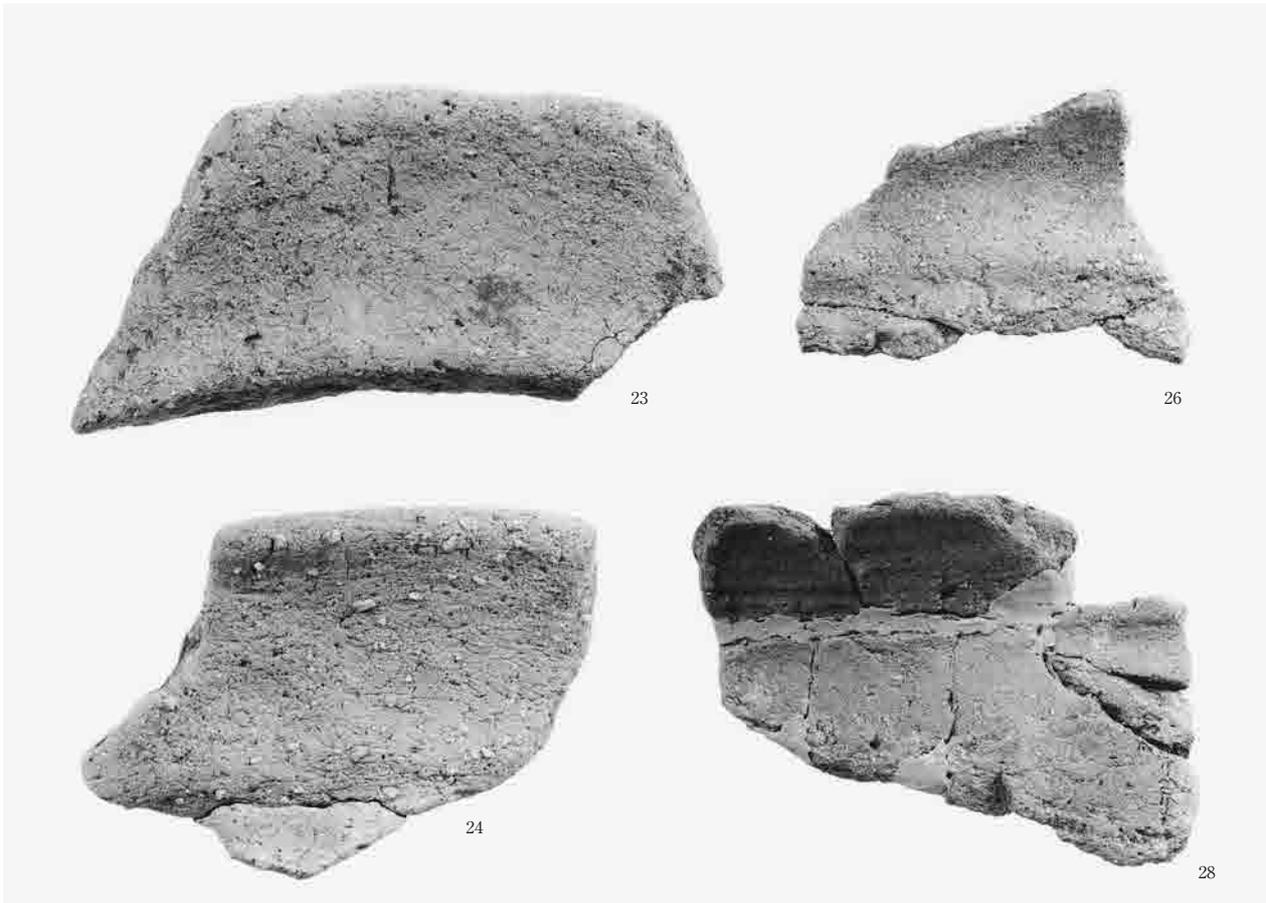
1 7区10a層・9b層出土土器



3 9区134土坑・3区408土坑出土土器



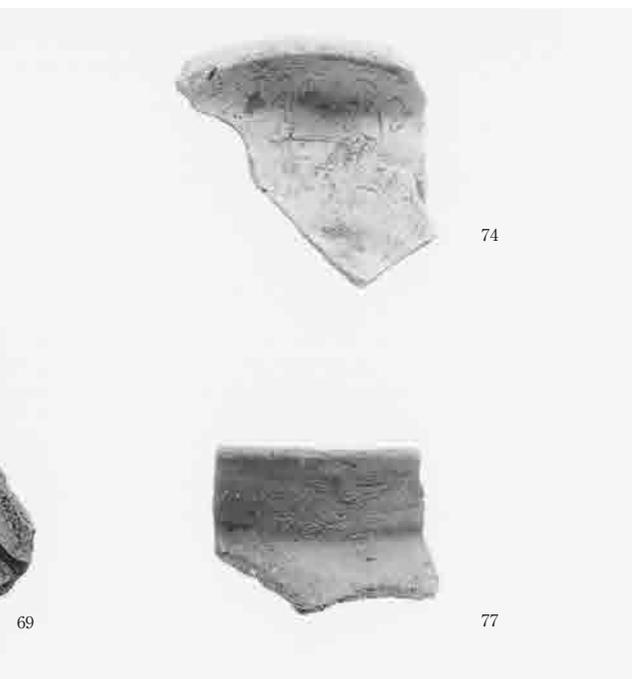
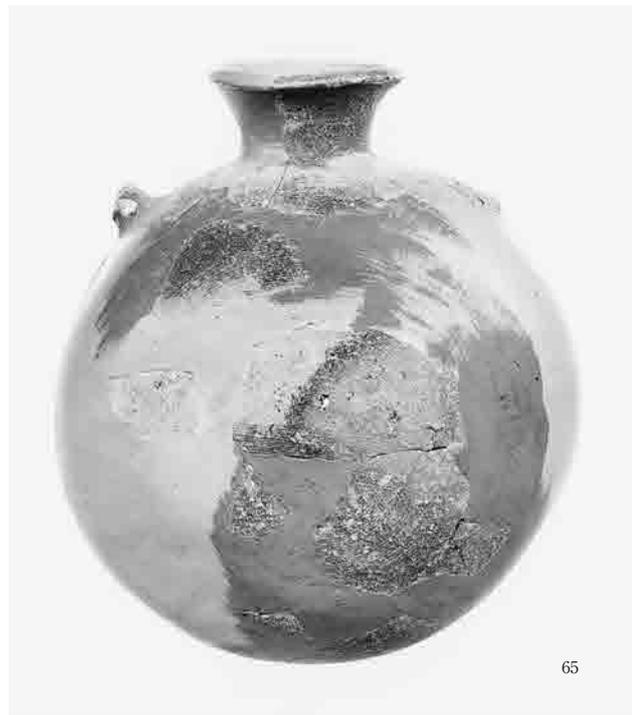
2 7区29土坑出土土器



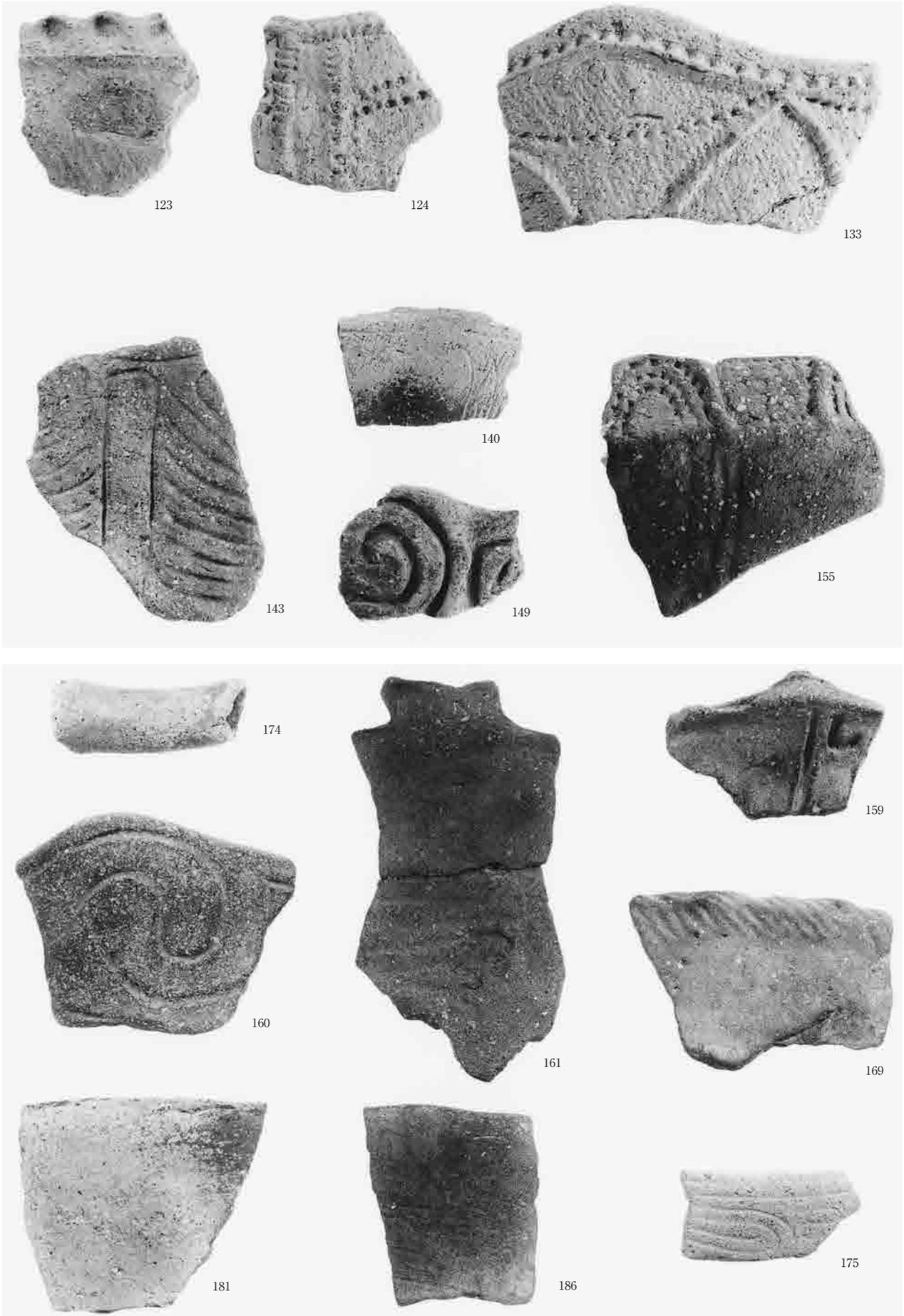
4 2区10層・3区16b層出土土器



5区440井戸・415土坑出土土器



1区188土坑・9区128土坑・7区28流路・5区第3面出土土器



縄文土器（上：中期 下：後期）

写真図版30

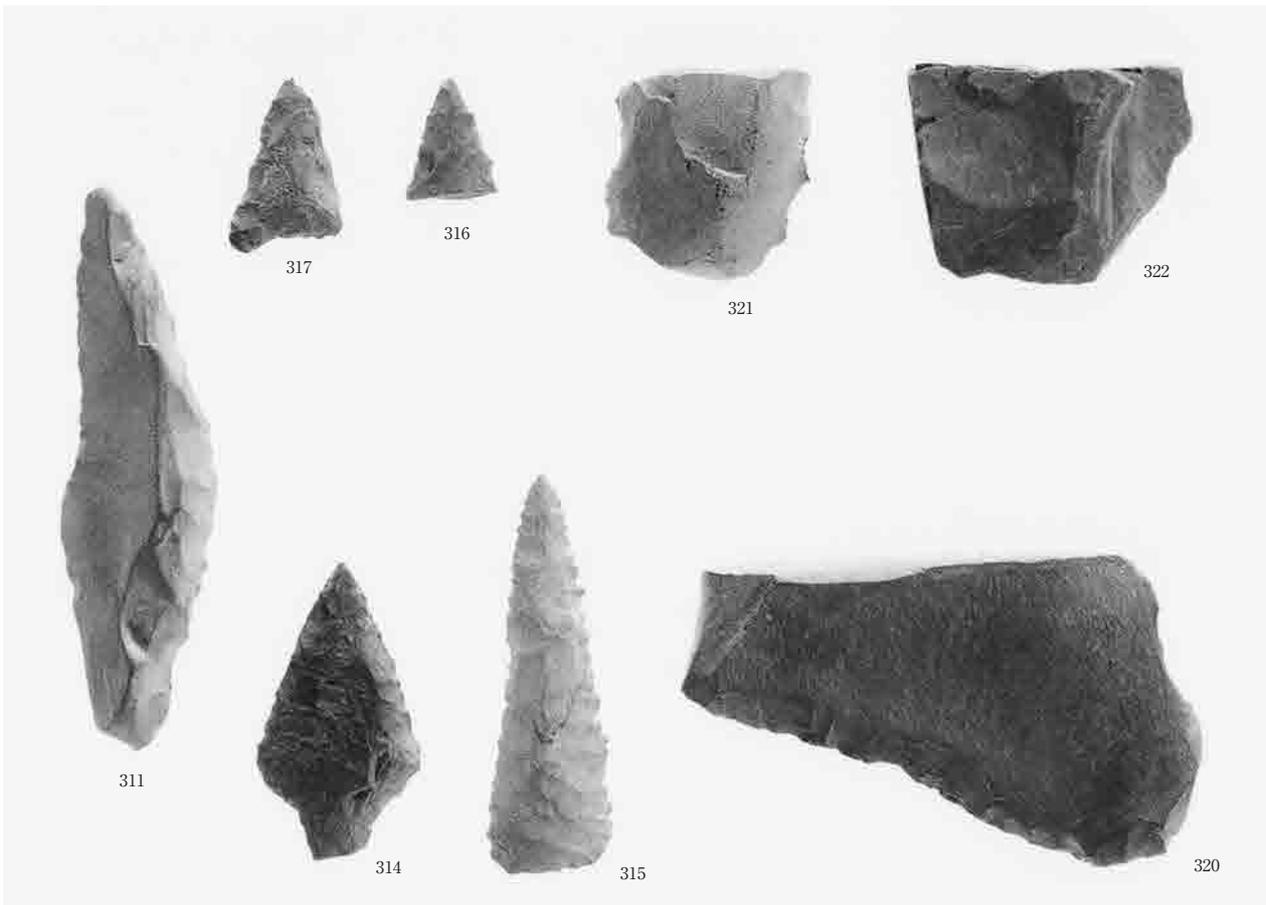


1 軒丸瓦



2 鬼瓦

3 埴輪



4 ナイフ形石器・石鎌・スクレイパー・楔形石器



328

1 金環



330

2 煙管



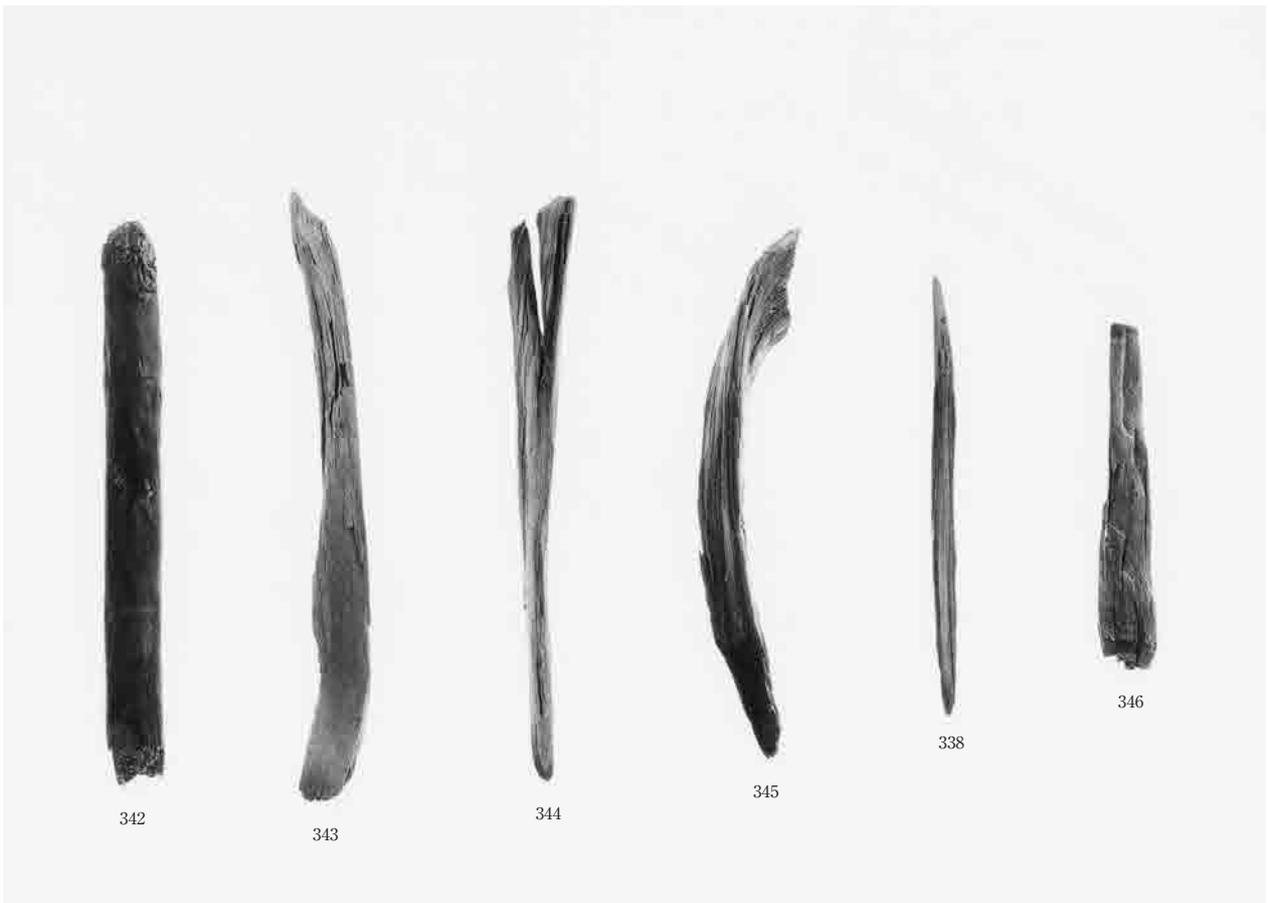
334

3 漆器碗



336

4 円盤形木製品



342

343

344

345

338

346

5 付木

報告書抄録

ふりがな	さらぐんじょうりいせき4							
書名	讃良郡条里遺跡IV							
副書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次数								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第138集							
編著者名	近藤章子・山本雅和・多賀晴司							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階 TEL072-299-8791							
発行年月日	2006年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	ねやがわしくすねみなみちよう 寝屋川市楠根南町 地先	27215	36	34° 44' 53"	135° 38' 07"	2003年4月17日～ 2004年9月30日	7,935㎡	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設
						追加調査 2005年3月2日～ 2005年3月25日	114㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
讃良郡条里遺跡	その他	縄文時代	土坑 流路	縄文土器、石鏃		中期の焚火跡を検出		
	生産	弥生時代	流路 水田 小土坑	弥生土器		弥生後期～古墳前期の小区画水田を検出		
	集落	古墳時代	井戸 土坑 小土坑 流路	土師器、須恵器		井戸・土坑から中期の良好な土師器一括資料が出土		
	集落	飛鳥～奈良時代	掘立柱建物 柱穴 土坑 溝	土師器、須恵器		掘立柱建物・溝などで構成される集落の一部を検出		
	生産	平安～室町時代	畦 耕作溝 水田	土師器、須恵器、瓦器、 陶器、磁器		条里制地割がおそくとも平安後期に作られていたことが判明		
	生産	江戸時代	畦 耕作溝 島畠	土師器、陶器、磁器		水田・畑・島畠が混在する耕作地の状況が明らかとなった		
要約	縄文時代中期の焚火跡周辺では多数の石片を採取し、この付近で石器製作が行われていた状況が窺える。また弥生時代後期から古墳時代前期の小区画水田を検出した。その他古墳時代中期の井戸・土坑から完形の土器を含む一括資料を得た。飛鳥時代から奈良時代の遺構は掘立柱建物2棟を検出した。それ以降の時期は耕作に伴う畦・溝などを多数検出した。							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第138集

讃良郡条里遺跡 IV

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2006年 2月28日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台 3丁21番 4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南 2丁目 6番 8号